女子文壇

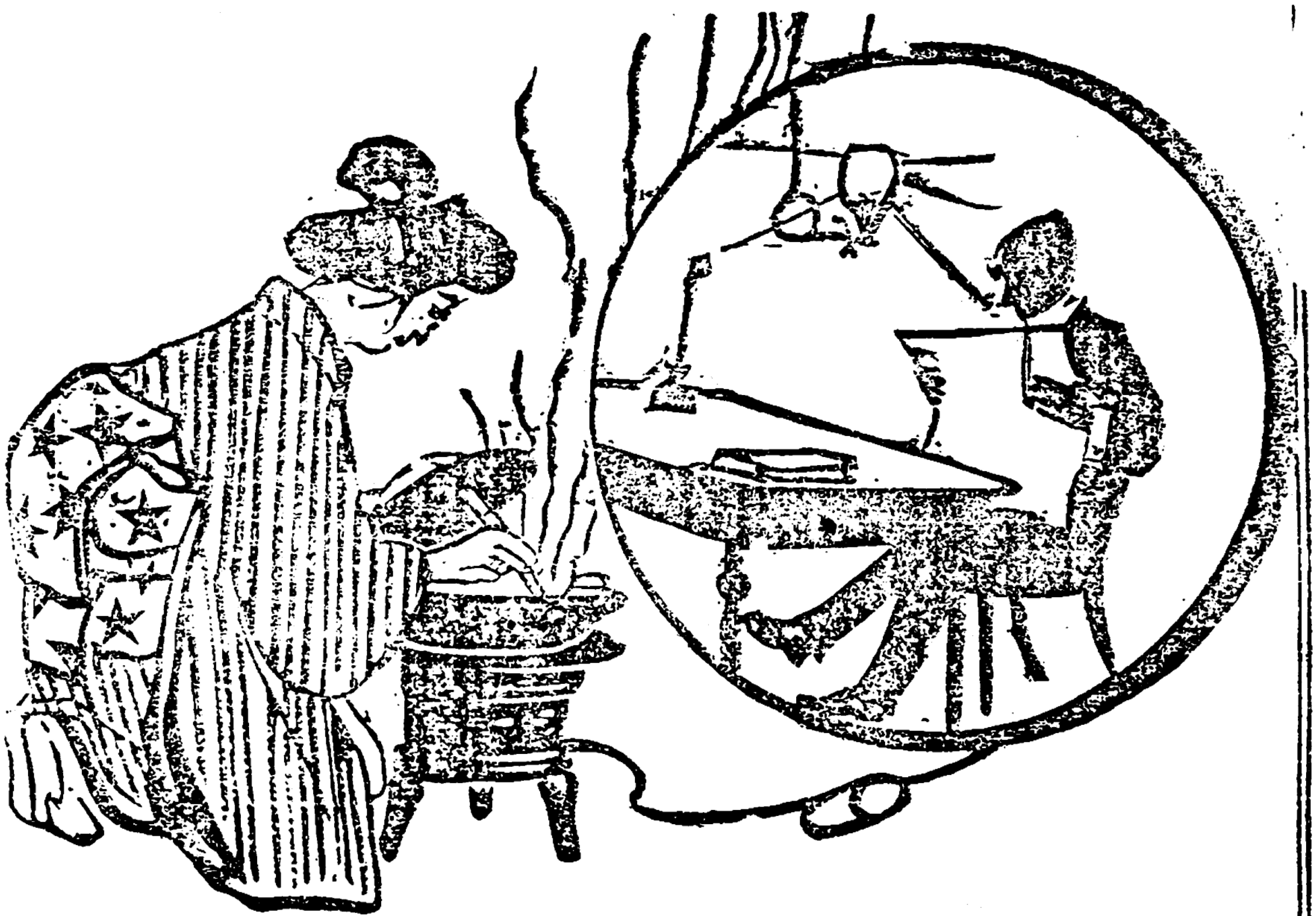
治三十七年十二月九日第三種郵便物認可　明治四十四年二月廿五日印刷納本（毎月一回廿五日印刷納本）



第七年第四號

三月號

東京
女子文壇社發行



アカリとヘッツイ

春のむつ言

旦那「瓦斯燈を使用して初めて、白晝を欺くと云ふ句の眞意義を悟ることが出來た。明るくて陽氣で、萬物を美化するの點に於て、瓦斯は實に燈火の王だ。理想の燈火だ。

細君「それに御値段が安くて、先月などはあんなに御客樣で、大抵毎夜十二時過まで點けましたに、御拂は僅か二燈五十錢の割なんですもの。なぜ今少し早く之を用ひなかつたかと後悔致しますの。

旦那「この頃は、大層御馳走が出來るぢやないか。

細君「御臺所の瓦斯代が經濟に上りますので、其の費用を御惣菜にまはしますものですから夫に瓦斯は淸潔で火の元の心配もなくお煮物も早く出來て、三なども大喜びですの。

旦那「これも全く瓦斯の賜物か、僕も大喜びだ。ハッハッ……

神田錦町

東京瓦斯株式會社

女子文壇目次

卷頭口繪

◎人間の觀察　【本　欄】

三月號（第七年第四號）

海邊の春



大下藤次郎筆

女學生



毎號懸賞讀者文藝募集

本社に取捌有

三月一日第三號發行
價十五錢郵税一錢半

參月號

口繪石版密刷數葉木版其
他數集毎號懸賞文藝滿載

○少女歌劇はげみの鐘……さむしろ

○貞女の鑑袈裟御前物語 かさゝぎ

■古武士の妻の哀れに床しき精神……

■英米佛三樣の婦人氣質……

■苅萱道心と石童丸……

■老夫人新夫人評判記……

現代の女らしき女

日本女子大學校長 成瀬仁藏

女子學院長 矢島楫子

女子高等師範教授 下田次郎

法學博士夫人 鳩山春子

成女高等女學校長 宮田脩

■切腹して下さい骨丈は拾ひます

■都下女學校評判記……

■病人と嬰兒を連れて敵中を免る……

■古歌に現はれたる我祖先の戀愛……

○嫁としての保證金……新渡戸博士

○英雄は婦人に近し 三輪田元道

發行所 東京神田旅籠町一 文光堂 振替口座東京 一九五五番

婦人世界

三月一日發行 六巻第三號 一冊拾五錢 郵税一錢五厘 半年分郵税共一圓五錢 一年分同二圓五錢

◎嫁と姑の別居論……山脇房子 鳩山春子 棚橋絢子 目賀田夫人 川瀬富美子

◎貧乏神の話……武田講師

◎お彼岸の御馳走……弦齋夫人

▽卒業式の答辭は何のために讀むか……下田歌子

◎令孃訪問……婦人記者

◎義理堅き京都の女中

◎人情論（愈よ出で〻愈よ天下を驚かす）……村井弦齋

◎髪を美しくする法……伊賀とら

◎小兒病の豫防……加藤博士

▽柳行李を負うて出世の旅……吉村鐵之助

◎家庭衛生談……村井弦齋

◎家事經濟の執り方……嘉悦孝子

◎淀君論……坪内博士 塚原澁柿 饗庭篁村 巖谷小波 大町桂月 伊原青々園 村田丹陵 廳生正識 岡部文學士 小金井君子 その他

發行所 東京京橋南紺屋町 實業之日本社（郵便振替貯金口座三二六番） 賣捌 全國書店

春晝



東京精巧堂石印

本書の内容

▲高峰博士發見特許製法に由る消化新藥▲强度一定効力永久不變
▲類似模造品あり「タカ」の冠字御注意▲各地有名藥舗にあり
▲日英博覽會化學品部に多數のヂアスターゼ類出品せられたるも
審査の結果獨り本劑の優良なるを賞賛し特に發明者の功勞を表彰

タカヂアスターゼ

せんが爲め我高峰博士に**名譽大賞**を贈與せり本社は我醫界に最高賞牌たる本劑の優秀絶倫を證明せられたる此實蹟を報導し得るを大なる光榮とす。▲説明書郵呈す

發賣元　東京市日本橋區室町三丁目　三共合資會社

大學教授博士鈴木梅太郎氏發見の特許製法に由り製造せられたる本劑は吸收性同化性の**完全**なる**有機性燐化合物**にして其効用は總ての

特許新藥　ユーキリン

營養増進に在り結核性患者、食慾不振、病後恢復期に用ゆべく殊に**神經衰弱**患者の營養劑とし卓効あり

發賣元　東京市日本橋區室町三丁目　三共合資會社

有馬伯爵令嗣賴寧氏の家庭



（靜子學習院在學）（令息）（澄子）（夫人貞子）

名門の夫人


子爵稲葉正縄氏夫人かず子


秋元子爵令嗣春朝氏夫人光子

新發明 美容法

肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黒き男女にても平素之を用ゆれば漸次肉體は純白色に變化し肌を滑にし皺を伸しあれ及吹出物を治し艶美の容貌となる驚くべき効果を有す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の美容新劑價並製壹圓廿錢特別製壹圓八拾錢

飲んで色白くなる世界唯一輸入新藥

根本的色白くなる内服藥 **サーサパリラ**

價壹劑二圓七拾錢▲參劑七圓五拾錢▲五劑拾貳圓拾錢

英國ロンドン「バーゴイン」製の「サーサパリラ」は峻烈なる清血劑にして頑强なる皮膚病、猛惡なる慢性梅毒痳毒リウマチス等の病毒及び惡血毒血惡液を體外に排泄し血液を清淨にし且つ精神を爽快にし根本的に肉色を純白艶美ならしむる奇効顯著の内服水劑なり(注意)從來種々の外用塗布的化粧水及誇大廣告の洗粉白粉等を用ひ其無効に歎じつゝある各位は速に此「サーサパリラ」を試みよ奏効顯る迅速確實なり(今回英國より輸入し當館にて一手專賣致候)色白藥劑と「サーサパリラ」と内外双方併用せば奏効頗る迅速確實なり

色白特効 ペーアス石鹸

此石鹸は世界第一等の良品にして化粧品の大王なることは苟も泰西の事情に通ずる者の熟知する所なれば今更喋々贅辭を要せず唯だ單に其主眼たる特効の一二を掲げん皮膚を潤澤軟密にし色を白くし、粗糙質を治するは此石鹸獨特の靈効なり且つ此石鹸は香氣頗る佳良にして使用後五時間は芳香馥郁として身體に附着し蘇るは館主の實驗保證する所なり、乞ふ昨今世上に續々顯出し誇大の廣告を以て世人を瞞着する内國製の粗惡品と玉石混同視すること勿れ(昨年輸入の五萬個は夙に賣切れ久しく品切中の處今回拾萬個着荷せり速に御注文を望む)

壹個代價送料共八拾五錢▲三個函入同上貳圓參拾錢

以上三種 專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

有効保險 前代未發 秘傳奇術

全壹册正價郵税共參拾五錢▲郵券代用は四拾五錢封送の事

(目錄の要)神經衰弱の新療法◎陰萎病を必治する新法◎陰○の爛れを治する法◎消渇を必治する法◎頑癬の必治法◎人造麝香の製法◎上等香水製法◎香袋製法◎美顔クリーム製造法◎音聲を清良にする法◎齒痛即治藥製法◎髪の脱落するを止むる法◎化粧石鹸製法◎西洋白粉製法◎毛髪必生法◎臭汗治法◎白髪を染る法◎髪毛の光澤を美にする藥製法◎齒磨製法◎西洋梳油製造新法◎にきび即治法◎ほくろを落す法◎ビットル酒製法◎夏日室内を爽涼にする法◎羅紗類を汚せるインキ斑を除く法◎白瓜を一年新鮮に貯ふ法◎蚤を驅除する良法◎氷を即時に製造する法◎百年長壽の奇法◎生涯病に罹らざる奇法◎人の生死を豫知する法◎船中より海の底を見る法◎百日眠らず體衰へざる法◎拔毛新法◎寢入たる者に答へしむる法◎禿頭病必治法◎寢入りたる男女の心中を知る法◎白なまず即治法◎五十の老婆を二八の娘に變ずる法◎脚氣病必治法◎妊婦の變化を見顯す神術◎人體不死の奇法◎千里一足飛行の神術◎盗人を見顯はす神術◎女に○れらるゝ藥法◎硬き毛髪を柔軟にする法◎怪○○かす藥◎堅き女の氣を○○す藥法◎陰○を長大にする藥法◎思ふ女をかす必治法◎女を○○にて泣す神藥◎夢に戀人と語る秘術◎見染し女を手に入れる神法◎待人來る神術◎一生戀中變らぬ秘術◎悋氣深き女を治する藥◎閨中の秘藥◎即座に精力を强むる法◎男精を增す法◎陰莖を長大にする法◎即效藥◎避妊の仙術◎精神を催眠する術◎速に男女を睡らす秘法◎赤顔を治す法◎色黒き女を白くする法◎女の情を知る術◎生れながら吹出物あるを治す法◎老人の若返り法◎身體の臭を治す法◎月經不順を治す法◎黄疸を治す法◎腹痛の速治法◎疥癬の新法◎肌を白くする法◎色の白くなる法◎光の奇術◎腹痛の秘法◎不老の仙術◎痔を治す法◎頭髪の生ずる新法◎癩病を治する新法◎肺病を治する新法◎下疳を治す法◎梅毒の必治法◎百日咳の妙法◎中風の新法◎胃病の妙法◎凍瘡の妙法◎火傷の即治法◎耳の穴を治す法◎寢小便を治す法◎新藥の新法◎土器の良法◎再び明ける法◎房事の秘法◎虎列拉病の治法◎諸病を治する法◎年齡を一時に若くする法◎鐵器の錆を落す法◎鐵の鼠を捕獲する秘法◎鳥の鳴き声を出す法◎新しき靴を作る法◎衣服に油の染付たる汚を落す法◎簡易美顔術◎帽子洗濯新法◎酒を製造する法◎梅毒の新術◎男女の全盛を占ふ法◎奇術の秘法◎以下拾法略す合計壹百四十法あり着金即刻送本す

專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 **日新館商店**

實用 文字速成通信 教授

○面白い程早く上達する○

本會獨特の特許速成の方法に依れば如何なる惡筆の方にても直に上達すること不思議のやうです、ゆえに先づ見本説明書を御請求なさい、直に送呈致します

○女子會員募集―今や入會の最好機會也○



專賣特許第九五五九號
專賣特許第一七九一〇號
實用新案特許第四八七三號

▲本會書者兼講師
小野鵞堂先生
玉木愛石先生
稲川雲谿先生
▲外講師大家數拾名
▲見本詳細會則無代進呈

東京本郷區大學正門前
電話下谷三〇壹壹番
電話下谷三貳壹〇番

帝國習字速成學會

名士の夫人



陸軍少佐齋藤澄氏夫人



海軍少佐一條實孝氏夫人經子
（公爵一條實輝氏の長女）

名士の令嬢



韓國拓殖銀行總裁宇佐川一正氏令孫りか子（麹町高女卒業）



韓國鐵道管理局技師岡村初之助氏令嬢福子（立教女學卒業）



千代田香油

紳士もお孃さんも奥さんも薫りよき千代田香油に限るとの高評盛んなり

定價
特製　七十錢
大形　卅五錢
中形　廿五錢
小形　十七錢

東京市馬喰町
發賣元　山岸三之助
電話浪花七九三番
振替口座二五〇〇〇番

御婦人の寶

御婦人方が生涯無病でお過しなさるには月經の處置が最も大切な事は申上る迄もなく從來の樣に脱脂綿等を挿入なされては經水の滯るのみならず綿の纎が殘り乾度子宮病ヒステリ等の病源となり醫家の嘆かる事です安全帯は藤川藥學士發明消毒安全吸收力脱脂綿の數倍で博士の甚く賞用さるゝ月經時に重寶便利な如何程經水の多い方でも粗漏する事のない起居動作極安全な又産後や白血長血痔漏等に妙です



安全帯本舗　東京下谷池の端七軒町四十二番地　安全堂

石鹸化粧品卸商
關西一手販賣　大阪市西區阿波座上通二ノ二三角　洋々堂分堂

定價
安全帯特甲一筋壹圓貳拾錢、乙八拾錢、並四十錢　一筋ニテ二三年使用出來升
安全衣は一打入一箱特甲金六拾錢特乙金四拾錢

市内ハ藥種化粧品店ニテ販賣致升
小包料ハ一組金拾貳錢一組増毎ニ貳錢増シ候

都會の婦人

紙數二百餘頁
美麗口繪挿入
定價貳拾錢
送料壹錢五厘

本書の內容

東京の地と東京の女 ▲芝居の書割のやうな不忍池畔 馬場孤蝶 ▲新しい觀察の盡きざる都會 蒲原有明 ▲大いなる未成品 戸川秋骨 ▲西と南の郊外 吉江孤雁 ▲張りつめた力 小川未明 ▲雪の夜の銀座 服部嘉香

街頭を歩める女の印象 ▲植物園で逢つた女 北原白秋 ▲僅に殘れる印象 水野葉舟 ▲街の夕月 森川葵村 ▲三人の女(對話) 吉井勇 ▲詩に現れたる都會 河井醉茗 ▲暗愁に囚はれたる都會の女性 澤村文學士 ▲油繪に入る女 木下杢太郎 ●西の郊外より 水野千枝子 ▲南の郊外より 荒川澄子 ▲日比谷大神宮結婚式の記事 遊蝶花 ▲上野より(對話) うす雲 ▲婦人席にて さわらび女 ▲東海道線 羅須柏

東京印象記 ▲銀座 くに子 ▲神樂阪 白百合 ▲魚河岸 菊蕾子 ▲日比谷 春子 ▲根津 雛子 ▲不忍 濱子 ▲芝公園 やゑ子 ▲谷中 霞子 ▲神田 繁子 ▲西片町 千歲 ▲美しい動物園 しげを ▲深川 ふぢ子

都會の渦捲に漂ふ若き女の眞情 ▲濁つた室に輝く電燈 やゑ子 ▲入京記 きく子 ▲闘ひ疲れて 白山吹 ▲熱涙冷涙 湖畔の女 ▲造物主は何故私の鼻の土を儉約したのでせう 常世草 ▲心の活動寫眞 夕ぼし ▲湯屋の三助に不快を感ず 萩花 ▲開放されたのか落伍したのか 葉隱れの花 ▲欺かれたる工女の懺悔 沼倉馥子 ▲東京大阪京都 きく子

都會の實際的生活 ▲生活の階級 霞子 ▲卒業式の前 つゆ草 ▲バザーの當日 靜江 ▲某子爵邸に遊ぶ 白菊 ▲お孃樣のお供 森茂子

創作 ▲(小說)卵涙 花子 ▲(散文)山みち野ちみ 章子 ▲(詩)白鳥 田中落葉子 ▲(歌)灰色の波 原田琴子 ▲(俳句)木の芽 玻出子

東京 京橋區大鋸町 女子文壇社出版
(振替口座第壹七貳九番)
●發賣所各地書店●

＝第二回會員大募集＝

書翰講義

◎會長 東京帝國大學文科大學教授文學博士 服部宇之吉

法學博士農學博士 新渡戶稻造先生は本講義錄は平易明瞭にて青年必須の讀物として頗る多大の効果あるべしと稱賛せられたり

五ヶ月で手紙が立派にかけることは保證します

毎號百頁月三回發行外に雜誌進呈

餘科として新派和歌の大家與謝野晶子先生の和歌講義は非常に面白くて紙上に花を添て居ます

文章 和歌無料添削 習字 無料批閱

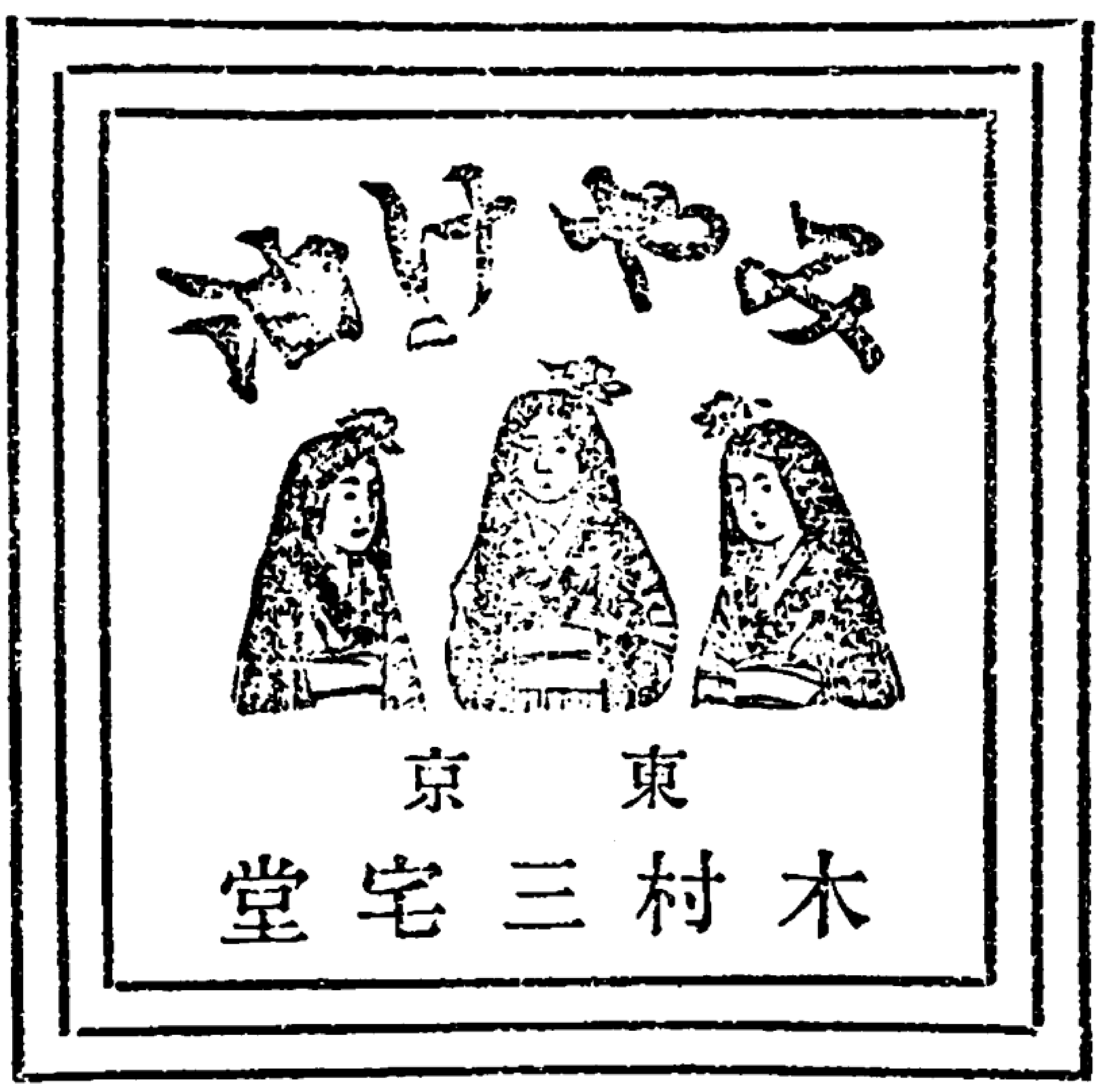
◎講義錄見本附規則 ◎申込次第進呈

東京市本鄉區根津宮永町三五

＝日本書翰學會＝

男女方必ず御讀下さい

金五千圓を左の方法に依り差出すことせり御用濟の瓶にある商標を剝ぎ取り慈善事業へ御寄附あれば一枚五厘宛で本舖にて何枚にても引換ます



宮內省御買上の光榮を賜はりたる純良髮油は日本國中唯みやけ油あるのみみやけ油を常に用ゆれば髮の抜ることなし産後病後髮を長くし、のぼせをしづめフケはなくなる、頭の病にかゝることなし、外に墨拔洗粉。スキ油ピンツケ冬しらず等好評嘖々近頃類似品澤山あり、みやけ油御望の方に對し椿と稱へ色々混合物ある粗惡品を賣り付る奸商四方にあれば必ず東京人形町のみやけ油と御名指の上御求めなさい販賣所全國信用ある店にあり

新刊

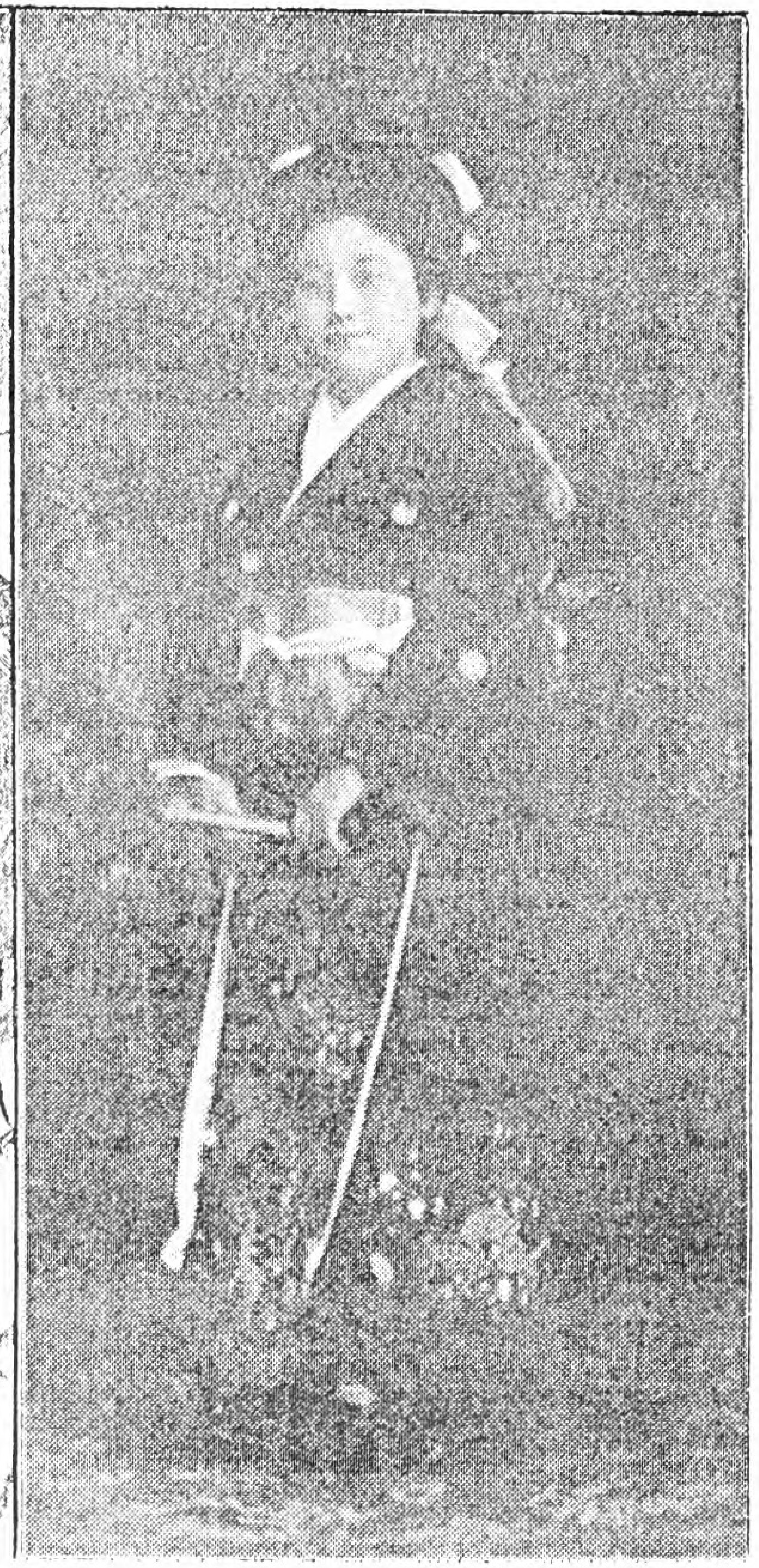
畫集 夢に野に山に

定價七拾錢
送料六錢

挿畫 三色版四枚◎石版畫四枚◎寫眞版十六枚◎木版畫二十枚
裝釘の畫は本文行人の歌と相對して無限の感を起さしむ

春の巻 七版 定價五拾錢 送料八錢
夏の巻 六版 定價五拾錢 送料八錢
秋の巻 再版 定價五拾錢 送料八錢
冬の巻 再版 定價五拾錢 送料八錢
花の巻 四版 定價四拾錢 送料四錢
旅の巻 四版 定價七拾錢 送料六錢
櫻さく國の乙女 近刊
都會の巻 近刊

發行所 東京麹町二丁目二番地 振替東京二〇九一四番 洛陽堂



久保善子嬢
（東京女學館卒業）



堀切貞子嬢（立教女學卒業）



箭内光子嬢
（府立第一高女卒業）

母と愛孃



在米神學士長谷川新一郎氏夫人咲子と愛兒



鐵道院技師山口工學士夫人增子と愛兒

肺結核全治之奇法

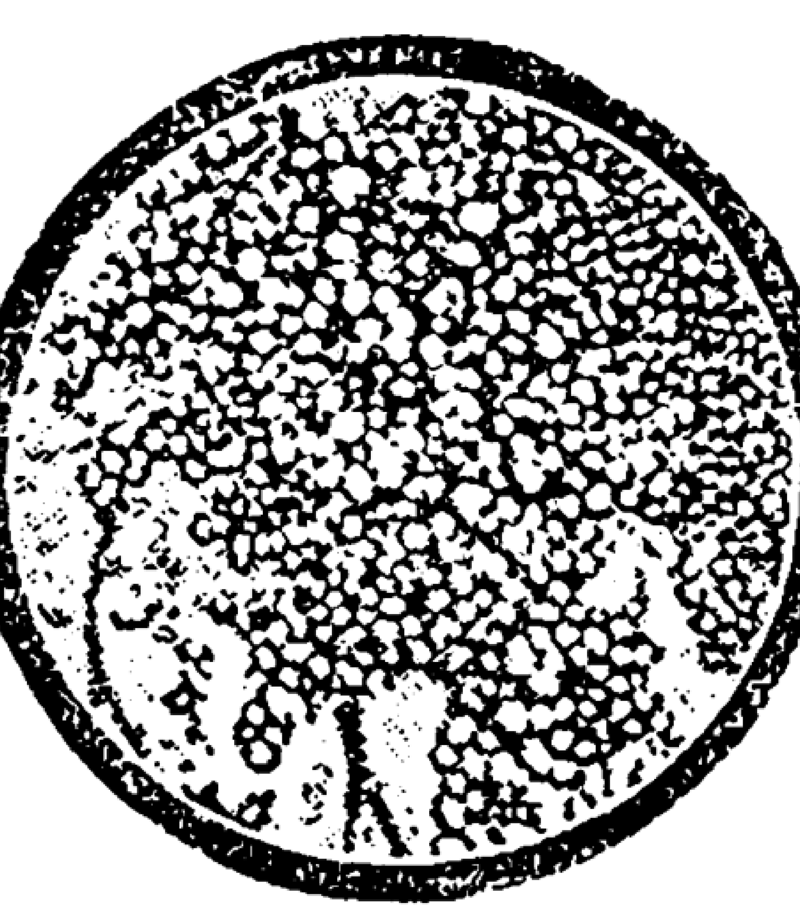
全治者數千人に達す
（所謂新藥に非ず）

近時肺病の治療藥として續出する新劑は其數幾百千然も人體内に於て殺菌の効力あるものは本療法の外之を認めずとは有名なる細菌學の大家古弗博士の證言なり宜なる哉肺結核治療上の學理的見地より論及せば能く結核菌を殺滅するに足る濃度の劇劑は人間の臟器細胞を害するや論なし現に患者は所謂大家の新藥が其効果を奏せしもの幾何かありしぞ余は曩に仁義に富める多くの學者先輩の援助を得て肺結核競爭療法を企て歐洲各地病院温泉地療養所等より多くの新材料を收集し茲に空前の新療法を發見し肺病患者寶典なる書物と全治の證據を刊行し五千卷を限り無代にて之を患者に分つ事とせり

大勳位伯爵東郷閣下題字
從一位侯爵久我閣下題字
正三位伯爵東久世閣下題字
正三位伯爵土方閣下題字

肺病患者寶典　全

世に不治の難病と稱せらるゝ肺勞患者が本療法の奇効に浴し全快の幸福を得し實例は既に數千の多きに達す抑々肺病の醫藥甚だ多けれど悲かな現今にては攝生的本治療法の如く大効を奏するものは他に之ある無しとは北里醫學博士栗山醫學博士鈴木醫學博士が極力唱導されし處にして如何に本治療法が最も進歩せる唯一の療法たるを知に足らん



本療法の奇効

○發熱盜汗　○血管破裂　○血痰不眠　○食慾不進　○呼吸困難　○咯痰咳嗽　○胸部疼痛　○下痢貧血　○喉頭痛　○心臓衰弱　○肋膜滲潤　○胃腸障害

然れば肺結核、肺炎、肋膜炎、氣管支加答兒等に罹り前記の症狀を呈し醫藥効なく煩悶の人は決して失望悲嘆を要せず直に郵券二錢添東京日本橋呉服町二番地順天堂藥院安原尙親宛申込ば全治の秘術を盡せる前記の大書冊無代送呈す

黴毒根治新劑

本劑（藥名ドクトル）は幾多の研究實驗を重ね多年辛苦經營の結果成功したる最新最良の藥物なれば現世紀に於る唯一の

ばい毒根治特効新藥なり故に黴毒及黴毒に關聯して續發する諸症（即ちばいどく。ひゑ。かさ。しつ毒。かんそう。よこね。ようばいそう。たいどく。瘡毒。るいれき。骨がらみ。べんどく。ふしぶしのいたみ等）ならば如何なる頑固難症にても特別製分にて**誓つて根治**することを確證す從來醫療賣藥等百方手を盡すも全治の効なくして困難せる患者は速に本劑を試服し其病毒を根底より驅逐斷絶し天賦の生命健康を保全せよ。

藥價壹劑分壹圓拾錢貳劑分壹圓九拾錢特別製分參圓六拾錢

陰萎病特効新劑（瑞西新輸入藥）

內服 **トニチン** TONITIN

本劑は瑞西國ウォルフエンスベルゲル社の發明新輸入に係り其主効は……男女**生殖機不能**即ち**陰萎病。腎虛。神經衰弱**……遺精。夢精。早漏。過房。元氣衰弱。老衰無力。生殖虛弱。生殖機能障害。早老者。精液精蟲缺乏。不妊娠。冷症發育不全等に用ひ天下無比**可驚奇効**ある最新發見藥也**精力**を**増進**し生殖器を强健ならしめん！望む者は早く試よ峻烈偉大なる特効眞に**如電光**世にありふれたる無効賣藥と同一視すること勿れ本劑の卓効は高名なる醫師に就て承合せば明白也

拾錠入壹劑藥價送料共壹圓九拾錢郵券貳割增

奏効確證美容新劑 やせる藥

本劑（藥名ヨードチリン錠）は學理實驗に徴したる現世紀唯一の發明劑にて血ぶとり、あぶらぶとり、酒ぶとり、顔赤くほてり、のぼせ症、卒中症等總て肥滿質多血質脂肪過多質の人用ゆれば無害にして著しく體量を減じ脂肪を適度に脫し美容健康を保ち程よくやせる特効藥なり故に彼の見苦しくふとりたるを苦にする諸君は速に本劑を用ひ其驚くべき偉大なる奇効を知られよ

壹劑分價送料共參圓廿錢貳劑分六圓廿錢特別製分九圓廿錢着金即刻送藥す

世界唯一 痳病消渇の根治確證新藥

痳滅（りんめつ）

痳滅は最も進歩したる最新の痳病消渇即治模範藥なり、本劑はありふれたる普通の賣藥と異なり殺菌學上効力頗る峻烈なる一新藥を主劑とし是を内服して**痳病消渇**の病原たる「ゴノコッケン」を忽ち**滅殺**する處方に基き製劑せし新藥に付輕症は壹劑重症は特別製分にて必ず誓て根底より**根治**するを確證す但し彼の舊式洗滌劑の如き迂遠無効有害の姑息藥と異なり奏効確實峻烈なるだけそれだけ藥價不廉なり用藥者豫め之を諒せよ

藥價壹劑壹圓拾錢特別製貳圓拾錢

郵券代用貳割增しの事

わきが 腋臭 全治確證新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても忽**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦腦を脫せよ、價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓參拾錢着金即刻送藥す

毛の必ず生る確證藥

本劑は獨逸醫學博士の發明に依り學理實驗に徴したる世界無比の毛髮發生藥なり、即ち男女共腫物の痕、はつぼうはげの痕、やけどの痕、頭髮及はゑぎわの薄き人、まゆげ口ひげの薄き人、其他總て毛のあるべき所に毛のなき人等本劑特別製分を用ゆれば忽ち毛髮森々と發生する特効あることを確證す本劑は從來ありふれたる雜多の毛はゑ藥とは其効力論同日に語るべきものにあらず眞に天地月鼈の大差あるに付幸に玉瓦混同視すること勿れ

特別製分金五圓三拾錢
中瓶貳圓廿錢
小瓶壹圓廿錢

以上六藥 **專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**（電話下谷五四六番）

梅毒　りん病　ぢ疾　わきが　生殖器諸病　神經衰弱症　婦人科

東京淺草瓦町廿八淺草橋通瓦町電車停留場横　朝八時より夜九時迄　中央醫院

子宮諸病　血の道　ヒステリー　月やくとまりたる病　子なき人

梅どく諸病　りん病消渇　わきが　ぢ　にきび　た蟲等

生殖器諸病　神經衰弱　陰萎　遺精　早漏　發育不充分　記臆力減衰

▲病狀を記し郵券六錢を送れば其病を速治する専門醫中央醫院々長處方の特効新藥説明書を送る

東京淺草區瓦町廿八番地淺草橋通り瓦町電車停留場横　中央藥院

男 ちぢれ毛　女 くせ毛

赤毛は何程の難毛も直に根本的に矯正黒化し且良き光澤の出る最新發見奇液を郵券申込者に教授し誓て美髮に治して差上げますから種々と手を盡してお直りにならない御方は御遠慮なく御申込あれ詳細記載せる説明書を無料進呈致します

東京市麻布區材木町　岩阪澄子

代々家傳の[illegible]

經通丸

月やく樂

調劑元

本劑は代々家傳の妙藥にて如何なる難症の月經滯りも胃腸子宮等を痛めず安々と通じ顯著なるは其效にあること請合也他劑を用ひて効能なき時は本劑を服用し以て其價値を認めよ定價廿五錢五十錢一圓特製二圓小包送を望まるゝ方は八錢を要す

東京市丸の内有樂町二ノ二　江戸屋

ちゞれもくせも　大奇法　きはへうけあひ

本法は女髮結師安部歌子女史の多年實地研究したる秘法にて是迄の使用者を悉く滿足せしめたる一大奇法なり照會者は往復はがきにて申込あれ

東京麹町區三番町六十七　小林濟世園

月經不順にて御困りの方へは『婦人の心得』と題せる妊娠と月經病症及月經時の攝生等を詳述せし冊子を貳錢券送付あれば無代送呈す

東京市京橋區南鍛冶町三　あづま

見よ◉月經なき女子◉病める婦人

▲勿驚……藥力最精實……効能確保……有効無害…

●本劑は専門博士が學理と實驗より發見せられたる物

有効確證



其主藥は最新唯一の通經藥にて帝國大學病院及各病院にて専用する最良藥なり二三月の月經閉止月經滯り經不順は一二劑にて必ず流下し四五ヶ月又は血塊にても特製或は別製分服用せば安心に忽ち流經す女子十七八歳になり月經なき人は二劑又毎月月經困難は三日分にて通經す

藥價一劑六十錢二劑一圓十錢特製二圓廿錢別製分三圓卅錢送料各四錢宛

◉肥滿病新藥 （米國新輸入）

子供の折美愛と賞せられし人も年頃になりてよりぶとく肉太りたる爲め上圖の如く醜婦となる人少なしとせず本劑は獨乙ペンツオルト氏の發見藥にて脂肪多き人◉ぶとく／＼ふとり◉血太り◉肉太り◉酒太り◉水太り◉顏赤◉にきび◉ふき出物多き等輕症一二劑如何程の惡性も四劑分連服せば色は艶白となり誓て美顏窈窕たる美人となる事を保證す乞肥滿性の人は試みよ

諸孃姉の福音



藥價一劑一圓五十錢二劑二圓九十錢三劑四圓卅錢五劑五圓半送料十錢

發賣元 東京々橋中橋和泉町 振替第壹〇六七七番 小宮愛生堂

◎腦神經衰弱及生殖器病藥

壯快愉絶



本劑は獨逸醫界大博士メリングー氏が發明に係る新劑にして男女生殖器不能即ち陰萎病活力無能發育不十分等に起因する病症に使用して可驚大効ある新發見藥なり故に該病患者は一日も早く本劑を服用し精力を尚一層强健にし人性最大の快樂を全ふせんと欲する人は必ず服用せよ服用僅かにして偉大の効力顯る……奇効現代唯一の良藥なり

藥價四十五錠入壹圓百錠入貳圓二百八十錠入五圓特器入拾圓

適効ハ神經衰弱遺精夢精早漏房事過度射精無能貧血勃起力減少精神的及身體的過勞等に用て特効有り

◎淋病でこまる人は先づ完全なる良藥を撰べ

りん病消渇必治藥

内用外用



奇効説明書無代進呈

本劑は各國醫科大學處方及び藥劑を參酌し研究に苦辛を重ね一大完全なる良藥を調製するを得たり依て之れを多くの患者に與へたるに其結果實に驚く可く急性淋病は勿論慢性痼疾の淋菌も悉く殺滅して更に餘す處なく治癒せしめたり故に同病患者は速に試みられよ必ず全治保證す—

内用三日分五拾錢七日分壹圓十五日分貳圓特製分參圓八拾錢外用三日分參拾錢七日分六拾錢十五日分壹圓廿錢特製貳圓廿錢送料内地は各八錢要す海外は小包卅錢

本舗 東京京橋區中橋和泉町 振替一〇六七七番 小宮愛生堂

名門の團欒



（相州鎌倉長谷の三條公爵別邸にて撮影）

三條公令弟　納所辨次郎氏

令孃　三條公夫人千代子



（歐洲漫遊中スコットランド、エヂンバラより十二哩のフォースブリッヂの下にて撮影せられしもの）

徳川公爵　令家　令嗣

秋元道子　千石書記　夫人正子



法學士横山正男氏と夫人愛子（東京女學館卒業）



ドクトル高橋研三氏と夫人旭子（女子大學卒業）



明治屋横濱支店長濱田五郎氏と夫人繁子

以下十種の書は百年後でも要つて居るから思ひついた時買ひ給へ

家庭必携 製法秘術寶典

代價郵税共廿三錢 郵便切手又は振替貯金なれば廿五錢

目録、輕便電氣燈●輕便晴雨計●輕便電話機●煙火●癇癪玉●齒磨●石鹸●洗粉●白粉●香水●紙石盤●のみ取粉●萬年草紙●メッキ法●朱肉●空氣枕●萬年手帳●墨●朱墨●鼠取藥●無刀彫刻術●酢●豆腐●甘露水●果實酒●屠蘇酒●燒酎●葡萄酒●魚煎餅●鑵詰●ラムネ●リモナーデー●ジンジャエル●蜜柑水●甘酒●味噌●醬油●水彩繪具等の製法其外大發明器械いらず**早取寫眞術** 器械不用 **早印刷法**等**百**餘種記載してあるが皆あり合せの道具で出來る樣にしてある、殊に早取寫眞術は名の如く器械を用ひず僅かの藥品を以て器械にて寫せし者と少しも異ならぬやうに人物風景其他如何なる者にても大小の差別なく何枚にても鮮明に寫し得る愉快なる寫眞法である、藥品の無き地方は弊店より送る、又器械にて寫せし通りに寫らねば何時にても**返金**す、又早印刷法は道具を使はず繪でも文字でも大小の論なく速座に數百枚印刷する事が出來るから名刺ハガキ書畫廣告其他如何なる者にても安價で奇麗に印刷する事が出來る、一つ覺えても優に五十錢以上の價値がある。

奇々妙々 手品種あかし

郵税共廿二錢 郵券代用又は振替は二十四錢

本書を讀んで酒席又は多人數集會の折り手品をして見せたならば拍手大喝采疑ひなし、記載目録●三尺の棒を丸呑みにする法●豆腐の上にて獨樂を廻す術●箱に水を入れる術●火を喰ふ大奇術●熱湯中に手を入れる術●空の帽子より色々物品を出す法●水上に木製船を自由に動かす術●黑いんきを金魚にする法●紙製の蝶を自然に飛ばす術●黒水を清水にする法●水を燃す術

附錄 **驚神的大魔術**

●清水を牛乳にする法●銅貨を水に溶す術●ステッキを帽子の中に隱す術●水中又は机上にて鷄卵を踊らせる法其他尙面白き手品が澤山記載してあるが皆子供にも出來るやうにしてある。

學理應用 世界奇術大全

一週間に思ふ儘に白色となる法●人間百歳迄生きる法●人の生死を前知する法●必ず子を姙む法●必ず子供の出來ぬ法●胎内の兒の男女を知る法●他人の年齡を當てる法●頭を櫻色にする法●日に燒けぬ法●髮の毛を多くする法●毛を生す法●書き損ひの字を拔く法●物覺惡き人に忘れさせぬ法●習字速成術●**催眠術**●歌がるた八々に必ずまけぬ法●百日百夜眠らずとも氣の衰へぬ法●老人でも白髮とならぬ法●其外斯の如き奇法を百餘集めたる書物は廿三錢(郵券代用は廿五錢)

◉總て御註文は前金の外一切送らず
●照會は往復ハガキの外返事せず 三重縣桑名矢田積 **弘報館**

破天荒の快書 破格の大安賣 最新大奇術

郵税共二十三錢 郵便切手は二十五錢

目録 大要**切支丹バテレン**の妖術●モルモット術●太き火箸を指先にて自由に曲げる術●金錢自由吸集の妖術●繩拔けの妖術●ランプの火にて手を燒く奇術●**十字架殺人術**●火渡の奇術●武道竹折術●火を喰ふ術●**隱身術**●人の力を取り我身を重くし上げられぬ術●七八歳の小兒を重くして上げられぬ術●棒を掌につけ押しても取れぬ術●片手にて數人の力を防ぐ法●讀心術●三人にて持ち居る椅子を指二本にて取る術●不動金縛の妖術●二本の指にて**大人**を自由に揚げる奇術●數人にて一人を倒せぬ術其他奇術妖術山の如しそして何人も實行し得る讀習書なれば早く求めて朋人を**驚**かすも亦愉快ならん、奇術師天一も跳足で逃け出す術ばかり。

禮法及婚姻法

日本の禮法は最大洩らさず婚姻部には媒酌●見合●結納の受渡●婚姻の前支度●嫁の荷物を送る事●三三九度盃の仕方●嫁と舅姑と親子盃の仕方●寢室に入る時の心得●フトンの敷方●其他婚姻に關する事柄は最大洩らさず附錄には婚姻出産死亡届其他澤山。郵税共廿三錢

男女 無上の快樂

本書の内容は秘密に付揭載する事は出來ないから本書を讀んで初めて愉快なる事が出來る者と思へばよい。(他人に見えぬやう密封にて送ります) 定價郵税共二十四錢

一讀千笑 滑稽頓智笑話

面白くてアゴのはづれぬ用心して讀み給へ本書を讀んで居れば退屈する時がない 郵税共廿二錢

數學獨稽古

皆さんの學科の内で一番苦まれる數學を手にて敎えるやうにしてある獨習書は、郵税共廿四錢

道具不要 輕便 食パン和洋菓子製造書

有り合せの道具で食パンや和洋菓子が手輕に出來る書は郵税共廿三錢

簡易 素人治療法

●感冒●胃病●痔●淋病●子宮病●眼病●寢小便●男女陰部諸病●頭痛●凍腫●肺病●ニキビ●ワキガ●サメハダ●耳ダレ●齒痛等の療法●毛を生す法●白髮を黑くする法●其他疾病を高價な醫藥でなく手輕に治療し得る書は二十二錢郵券代用は廿四錢

振替貯金口座番號 東京壹六九貳八番 三重縣桑名矢田積 **弘報館**

◉割引上段下段ヨリドリ五冊一圓、十冊一圓七十錢、郵券代用一割增

毛ぬき新劑

従來脱毛劑の類頗多きも之が製劑の原料は洋の東西を通じて硫化劑を配合して發賣せられつゝありと雖も皮膚に有害にして惡臭を有する不利あり先年所主數種の脱毛劑を研究して皮膚に無害なる一新脱毛劑ヘルーピンを發明せるに多數の實驗成功者を生じたり本劑は皮膚に害なく根本より脱毛せしむる唯一の良劑なり毛深き人毛多くして苦む人達は速に本劑を試用せられよ

原名ヘルーピン
定價壹圓
特製參圓
内地送料十五錢
海外三十五錢

飲んで色白くなる藥

近來美白劑としては外用的化粧水の類頗る多きも其確效あるものなく色黒き人の種々なる藥劑に迷ふの時代は過去り日進の醫藥學は一日も休止する事なく美白劑の製法も已に一變し内服劑應用の時代となれり當所製藥の惡液排泄劑ビオール錠は極て强度の清血劑にして一般惡血惡液性の人本劑を服用するときは血液を清淨となし惡液を排泄して皮膚を艶麗美白ならしむる根本的美白劑なりあらゆる賣藥に外用的化粧水を用ゆるも目的を達せざる人速に本劑を愛用して天賦の美白を保存せられよ

藥名ビオール錠
壹劑壹圓
參劑半參圓
内地送費十五錢

東京市牛込區北山伏町壹番地
百合園製藥所

專賣特許（せんばいとくきよ） 毛生藥

ノーブル液は多年の實驗より發明致しました品でいか程年入しき又は大なる禿にても或はぬけ毛、赤毛、生へ際の惡しき、眉毛口ひげの薄き類に塗て目立たず劇藥など少しも配合しませんから危險の恐れ更になく實に有効確實なる模範的一大靈藥であります

定價大瓶壹圓●小瓶五十錢（送料各貳錢密封八錢）

東京市東兩國横網町壹丁目十九番地
西森五友館

●るいれき（頸腺結核）特効新藥

▲内務省衛生試驗所試驗濟
▲藥學博士石津先生の分析

金線草丁幾
四百五十瓦入參圓（送費二十錢）
二百廿五瓦壹圓半（送費十五錢）

▲本藥に關する詳細説明書は御申越次第送呈す

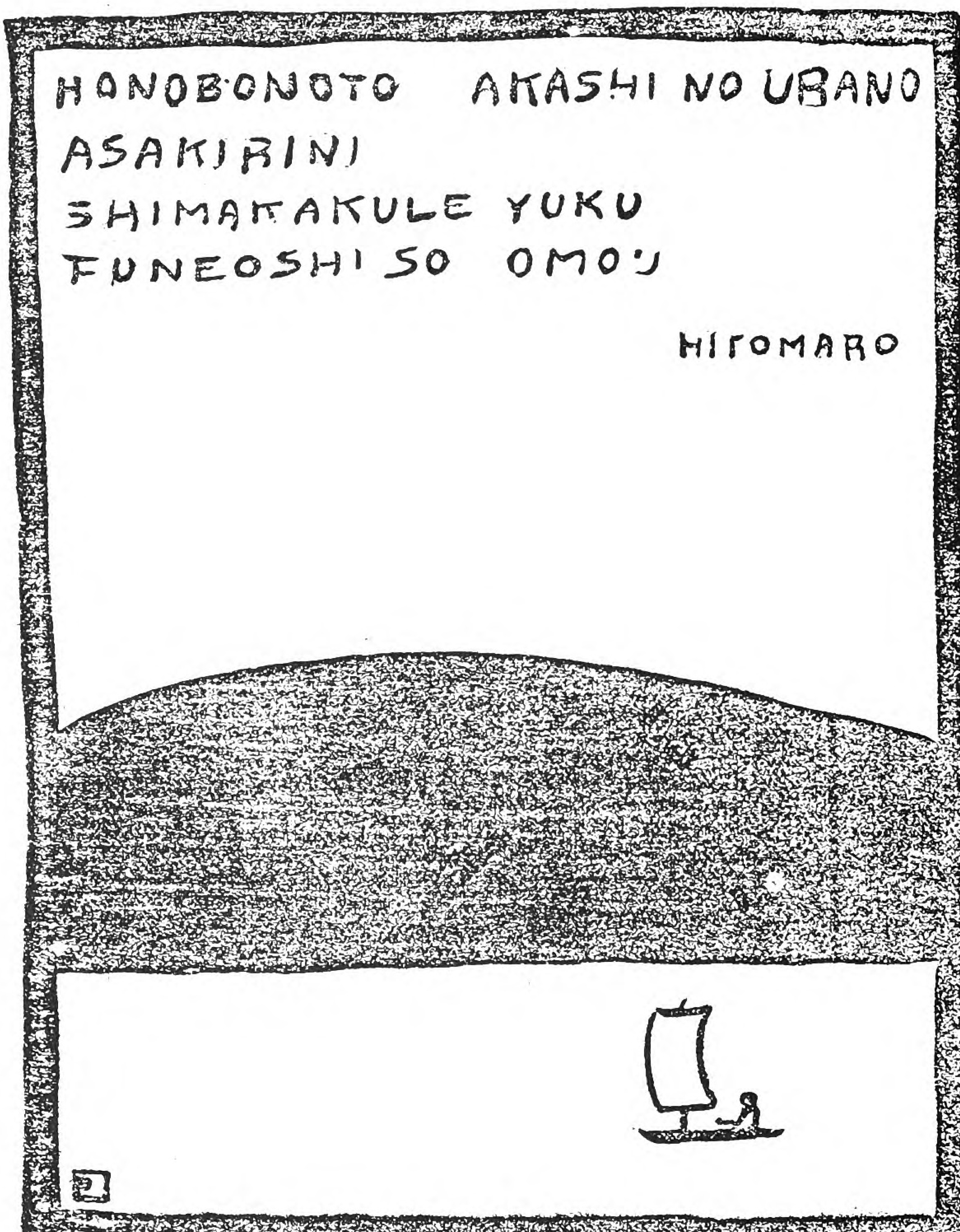
製藥本舗 東京日本橋區本銀町四ノ五 振替貯金七六六七番 **東光堂**

▲本藥は各地有名藥舗に於て取次販賣す

女子文壇

第七年第四號

明治四十四年三月一日



人間の觀察

精神病に罹りさうな人

醫學博士　呉秀三

▲結婚と健康

人を觀ると言ふにも種々ある。善い人か、惡い人か怜悧な人か、愚な人か、頼母しい人か、頼母しくない人かを鑑別するのも人を觀る一つであるが、さう言ふ方面の研究は他に然るべき人があらうから、私は精神病者、若しくは精神病に罹る恐れのある人か、然らざるかを鑑別することに就て御話をしやう。と言へば、精神病か精神病でないかを鑑別するのは專門家の任務で、普通の者にはさう言ふことを研究する必要がないと言ふ人があるかも知れないが、これは大變な間違である。なぜかと言ふに、成程精神病であるかないかを鑑定するのは醫者の任務ではあるが、素人でも多少精神病學の知識を持つて居なければならぬと言ふのは、結婚と言ふ大問題があるからである。以前は結婚問題の起つた時、容貌、身分、財產等には注意をしながら健康、遺傳等には殆ど注意する者がなかつた。ところが近頃は大分進歩したと見えて、結婚の場合に健康遺

傳等を囂しく言ふ様になつた。これは實に悦ばしい傾向である、然れども今日の健康遺傳を囂しく言ふのは肺病癩病位なもので。精神病にまでは未だ注意する人がない様である。

▲素人に分らぬ場合

結婚の場合に、精神病の有無を彼此言はないのは、精神病者、普通所謂狂者と言ふ者は、一見何人でも鑑別し得られるもので、敢て専門家を待つまでもないと思ひ、見た所別に狂者でもない人に對して、精神病の有無を彼此言ふ必要を認めないからである。然れども、これは立派に狂者となつた人と、普通の人との區別で、これなれば成程専門家の鑑定も何も要らないのは言ふまでもないが、然しさう言へば喀血して將に死んとする肺病人と、壯健な人間との鑑別は決して困難な問題でないから、結婚の際に囂しく言ふ必要がないと言ふのと同じことになる。肺病人も喀血をする程になれば素人が見ても直ぐ肺病人と言ふことが分るが、極初期の病人は素人が見ても分らない。精神病も又それと同様で、全く狂者となつて了うた者は素人でも直ぐ分るが、初期の精神病者若しくは精神病に罹る恐れのある人間は素人が見ては容易に分らぬ。然し素人では分らぬからと言ふて等閑にして置くべきものでない。

▲馬を見て犬と思ひ、地藏を見て人と思ふの類

肺病患者と結婚した人は不幸であるが、精神病者と結婚した人は尚ほさら不幸である。精神病者と結婚した人の不幸は言ふまでもないが、結婚當時は精神病者ではなかつたが、精神病に罹り易い性質を持つた人と結婚して、結婚後其人が精神病に罹つた際に、其配偶者の不幸も亦尋常ではなからうと思ふ。故に、結婚する場合には、相手が精神病者であるか無いかを確めねばならぬ。單に精神病者であるかないかを鑑別するだけに止まらず、其當時は精神病者でなくとも、將來精神病に罹り易い性質を持つて居るか居ないかも亦確

めねばならぬのである。これは如何して鑑別するかと言ふと、全く狂者になつて居る者は一見して分るから別に鑑別する必要もないが、精神病者でも初期の者は一寸見ただけでは分らない。其擧動を見、其言ふところを聞て初めて精神病者と言ふことが分るのである。幾許奇抜なことを行る人間でも、判斷力に錯誤のない以上は精神病と言ふことは出來ぬ。精神病者になると判斷力に錯誤が生じて來る、馬を見て犬と思ひ、地藏を見て人と思ふのである。一寸見たところ普通の人間に變りがない様でも、種々話をさして見る中に、判斷力に錯誤が生じて來る、斯うなつてくると精神病者と言ふことが直ぐ分る。

▲目に立つ癖は危險

精神病者は其擧動を見、其言ふところを聞いて、判斷力に錯誤があるかないかに依つて精神病者であるかないかが分るとして、現在は精神病者ではないが、將來精神病に罹る恐れのある人、又は精神病の遺傳のある人は如何すれば分るかと云ふに、これは精神病者ではないから判斷力に錯誤のある筈がない。從つて其擧動を見ても、其言ふところを聞ても鑑別ることは出來ない。然し精神病の遺傳があつたり、又は將來精神病に罹る恐れのある人は大抵癖がある。顔を顰めるとか眼を瞬くとか、口を歪めるとか、何か必ず癖がある。それも他の目に立たぬ癖や、又は誰にもあり得べき癖なら、それ程でもないが、著しく目に立つ癖や、珍らしい癖のある人は、多く精神病の遺傳があるか、又は將來精神病に罹る恐れのある人である。だから配偶者を求める場合には、癖のある人は避けねばならぬ。殊に配偶者を求める人間に精神病の遺傳があつたり、癖があつたりしては尚更癖のある人を避けねばならぬ精神病の遺傳のある者や、癖のある者同志が夫婦になつたら、其間に生れた子は、大抵精神病になる。斯う言ふ寒心すべき結果を生ずるから、配偶者を求める場合には、精神病の系統があるかないかを充分調べねばならぬ。然しさう言ふことは御互に秘密にして居るか

ら、容易に分るものでない。さりとて結婚する場合、一々相手を專門醫者の鑑定に附す譯にも行かぬから、この場合には素人と雖も、多少精神病學の知識を備へて、相手を觀察せねばならぬのである。その方法は今言うた如く其人の癖を研究するのが一番捷徑である。

▲眞の天才と病的の天才

近頃骨相學（Phrenalgy）と言ふものが大分流行して居るが、我々は骨相學と言ふものは認めない。頭の形を見て此所が張つて居るから殘忍だとか、此方が出て居るから情に脆いとか言ふのが、骨相學の主張であるが、頭蓋骨と腦とは別物であるから、頭蓋骨が大いからとて腦が大きいと限つた譯でない。成程腦の大小や形は精神に關係のあるのは言ふまでもないが、腦を包むだる頭蓋骨と、精神とは何等の關係もない。その精神と關係のない頭蓋骨の形を見て、人の性質を彼此言ふのは、我々に於て信ぜられないのである。然し容貌や身體の著しく普通人に異つて居るのは、肉體に於て既に出來損ひであるから、精神に於て出來損ひのところがあるに相違ない。斯う言ふ人間は圓滿な人とは言へない。又神童とか天才とか言ふものがあるが、これも眞正の天才と、精神病的のと二つある。眞の天才なれば何を教へても普通人以上の事を行る、ところが病的の天才になると、文章を書かせれば巧に書くが、數學は普通人にも及ばぬとか、字を教へれば能く覺えるが、書を教へても如何しても覺えられぬと言ふ樣に、一方に偏した天才は、一種病的の天才であつて、眞正の天才ではない。斯う言ふ病的の天才は夭折するか、然らざれば成年に達する時分には普通以下の人間になるのである。

* * * *

要するに、精神病と云ふやうな、一見直ちに分ると限らない病氣を持つてゐる人を觀るのは、成るたけ細密の注意を要する、たちいつたことは專門家でなければ分らぬとしても、其端緒ぐらゐは普通の人でも識つて居らなければならぬ。

容易いやうでむづかしい

内藤鳴雪

▲其人の平生を知れ

人を觀る心得を話せと言ふのですか、それは却々六ケ敷い問題だ。古來の英雄豪傑でも人を觀ることは難しとして居たのであるから。況て普通の人間が人を觀るなぞと言ふことは容易に出來ることでない。然し、人物を遺憾なく觀察する事は出來ずとも、悧怜な人とか、愚な人とか、惡い人とか、善い人とか、頼みになる人とか、恐しい人とか言ふ樣なことは、常識を備へた人間なら少し注意をすれば分ることである。孔子も『其以てする所を視、其由る所を觀、其安んずる所を察すれば、人焉んぞ廋さん哉、人焉んぞ廋さん哉』と言はれたるが如く、人を觀るには、其人が平常なして居るところの事柄を觀て、而かもそれが其人の本心から出た事か如何かと言ふことを好く觀極め、假令それが本心から出たことにしても、實際安んじて其事をやつて居るか如何かと言ふことを觀れば、人焉んぞ廋さん哉、如何しても心の中を廋しきることは出來ないものである。

▲人を觀る力を養へ

然れどもこの人を觀ると言ふことは、別に方法のあるものでない。今言ふた其人の平常の行ひを觀、其行ひが果して其人の本心から出たか如何かを觀、本心から出たとしても其事を安じて行ふて居るか如何かを觀るにも一定の方法のある譯でない。では如何して其を觀察すればよいかと言ふと、それは自分を修養して、多くの人に接し、多くの事柄に當つて、經驗上より觀察眼を養ひ、直覺的に人を觀ることを自得するより外はないのである。英雄は英雄を知ると言ふて、英雄で

なければ英雄が知れない、それと同じく修養のある人を觀るには自分に自修がなければ出來ない事であるから、人を觀察するには先づ自分から修養せねばならぬのである。自分に修養があり、各種の方面に知識と經驗があれば、人の善惡賢愚を觀る位のことはさ程難事ではないと思ふ。



▲友人と良人

そこで、女、殊に年少の婦人が人を觀ると言ふ問題に移つて來るが、年少の婦人が人を觀る必要の起るのは、友達を選む場合と、夫を定める場合である。友達を選むのも無論大切ではあるが、夫を選むのとは違ふから一々年長者の意見を聞いた上でないと、交際してはならぬと言ふ必要もないが、夫を選むものには、修養の淺い、經驗に乏しい年少の婦人が單獨に選むのは頗る危險である。前にも言ふた通り、人を觀るには修養あり經驗ある人間でないと容易に人を觀察することは出來ないから、未だ年少にして修養淺き婦人が、乏しい經驗を以て人を觀察すると言ふことは餘程困難で

ある。それが單に人を觀察するだけなれば兎も角も、其人を一生連添ふ夫とするに至つては愼重の態度をとらねばならぬ。今時の若い女は自分の夫を選むに敢て父母の干渉は要らぬ、自分の夫は自分で鑑定して自分で選べばよいと言ふ樣な思想を懷て居る樣であるが、これは大變な間違であらうと思ふ。さう言ふ女は何を標準として男を選むかと言ふと、彼の人の容貌が好いとか、氣前が面白いとか、或は小說や詩作がうまいとか、云ふ處に目を着けて居る、そんな事のみで人物の如何が分るものでない。

▲上長者に從ふのが安全

修養の淺い、經驗の少ない年少の婦人が、その乏しき知識と經驗を以て、一生を伴にすべき夫を選むなぞとは實に危險此上もないことである。殊に若い婦人は感情に走り易いから、一時の感情の爲めに恢復のつかぬことを仕出かす者も少くない。されば年少の婦人が夫を選むには如何すればよいかと言ふに、修養の深い多くの經驗を持つて居る、上長者に選擇して貰ふのが何より安全である。人を觀るだけの修養のない自分が一時の感情の爲めにあらぬ男を夫に持たうより、自分の爲めを思ふて而かも人を觀察し得るだけの能力ある上長者に鑑定てゝ貰ふのが、その當時は兎も角、將來に確に幸福である。さりとて上長者の眼識に叶うた者なれば、自分の氣に入らない男でも夫に持てよと言ふのではない。上長者が我が意にさへ叶へば本人の氣に染まなくも無理に押つけよと言ふのではない。何を言ふても夫を定めるのは當人の意思が肝心であるから何所までも可也當人の氣に入つた男であつて、そして上長者のこれならばと眼識に叶ふた男なれば夫として後に不幸の起る樣なことはない。要するに人を觀ると言ふことは六ケ敷いことではあるが、修養と經驗とに依つて一通り觀察を下すことはさ程困難ではない。然れども、修養中の若い婦人は、人を觀るにはなるべく上長者の意見を容れるがよいと言ふのである。

* * * * *

顏を觀れば人物が分る

田岡嶺雲

▲心持の外へ現れる實例

人の心持と言ふものは必ず外へ現れるものである。これを證據立てる爲めに一つの話がある。私が未だ中學時代のことであるが、中學の一年生の時は、生徒の顏が幾種類にも分れて居た。商人の子は商人顏をして居るし、官吏の子は官吏顏をして居る、醫者の子は醫者顏、軍人の子は軍人顏、職人の子は職人顏、藝人の子は藝人顏と言ふ樣に、親の職業に因て其子の顏の式が皆違ふて居た。ところが中學の一年生が二年生となり、二年生が三年生となるに伴れて、顏の種類分けが判然せぬ樣になり、卒業する時分には一列一體、皆中學生と言ふ顏になつて、官吏、軍人、商人、職人と言ふ樣な區別が分らなくなつて了うた。其後幾年、その時の中學卒業生は、或は學者となり、或は軍人となり、或は商人となり、或は職人となつた。今日逢つて見ると、學者は學者顏をして居るし、軍人は軍人顏をして居る。商人は商人顏、職人は職人顏と言ふ樣に孰れも其從事せる職業に因つて自ら顏が變つて居る。これは如何いふ譯かと言ふと、心持が自ら外へ現れるに外ならぬのである。未だ中學に入るまでは、家庭の感化を受けることが強いから、商人の子は商人的の心持で居るし、學者の子は學者的の心持で居る。その外孰れも親の職業に從ひ、子の心持も違ふから、自然それが容貌に現れて居るが、一度中學に入つて五年間學問をすると、親の職業の感化が薄くなつて、我は中學生なりと言ふ念が強くなるから、孰れも中學生と言ふ一種鑄型に嵌つた顏になるが、それが又世の中へ出て種々異つた職業に從事すると、其職業に伴れて顏が變つて來るのである。

▲女も同じこと

斯う言ふこともある。彼の藝妓の顔を見るに、藝妓だから悉く美人と言ふ譯には行かぬ、中には美人でない女もある。然れども皆一列に藝妓と云ふ顔をして居る。又幾許美人でも修養のない女は、何となく間が抜けた顔をして居るが、之に反して假令容貌は美しくなくとも、修養のある女は何となく氣高く美しく見えるものである。その他刑事巡査や、博徒の眼を見ると、一種言ふに言はれぬ凄い眼をして居る。これ等も皆前に言ふた通り其人の心持が外へ現れるのである。先づ斯う言ふ事實を擧げて置いて、さて本問題に於ける人を觀るの心得を一言しよう。

▲眼を中心として

今言ふ如く、人の心持は自ら容貌に現はれるものであるから、人物の如何を知らんと欲せば其人の顔を觀るのが一番である。殊に顔の中でも眼が最も大切である、人の心を讀まうとするには、眼を見れば大抵は分る。人の善い人は其人の顔を見れば人の善さうな顔をして居る、人の惡い人の顔を見れば必と人の惡い顔をして居る。だから人を觀るには眼を中心として、其人の顔を見るより外に方法はない。顔に尋では其人の擧動である。其擧動に少しも愼重な態度なく常にソワ〱して居る人に偉い人物はない、斯う言ふ人には大事を相談することは頗る危險である。腹の底に確りしたところがないから、自然擧動も輕々しくなるのである。若し修養があつて、腹の底にウント締りのある人なれば、其態度も何となく重々しくなつて、人から輕蔑される隙がない。又聲も其人の人物を現すものである。聲のみでない、其言ふところも言葉も亦人物を現して居る、だから人を觀るには先づ其容貌を觀、それから態度、音聲、言語等に注意すれば大抵は分るものである。

▲人に見られる心得

人を觀る時の心得は前に言ふた通りであるが、終に臨むで一言して置きたいのは、人に觀られる時の心得である。人を觀る時の心得を說明したのであるから、その反對に立て、人に觀られる時の用意も略分つたであらうが、近頃の女學生等が、餘り不用意であるから言ふて置きたいのである。女學生の多くは化粧に憂身をやつして居る、それもまづ好いとして、それ程化粧に熱心な女學生の盛裝したところを觀ると、成程前から見ると顔は白粉を塗て居るから白いが、後へ廻ると首筋に垢が溜つて居る。多くの中には首筋までも白粉を塗て居る者もあるが、それでも耳には澤山垢を溜めて居る。立派な着物を着込むでも、手足の爪が長くなつて、爪の中に黒い垢が溜つて居る樣では、幾許立派な着物を着て、顔に白粉、口に紅と裝を凝らしても、決して美しく見えるものでない。唯に美しく見えないのみでない、其人の平常まで思ひやられて興の冷るものである。人を觀る心得も必要ではあるが、人に觀られる心得も亦等閑に附してはならぬ。

男子の觀察を誤る

佐藤紅緑

▲愛憎の念を去れ

人を觀ると言ふことは隨分六ケ敷いことである。人間と言ふ者は却々表面を飾る者であるから、餘程注意せぬと人物の眞價は分るものでない。それに又人間には愛憎と言ふものがあるから、自分の好いた人には長所ばかりが目に附いて惡い所は分らない。又自分の好かない人に對しては、缺點ばかり見えて、長所は少しも目に附かぬ。であるから人を觀るには先づ第一に、自ら虛心平氣になると言ふことが必要である。若し其

間に愛憎の念がある樣では、眞に人を觀ると言ふことは出來るものでない。曇つた鏡には物が寫らない、明鏡にあらざれば物の姿がよく寫らぬと等しく、愛憎の念を去つて虛心平氣にならねば、人を觀て正鵠を得ることは六ケ敷い。殊に女は愛憎の念の强い者であるから、人に對すると直ぐ愛憎の念を挾む。人を觀察して好くべき長所、嫌ふべき缺點を發見た上で、好いたり嫌ふたりするのなれば兎も角も、未だ相手の長所缺點をも見定めずして、直に愛憎の念を挾むで、而して後に人を觀やうとするのであるから、曇つた鏡に物を寫すのと同じく、人物の眞價は容易に分らないのである。

▲現今の女の考

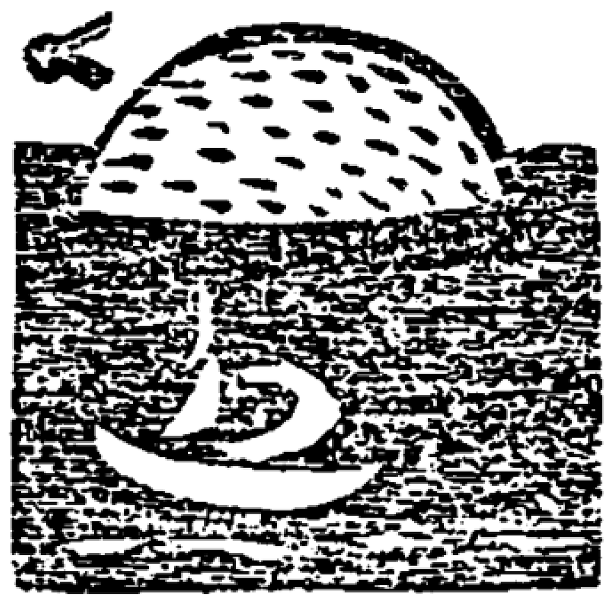
女が男を觀ると言ふことは時代に依て變つて行く。これまでの女は、男を觀るに、言葉數の少ない、思慮分別のありさうな、何所となく侵し難い所のある、賴母しい、終生賴りになり相な人を好いて居た。斯う言ふ標準を以て男を觀て居た。と言ふのは女に獨立心がなく、又獨立して世の中に立たうと言ふ野心もないから、成るべく賴母しい、一生の賴りとして安心の出來る男を求めて、夫としやうと言ふ心があつたから、自然男に目を附けるのでも、此標準を以て居たのである。現在の女でも尙ほ此傾向のあるのは言ふまでもない。ところが今日の女、殊に女學生の一部に於ては、斯う言ふ標準に依つて男を見ない樣になつた。言葉數の少ない人よりは、能く語る人の方を好み、思慮分別のある人よりも、才氣のある人を好む。敢て賴母しい一生賴りになる人を求めやうとはせない、共に語つて面白い、自分に對して敬意を拂ふてくれる、少なくも自分を押へ附ける恐れのない男を好む樣である。これは何故かと言ふに、今日の女は、以前の女の樣に、終生夫に賴ると言ふ考がないからである、正敷間違へば獨立すると言ふ決心があるから、夫として賴もしい男よりも、友達として面白い男を好く傾があるのである。

▲人物の表と裏

然れども斯う言ふ標準を以て、男を觀るのは善くない。若し斯う言ふ標準で男を觀るとなると、輕薄才子は皆女に好かれることになる。さなきだに愛憎の爲めに人を觀ることの出來難い女が、總て己に諛ふ者を標準として人を觀る樣では、其結果は寒心すべきものであらうと思ふ。將來はいざ知らず、今日の世の中では女が男を觀るには、如何しても、頼母しい人物と言ふことを主眼にせねばならぬ。然しこれとても、男と言ふ者は却々油斷の出來ない者で、表面に頼母しく見せ掛けて其實少しも頼母しくない者が多いのであるから表面の親切や行のみを見て、輕々に人を信ずることは出來ない。假令見たところ幾許信用すべき人物の如く思つても、裏面に如何いふ行をして居るか分らないものであるから、人を觀るには表裏兩面から觀察を下さねばならぬのである。要するに人を觀るには、愛憎の念を去て、虚心平氣に相手の容貌態度から、行の表面裏面を觀察してからでないと、輕々しく信ずることは出來ないのである。

自然の恩寵に富む南歐の都會

丸山晩霞



乞食娘

羅馬を發つた汽車の中にも異樣な風俗をした女乞食の一群が乘込んでゐた。或者は太古の風俗を眞似て柔い薄絹を肩から腰の邊に纏ひ、太鼓の樣な樂器を肩のあたりで打鼓き輕やかに舞うた、或者は絶々の聲で亡國の哀歌を唄ふ。私達は衣嚢から銅錢を握み出しては小娘が捧げる椀の中に投げ入れた。次の驛に着くと其

群が降りる、又新らしい一群が乘込んで來る。恰度日本の列車內へ物賣が入つて來る樣だつた。

ボンベイに着いて、或る茶店に憩ふと、其處へも亦女乞食の群が打集ふて來る。或乞食は背後に立つて群る蠅を追ふ、或者は案內もなく靴を磨く、唄ふ躍る、而して幾らかの金錢を强請る。

ベスビアス山は八合目迄馬車で行く事が出來る、然し其れ以上は又乞食の包圍に逢ひ乍ら徒步しなくてはならぬ。其處の乞食は案內者よりも却て丁寧に案內して呉れる。

軈て南歐の夜は明けた。ネープルス灣の朝景色が脚下に開ける。

キャペルの巖洞

エルクヲノで朝飯を食べた。其沖合三浬許りに美麗しいキャペルの島が浮んで居る。椰子の森、レモンの丘、其間に歐米素封家の避寒別邸が白く建並んで居る。此島は英語の謂所"Table Land"で四方絕壁の屹立した上に一帶の高原が恰度高机の樣な形をして居る、其テーブルの上に當る平地は純熱帶式の色彩に包まれて居て、其間に白大理石や赤煉瓦の別莊が建てられてゐると云つた樣に恰も樂園の面影が有るのだが、其絕壁の影には彼の名高いキャペルの巖洞が橫はつて居る。キャペルの魔窟とも呼ばれた此巖洞は、曾ては海賊の棲家になつて居た。普通の旅客が此洞窟を見物するには汐の引けるのを待つて漸く小舟が這入られるだけの穴を拔けて洞窟の中へ入ると其處は又驚く程廣い大廣間になつて居る。而も此處へ入つて來る光線は總て海を透して來るので、旅人の顏も船も天地も總てが青色に見える。水は鏡の樣に透き通り、旅客が若し少しでも聲を立てると忽ち洞內の靜謐は破られて轟々と反響する。實に何となく鬼氣の逼り來る心地せられ、總てが神秘の幕に包まれて居る樣である。

更に不可思議なのは、段々と洞の奧へ入るに從つて異樣に輝く星を見る事である。キリストがナザレに生れた其夜現はれたと云ふ星も斯くやとばかり驚異の眼

を呼けば、其の實は星には有らで、自分達が入り來りたる穴の青き天地に只一點輝けるので有る。

其うして居る間にも滿潮となれば船を出す事が出來なくなると言ふので急ぎ洞外に出れば又船乞食の群に包圍される。美しい女の彈くギターの音さへ騷しいと思はれる許り、耳を俺へば、銀貨を海中に投せよと呼ぶ、斯くて女等は海底深く潛りて小さき銀貨を拾ひ來るので有る。

南歐の美の要素

南歐と云へば直に其色彩の美を追想する。滴る樣な暖い、柔い、明るい、有らゆる美しい色彩は南歐の自然にのみ認められる。何なれば斯く美しいかと云ふに、第一に氣候の溫暖なる事で有る。又地面が石灰質で有る事にも依る。見よ南歐の空は深い深いコバルトの、雲一つない幕に掩はれ、其濃藍色は明るい地面と實に絶好の對照をなして居るので有る。樹林、家屋、皆空より明るく浮び、程宜き雨に逢ひて暖き空氣は透き通る許り鮮明に、綠葉は謂所滴らん許りの色を呈して居る。而して麗しき花咲き、種々の果物實る。殊に南歐の野は至る處葡萄の蔓のをどろなして、或一方より匍ひ出せば其極る處を知らぬと云ふ程で有る。

又純黃なのや、稍々帶紅の柑橘類が、鮮な綠の中に美彩を放つて居るのも美しいものだ。

ベスビアス附近は地形に變化が有て高低甚だしく、山岳あり高原あり而も今云つた樣な美彩に掩はれて居るのだから其れも確に美の一要素をなして居る。其上に今一つの美の要素は此土地は地震が非常に多い爲めに成る可く堅牢なる地盤を擇んで家がたてられて居る其れで此邊の部落は武藏野の村々の樣に平地に群るものとは異り、巖壁の處に人家が集まつて居る。ナポリでもボンペイでも左樣で有るが殊にアマルフヒーは最も變化に富んで居る。絶壁の巖に人工を加へ、其間に一杯の土あれば花園にし、廣ければ葡萄を作る。家々の白堊に映つる日出の遠望は又美しいものだつた。

私達はアマルフヒーの寺院に宿つた。其夕、麓の村

に暮色蒼然と逼り、地中海の鏡の様な水に夕日の反映美しきを眺めながら、山より迂回せる巖壁の白き小徑を下る。下町に出れば町並の家々より華なる灯影洩れて、其處にカフヒーあり、別莊あり、更に淋しき漁夫街もある。

羅馬を見ない人は巴里も同じ都會の様に思ふだらうが、決して左様ではない。東京で云へば恰度小石川の茗荷谷邊の様な地形に變化の有る處である。他の都會も皆其れに似てゐる。

大通にはコンクリートを敷いてある。然し小路や田舍の街に行けば、火山の噴火礫を敷いて有る、其れにも亦特種の趣きがある。

南歐の地中海では水と空とが殆んど同じ様な青藍色をなしてゐる。而して海岸一帶の砂地は強烈な熱色をなしてゐて、色彩の調和の上から云ふと、優美と云ふよりは壯美に近い。實に南歐では反對色の調和を極端に見る事が出來る。

例へば、青、黄、赤、綠、と云ふ様な強烈な原色或は原色に近い色彩が多く、なまぬるい間色は少ないのである。

曠漠たる野の中の坦々たる白い小徑を廻り廻りて行く。兩側は一面の葡萄畠だ。不圖見る、日本の田舍などでも能く見る所謂一軒の掛茶屋が有る。腰を下すと女が一杯の葡萄酒を持て來る。其葡萄酒の美しい事よ。日本で見る彼麼葡萄酒などは迚も較べものにならぬ。杯を透して見る其色彩の美しさ恰もルビーの如く輝き其味は舌にも胸にも泌みる様に思はれる。

南歐の風光は實に繪畫だ。其儘にして一幅の名畫だ。更に乞食の包圍がなかつたなら怎麼に樂しい美しい事であらう。

トルストイ曰く

自分は寺院に背いたと云はれてゐるが、それは不和を蒔く今の寺院に背いたので、和睦を齎し、正直に神を求める人を悉く合一する寺院牧者以下、佛陀、孔夫子、婆羅門等に至るまでを、悉く合一する眞の寺院には、自分は背いてはゐない。



男女の自由交際は未だ早い

女子大學々監　麻生正藏

現在の日本の青年男女の交際程、不自然なものはないと思ふ。人に依つては之を別段不自然と解さず無理に自分等から青年男女と言ふものを切りはなして見て居る人があるが、私はさうは解さない。

現在の日本の青年男女の交際を、西洋のそれの如くに許す事は、丁度馬の前に車を付ける樣なもので、何の役にもたゝないし、第一見た所の惡い事は言ふ迄もない。

凡べて我國の風習は、長い間の歴史によつて家族的に進歩して來たので有つて、之が善い、彼れが惡いと思ふ直ちに其れが現實されるものではない。維新の大學も永い〳〵百年に餘る月日の間に、知らず〳〵に養はれて居つた周圍の空氣が、あの大學を生んだので有つて、決して一朝一夕の企で無かつた事は歴史を學んだ人の既に知つて居る處であり、又我が此立憲政體の恩典に浴するを得たるも、或る時期に達してそこに現れた現象に外ならぬのである。

西洋で男女交際の自由なのも、又それに相當した長い歴史と、習慣とが　自然の法則と成つて居て、みだりに人を亂さないのである。

西洋では若い男や女が交際するのではない、凡べての男と女が同樣に交際して居るのである。

卽ち母にもあれ、祖父にもあれ、それ相應な交際が有り、それと同樣に、娘にも相應な交際が有るので、至つて自然に、至つて至當に、風習として連續されて居るのであつて、それとても若い娘や息子たちが、決

して自分勝手な交際を開くのではない、必ず何事も包まずに、父母の許しを得て、それ〴〵交際を開くのである。父母に無言で交際するのは西洋でも賤しい事として有るのである。

かゝる事は中流以上の青年男女は非常に恥づべき事として居るのは、我國と較べて優劣はない。つまり西洋では男と女と友達になる。友達で有ると言ふ事が社會一般に普通な事と成つてるので、それは老人であれ壯年であれ、青年であれ、何の怪しむに足らぬ樣な習慣に成つて居るのである。されば私が渡米した時分に假令へば先方の學校の婦人を訪ねる樣な場合にも、其婦人は私を其友達に紹介するじぶん、いつも私のフレンドで有ると言つて紹介するのである。

是等すべてに比して、我が國の有樣はどうで有らう。假令老人と雖も、女は女づれ、男は男づれ、祖父母から父母迄同一な道を同一にふんで來て居るのに、今一時に切り離した樣に、青年男女から交際を開いた處でそれこそ木に竹を接ぐとまでならずとも、其れに近い樣なものでは有るまいか。私は決して絕對に此交際を止めるものではない、否他日は日本でも、おひ〳〵に一般がから言ふ風になつて行くだらうとは思つてゐる然し其れを今一時に堤の切れた樣に押し擴げ樣としても廣まるものでもない、よし廣まつたにしろ、極めて不完全なもので有る。假令ば一般の勢から押しても、若い男女が交際しますと、父母に願つたところで、眞から譯が分つて許してくれる親が幾人有らうか。親に知らさない交際は、西洋でさへ、恥ぢとして居るのを知らなくてはならぬ。何しろ若い婦人が一個の青年を「私の友」として、辨解をいれずに人に紹介出來るやうになるまでには未だ〳〵長い月日でそれ〴〵の心の修養と、特に婦人の腦力の發達を要する。青年男女の交際は切りはなして論ずべき事ではない、社會現象の一部とならなければ不自然である。

社會全體の組織が不完全であり、個々人の考へも未だ能く根柢が定まつて居らぬのに、青年男女の交際だけを解放するのは、甚だ危險なことである。



松浦佐用姫

岩野泡鳴

松浦佐用姫のことを初めて紹介したのは、『萬葉集』第五巻である。『天平二年七月十一日、筑前國司山の上憶良謹上』の文に曰く、『大伴の狹手彦、特に朝命を被り、使を藩國に奉ず。棹を艤してここに行き、やうやく蒼波に赴く。妾、松浦(佐用姫)この別れの易きを嗟き、彼の會の難きを歎く。卽ち高山の嶺に登り、遙かに離去の船を望み、悵然として肝を斷ち、黯然として魂を銷す。遂ひに領布を脫して之を麾く。傍者涕を流さざるなし。因て、此山を號して、領布麾之嶺と曰ふ』と。

狹手彦は大伴の金村の子であつて、『宣化紀』並に『欽明紀』に據ると、勅命を受けて、一たび新羅征伐に向ひ、また一たび高麗征討に向つた將軍である。そのいづれかの場合に、佐用姫の事件が起つたのであらう。

憶良がこの姫を詠み込んだ歌は二首で、左の通りだ。

松浦がた、佐用姫の子が
領布振りし 山の名 のみや
聽きつつ をらむ。

遠つ人 まつら佐用姫
つま戀ひに 領布振りし より、
負へる 山の 名。

更らに後人の追和が四首ある。左の通りである。

山の 名と 云ひつげと かも、
佐用姫が この山のへに
領布を 振りけむ。

よろづ世に 語りつげとし、

この岳に　領布　振りけらし
　松浦　佐用姫。
うなばらの　沖行く　船を
　歸れとか、領布　振らしけむ
　松浦　佐用姫。
行く船を　ふりとどみかね、
　いかばかり　戀しく　ありけむ
　松浦　佐用姫。

この傳説の事實もしくは内容は、ただ以上によつて知られるだけで――それ以外もしくは以内に何事も傳つてゐない。かの女が悲嘆の餘り、化して石になつたといふが如きは、無論、ずッと後になつてからの附け加へである。然しかういふ悲しい別れは、事實上、あり得べきことである。わが國のやうな島國で、而も現代と等しく他國と交通が自由であつた上古には、殊にさうである。この哀歌的事實を僕は北海道に於ても、實際、二つばかり發見する。一つは、誰れもよく知つてゐることで、

　おしよろ、高島　及びは　ないが、
　せめて　歌すつ、いそや　まで。

の『追ひ分け節』である。これも、或女が或男の船を見送つて歌つたものだと云ふ。故高山氏もさういふ風に紹介したが、實際はさうロマンチクな事實ではないらしい。

今一つのは、然し、全く佐用姫的である。アイノの歌で、『ヤイシヤマネ』といふ。哀歌の意だ。

　ヤイシヤマネー　ナ（悲しや、な）！
　ヤイシヤマネー　ナ（悲しや、な）！
　クコロ　ポン　カンピ（わが若い帳場さんは）、
　ヤイシヤマネー　ナ（悲しや、な）！
　ナッタ　アララ（どこへ行つた）？
　ヤイシヤマネー　ナ（悲しや、な）！
　ヤイシヤマネー　ナ（悲しや、な）！

番屋（乃ち、漁場）の帳場は、アイノの若い女どもに取りては、理想の戀人である。それと關係してゐたのが、年期が滿ちた爲め、渠は内地に向つて船出した。

然しその船は途中で沈沒したといふ悲しみを、アイノの娘に代つて歌つたものだ。萬葉詩人の佐用姬歌のどれよりも、この方が一層內容的敘情に近いほどだ。

然し『ヤイシヤマネ』にせよ、『おしよろ高島』にせよ、佐用姬に關する諸歌にせよ、いづれも同種類の歌であつて、また事實上あり得べき事柄であることは、常識から云つても、分つてゐるだらう。然しまたただ哀れだとか、悲しいとかいふばかりがさきに立つてゐるばかりで、說明がなければ、すべて何のことか殆ど分らない。その說明によるも、佐用姬はただ狹手彥の妾もしくは愛妾（ずッと後世になつての記事）とあるばかりで、歷史上、それ以上のことは見えてゐない。將軍が都からつれて來た者だか、それとも、肥前の松浦潟に滯在中に出來た者だか、それも分らない。然し松浦佐用姬と、わざ〱土地の名を被せてあり、また、萬葉詩人が松浦の『魚を釣る女等』に値ひ、『花容雙びなく、光儀匹無し』など形容し、それを『松浦仙媛』など稱



し、『この世の國のあまをとめかも』と讃してある。そんなところから推察すると、その女を愛する餘り、狹手彦の時代にも、旅の慰めにそれを一夜妻にしたことがあつたのかも知れない。

多分、佐用姫は狹手彦の一夜妻であつたのだらう。して、いよ〳〵渠の船出にのぞんで、別れかねて、山の上に登つてまでも、頻りに戀ひ叫んだのであらう。ただ男に對する愛情が深かつたといふだけなら、事實はそれだけで充分に解釋され、石になつたといふ傳說はそれほどまでに心の決心が堅かつた例へにもならう。ところで、それもどうせ想像であるから、いツそのこと、もう、少し進んで現代的に解釋して見ればどうだらう。

一般の傳說的解釋では、『ヤイシヤマネ』の主人公と同樣、佐用姫は單にセンチメンタル（純情的）な女に過ぎない。つまり、平凡な女の情を平凡に現はしたにとどまる。然し、今、かの女はもと海女で、一般の海女どもとは違つて、男嫌ひの氣味があつた美女とする。して、二十四五までは獨身で通してゐたとする。その結婚しないわけに就いて、いろんな評判が立つに違ひない、片輪であるからとか、隱し男があるからとか――それに對して常に一身を庇護する必要上、かの女は一方に神經過敏になると同時に、また一方には、村中の狼連が手易く近づかないやうな嚴格な態度を持するに決つてゐる。狼連の同情は變じて憎しみとなる、かの女はまた、表面はたとへ快濶だとしても、心はいつも孤獨の感じに沈むばかりだ。

そのうち、村の或男があつて、醜男だが、最も親切な、獻身的な愛情をかの女に向けるとする。かの女は手易く動くに相違ない。然し男の親どもは、世上の評判を信じて、あんな女と一緒になることは許さない。從つて、二人は却つてます〳〵熱烈な戀に落ちる。許されない家を持つ、村中は燒き餅と憎しみとの爲めに一層虐待する、新夫婦は、却つてそれに鍊はれて、相愛の情が深くなる。そこへ、狹手彦の滯在があるとする。して、將軍の給仕女には美貌のがいいと云ふので

佐用姫が無理に選抜されるとする。恨みを晴らすにいい機會だと思つた若者どもが、ありもしないことを事實らしく、かの女に將軍のお手がついたと云ひふらす。男はふとそれを信じて、燒けを起し、誓ひを破つて、わざと村の遊女に關係する。

佐用はまた佐用で、男の變心を聽き、今までの誓ひは噓であつた、氣安めであつたと恨み怒つて、どうせ一たび破れた處女の誇りは取返すことが出來ない——いッそのこと、將軍に從つて三韓に行き、死ぬなら一緒に死なうと決心する。將軍も亦都にある乾がらびた妻を嫌つて、誠實に佐用の愛を受けたいと口說いてゐたところだから、兩者は佐用の一諾で精神的夫婦となる。然しなつたはなつたものの、狹手彥はかの女を、村には稀れなほど上品な、しッかりした態度から、無垢な女と信じてのことであつたのに、隱し男があると聽いて、そんな氣の變り易いものは愛することが出來ないと云ひ出す。

佐用姫は狹手彥からと、もとの男からと、どちらにも責められる。して、三人とも、そこに思ひ違ひもしくは調べ落ちがあつたと分つた後、佐用はどちらも誠實な男二人に身を許してゐる立ち場になる。然し現在の決心は過去の決心とは違ふ。かの女はもとの男が自分に歸れとあやまり詫びるのを聽かず、現在の狹手彥に就いて行くつもりだ。然し狹手彥は、義理上、もとの男に割愛して、かの女に渠ともとの通りになれと勸める。狹手彥の決心も強い。然しまた佐用の決心も強い。こんな場合になつて、佐用が狹手彥に領布を振つたものと解釋して見れば、かの女の內容は實に複雜な最も強烈なものになる。して、僕はこの解釋に從つて僕の脚本『佐用姫』（中央公論昨年の十一月號）を書いたのである。

われは友なく此世の岸に
立てばかなしみ、うしほなして
あはれいづこの果を來り
あはれいづこの果に行くや

胸もどよめく海の音の
凝りし巖の上にすわり
沈む夕日の光見れば
ひとり吾身の影ぞ薄き

泡鳴



男雛たゞしき居ずまゐに
おほとの籠り渡らせず
女雛若うて白き面
闇に怖ぢたる春の夜を
小鼠走せてさかしげに
御衣の端を齒に咬へ
壇より下ろし奉つる
女雛の御手に尾の觸れて
あなやと強くふり放す
鼠さわがず菱の餅を
さらへてこそは歸りけれ

事ありけりと男雛
悠々として出でたまふ
後ろうかゞふ早わざの
抱きすくめし羽がひじめ
物の怪まろを捉へぬと
玉の御聲の朗らなるに
ともの御やつこ御階をよぢ
逆髯あげて心得貌
さくら、橘、山吹の
殿上、花のあらしなり

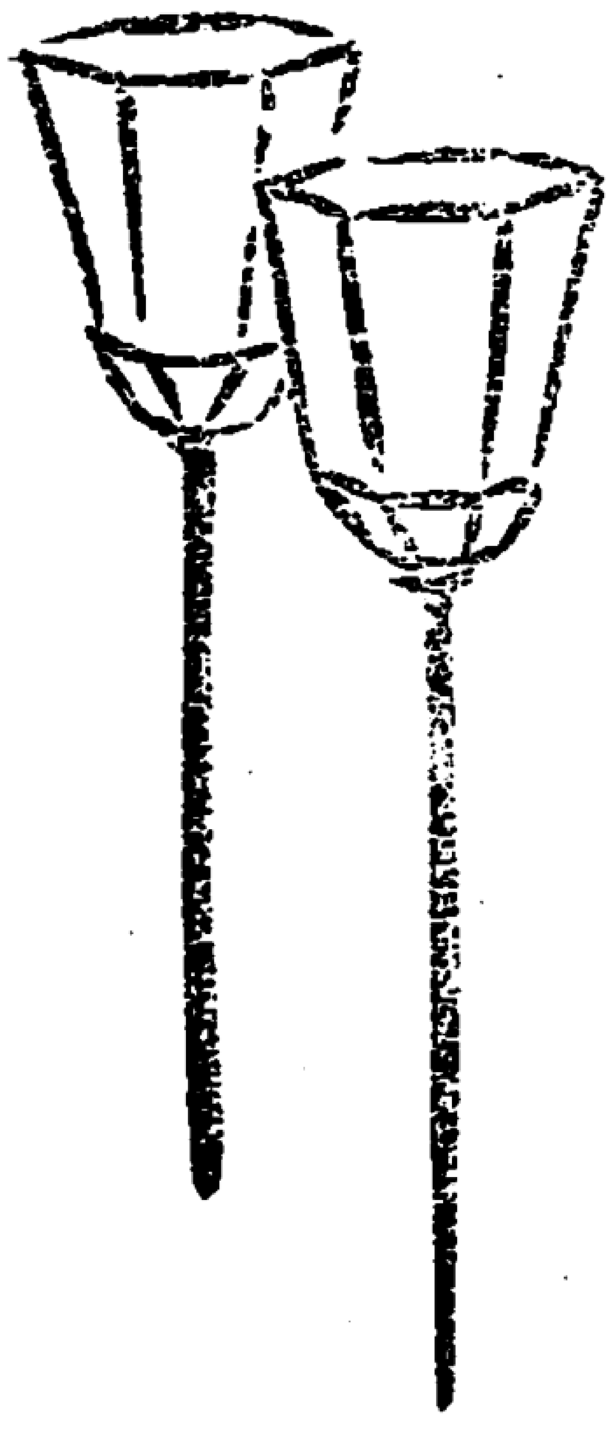
河井醉茗

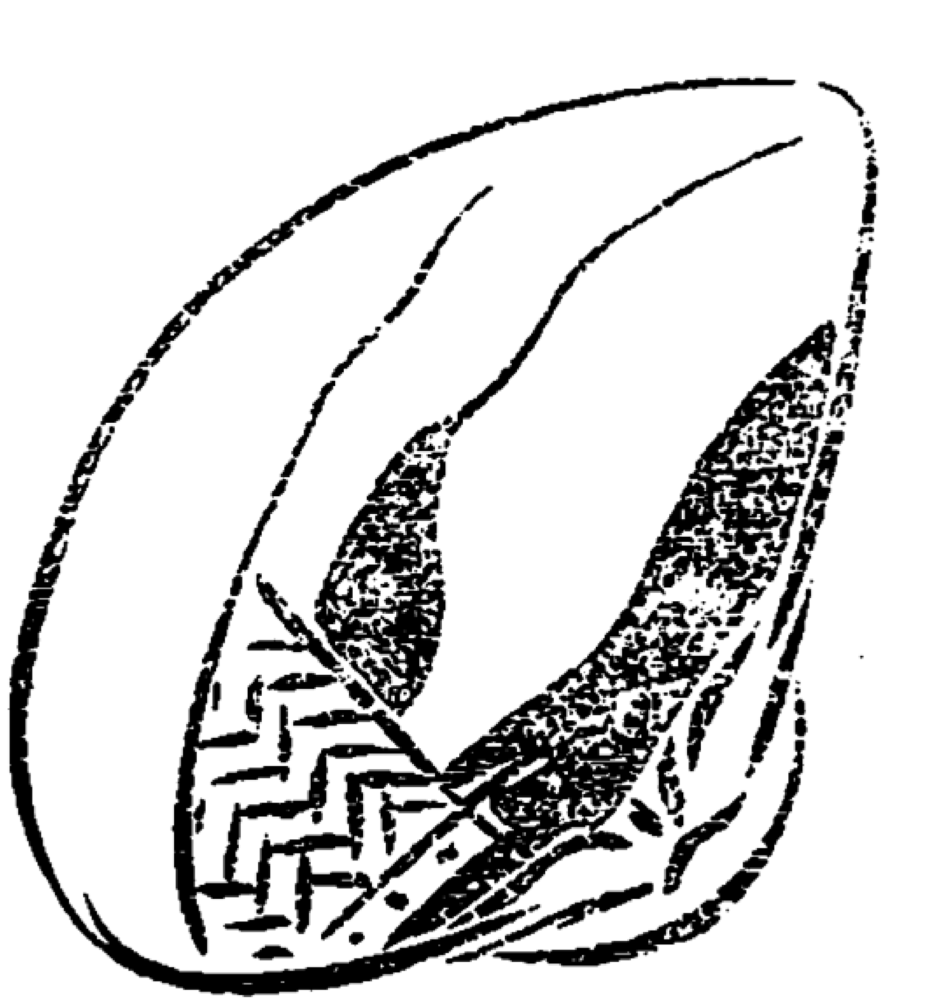
をとこ君は朝拜にまゐりたまふとて、さしのぞきたまへり。けふよりはおとなしくなりたまへりやとて、うち笑みたまへる、いとなめでたうあいぎやうづきたまへり、いつしかひいなおしすゑて、そゝきゐたまへり。三尺のみづし一よろひにしな〴〵しつらひすゑて、又小さきやどもをつくりあつめて奉り給へるを、所せきまで遊びひろげたまへり。なやらふとていぬきが、これをこぼち侍りにければ、つくろひ侍るぞとて、いと大事と覺えたり。げにいと心なき人のしわざにも侍るかな。

源氏物語　紅葉賀の巻

ひいなの殿はいかゞおはすらんと問ひたまへば、人々笑ひて、あふぎの風だにまゐれば、いみじきことにおぼえたるを、ほとほとしくこそ吹みだり侍りにしが、此御とのあつかひにわびにて侍りなど語る。

野分巻





箱を出る顔忘れめや雛二對　蕪村

もどかしや雛に對して小さかづき　其角

ころんでも笑ふてばかり雛かな　千代

ふるまひや下座に直る去年の雛　去來

昔男昔をんなや紙びいな　乙兒

また小姫君はこゝのつ十ばかりにていみじう美くしう、ひいなのやうにて、こなたかなたまぎれあるかせたまふ。

榮花物語初花の巻



萬葉の姿ゆかしや紙びいな　機石

姉妹肩そろはねど雛の駕籠　斜嶺

高殿に雛のまゝたく煙かな　芙萊

たらちねの摘まゝでありや雛の鼻　蕪村

片づかぬ女ごゝろや雛の暮　可詠

うれしいな今日は物言へはだか雛　專跡

雛達の春の夜何となくさめん　癸亭

みよしのゝ吉野に古き雛かな　升六

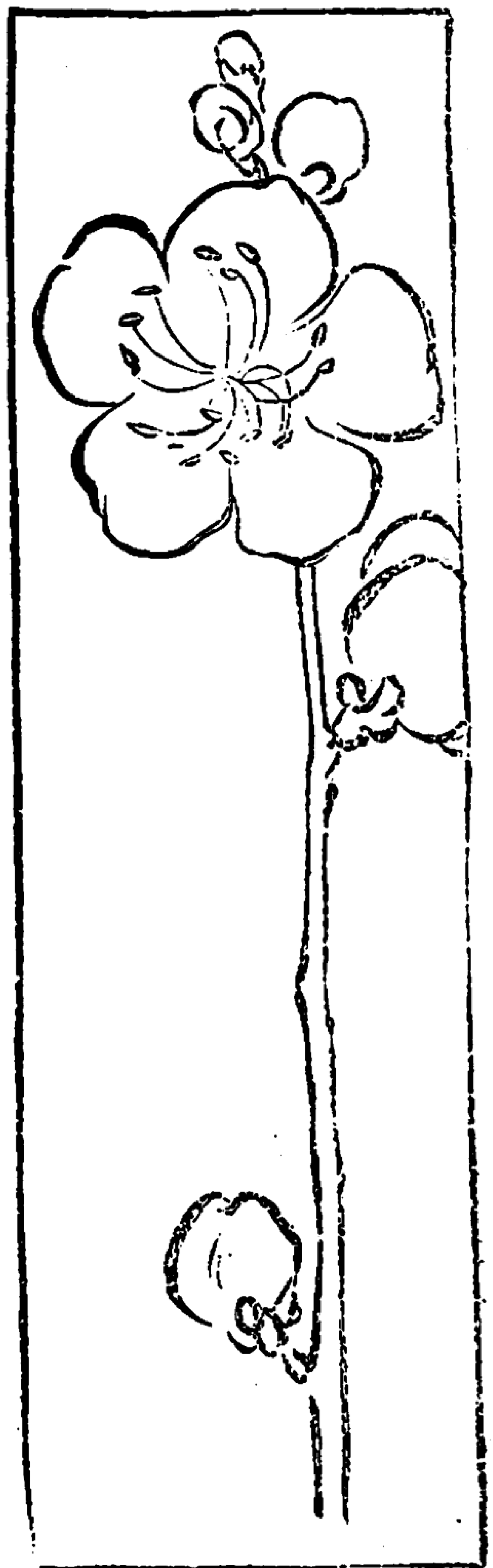
蝋燭の匂ふひいなの雨夜かな　白雄

片隅に煤けびいなも夫婦かな　一茶

內裡雛人形天皇の御宇とかや　芭蕉

雀子も來るやひいなの膳まはり　士朗

雛より小さき嫁をもらひけり　虚子



すぎにしかた

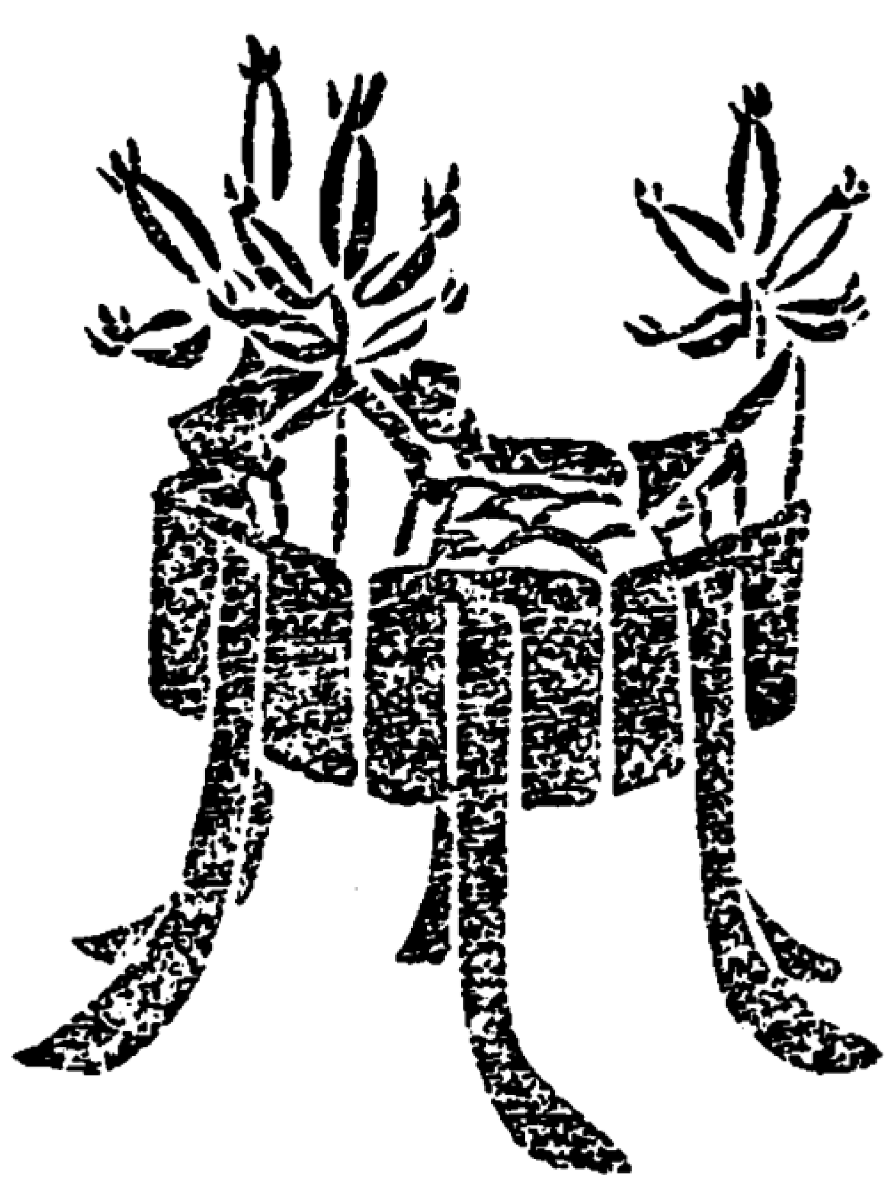
こひしきもの

かれたるあふひ

ひいなあそびの

てうど

枕の草紙



蘇生

横瀬夜雨

（上）途上

下館驛――木村なか子　花の前――たて場主人――
若柳――初澤さく子　藤店――荒野放浪　澁田――
森新三郎

一

本當にわたしびつくりしてよ、だつてをとゝひ一色樣の追悼會にいらすと仰やつてお居でしたのに、昨夜は死んだつて、人の噂でもあることか、貞雄さんて方をはじめ　五十人ばかり堺屋に居るでせう、御遺骸は三番で來る筈だつて。私もお知らせを受けてかけ出して來ました、どんなに悲しかつたか……。河井先生はまだご存じなさるまい、邦子さんは――邦子さんも下館へは二度お出になつたし、御一しよに小貝川を渡つて吉田へもいらしたといふに、今日死んだとは夢にも知んなさるまい。はま子さんは、うた子さんはと思うと私ひとり皆さんの名代にでもなつて御迎へするようで涙が出て來てしようが無かつたんですの。今だから白狀しますが先生はあまりに人の世をつらく思召して自殺しなすつたのだと思つてよ、御免あそばせ、ね。渡邊さんなんか横根のお出入だといふくるまやの源太さんに、不幸（葬式）は何日でせう、なかまを皆集めて會葬せんならんつて、そしてお家柄だけにどんなにお立派な門おくりになるやらとおつしやつてましたわ。わたしはどうしようかと思つたの、だつて着物が無いんですもの、それに御可愛くなすつてる古河のはま子さんすら御年始のお葉書も忘れてるつていふでせう、邦子さんも濱子さんもわざ〱お見送りにお出な

さりはしまい、まして仲よしのお友だちでもかたついてからは、知らぬふりをするのが女には多いのだもの、お敎を受けた方でいくたりお墓を訪ふやら。私は三里しか隔つてゐないのだからいつでもお墓詣りはできる今度は御遺骸を迎へるだけにしようか、どなたか東京からいらす方があつたら其時行つても惡いてとはあるまい。うそつけ女が泣くのは着物のほしい時と芝居に行きたい時切りだなんて言つてらした方だもの、私ひとり行つたところでお墓の中から、ヘン來たな、もう惡口を言はれないからせい〳〵するだらうと言はれる位がおちだわと思ひました。けれど、たゞの一人わかいお妹さんがあるんぢやなし、をとゝひいらした時は順様が居た、順様にもお嫁さんが近くお來るといふ、師の君はながい〳〵一生をとう〳〵華やかなひも無くて終つてしまつた。お葬式は壯嚴華麗に行はれようけれど物足らずおもひなさりはしまいか。馬鹿と怒つたつておつかなくは御座いません、生きてらしたから言ふのぢやないの、私はどうしても自殺したとしか思へなかつた。あなたにうら切つた賢い孃さんには、ピストルをいだいて淺間の山を下りた○さん、髮を切つて父ぎみに捧げなすつたKさん、お二人の事はこのへんでは誰だつて知つてますわ。十萬の財を擧げて一人の愛に代へようとした方も、血をしたたかたらして遺書を作つた寺のお方も、もう赤ちやんが生れたといふぢやありませんか、そしておくめんなしに「女」として「母」



京都誌友會餘興の活人畫（大原女）

として誇つてゐるのでせう、冷嘲熱罵、女を人非人ばかりのように言つてらしたのも無理はない。水戸を廻つて何かまた刺戟を受けていつその腐れ埒を明けてしまへとそれで自殺したんだ、自殺したにちがひないと思ひました。

　自殺したにちがひは無いと思ひ思ひ、私は大せいの方に雑つて柵によつて泣いてゐました、最期の列車に聯結した箱から昇ぎ出さるる白木の柩、それに附添うて下りてらつしやるお父樣、柩の中に横へられて長き永き眠りにつきませる薄命の人！　私は詩人だからうまいでせう、こんな想像をつくつて。

　お棺を載せるんだつてすつかり菰を敷いて毛布まで上に擴げた荷車がありました。それへ二三人立ちかゝつて棺へ入れて來るんだんべいな、そンでなくちや荷車ぢや、むりだせと言ふものがありました、するとなあにその時やすつかり毛布へくるんでおれ抱いて俥で行かあ、おめえ等前後に伴しろいと言ふ方もありました。その方は顔中髯が生えて目のくちやくちやした四十四五でした。

　子供等はどうしたらう、先生が死んだぢや、己等も迎へに行んべつてあとへくつかつて來るようだせといふと、うん野殿の橋まで二十人ばかりあとになり前になり驅けて來たつけ、貞雄さんがおめえ等の親切はてれで届くからぼつ〳〵歸つた方がいゝつて言つたから多分戻つて行つたらう、もう遅いもの。

　全くおそうございました、霧の中に立つてる筑波山の北の方から月が出て高く高く氷のやうな鏡を懸けてゐました、停車場の東よりに建てた倉庫の家根をかすめて鬢を吹く風が大へん寒かつた。

　七時になりました、後れても五時までには水戸をお立ちになつたらうからと皆して入場券を買て橋を渡つて行つて待ちました。東より遠く〳〵山の峡を突つ切つて轟々と進んで來る汽車を見た時——月が霜の光のように照つてる、其下をぽつぽつと白い煙を吐いて地ひゞき立てゝましぐらに來るのを見て、私の胸はひしと引きしめられるように思ひました。

來た來たと小さな鬨の聲をあげて、ばら〳〵と皆プラットホームのはしへかけ寄つたのです……

『しづかにさしくる
　ゆふひのかげに
よをさりしともの
　おもかげみゆ』
うれしやきみはいきませり

二

どうも昨夜位驚いたことはがんせん。あんなに機嫌よくいらして爺や厄介になつたなと仰やつて、あの大きな、立派な座布團にそつと乘せられて俥から御挨拶をなすつたお顔ももう見られない、どうしてまた亡くなつたか、汽車はお連れが大勢有つたし友部の乘かへに間違があつたとも受とれず、めつきり寒く冴え返つたためお足がいけなくなつたのか、尤わつち等の足なんか二本共なだでぶつ切つたところで、痛えとも痒えとも思ひやせんが、尫弱なあなたのことたから寒氣のために心の臟でも凍つてなくなつたんだんべと思ひやしてな。

先達、あれは大水上りでしたな、横根も泥水の中に沈んぢまつたとお話でした、あン時うどんを一箸だけ上つてよしましたね、今日はどうです、にしんの煮たのぢや矢張りいけませんか。

まあお母さまが、どんなにお喜びでせう、死んだ子が生きて歸る？　こんな珍らしいことも無いものです、もうあんたを何處へも出さないつておつしやつて押籠めてしまひやすぜ、ハヽ。



京都誌友會餘興の活人畫　（小楠公）

三

夜雨死すと書いた三喜さまの葉書を手にして、わたしは立つて庭をあるきました、をとゝひ門口までいらして欅の下で兄をおたづね下すつた時わたし〇〇さんの御祝儀手傳に行つてゐてお目にかゝりませんでしたし、正月にはなか子さんとかるたを取りに大寶へ上らう、上つてお顔を眞黒かいに染めて上げるつて約束をしたけれど、たうとう亡くなつてしまつた……。かぶにじは海の嵐の兆てふ、わが死よ來れ天つみそらゆとお歌ひになつたのが讖を爲したのだと思ひました。

まあ、それでも二たび常陸の人として生きかへつていらしたのだからようございました。生れかはつたんだから是から九十九までは生きるかも知れませんわ。

お母さまが待つてゞせう、それぢや御きげんよういらつしやい。

四

まあ上つたつていゝでせう、お上んなさい、お負つて上げますよ、死んだものが生きて歸つたんだから君の爲に太白を擧げよう。いゝやねお母さんも喜んだらうが、おれもお母さんに讓りはしないぜ。くやみの取消とおめでたを兼てさつき親爺が出かけて行つた、きのふは妹の奴も青くなつてしまつたつけ。貞雄さんが自轉車を飛して來て、おい守君夜雨さんが死んぢまつたぜと、言ひ〳〵北の方へ行つてしまつて、どうして死んだとも何とも、まるで狐につままれたような氣がしてゐた。上つたつて君が改めて死ぬわけもあるまい毒は盛らないから…………

しかしお母さんが待つてるだらうな、どうしても上らずに行きますか、ぢや二三日うちにビーフでもしてたま下げて行きませう、モウパッサンの譯もでき上つたから持つてつてお目にかけます。

人さわがせ、と言ふと、おれが知つたことかいと叱られようけれど、夜雨さんが死んだといふのは不思議のようで、また有り得べき事實であると思つた、全く

僕の頭にも自殺ぢやないかといふ疑が電のやうに閃めいたのでした。

毎日二階の戸をくり明けてはお家の家根を見い見い育つて來たのだから、ひとり病んで無限の寂寥を堪へていらすことは文壇の誰よりも〱私が多く知つてゐる。『夜雨君逸事』を齎して『早稲田』の服部（嘉香）をたづねようものなら奴も吃驚するだらう。一つ書かうかなあとまで思つた。少さな時はずゐ分あなたにいぢめられたつけ。

ぢや、あした………

五

下山へ木伐りに行つても一駄で仕まひにすべいと思つてせつせと「薪割」を振り廻してるところへ、いち女あが迎へに來て、やまかさんぢや大へんだつて、早く來うとつていふから、うんお婆さんが亡くなつたんだなと念を押すと、ほなもんか、まあちやん、が水戸で死んだんだつて、皆驅けて行つたちうから、變なこともあるもんだとは思つたが、急いで馬を引張つて門へ追ひ込んだなり、おうちへ上つた時はもう混雜の半ごろでした。

此間中、大山の重兵衛さんへかたついたお蘭ちやんが、お慶さんち方でせう稲葉の新宅のお上さんと一しよに來てゐて、やつとお晝を喰べておばあさんの枕もとでお茶をのむところでした。そこへトラジシスの電信が届いたのださうです、「嫁見せに」來て從兄の死に出つくはせるといふのも不思議だけれど、お二人共お上さまを慰めるのにはどんなにか困つたらう。何でもお慶さんだけ殘つてお蘭ちやんは結城へ歸るといふのを聞き傳へて集つて來る人で廣間も中の間も一杯になつたので、かういふ中にお前がゐたつて仕ようが無いそれよりか下館へ三番で死骸が來るといふのだから、粲にでも迎に行つて貰つてくれつて強ひるようでしたお客さま達は泣きに來たようなものでした。

その中村中何家からも人が來たので、近間の親類方へ手分して沙汰に行つだのです、吉田のお姉い樣とて

へは儀兵衛さん等の組、大市の旦那のとこへは久吉郎さん等とように、たゞ急變を知らせるに止めて、いづれ旦那樣が遺骸を護つて歸れば、改めて通知しますからといふ口上だけ持つて行つたのです。それから下館へは貞雄さんが一番早く出て貞雄さんに本を敎はつてゐた子供等も二十人ほどわあつて飛出したといふし、私等は、座敷掃除と諸道具のかたつけ役に當つて日くれまでにすつかり障子まで張かへたのです、女連はおばあさんのお床を隱居所へ移すつて大さわぎをやつてゐた。

棺を載せる荷車の仕度が出來て米さん――凱旋の勇士天ヶ谷米吉君がおい森行かうと庭から呼んだ時はもう灯のつく頃でした、おれにや役が有らあいと言はうとしたが、死んだのは竹馬の友である、まあちやんの死骸を迎へるといふのは二度と無いことだ、待つてやんべと一しよに門を出た、同勢は六人、丁度四番手だつたのです。

けれど私はまあちやんが死んだとは思へなかつた、現にやまかは割れる樣な騷ぎである、お上さまはじめおつきあひか知らぬが入のかみさん中坪のかみさんも泣いてゐる、新宅のおかみさんも、失心したようにそはそはしてゐる、冗談ぢやない、死なないものに何でかう騷ぐべい、死んだんだ〳〵と無理に死んだにして、大寶の坂ンところまで行つたら、大串の喜助さんがから俥を引いて來て、横瀨さんぢや大へんだな、皆さんお迎へですかと言はれて、下館の方から來た人がかう言ふのぢや本たうに死んだのであらうとはじめて悟つたのです。

がつかりして歩いて行くと膽波ノ江役場の先きに車かぢがあるでせう、あすこに北大寶の武平さんが立つてゐて、虎壽さんが亡くなつたつて可わいさうなことしたなと言はれたのです、どうしてあゝ早く評判が知れたか實際驚きました。

二本松、梶内のあたりから日が暮れて櫟林の中を提灯一つで六人ながら沈み切つて急ぎました、向うから動いて來る火を見るとそら來たと思つて、荷馬ゝに

失望したり、野殿の坂では道普請の土方が火をふつたけて燠つてゐたのを、あれがきつとさうだぜと言ひ言ひ近よつたら矢張違つてゐた。

もう行合ふ筈だがな、どうしたんだらう。三番には棺を列車へ持込む都合か何かで間に合はなんだにしても、もう着いてやつて來る筈だがなあ、といふ者がある、さうよな何ぼ泡ぁ喰つたにしたにしろ旦那樣が附いてゐるンだからなといふ者がある、死骸を汽車で運ぶには一車貸切にするんだから水戸からは四十圓もとられるだらうといふ者もある、だつてお前いくらかゝつても死顔を見たいのはお上さま一人ぢや無いといふ者もあつて、一軒おき二軒おき人家のまばらな街道を聟入でもあることか、めつたに犬も吠えないから寂しいの何のつて。…………

まあちやんも罪つくりだつた。

少し急ぎますか、今日もまたおうちは大へんな人ですよ、くやみいふ積で門まで來て座敷へ通つたらよろこびをのべるといふぐあひで、昨日とは夜の明けたやうなちがひです。

しかしお上樣は。

對話 語り盡せし後の寂しみ

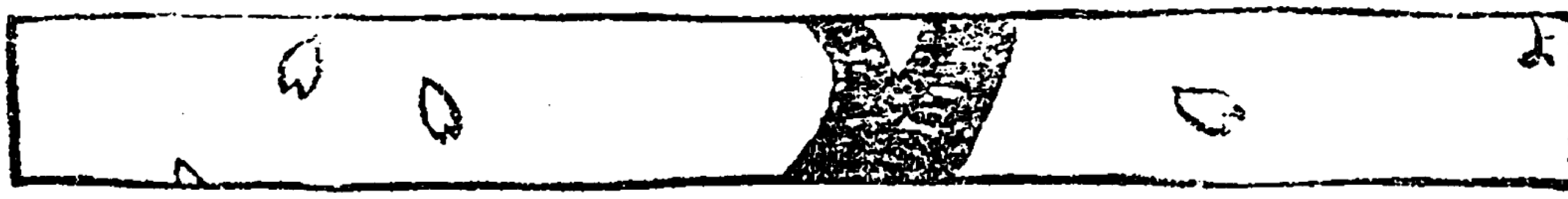
森川葵村

A青年「………………………」
B女「怎なすつて？　急に悄げて入らしやるわ、新ラオコン論の續を聞かして下さいよ」
A青年「最早疲れました、それより面白い詩でも歌つて聞かして下さいな。

In die dunkle Bergschlucht
Kehrt der Mond Zurück.
Ein Stimme singt am Nassersturz:
O. Geliebtes—
dein höchte Wonne
und dein tiefster Schmerz
sinS mein Glück——

暗き谿間へ
月はかへりぬ
一とつの聲の流に歌へり、
わが戀人よ——
汝が崇きよろこびと
汝が深きなやみこそ
わが寶なれ——　——

B女「淋しいわねえ、なぜこんなに淋しいんでしよう、『たかき歡び』も『ふかき艱み』もみんな惜しげなく、使ひ果してしまつたような氣がしま



すね」
A青年「あんなに櫨の木に鳴いてた頬白は何處へ行つてしまつたんでしよう」
B女「やがて暮れるのですね、向ふの端山のゆるやかな、疲れたやうな山襞が蒼い靄に疊まれてしまひましたもの」
A青年「ぢや小鳥は自分の塒へ歸つたんですね、空つぽの巣へ」
B女「空虚の巣？」
A青年「左樣、私はかう思ひますよ、終日歌ひ盡して、胸のありつたけを歌ひ盡して、空虚の巣へ歸つたとき、小鳥は初て氣がついた樣に、屹度何とも譬へやうの無い心淋しさを覺えるだらうと――丁度夕暮の溝にほんのり咲いて居る河骨の花が何か知れない微風にぐつたりと萎れて暗い夜の水へ沈むやうに………」
B女「淋しいわね、何故かうも急に淋しくなつたんでしよう」
A青年「お互に空虚の胸へ歸るんですね」
B女「怎して、そんな淋しい聲をなさるの、何だか私は墓の裡で話して居るやうな氣がしますわ」
A青年「脱殼のやうな月が空に出ました」
B女「何だか微かな細い聲が聞えますね、女のやうな、稚兒のやうな聲が町の方から」
A青年「あれは夕轟です、ちらほら霧のなかから灯が見えて來ました」
B女「いえ、町の方から棺が來ました、淋しい葬式が」
A青年「成る程、灰色の沈默の行列が沼に沿うて來ましたね」
B女「何の葬式でしよう、灯もつけないで、莫迦にひツそりして居ますね」
A青年「月が脱殼のやうに空に出ました」
B女「何の葬式でしよう、西の方へ行く樣ですね」
A青年「あれは『白日』の靈です、パツションの死骸です」

繪の東京

(一)上野停車場と納豆賣　荒井寛方

午前五時……小雨もやんだ。
北ゆきの驛の鈴から柔かに朝の芽がふく、
けれど未だ靄へる路の敷石に音もせなんだ。
ほの暗い路地を掠めて、濡そぼつ並樹を潜り
火のやうな物の叫びが震へつゝ濡れつゝ靄ふ。

胡蝶





雛の顔

長谷川時雨

雪消する日に知己のところからお白酒を戴きました戸外には寒い風が吹いてをりました。梅もまだ蕾の色が、どれが紅梅やら白梅やら、見分けるのにかたい頃ではありましたが、一日火をたきこめた室内は溫かうございました。

　お白酒は今樣の瓶につめたのではなくて、角樽の杉で作つたのへ入れて、昔ながらの山川白酒と書いた、櫻の花にぴらぴら（短冊）のさがつた、古風な色摺りの紙が張つてありました。それが何となく嬉しくて、私は子供にかへつた氣で、小さなギヤマンのコップを取出し、杉樽とひとつに朱塗りのお盆へのせて床の間へ飾つて見ました。さういたして見ますと平日から飾つてあります、紙雛樣や犬張子の古びたのが殊更目につきますをかしさ。花瓶に桃の花はありませぬが、ほんの椿の一輪にも何處と無く浮きたつ色が見え、戸外は霜の花の凍る夜を、燈火をつけてからは火影の春めくのに、室の中がなんとなく賑やかな心地になりました。

　私は火桶に寄そふて取とめもない思ひにふけつてをりました。傍では夕暮方に學校から他の稽古に廻つて歸つてきた妹が、まだ袴をつけたまゝで、忘れぬうちにと習つてきた十三弦のおさらひをいたしてをりました。其下むきになつた髮のかかり、下髮の毛が肩に亂れてをります。

　ふと私は、お雛樣のお顏のことを思ひ浮べました。昨年でしたか三越に參考品として全國にありとあらゆ

る古代の雛を集めたのが陳列してありましたのを觀ま
したが、あまり數多いので、室町雛とか、菜の花雛と
かいふ、特殊の名前を忘れてしまひました。其前方か
らも折々見かけました次郎衞門雛（二人の姓名）なぞ
はまん丸い顔といふよりは横に平たい、切込み人形な
どに見るやうな、額と頰の豐な、それで眼のきれが細
長くなく、上眼瞼の丸くなつた、可愛いくるりとした
眼で、どことなく力んだ愛嬌のある、心地のよい明る
い顔でございました。私が祖母から以前ゆづられまし
た、今は形見の内裏雛は、百年ばかり前の品でござい
ますが、其顔は今いふ瓜實顔の、ごく上品なおつとり
した面立で、鼻はふつくりと大きくも高くもなく、額
は廣く頰もふくよかで、小さなゑくぼがあつて、お口
は唇がすこしほころびて笑を含んでゐるやうに見えま
した。目つきは間が離れてゐて、耳は大きうございま
す、間が抜けてゐるとまをせば、さういふ難もつけら
れますが、向つてゐるとおほどかでのびやかで、此方
の胸も開くやうで、桃の花にもお白酒にもふさはしく
いかにも上巳の節句の主人と、人の心を柔らげる德が
あらはれてゐるやうに思はれます。もつと、もつと古
い紙雛の方は奧樣のお髮が年月に擂りきれてしまつた
ほどの品ですが。此女夫もそれはのびやかな面立でご
ざいます。私は近年になつて兩三度、妹の幼兒のため
やら、從妹の娘の初の節句やらの爲に、久しぶりで十
軒店へ參りまして、生れた子があやかるやうな、よい
顔立の雛を求めようと、あちらこちら探ねまして、雛
の顔のあまり近代的——神經質にせゝこましくなつて
ゐるのに驚いたのでございました。

近頃出來るお雛樣の顔は、あまり怜悧氣に過ぎます
まいか。鼻は細く高く銳く、目と目の間は狹り、あれ
が人間ならば瞳をよせてゐる位でせう。頰は削つたや
うに淋しく、あれでは和樂の相よりは、苦悶の相が見
ゆるといふても仕方がございません。顔にさへ餘裕が
ないほど故、體は猶更こつこつで、殿樣のお膝をまげ
た具合は痛々しく、袍を召した胸もとも薄べつたく、
奧樣の十二一重の肩つきの寒さうな事は、惡い小芝居

などに見る役者のかたちと同じやうに、品といふものが顔といひ、體といひ全體に缺けてゐて、見窄らしうございます。

工人の拙ないのと、小器用といふことが雛の顔を段々貧相――險しくしたとはいへ、時代の人の顔の特色――其心地が、人間によつて作られる木偶の人形の顔にまで影さすのではありますまいか。

優美の二字で言ひつくせる、懷しい昔時の女性の顔、教育されて引締つた、何處かに切ない悶の影のひそむ現代女性の顔。其二個の代表を、女のもてあそぶ雛の顔に男の手によつて、知らず知らずの間に作り出された變遷をしのばぬわけにはまゐりません。

今私の目には、今までに見たほどの人形の種々な顔のまぼろしが浮んでまゐりました。妹が彈く琴の絲の餘韻にのつて、往さくるさの行列が亂れます、私はかならず、お白酒をいぢきたないと申したのではありませんが…………。



女子の柔術

雛のことは昔時、崇神天皇の御時和珥坂の少女の歌に、「比賣那素寢殊望」とあつて、それは「ひめのあそびも」といふのださうでございますが、古書にもうたがはしい事だとしるしてあります。其後の事ではうつぼ物語にも、源氏物語にも枕の草子にも見えましたと存じます。

いにしへ三月三日には、身を拔ふ撫でものといふのがございました。雛は何日ともかぎらず玩びましたものを、やがて兩方を合して上巳の節句となり、桃の雛祭りとなつた

かと思はれます。天兒、這子といふ人形が雛といふ手遊びになりましたのゆゑ、立雛（紙雛）が最初の型かと思はれます。天兒は竹の筒へ首をつけたものでございます。丁度今の子供が白紙をもんで綿をいれて人形の首をこしらへますように絹で丸く首をこしらへ、目鼻や頭髪の生ぎはなど描きましたものです。近代は雛のかたちが小さくなりましたが、昔のものは中々大きうございました。それは天兒、這子は、上流の家に兒女が生れる、形代――影身といつたように、其子に廻つてくる惡いことは、天兒が守り引きうけるといつた迷信で、魂のない分身のように作りますので、かなり大きなものでございます。私はある方様の這子を拜見させて戴きましたが、七歳位の子ほどの丈でございました。召物なども、主のお兒と同じものを着させたものとか承はつてをりました、只今でも貴人の御老年の御方には、御自分樣の天兒、這子をお持ちの方があります。天兒は男子で這子は女子ださうでございます。立雛は此天兒這子の二つを合せたものと、古來の申傳へを證しますのは、袖を開いたのと開かぬのと、女夫ともあの通りの形でございます。近代になつて雛の小さくなつたといふは一般のことで、其以前にも好事の人が、極めて小さく作らせたものもございますが、それはたゞ一部の好みでございました。

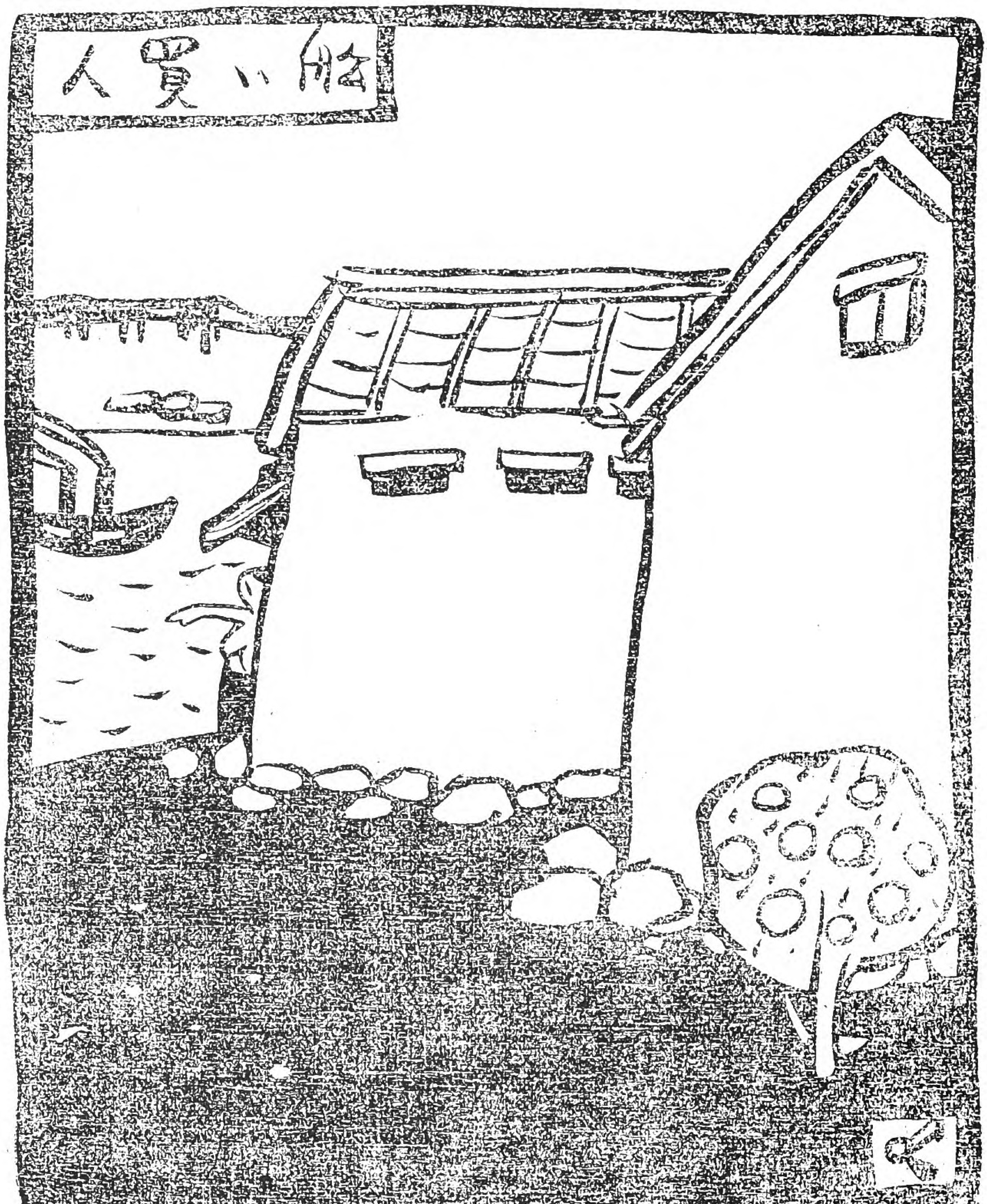
紙雛が〻の本式といひますのは、巳の日の拔ひの紙の人形から出しゆゑとも、ある書にはでございます。それから此遊びは、昔時も若きうちだけの催しのように思はれます。

雛の名は何によつて名づけられましたのか分りませぬ。小さいもの譬ば鳥の子の小さきうちを雛といふような意味でせうか、分明りとはまをされません。

此樣なむづかしい穿鑿に氣が散つたので、雛の顏のまぼろしは薄くなりました。消てしまひました。琴の音も絶えました。

源氏物語若紫の卷に「この若君（紫の上）おさなき心地にめでたき人かなとみたまひて云々（源氏を）其後は、ひひな遊びにもゑかいたまふにも、源氏の君

とづくり出てきよらなるきぬきせかしづきたまふ」とあります。これに見ましても、今の雛祭りと同様に、むかしも女夫和合したるよろこびの宴――とまでにはなくとも、家庭の女のとる道を、知らず知らず遊びのうちに教へる一つの道具であつた事が考へられます。徳川氏時代の舊諸公の姫君がたは、平日奥ふかくあつて世上の事に暗いので、雛祭りの配膳や何やかと、それによつて他家へ輿入れせられた時の用意を、老女が教へたとさへまをします。また横へそれました。下



下では上の御あたりを忍び奉つる、たつたひとつの此雛祭りの調度人形。また上下人心の桃の酒に醉ふて、へだてなく見上げ見下す、雛棚の上段の王后の御顔があまり刺げとげしく尖つてゐては、いかな新らしい御衣御冠、緋のお袴でも、お顔の色が桃色にあざやかでも物足りませぬ。

火桶にあかかつた火は、まつ白に衣重く老いました。私は今年も古い、顔色の黄色くなつた、其代りにこやかな古雛を飾つて、のんびりした心地で、昔時の御内裏の面影をしのびませうと思つてをります。

或る家の雛祭の掟

男子は禁制のこと
お客は老幼を問はず女子に限る
歌を詠むこと
虚榮と贅澤を廢す
古代雛の簡單素朴を貴ぶ
白酒はすゝめぬこと
雪洞を多く點火す

大阪誌友會の記

一月二十二日、豫定の如く浪華倶樂部に於て女子文壇誌友會は開かれました。由來文學に縁遠い地に、此の種の會合の開かれたのは、珍しいことでした。會場は場内の大廣間を以て之に充て、正面床の間には鶴雛の大軸掛物、右には梅花と葉牡丹とを大花瓶に揷し、一段高い舞臺には白の毛布を敷き詰めてあります。室内は唐人歡迎の屛風を引廻し、凡て淡雅な粧飾でした。當日第一の出席者は木田千代子樣、續いて追々來會者が見える、京都からはわざ〳〵要司村福子樣が來會して下さる、敗野幹事は芳名錄がゝり、いろ〳〵來會者の斡旋に努められる。定刻を少し後れていよ〳〵開會の辭がある、河井先生よりの祝辭祝電を朗讀し、續いて餘興に移る、上原久子さんの箏栫づくし、小田さん生駒さんの小督の曲、堤信子さんの松上鶴、いづれ當日の聞きものでありました。吹田義幹氏の筑前琵琶嵯峨野と川中島も亦會衆一同を感嘆せしめました、其他數番の演奏あり、歡聲闌なる頃一同撮影を濟まし、福引を行ふ、間もなく閉會の辭と共に一同散會。おの〳〵家路に就いた頃は、宵の巷に電燈の光眩ゆく點つてゐました。當日の來會者は約三十餘名。

何分幹事が不熟練の爲め、行き届かなかつた處は幾重にもお詫いたします、御出席の諸君には此れにこりず再び開會の節は御贊同をねがひます。大阪には多數の愛讀者あるに拘はらず出席者の少數であつたのは、種々の事情の下に女子の會合には、なほ幾多の故障があるからでせう、追々は自由な盛んな集會も出來るやうになることを期待いたします、先づ最初の集會としては及ばずながら私共の微力は果されました。なほ次次には相共に御發企下さる方の多からんことをも併せておねがひいたして置きます。（幹事の一人、川崎道江報）

青年文士の人物

久花子

北原白秋氏

牡丹の花の咲くころ、牡丹畑に足を踏み込んだ時のやうに、豐艶と一種の甘い氣高い香に醉はされて了ひます。若い藝術家が燃ゆるやうな心血を注いで彫むだといふ觀世音の眉のやうに柔かくて強い感じを與へる優しいその眉、眉と眼との間の明るさ、ムツチりした頬の線のふくらみ、それがすでに音樂的に藝術的に、出來て居ます、ことに造物主の巧妙なる技能を感ぜざるを得ないのは、その澄み切つた秋の空に、何處からか春の氣を通はしたやうなツブラの眸です、先づ最初は斯うした氣もちになりますが、靜かに氣をおちつけて見ると、心と顔とが少しも違はないといふことを知ります、口から發せられる話も話も美しい憧憬の描かせる舞臺です。心から笑へる人でもなければ、心から泣かれる人でもありませんが、心から藝術に醉ひうる人なのでせう。また逢ひたくなり、逢へば益々深くなる人です。

吉井勇氏

始めてお逢ひ申したのは二年前のある秋の日その時分は今と違つてホンの書生といふ氣が致しました、これが伯爵のご嫡男かと思はれる程平民的なお方、髮の毛の荒いのと、齒が蟲齒で黑いのと、面長なのと、無口なのとが普通の人だといふ感じを與へます。

私は勉めて變つた所を求めましたが、それは徒勞に歸したのです。斯うした家に生れた人によく見る駄々つ氣はないやうなのが何よりうれしかつたのです。やはり春がお好きで、花が咲く時より、散る時より今眞盛りといふ、美しさがお好きのやうな氣がします、眼には屹度涙がお有りなさるんです。寂しい處で泌々と自己を考へるよりも、賑やかな人の群に強烈なる色彩と刺戟との中で、失望の寂しさと悲哀の嬉しさを味ふ人でムいませう。『新らしき平凡』といふことが云へますならば、吉井樣は全く、新しき平凡に生きる近代人のよい標本でムいませう。この人も二度も三度も逢ひたい人です。

中村星湖氏

奥樣をお貰ひになつてからでした。あの辨天町の新家庭でお逢ひ申しました。餘り大きくない人だなといふことが最初頭に入りました。うすい髭の下の眞赤な唇は、自信の人一倍強いといふことを語つてゐます。はれぼつたい眼は世の中を殊更に冷笑したいといふやうに輝いて居ます。それで居て怖々と物を云はれるので、心の中からブチマケる人ではありません、ですから中村樣のお胸に自己を見出さうと思つて行く人は悉皆失望して歸らねばなりません。共に泣き得る人ぢやないのです。泣かず笑はずに泌々と研究し得る人なんです。

武者小路實篤氏

『白樺』の代表的の人でムいます。眼光が非凡に輝きます、眉がせまつて居ます。髮も身容も構はないお方のやうでムいます。斯うした家にお生れの方で、この方も華族臭のない氣持のいい方です。同情といふことゝ信實といふことが人間に如何に重要であるかといふ事を泌々と感じさせる人格をもつた方です。純なる人間、混り氣のない人間、といふ感じがします。何處までも周圍の人を同化せずもば已まないといふ人なんでムいませう。非常に人懷つこい方なんで

すけれど、始めて逢ふと何だが、こちらで氣がひけてなりませぬ。笑ひ得る人ではありませんが全身を擧げて泣き得る人は今の處武者小路樣一人なんでございませう、世の人を救ひ得る方でせう。幾度でも逢ひたいと思ひます。

秋田雨雀氏

三年前の晩秋のことでした。雜司ケ谷の森の中の家に訪ふたんです。小じんまりした方で、目の若やいだ色の白い美髯の人でムいます。風彩や室などはおかまひない。「一寸」と出て行かれるかと思ふとすぐ歸つてこられて、荒い飛白の單衣の上に細かい飛白の綿入、同じもの〻羽織を着た袂の中から小さい蜜柑を十ばかり出して、

「安いやつですよ……。」

と火鉢の脇にコロ〱と轉がして出されたのが非常に馴々しい懷かしさを增したのです。また人を懷しがる方です。發見力の鋭いやうな眼は絕えず笑を含んで居るんです。唇は赤くつて少しの邪念なぞはありませんでした。物事を非常に喜ぶと云つた風です。斯うした人だけに新しいものを好む方ですが、大きいことは出來ないと思ひます。一等共鳴する所があるやうに思ひます。幾度も逢つて、飽かず語りたいと思ひます。

前田木城氏

極めて最近にお逢ひ申しました。クリクリとしたコマメな人なんです。栗鼠のやうな眼が云ふに云はれぬ愛嬌がムいます。頰の所から頤へかけて髯のあとが青々として居るのです。久留米の着物がよく似合つて、逢つて居ますと微笑まずには居られません。仄りと上氣して「あゝさうですか」と早口に言はれる唇が無邪氣に動きます、多く考へずに云はずも考へるべき言葉が口をついて出ると云つた風の方なんです。『無邪氣なる才子』と云ひ得るでせうと思ひます。逢つて話して面白い人、飽かない人として價値があると思はれます。毒のない人です。

志賀直哉氏

背の高い人、眉の濃い人『白樺』の連中のなかで絕えず問題になるノンビリした人、非常に人を懷かしがる人なんです。物事を非常に考へつめる。考へつめてそれが惡であるといふことを知りながらもそれに打勝つことの出來ない程氣の弱い方です。美醜、好嫌の感じのはげしい同化力の強いお方でムいませう。自分が人を懷かしがるだけ、人も自分を懷かしがつて居ると思つて居る程純なる人です。自分が人に好意をもつて居るだけその人も自分にそれ丈の好意をもつて居ると定めて了ふだけ自信の強い人でムいませう。それですから自分が非常に悲しい時なぞは自分で人が自分の悲しみに泣いて呉れるものと定めて了つて、時々思はぬ人に思はぬ同情を强ふることがある人に違ひありません。これは貴族の家に人と成られたからかも知れませぬ。幾度逢つても懷かしい柔かい感じを與へる人なんです。

永井荷風氏

柔かい物の言ひ方が、氣儘に育つたといふことを思はせます。シヤナリ、シヤナリとした姿つき、波を打つた髮の具合ひ、よく働く柔かい眼、さうしたものが或人に非常に好かれるのでムいませう。非常な投げやりな不規則なお方、イージーゴーイングなお方といふことは誰の眼にも判ります。その日その日の都合で暮すと云つたやうな文化文政時分の通人とか粹人とか云つたやうな所があるが、もう泣き得る人ではありません。氣まぐれに泣いて見たいな、とか醉つて見たいなとか思ふことは確かにあると思ひます。二重生活は到底も出來ない人なんですが無邪氣で人懷つこい所のある方です。

化粧問答

化粧研究會
婦人修容會 顧問 藤波芙蓉

はしがき

始めに申上げて置きたいことがあります。外でもありません、眞正の化粧法は一種の立派なアートで、サイアンスの上に立脚（少くとも私の研究法は左樣です）を占めて居るもので、その目的たる化粧美は、世の或化粧論者の申すが如くに、恰も魔術か神業のやうに、さう易易と實現の出來るものではないのであります。申すまでもなく自然の偉大なる力は、時間といふ手を以て、刻一刻と、花を咲かせ花を散らすと同樣、少女を年增とし、老婆と化し去らしめつゝあるので、何としても人間は此力に隨はねばならぬ運命を擔つて居る以上、晨に紅顏を誇つた美女も、夕には白髮の雪を頭に戴かねばならぬのです。

ですから人間如何にこれに反抗しやうとしても、所詮は其の偉力の前に屈伏せねばならぬのです。然らば何のための化粧ぞ、何の要あつて化粧法の研究をするか、玆が問題です。一言にして申せば、化粧法とは、自然の偉力に反抗する謂ではなく、この偉力を利用するにあるのです。即ちこれを利用することによりて人間は天禀の美の上に、一層の化粧美を添加せしむることが出來るのであります。

けれども之れを能く利用して以て、眞に化粧美を實現さすには、なまぬるいことで出來る仕事ではないのであります。是非これを實現し成功せんとする御方は、どうしても、三要の秘訣を常に忘れぬやう心掛けられねばならぬと信じます。第一には、忍耐です、忍耐の一切のことに必要なるは今更申すまでもないことですが、殊に世の婦人の化粧道に對して、切にこれが必要を私は認むるのであります。次には規律です、規律を正確に守らんでは、折角成功の間近になつて不成功に了ること、決して珍らしい話ではありません。第三には不惑です、これが三大秘要中の最も大切な秘訣で、不惑の土臺があつてこそ、規律も守ることが出來、忍耐も出來るので、昨日まで甲の化粧品がよいからと云ふて使つて居つて、今日は乙の化粧品がよからうと氣移りするやうでは、とても化粧美を實現さすることは覺束ないものと覺悟せんければなりませぬ。

で、わが親愛する本誌の讀者諸姉も、苟めにも女德の一要件たる身だしなみを立派に仕遂げ、他を喜ばせ自らを快からしむる眞正の化粧美を發揚實現さしたいと思召さるゝならば、どうぞ右の三大要訣を心に記して置いて戴きたいと思ひます。でなければ、折角皆樣が御

質問なさつても何の甲斐もないことゝなり、又私も忙しい中から御答申上げたことも水の泡となる譯で、天下これにも倍して不經濟な無意義なことはなからうと思ひます。

化粧問答

問　妾は生れつき眉毛が誠に薄くて、ピローゲンや舶來の毛生液を毎日朝晩、凡そ一箇月の間塗つて見ましたが一向に生えません、それのみか時々この薄い眉毛が拔けるので心配に堪へませんのでございますが、これは藥が強過ぎて脱けるのではないでせうか、又毛生液といふものは實際生えるでせうか。どうぞお教へ下さい。（函館悲しき女）

答　頭髮を生やす毛生液と眉毛の毛生藥とは、同一でありません、單純な毛生液は概して頭髮用に出來て居りますから、それを知らずに塗けますと、その刺戟反應が強過ぎて眉毛の脱けることは餘り珍らしい話でありませんから、斯樣な意態の解らない賣品はみだりに御使用なさらぬがよいでせう、或る毛生液は無論生えます、といふてドダイ毛母も毛根もない所に生毛さずといふのではなく、これは只その毛の發生を促がし、且つ細きを大くして、恰かも繁生したやうにするといふだけのもので、眉毛を生やすには、沃度丁幾を四倍のベンゾールに混合したものを毎日二三回程づゝ塗るのがよろしい、但し塗布した所がカユミを覺えるやうであつたら、一時中止して又翌日塗けるのです、三ヶ月程經たら効が見えて來ませう。

問　私は色が黑くて非常に醜いのですが、頸を白く細く見えるやうな化粧法はどう致したら宜しいでございませうか。（上州の愛讀女）

答　ちよいと御質問の意味が解りませぬが、若し頸を白く細ッそりと見せるといふだけなら、先づ貴娘の御顏が長いか短いかを承知せぬことにはシカとした御答は申しかねますが、單に太頸を細目に見せるのであつたら、咽喉管の兩側に取つて頸の付根にかけ、縱に新芽色おしろいを打ち、耳の下、襟元にかけて矢張り縱に同色のおしろいを打つのです。尙ほ半襟は成るべく正色のものを選み、肩をすぼめ、首を心持ち俯向き加減に伸ばすと、太い頸も自と細目に見えます。

問　私は生來襟頸の所に大きなホクロがありますが、これは着物の襟山出來る徴候だなんと申す人がありますので、その儘に放捨やつて置きましたが、一向そんな効もありませんから、思ひ切つて取つてしまひたいと思ひます。どうすれば取去ることが出來ますでせうか。（淡路、泣きくろ）

答　ホクロを取るには、種々の藥劑がありますが、レゾ

ルチン一、五、サリチール酸二、五、コロヂユーム一五、〇を混和したものを其上に塗けると、ホクロはコロリと抜去られて了ひます、但しこれを塗ける時、皮膚につかぬやう御注意なさい、でも之れを取つた後で着物の澤山あるのが、いくらか減つたとしても、それは私の罪と御叱りないやう、前以て御斷り申して置きます。

問　私は眼の邊から頸筋、身體にかけて茶褐色のソバカスが出て居りまして誠に見にくうございますが、これはどうしたら療りませうか、どうぞ御教へを。（一愛讀者）

答　皮膚の色素異常を療ずるは第一辛抱が肝要で、殊に雀班といふ奴は、至つて頑固な症性ですから、これを取去るには、一番剝離劑の應用が効目あるやうに思はれます、剝離劑にも種々ありますが、劇毒藥を含むのは素人方には買求ることが出來ませんから、左に何人にも調製の出來る、最も有効な處方を申上げませうそれはナフトール二、五、沈降硫黄一二、五、綠石鹼、黄色ワゼリン各五、〇を坭膏となし、これを半時間乃至一時間程よく塗付して、後ち脫脂綿で良く拭き取り、斯く四五日行つて居ると、皮膚に炎衝が起つて來ますから、この際には顏を洗ふては不可ません、而して其炎衝の起つた部分に澱粉とタルクとを等分に合へた白粉を撒けて置きなさい、すると上皮が段々と剝離して、從つて雀班も取れて參ります。但し頑固にして永いこと出て居る人のであつたら、どうしても右の方法を四五回は繰返す覺悟でかゝらねば駄目です。

問　餘り人目にたゝぬやうに、手におしろいをぬる化粧法を御教へ下さい。（京都女）

答　赤い質の手なら、キセロールプードルドリーの新芽色のをキセロールクリーム、若くはコールドクリームに適量に混和して塗布し、その上に、四ブロ乃至一〇ブロ位の過酸化水素水を塗るのです。若し蒼白いか蒼黑い手であつたら、新芽色では不可ませんから肉色のを御使用なさい、そして過酸化水素水の濃薄は其人の脂肪性と否とによつて違ひます、脂肪性の人であつたら濃厚なのが適當です。

問　白粉を塗つて、顏を丸く見せたり長く見せたりすることが出來ますでせうか、出來るとすれば、如何したら宜しいでせうか。（玉子）

答　出來ます、併しこれを玆に御答する日になつては大變ですから、詳しくは昨年博文館から新式化粧法と題し、家庭百科全書の一部として出版されてある拙著に就いて御調べ下さい。

問　石鹸の良否を簡單に鑑定する法がございますなら、御敎へ下さいまし。（廣島の晴子）

答　石鹸には加里製のものとナトロン劑のものとの二種ありて、現今は何とか斯とか色々な石鹸がありますけれど、要するに此二種の外に出づるものはありません、而して加里製はよろしく、ナトロン劑は粗品ですこれを鑑定するにはチヨイと嘗めて見ると解ります、卽ち嘗めて舌を強く刺戟するのはナトロン劑で、輕く刺戟するのは加里性の證據です、けれども近來石鹸に砂糖を入れて刺戟を薄めてあるのもありますから、ウカとすると間違ひますから御注意なさい、それから其量に比較して目方の重いのはメリケン粉を多量に含んで居る粗造品で、精製品は輕目に出來て居ります、と云ふて水に浮かぬから惡質だとは申されません、これは煉石鹸に對するタキ石鹸と申して、原料に何の違ひもなく、只これを調製する方法を異にするだけのもので、詳しく申すと、その煉石鹸の、いまだ固らぬうちに、それをカキ廻すので、左樣すると、その質が恰かも浮石狀の荒目となり、從つて目方が輕くなつて水にも浮くので、斯くして製したものをタキと申すのですが、斯くして製すとその香をつけるに大變澤山の香料が要りますので、タキ石鹸には總じて香料を附けぬことになつて居ります。

問　水晶おしろいの原料は何で調製るのでせうか。（ねり白粉嫌女）

答　現今坊間に鬻がれて居る、所謂水晶おしろい、これが原料を素破拔くは、商賈に對し氣の毒ですから、お預りとして、折角のお尋ねですから、水晶おしろいと同樣の、透明なおしろい水を調へる藥劑を申上げませう、それは皆さんもよく御存知の硫酸苦土卽ち瀉利鹽を適宜、薔薇水若くは橙花水に溶解さしたものです。

化粧問答

質問隨意　無手數料（はがきにても可なり）

創作

短篇小說

○煙草の香（天賞）

水野葉舟選

横濱 梅子

通ちやん僕はね、此間中から色々な事が氣になつて〳〵堪らないので、用もないのに毎日〳〵×町の方へ行て見たりするのだけれど、通ちやんの姿は一向見えないので、ます〳〵堪らなくなつて、惡いのかもしれないけど又手紙を書いたのだよ。二日の晩だつたね、瓦斯の明るい書店の前で、お前にバッタリ逢たのは、あの時僕は直覺的に、あゝ通ちやんの見合ひだなと思て了た。何故と云て、お前がいつになく一絲亂さず重さうな髪に結て、お前の傍にお母樣がついて歩いてゐるのぢやないか。それもいゝとして、通ちやんお前はあの時何故僕の顔を見乍ら、いやにしらん風してゐたのだえ？お前が行き過ぎてから僕は何時迄も振返つて眺めてゐたのに、お前は見向き相にもしなかつたね、場合が場合丈けに、いつになく口惜しく腹が立たよ。出來る事なら後ろから追かけて行て、お前の顔が見てやりたい位に思たよ。だが其見合ひした人は何んな男だえ？して氣に入られたのかへ？だらうね。あゝ六月の戀にいつも強く情なかつたお前も遂に人妻になつて了ふのかと思ふと、只淋しいよ。男の癖に僕は何故かうも弱いだらう。お前に逢ふ毎に僕は何故あゝ思た事が云へないのだらう。僕は強くなりたい。云ひたい事をどし〳〵云て見たい……通ちやんもう一度逢ひたいね然しもう一人で出られないと云ふのなら、手紙位書いてくれてもいゝだらう。僕は只お前の心をきゝたい許りだよ。僕を何と思てゐるのだか、何う思て結婚するのか只それがきゝたい……くどい樣だが逢へまいかね

一寸でいゝのだけど、もし手紙を出すなら店の方へ賴むよ。

こんな事が例の汚い字で走り書きがしてあつた。二日の夜あの時逢たきり……四五六七と一週間足らずだが此度は莫迦に久しい樣な氣がする。逢ふまいと思たから、逢ては不爲だと思たから……然し又逢ても見たい樣な氣がする。私の緣談は纏りかけてゐる。纏ればいゝ樣にも思ふ。かと云て信さんの戀を捨てる氣はさら〳〵ない……初めから信さんと何うする積りもなかつた。彼人だつて屹度私を何う仕樣なんと思てゐたのぢやないのだらうけれど、今更ら私が人妻となると聞いて淋しいと云ふのだらう……私も淋しい。思へばいつも〳〵我儘に情れなかつた私に何て弱い優しい男だつたらう……私が今嫁だときいたとて、何とも云へる男ぢやない丈けそれ丈け云ひ辛くもある。あゝした弱い淋しい男に泣いて喜ぶ程の心中立てがしてやりたい樣な氣もする。逢へるなら逢ひたくもあると、こんな事を思ひ乍ら、今の手紙をみつめてゐると、茶の間の方へ誰れか來てゐるらしく、高い笑聲がきこえるので手紙を懷中へねぢ込んで行て見ると、長火鉢に兄と向き合て吉藏さんが座てゐた、私の姿を見るとにこ〳〵笑ひ乍ら「やあ通ちやん久らくだつたね。まあこゝへお座りなさいよ」と相變らず元氣のいゝ調子で、座蒲團を火鉢の横手へ置いてくれた。「隨分お珍らしいぢやないの。一寸も遊びにいらつしやらなかつたのね」と其處へピッタリ座た。「えゝ可成り御無沙汰して了たね、ことに通ちやんには逢はなかつたね。ほら例の法事の時に逢たきりだものね、ざつと一年半になるよ。」「さうね、割合に變らないものね。」と私が云ふと兄は茶を注ぎ乍ら、「女は少しの間に馬鹿に變ると云ふが通なんか根からいつ迄も子供嗅いな。」と今更らの樣に私の顏をしげ〳〵見た。「女だつて境遇さへ變らなきあさうでもないわ。」「だがさう無暗みに境遇が變られちや堪らないよ、心細くて、全くだよ通ちやん。」と吉ちやんも低い聲で云て自分でくゆらした煙草の煙をぢいと見た「貴方煙草が好きらしいわね。私も誰れかからやつて傍で吸てゐると堪らなく其匂ひが好きだわ。」「ぢや屹度煙草好きになるよ、生粹だな女の癖に。」と兄は冷やかす樣に云た。「ぢや盛に吸て上げ樣。」と吉ちやんは無暗に煙を吐いた。私は何故か此の匂ひを嗅ぐ時は、いつも軟らかい樣ななつかしい刺戟を感じるのが癖だ。「伯母さん達馬鹿に遲いな。」と吉ちやんは急に眞顏に

なつた。」「ぢや構はないから伊勢崎町でも歩いて來ようか。」と兄が云ふと、「さうし樣かね。」「私も行き度いわ」「無論行くさ。お前は少し謹愼しなくては。」と兄は冗談の樣な其癖恐い眼をした。詰らないなと思た。二人が出て行てから私は火鉢の前へ座て、灰の中に汚なく突込んだ吸ひ殼を何となく見つめて矢張り嫁に行くのは淋しいと思た。信さんに何と書いてやらう……それとも逢ふか、何にしても彼人ときれて了ふのは淋しいとそんな事が呆然考へられた。

○嫂（地賞）

優梨子

寒い國はもう雲がチラ〳〵して居た十一月半ばの或る朝、私は上野行きの一番列車に乘る爲に、まだ燈りの點いて居る××驛へ驅けつけた。

急がしく車から下りると、未だ早いのか、廣い待合はガランとして、高い天井から釣るされた幾つかの電燈が、明けがたの冷たい空氣をぼーつと明るくして居た。長いベンチの隅の方に、寒さうに小さくなつて腰掛けて居る人も、薄暗い小窓の下で切符を買つて居る人も、皆外套の襟や肩掛けで、冷たい頰を包んで居た。改札口ではもう私の來る前から切符を切つて居た。私は「××驛より上野まで」とした赤い切符を鋏んで貰つて、大きな風呂敷包みを抱いたお婆さんの後から改札口を出た。片手には幾らかのお錢を握つて居た。私はそれを一寸數へて見て莞爾した。二等室へ乘つたつて詰らない、それより是で何か嫂さんにと、ふと思ひついて、「上野まで三等を一枚……」と判然云つたのが自分ながら嬉しかつたからである。

橋を渡つて向ふ側へ行くと、長いブラットホームは待合ひと同じ樣に靜かでそして寂しかつた。

幾つか列んだ三等室は、どの室も皆隙であつた。私は何室でも好いと思つてそこらへ入つた。

屋根から下された眠い樣なランプは、向ふ側に居る人の顏も好く解らない程暗かつた。私は格別でも暗い隅の所へ小さく腰掛けた。そして室の內をそつと見廻した。皆の顏がぼーつと眠さうに見えて、朝の樣には思はれなかつた。それに寒い故か誰もさう大きな聲で話などする者もなかつた。

ガタンと一つ搖れて汽車は靜かに動き出した。私はハッとした。「嫂さんに逢へる！」と思ふと胸がわくわ

くした。それを強いて抑へる様にわざと落着いた風をして俯向いて居た。

犀川も千曲川も通つて何時とは無しに夜が明けた。此邊りの景色に倦きて居る私は一寸も外を見ないで、すぐ前に腰掛けて居る四十許りの男の所有らしい、大カバンの模様を眤と見詰めたまゝ、今日始めて逢ふとする嫂の事を、色々に想つた。

日本橋の××銀行へ出勤て居る兄が、同僚の三木様の妹の今の嫂をもらふと云ふ縁談の出た時、私は只理由も無く嬉しかつた。それを母は

「東京者なんか……」とかたで耳にも入れなかつた。

私はそれが自烈つたくて〳〵堪らなかつた。

「ネ母様、兄様は什麽せ一生東京でお暮しなさる方なんですもの嫂さんは矢張り東京の女をお貰ひなつた方が好うございますわ、とても田舍者になんかあの中を切り廻して行かれやしませんもの、第一兄様が嫌だつて被仰いますよ」とそれから去年の春二月許り兄に經濟をまかせられて困つた事や、其時私の瞳に映つた都會の女の美しい所許りを列べ立てゝ

「だからネ母様お貰ひなさいな、大丈夫ですよ××女學校の出身だつて云ふじやありませんか」と恁麽事まで持ち出して母を説いた。

「いくら何女學校の出だつて人中に馴れた女は矢張り擦れて居るからネ」となか〳〵莞爾しさうも無かつた母を、私は逐々納得させた。けれど日々谷の大神宮で兄が結婚式を擧げた時、母は伯父を代理にやつて行かなかつた。私は其時酷い盲腸炎を病みながら、床の中でじたばたする程それが慊きたらなかつた。それを母は平氣な顔をして「お前が恁麽に惡いのに什麽して行かれるネ」と云つて居た。それから四五日すると表書の美しい手紙が來た。

私は封を切らない前から只懐しくてならなかつた。胸が小さく波立つのを凝と抑へて、急がしく讀んだ。とそれが、私の胸の奥にある或るものにしつくり合つた様に思はれて、私は「嫂さん！」と縋りつきたい様な返事をすぐにも出したい程嬉しかつた。それを母は浮かない顔をして默つて讀んだ許りであつた。

嫂からは續いて絶えず手紙が來た。私は一度毎に懐しさが増した。母は何時までも始めの時と同じ様な顔をして居た。

「手紙の文句は上手いものだネ」と冷笑ふ様に云つた事もあつた、私は其度に母様はどうしてかう固質なん

だらう」と思ふと何と無く嫂に悪い様な氣がしていらいらした。

――俊さん入京して下さいますの？お母様がお宜しいつて？まア嬉しい。明後日なんて何だか夢の様な氣が致しますわ、俊子さんお僞しになつては嫌でございますよ。一番と申しますと東京へ二時何分着で御ざいましたのネ。丁度日曜ですから兄様と屹度〳〵お迎へに出て居ますよ。私どうしませう先刻から戴いたお手紙を出したり入れたり狐につまされた様な事をして居りますの、何故で御ざいませう……………」

此麼手紙を私は、行く前の日、着物の一杯に散らか



（天賞）　公園の上から　　福井市　岸本てつ子

つた中で讀んだ。淺間山の煙りを皆が珍らしさうに見て居る時も、私は二三枚の寫眞を通して見た、品の好い山の手式の嫂を想つて居た。

落葉松許りの所を通つて輕井澤へ着くと、朝××驛を出た時と同じいランプが屋根から下された。曇つてこそ居たけれど明るいので燈りの色が馬鹿々々しく見えた。トンネルの中へ這入ると皆眠さうに目をふさいで、出るとすぐまぶしい様な顔をして目を明いた。さうして二十六のトンネルを越した。

上州と武藏野との境ひはわからなかつた。

赤羽で七八人の旅商人が大きな荷物を持つてどやどやと這入つて來た。私は押し潰されさうだつたけれども、もう少しの間だと思つて我慢して居た。

汽車は靜かに廣い構内へ這入つた。私の胸は高く波立つて來た。そして妙に氣遅れがしてわざと落着いて居た。一番出口に居ながら皆の出た後から靜かに下車た。どんなにも早く嫂の姿を見附け樣としなければならないものを、昵と俯向いたまゝそつと皆の後に附いて長いプラットホームを成るたけ遅く歩いた。

「何ぞお母樣に宜しく」と落着きの無い上づつた聲で嫂に送られて、私は風の強い日に上野を出た。髱の思ひ切つて出たそして後のきゆつと立つた大きな丸髷、半襟の掛つた荒い縞お召の着物、色のくすんだお召のコート、クリームのショール、それらがプラットホームの柱で見えなくなると、私はついと窓から顏を引込めた。がつかりした樣にぐたりと柔かいフラン天張りの上へ腰掛けると、寂しい樣な心細い樣な、人が居なかつたらさつと涙のせき上げる樣な思ひが、胸一杯に込み上げた。

「それ、それだから」とさも勝ち誇つた樣に云ふ母の顏を見るのが辛い……と思ふと、什麼しやうともうそれが心配で堪らなくなつて來た。

振ひつきたい樣な其手紙と、慕ひこがれた私の眼に映つた眞の嫂とは、餘りに〳〵違つて居た。只わけも無く無性に戀しがつて居た幼稚な自分が、腹立たしかつた。

汽車は何日か私の美しい思ひを乘せて行つた時と同じ道を少しも間違へないで山の中へと歸つて來た。横川で何時ものぼんやりしたランプを下された時、私は抑へつけられる樣なトンネルの中の暗い空氣を思つて嫌な氣持ちになると同時に、それよりまだ一層何か強い苦しみを與へられる樣な氣がして思はず顏を顰めた。

○電話係（入賞）

澁谷　小笠原ゆり子

八重子は重い足をひきずる樣にして今朝も家を出た。おもい〳〵と思つて居たがまさかこんなに迄とは思はなかつた――二三日前ふと足を押して見るとヅブと氣味のわるい程指のあとがつく――其を見た時八重子は情なさが一つぱいになつて身をふるはした。「どうせ死

んだつてかまやしないんだからッ」と自分の運命を思ふ樣嘲つてやりたい樣で八重子は呪ふ樣にかうさけんだ。〇〇銀行の電話係——此樣な煩雜な仕事は實際神經のするどい八重子には堪へられない事であつた。アア今日も又……と思ふともう足がすくんで終ふ樣である。なれない自分の業務に對して限りなく不安と苦痛とを感じてあるいて居る八重子には、美しい女も若い男の姿も少しも目にはうつらなかつた。明日こそよして終ふといつも〳〵歸り路には思つて來てもさびれ果てた暗い家の中を見るともうさし迫つた生活と云ふ事が胸をついてあゝもう仕方がない！とかんねんしては折角の決心もぐづ〳〵になつて終ふ。洋風の建築の中の爲でもあらう、さゝいなペンを落した音迄強く反響して頭をさす樣に響く中を銀貨の音算盤の音靴の音の雜然とした場内は八重子の頭をかきむしる樣にも思はれる。それに行員等の權柄づくな態度に接すると自我の強い八重子は體がかたくなる程口惜しくなつてくるもとよりこんな處に通ふ事は好ましくはなかつたけれど別の仕事を見つけて居ては明日に迫つた生活の間にあはなかつた。で、ふと新聞の廣告を見て急に出る氣になつて面會に行つて見る、履歷書を出すと明日からと云ふので次の日から通勤する樣になつた、行つて見ると事務員とは名許り體のいゝ女小使同樣で「オイ」とか「コラ」とか云はれる度に八重子は口惜さを唇でかんでこらへた。

　足のはれたのを見る度に「死ね、死ね、かまうものかッ」と自棄した樣にくり返した。全く考へれば短い間に八重子の境遇も色々に變つた。自用車で學校に通つても見た、ぜいたくな我儘なお孃樣の生活もした、其内にお父樣が死んだ——それも悲しい事ではあつたけれど氣まゝな八重子には却つてしかる人が無くなつてどこかのび〳〵した樣にも思へた、そして收入の道のたえた事にはとんぢやくなく、たゞうか〳〵と面白く母親とくらした、然しそれも決して長くは續かない事であつた、それから以後は實に八重子にとつては苦しい〳〵生活であつた。下宿やもした料理やもした興行などにも手をだして見た、そして其果ては夜逃同樣に家をたゝんでうすぎたない長屋のすみに入らなければならぬ破目になつて終つた。そしてとう〳〵八重子は電話係にやとはれる樣になつた。八重子はこんな事を考へながら電車にゆられた、眠りの不足な爲か目の間が否にがず〳〵いたむ樣で氣分が妙に沈んでくる。

下をむいて目をつぶつて居ると「鎧橋！々々！」と云ふ車掌の聲がきこえた、八重子は彈かれた樣に立ち上つたが割引電車のぎつしりつまつた中を「下りるんですからどうぞ御めん下さい」と辛々の思ひで下口を降ると「こんでる時はさつさと降りて下さらないと困りますッ」と後からおひ出す樣に車掌の云ふ聲がきこえた。

此頃の樣に心のひがんだ八重子にはこんな事迄もひどく神經にさからつて「ちく生ッ」と口惜しさうに口の中でさけんだ。

銀行に入るともう同じ係の人等は皆來て居た。

「八重子さん、どうなすつて？お顏の色が惡るいわ」と加藤さんと云ふのがいきなりから云つた。「さうですか何んだか頭が重くつて……」と八重子は頭を押へて机の傍に立つた「ね、チヨイと替爲課のKさんね嫌な人つたらないわ」「アラ、なぜ？」

「だつて……」と加藤さんは聲をひそめて「一時一分でもい丶から若い女の傍に居たいつて云ふんですとさウフ丶……」と口に袖をあて丶笑つて居る。「アラッマア嫌な方ね道理で目つきが違つて居るわね。」

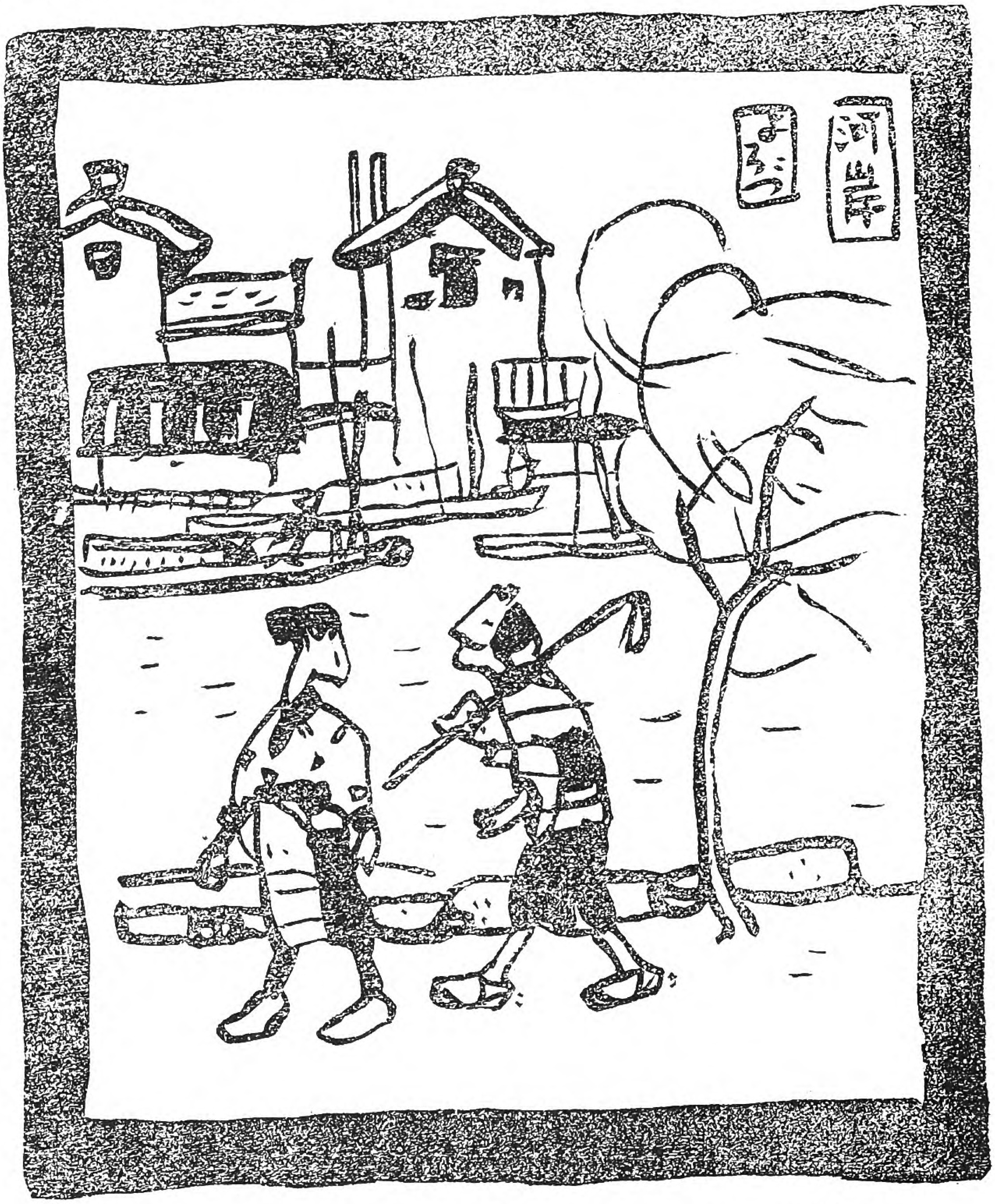
「ね、チヨイト／＼昨日もね、朝皆さんが入らつしやらない內ね、妾ストーブにあたつてたんでせう、さうするとねあのKがねもつとこつちによつておあたんなさい／＼つてだん／＼自分がよつてくるのよ、マアほんたうにいやなやつたら……」

「アラあいつが！ マア色魔だわね、オホ丶」

「オホ丶丶ウフ丶丶」何がそんなにをかしいのかと思ふ程笑ひこけて居る。八重子は此樣な對話を浮かない顏をして聞いて居た「チリ／＼／＼……ン」五〇番の電話が鳴つた、「チヨイト出て頂戴な」「ハイ」八重子は否ではあつたが急いで電話器の前に立つた。

「モシ／＼あなたは〇〇銀行さんですか」と云ふのがかすかにきこえる「左樣でございますよあなたどちら」「私はね〇〇支店ですが今朝のふり出し替爲は……」「モシ／＼何んですか……」「今朝の替爲は五千七百…圓……」「エ五千何んですつて……」「五千七百……圓ですか」「五千七百……圓ですつて」「イ丶エ五千七百…圓ですかとあなたにおきゝするのですよ」八重子にはどうしても何圓だか聞きとれない「モシ／＼すみませんがもう一つペン……」「ほんとにわからない人だ、もつとわかる人を出して下さい。」向ふの人はおこつてる樣だ、もう八重子は泣き出したい樣で、あせる程胸のと

うきがはげしくなつて少つともきこえない「では少々おまち下さい」と云つて仕方なしに同僚の處にとんできた「ね、すみませんけれど金額がどうしてもきゝとれないのですの」と八重子は泣き出しさうな聲で頼んだ、何かヒソ／＼云つてはしきりに笑つて居た連中は「そんな事



（地賞）河岸　八王子　よろづ子

がわからぬのか」と云た樣な顏つきでジロ／＼八重子を見た、「なれないからよ幾度もよくおききなさいよ」だれも立ちさうにもしなかつた。「アラ早やく行かないと切れて終ふじやありませんか、あなたは」と一人はにらむ樣に云つた。新參者をあざける樣子があり／＼皆の顏に見え

た。八重子は仕方なしに再び受話器をとつたが口惜しさがこみ上げてきてあつい涙がポロ〳〵こぼれた。

○若い心

春子

「昨夜はありがたう、頭が少しいたかつたものだからつい失禮して」

お光は敷居に手をかけてあいさつをした、藤ねづちりめんの襟がうつすりと化粧した襟に、よく似あふて居る。

黒がすりの人と、洋服の人と、お菊さん、お菊は美しく笑ひを見せて、お光のしづくしさうな、高島田のびんのあたりをながめながら

「なんだか假病らしかつたわ、もうなほるなんて……」

「あゝ……」二十歳の女とは思はれぬ程に初々しい樣子を見せて、ぢつとお菊さんの顏をながめた。

「ずつとおよんなさいよ、加留多狂の弟の奴が、あなたが見えなかつたものだから、がつかりしてね、いつも出られるに昨夜に限つて」と御菊さんは御茶を進めた。お光はつと昨夜の母の言葉が胸にうかんだ、たまらなく不快になる。

「もう八時なんだもの、どうせよんでくれるならもつと早くならね、健次さんも居るんでせう、頭がいたむからつておことわり……」母の聲は大きかつた、お使の人がまつて居るのに聞えよがしの高聲で、思ひ出してもひや〳〵する。なにもかも、胸の奥底迄も知りぬいて居るやうなお菊が恐ろしく思はれる。

お菊さんは明けて二十四になつた、丸がほの高まげのよく似あふでく若く十九位に見える人である。世間の人はづう〳〵しい女だといふた、あつて見ればそれ程でもないが、都會の空氣にふれて居たせいか人づれた、眼八分に人を見る樣子がよく見える。

蜜柑をとりにいつた健次さんは、盆にのれるだけのせて入つてきた。桐の火鉢に、かたい、やはらかい、幾つもの手が動いて居る。

洋服の人は北海道の農科大學生でお菊さんらの從兄になつて居る、七郎さんと健次さんとは默して笑つて居る、お菊さんはよくしやべる。

「女なんて、美しい着物をきて、しやべつて居りさへすればいゝんでせう、大にしやべる人は長いきをするさうですね」

「さうかも知れないわ、そんなことを氣にして居る男

はもつと長いきをするでせう」健次さんは大きく笑つた。「お光さんは幾歳になりましたの」

「さうね、幾つだか數へて見なくつちや」

「三十位……」

「もつと多いかも知れないわ」

「そんなら三十五」

「それでも若いでせう」皆なは笑つた、「二十歳、二十歳ですよ」と大きくさけびたいのを、じつとこらへてお光も笑つた。

「七郎さん、スケートをしませんか」雪雄さんといふ七つになる子が窓からのぞいて居る。

「私も若い時、スクール時代にはよくすべつたものですね」

「さうよお光ちやんなんか、女三分で男七分……」

「でもこんな髮にゆつて居ちや、男にも見えないわ、つまらない女なんて」

「そんなら男になり給へ」

男の樣だといはれるのがなによりうれしい、そして得意なのだ、それが現代的の女、都會に生活する女の眞と思つて居た。

二時間餘り經つて、健次さんと、七郎樣と遊びに出ていつた。今夜たつから、もうあはれぬといふて健次さんは、

「御みつちやんでゆつくりなさいまし」

「ありがたう」

「又夏に御めにかゝつて口のわるいあなた達にしこんでもらひませう」

「三郎さんでなくともさ、お光ちやんにしこまれたのでなくつちや、といつてましたよ」

「雨の降る日に××山が」

「健次さん、緣があつたら又おめにかゝりますと、いつ死ぬかわからないから……」

「は……」角帽の人とマントの人とは去つた。

古りにし戀、お光には戀人があつた、健次さんと同じ年の、美しい人だつたが、雨のふる日にとう〳〵わかれた、健次さんはよくそれを知つて居る。

其日お光はかへつて、わけなく悲しかつた。戀人もない、なにもない、只かうした若い異性のそばに、昔のやうな若い心になつて話して居たいと思つた。兄なく弟なく、只父母の愛のみの淋しさに、若い異性の、もえるやうな胸になつて見たいとも思つた。

○晴子

夢浮橋

町子は若々しい笑聲を殘して歸つて行つた。うるほひのある大きな目と、物にとんちやくせぬ無邪氣な笑ひ方と、ばらを褪紅色で拔いた半衿とが何時迄も〳〵目耳に殘つてゝ仕樣がなかつた。

晴子は「まああれでお町さんは私よりか一つ上に見えるだらうか」と獨言云つて、ツッと鏡臺の前へ來てホッと太息をついた、紫無地の半衿と新御召の細かい子持縞の着物とで晴子の方が五ッも老けて見える。「厭だッ、何て地味なんだらう」ポンと自分の肩を一つたゝいて、「でも何だわ、其麼事云つちや惡いけれど眉だつて私の方が濃いし目だつて二重で私の方が愛嬌もあるし、鼻だつて口元だつてお町さんに負けようとは思やしないは」につこり笑つて、「然うよ、私だつて」すた〳〵勝手元の方へ行つたと思つたら顏を洗つて來た。

晴子は特別念入りにレートをつけて、クレームを引いて、其上へ淡さり御園の月をなすりつけた、其れから藥指につばをつけて眉毛をすつとなでた、で立うとして又座り込んだ、顏色の惡いのが氣になつたらしい、一番下の引出から西洋紅を出してうすく頰へはいた。

晴子は暫く考へてたが、思ひついたと見えてせかせかと簞笥の引出から御納戸地の派手な口綿と、もう着られないと云つて一番底へ仕舞込んどいた伊勢崎の荒い〳〵かすりの羽織とを出した。

ふわりと着かへながら不圖もう五月だつて事を考へた。後五月でもう親になるんだと思ふと何だか淺猿しい樣な氣がした。自分より一つ上のお町さんは二十三にもなつて若い事、何時も呑氣で、私はなぜ早く結婚なんかしたんだらう、取り返しのつかぬ事をしちやつた樣に晴子は口惜しがつた、其くせ二三日前には赤坊が出來るつて、早く抱いて乳を呑ませて見たいと思つた。どんな子だらう、あんなじやないかしら、こんなじやないかしら、今迄見た可愛い子のあつた丈の顏を想像して紅い布を買つて來たりなんかして樂しんでたのに、もう其麼事は忘れちやつてる、いつそ恁麼子流產でもしちまへばいゝと迄思つた。

羽織の紐がはりにクリームのリボンで結びながら、何だか知れない者が胸をそゝる樣に思つた。

一寸髮をなでつけて青貝入りの蝶の簪を差して居る

と悠雅な調子で時計が四時を報じた。

「あらもう歸へつて被入るわ」晴子はあわてゝ勝手へ行つた夫の信二はいつも四時半にはきつと歸へつて來るのだ。

七厘へ火を熾しながら晴子は「何とか云はれやしないか知ら」と獨言を云つて何だかきまりが惡いなと心で思つた。

酒しほと醬油とを加減して入れた瀨戸引鍋をかけながら親になるつて事に付て考へた、我身ながらあさましいはかない何とも云へない厭な氣がして泣きたくなつた。華やかな時代に永久に別れねばならないんだもの、あゝもう幾何もがいたつて駄目だ、萬事休すだ、未練と觀念と相半つて所まで考へると鍋が煮立つた、水によく晒したひらめの切身をさつと入れて蓋をしながら今度は先の鏡にうつつた自分を思つて莞爾りした。何うしたつて私はお町さんより何だもの派手な風さへすれば幾何でも若く見えるわ、と思つて安心した。鍋を下して明日の米を計りながら、信二が何とか云はなきやいいがと思つた。



（入賞）窓むき　水戸市　すま子

晴子は何うしても一つ事を何時までも考へては居られない性分だ。

其中に信二は歸宅した、晴子は恐しいものにでも出逢ふ樣な風にしておそる〳〵出むかへた。

信二は「御歸へんなさいまし」と手をついた晴子の樣子を例のにやり〳〵と譯のわからない笑ひ方でじつと見て居たが別に何とも云はなかつた。

晴子はホッと安心した、さうしていつになくはしやぎ出した。

○ゆびわ

世緒子

穩かに暖かさうな日光が眩しく障子を明るくした。庭前には陽炎がゆら〳〵と遊動して見える。霜柱の崩るゝやうな音、凍つた地盤の弛るむやうな音が、みしり〳〵をちこちに聞えた。蠅が幾度か飛んで來ては障子に打當つてブン〳〵しては飛んだ。

相子は其麽ことを凝視めながら、困憊した風態で障子際にぼんやり坐つてゐた。ポカ〳〵と脊中まで暖味が透る。相子は急に三つ四つ老けたやうな感じがしたそしてまた、愚に返つたやうな、可笑しいやうな、儚ないやうな心持ちがした。

兄の眞一は其側へ寢轉んで、今朝來た新聞を讀んでゐる。

「正ちやん、私の指環知らなかつたかい」

「指環なんか知らない」

「さう、何うしたんでせう」

「何處へ置いた？え、姉さん」

「此處へ置いたと思つたんだけれど……」

光子と正一（兄の子）が指環がないと言つて大騷ぎをしながら、あちこち搜してゐる。

「何が失くなつたの？」と、勝手元に仕事をしてゐた嫂が、濡れた手を拭きながら茶の間へ上つて來た。

「指環が無いつて、姉さんの指環！」正一は敦圉いた口振りして言つた。

「よつく搜してごらんな、一體何處へ置いたのサ」

嫂は光子を叱るやうに言つて、自分も心當りの方面を探して見た。光子は自分の机の上から抽斗から本箱から、細かに隅なく搜して見たが見當らない。正一は氣の利いた積りで、本の頁を一冊宛繙げて調べたが矢張り見付からなかつた。

相子は障子越しに聽いてゐた。そして蔑すむやうに

顰蹙したが、心の中では「またか」と厭な思ひがした。指環は子思ひの嫂がわざ〳〵足を運んで買つて來て遣つたので、紅葉に眞珠とかが入つてゐると云ふ、可成り高價な物であつた。そしてまた光子の嬌　飾と云つたやうな唯一の飾りでも有つた。

「これでも二十金だつた云ひますよ」と、相子にみせびらかしたことがあつた。それが光子の指に時々光つたのである。

「變だわ、本當に、無い筈はないんだけれど」

「變だなア」正一は意地惡く聲を大くして言つた。嫂は憫れて默つてゐる。

「變なら怎うしました、私でも盜つたと思ふんでせう馬鹿にしてるよ」相子はばか〳〵しくなつて、言ひ返して遣りたかつた。暫く經つと正一はのそ〳〵と這入つて來て、相子の四圍を胡散さうに見廻してゐる。

「指環なくなつたの」相子は優しく訊いた。

「ア、姉さんの指環、叔母樣知らなかつたか！」

「私？、知りませんが……」

正一はビシンと障子を締め切つて行つて仕舞つた。茶の間で竊々と話す聲が漏れて聞えた。

「どうせ出戾りの厄介者だから」相子は無性に悲しくなつて來た、込み上げてくるのを凝乎と怺へて居たが到頭慘めに泣いて仕舞つた。涙は取止めもなく落ちる。孤獨しく思はれて、賴ない自分を憫まれて。

「光子ッ」眞一は新聞から眼を離して呼んだ。

「指環を何うしたんだ」語氣が勢んで居た。

「何處見付けたつて無いんだねェ、姉さん」無邪氣な正一は眞面目らしい顏容。

「誰が他人の物なぞへ手を附けるものか、莫迦なッ」

正一は父の可怕しく氣色ばんだ見幕に吃驚度膽を拔かれて仕舞つた。

「お前が不精だからだ、馬鹿な奴だッ」

光子は顏を赧くして俯向いて居たが、何時の間にか歔欷いて居る。

「誰も盜つたつて言はないぢやございませんか」嫂は物怖ぢした言ひ振りで辯解した。

「馬鹿を言ふな、盜つたと言はんでも……一體光子が間拔けなんだ、もう一度よく其邊搜索して見るがよい」

眞一は怎う言ひ放つて再び新聞へ眼を落した。

相子が面を擡げた時には、もう誰も其處には居らなかつた。眞一の咳拂ひするのが茶の間に聞えた。

太陽は何時の間にか西へ回つて、明るい障子はもう

疾うに蔭つてゐた。室内は妙に寂しく空洞とした。薄暗い空氣が漾ふて居るやうにも思はれた。

「破壞者！」恁麼言葉が相子の頭にひよつくり浮び出した。自分は家庭の破壞者ぢやないかしら。

相子は茫乎して仕舞つた。

指環のことは其切り沙汰止み、誰も口にさへ出さなかつた。

選評

選者

▲**夫婦**（渡邊とよ子）　手法は割合によく行つて居るが、如何もこの夫婦の生活が、一寸僕には考へ付かぬ程、不合理な處があつた。

▲**若い心**（春子）　如何も、一つ生れ變つたやうに目の向き方を新しくして欲しいものだ。これでは何時までも一つ處を——幼稚な境を行つたり來たりして居るやうだ。しかし、この人の作には何處か素直な處がある。そこを失はないやうに歩いて行かれる事を希望する。

▲**お向の家**（しのぶ子）　甘つたるい空想だ。

▲**悲しき別れ**（木村涙花子）　やはり定りきつたセンチメントを聞かされた。

▲**電話係**（小笠原ゆり子）　如何もこの作には、作者の直接の感情を——私情を聞かされて居るやうな氣がする。且つその考へ方もコンベンショナルな處がある。しかし、さう何處でも見られるやうなものではないけれど。

▲**羽蟲**（のぶ子）　何處と言つて際立つた處は無いが、心が細くものに動く處がいゝ。この人も一度、藝術の國の空氣の中に浴して、それから又人生を見るといゝと思つた。

▲**無筆な妻から**（藤井豐子）　拙いと言ふのではない。ケタが一つはづれて居る作だ。もつと内にある容量がほしいものだ。

▲**兄樣**（世良田夕子）　何でも無い事が書いてある。しかし、この作の純潔と無邪氣な心持がすつかり表はれて居て、讀んで居ると何とも言はれず心持がよかつた。勿論これは藝術品に向つて言ふ批評ではない。自分が、そのやうな純潔な、初々しい人の懷しい手紙でも貰つて讀んでゐるやうな氣持だつた。

▲**母と子**（智代子）　いゝ處を摑まうとしてはゐるが、やはり一寸した世間話にすぎなかつた。もつとこのやうな中には、澤山見て來る必要があると思ふ。

▲**嫂**（優梨子）　久しくこの人の作を見なかつたが、この作は作者の進歩を保證するに足るものである。これは作者の爲めに祝すべき事である。しかし、まだこの作にはたゞこの人の持つて居る感情が、よく表はれて居ると言ふのが、いゝ處だが、全體から言ふも、も少し細密に書いて欲しい。それと、も少し考へる事がしてほしい。

▲**煙草の香**（梅子）　今回でも、この人のこの作が一番勝れて居た。この男と女との關係が非常に面白く思はれた。このやうな種類のをもつと深刻に書いてほしいものだ。

▲**博多節**（靜子）　古いものだ。文章も思想も。

▲**黄昏**（日下榮子）　見當のつかぬ作だ。少しも眞面目に見てゐない。

▲**寫眞**（篤江）　調子がちやんと合はぬ。一寸破れた處がある。

▲**ゆびわ**（世緒子）　こさへた作である。

▲**冬枯**（くれたけ）この人も次第によくなるとは思ふがまだ面白くない。

▲**晴子**（夢浮橋）　もう幾度も讀まされたやうな氣持のする作である。

女子文壇 紀念第百號

● 紙數三百餘頁　本號特價金參拾錢 【五月一日定期號】

來る五月一日。本誌創刊滿百號に相當するを以て、紀念の爲め、目覺ましき雜誌を發行すべし。▲近頃。世上一般の婦人雜誌は漸く單調に流れ、常に同一問題を繰返して、讀者を倦怠せしむる弊あり。本誌は**紀念第百號**の發刊に當り、百尺竿頭一步を進め、更に誠實なる態度を以て、愛讀者諸君が多年の信賴に背かざらんことを期す。▲**紀念第百號**の編輯準備は着々として進行しつゝあり。其概目は逐つて豫告すべきも、要するに花やかなること櫻の如く、親しきこと母の如く、而かも尤も內容の充實したる雜誌を發行すべし。▲每年の例に傚ひ、五月に女子文壇第二增刊を發行すべき筈なれども、代ゆるに**紀念第百號**を以てし、專ら此方に力を注ぐ事となりたれば、讀者諸孃にも此意の諒察を乞ふ、隨つて**紀念第百號**に揭載する爲め特に各種の原稿を募る、左の如し。

紀念第百號掲載投稿募集

▲花（散文）（二十四字詰五十行以內）……河井醉茗選

▲動物に對する感想（獸、鳥、蟲魚に對する感想文）（行數同上）……溝口白羊選

▲三月一日より七日までの日記（或は其間の一日二日分にても可）（行數同上）……横瀨夜雨選

▲短篇小說（二十四字詰二百行以內凡て振がな付）……水野葉舟選

▲詩（題材及び長短自由）……服部嘉香選

▲和歌（一人三首以內）……與謝野晶子選

▲俳句（一人三句以內）……內藤鳴雪選

◉婦人 身の上話 世間話 實驗談（二十四字詰百行乃至二百行まで凡て振假名付）……編輯局選

◉女子文壇追想記（本誌と諸君との關係又は本誌に依りて起るさまぐ\の追懷）……編輯局選

▲懸賞總額金百五拾圓也

內譯
一等 金貳拾圓（一人）
二等 金拾圓（一人）
三等 金七圓（三人）
四等 金五圓（五人）
五等 金參圓（八人）
六等 金貳圓（十五人）
七等 金壹圓（二十人）

賞與法 各種投稿を通じて尤も優勝なるものに一等を贈與し、以下之に準ず
但し第三等以下の賞は價格相當の物品にて贈る

▼投稿締切三月十五日最終便本社到着の分▲

紀念發行所 東京京橋區大鋸町 女子文壇社 （電話京橋六〇七番）

紙數增加……四月一日發行

少女櫻花號豫告

特價金拾五錢　送料一錢

少女は。來る四月一日、特に平常號の紙數を增大して、櫻花號を發行します。

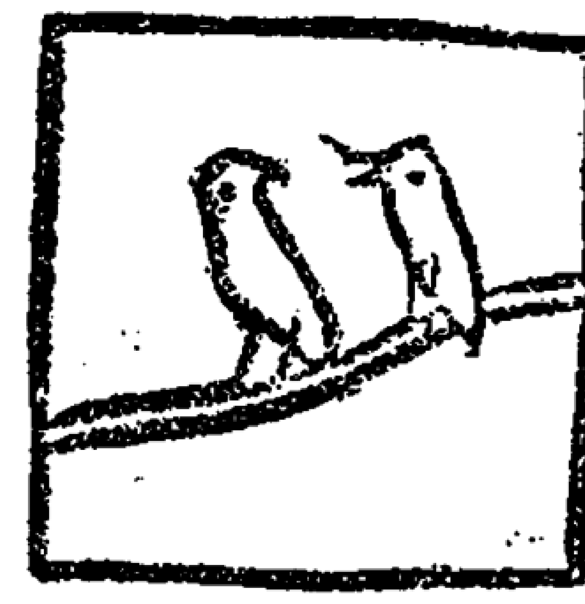
時は春、滿都の櫻花悉く開いて、香風徐ろにコバルトの天を渡るの時我が櫻花號は如何に華麗なる色彩と充實せる內容とを以て、花の如き諸孃の前に出現するでありませうか。記者は前月來その計畫の爲めに、夜の目も寢ない程苦心して居ります、

管々しくは申しませんが、どんなものが出來るか樂んで四月一日を待つて下さい。記者はこれでも天下一品の面白い美しい雜誌を拵へあげるツモリで、一生懸命になつて居るのです。

併し記者が幾ら力んでも無益です。これには皆樣にもお力を借りなければなりませぬ。ですから皆樣も盛に美しい文章や面白い話を投書して下さい。さうして讀者記者共同の力を以て、世界に耻ぢない立派な雜誌を作らうぢやありませんか。

（投書の種類は『少女』三月號に就て御覽下さい）

發行所　東京市京橋區大鋸町　振替東京一七二九番　女子文壇社　實捌全國雜誌書店



散文

編輯局選

○雪の積る日（天）

米澤市　深山木

昨夜、尺餘も積つた雪は今朝になつても、やまない。量が減つたかと思ふと、ぢきまた新らしく降り積るのだ。裏についてゐる雪を指ではぢき落して、小窓を開けて白い庭を見る。まだ日の目も見ず、やんわりと積つた雪は浮雲よりも輕るさうだ。斜めに霏々と降る綿雪は見てゐるうちにも、積つたうへにたまつてゆくのが見える。

いままで足駄でゆきかへりをしてゐた妹も今朝は藁沓を買つて穿いていつた。雪袴の上に肩懸をまとつて、お高祖頭巾を眉深にといふいでたち。海老茶袴は本といつしよに背負つて學校へいつてから穿きかへるといふ。

みんな出でいつて二人きりの炬燵になると、母樣はまた齒が痛むつて枕を持つて來て横におなりなさつた。しんとして何の音もなく更けてゆく白晝を默つて編針を動かして居ると、母樣の寢息ばかり布團のなかから耳について、雪の降る音も聞えるやうな氣がした。

午はひとりで冷たいお飯に白湯を注けて澤庵で濟しとく。暮れかゝる頃雪はやんで、向の山が薄く見えた。がう、がうと遠く杉林の鳴るのを聞きながら、目を瞑つて湿加減な湯につかつてゐると眠たくなつた。上つて、みんなにわけられた蜜柑をたべた。乾いた唇に甘いつゆの冷たさ、故となく胸がときめき跳つた。

（十二月十五日）

小さい弟が窓の內から戸張棒で軒の氷柱をたゝき落してのち、何かの樅みに穿たれた眼鏡ほどの穴が空氣を湛へて蒼く見えるのを興がつて、いくたびも棒をさしては拔くので、つひには窓の下に十ばかりの蒼い穴が並んだ。

明日までにといはれた編物が二百、午まへに出來上つた。十づゝ重ねて白い糸で綴ぢたのを、箱の中に並べてみて、これで二百反の糸織のかざりにつくわけだと思ふ。お納戸色の糸は倦きたやうに思つてゐたとこ ろへ、このつぎからは赤い糸でたのむといはれたの

で、早く無くなつてしまへばいゝと、まだ半分も減つたか減らない糸のかゝつた枠ばかり眺められる。

寢る前、炬燵は塞がつてしまひ、灯もない室に坐つて父様がつれ〴〵の話を聞いてゐると、淋しいてゝろもちに氣が張りつめて、冷たい疊のうへに足が痛くなるまで坐つてゐた。（十六日）

朝から雲一つない雪霽れ。坐敷の雨戸をすつかり開け放して掃除した。庭の松の木に積つた雪に下つた氷柱がきら〳〵とまぶしく融けて雫を落してゐる。家の内は寒いけれど外は暖かさうだから弟等が遊び場に雪を踏み固めた裏へ出てみた。

紺青にひろ〳〵晴れ渡つた空と、雪に覆れて白い地とは何處までも對ひ合つてゐるのだらう。私は雪玉を握つていくつか空へ向けてなげつけた。

明日はどんなにか寒じるのだらう。黄ろい光が雪の上に晝のやうに明るい。雲は東へ、數へるほどなきらめく星も月もみな空高く西へ走る。流れる様でもある。

人通りもないやうだから、街道へ出て滑つてみたいと思つたけれど、妹が寒いからいやと、きかないので一人ではと思つてよした。（十八日）

女子文壇の投稿家中、自然を描くに妙を得たる人は窓分此人にとゞめをさす。（醉茗）

自然ばかりぢやない、客觀に伴ふ主觀の現はし方も、和らかく暢々と書かれて居る。雪の中の美しい空氣が目に見える様で嬉しい奥床しい作だ。（白羊）

◎階段（地）

東京　鈴木春子

濛々と渦卷く砂烟の内に漂はせられつゝ、とぼ〳〵と力抜けのした身體を、熊笹の蔭に白く青く傾斜を造つた階段の上にまで運んだ。

透通る様な鋭さ持つた冬の朝の光線は、白い石の階段を黄色に見せ、暗緑の蔭に淀んだ雜木の群に、隱顯と、白銀色の反射光を搖すぶつて居る。俯向き勝な私の瞳には、ぴら〳〵と顏に冠さる肩掛の濃藍色の間から、一寸の間、是等の物が出入してゐた。

が、何時もの様な生々した觀察の興味は、少しも私の頭腦には無い。園子さんと一緒だからと、母様を僞つて、忙がしい内を、圖書館通ひしやうとした、ばちかも知れ無い。けれ共、現在の私の境遇では、斯うするより他に、修養の仕方が無いのである。八日頃から開館するさうなが、其時分には、御忙しくなつて、もう來られなく成つて了ふであらう。或る心配な事の起つた時、自分を取卷いて居る凡ての物象が、すげない眼付をしてゐるやうに見えるのは、意識の瞳が、すつ

かり其の鈍い布に隠されてしまつて、面白い、華かな聲許り、浮立つて耳に響く樣に成る故であらうか、と、現在の自己の心理を、誇張的に客觀して見た。

轟々と凄まじい物の響が寒氣に顫へる私の身體を傳つて下つた。

ぽう／＼と立つ砂烟を突切り／＼、スッ！スッ！と電車が走せ違ふ。ぞろぞろと疎に黒く白く、緑、小豆、オレンヂの人影が動く。

何處から何處へ…………。



少女　信濃よし子

雜然と黑く陰影見せて、重疊連續した眼下の街は、薄樺と鼠の陰影ある雲の流れた冷光もつ碧瑠璃の蒼穹の下に沈んで撒いた水がキラ／＼と硝子板の樣な反射光が強く強く眼を刺戟する

日本橋にかゝつた。

モツコに土を載せて、さし荷ひにかつぐ工夫トン／＼と打つ釘の響、ゴト／＼と走るトロツコ、何と無く土の匂ひのする數多の勞働者の内には、汚ない手拭の女も

交つてゐる様だ。私は勞働者の生活の、如何に慘めな者であるかを知つて居る。私の家も、勞働者である。

ずーつと假橋の上を渡つた。隱顯と、手摺の傍をインバネスが通る。コートが通る。荷車が通る。半玉が通る。藝妓が通る。背廣が通る。絣が通る。

日本橋から本郷行の電車に乘つた。魚類の匂ひ、なつかしき魚河岸、川を間にして建並ぶ土藏の壁が、午後二時の光線に輝いて、ゴチヤ〳〵ともやつた、水上生活の船には、流石に初春で、小さな締飾がしてあつて、額の狹い、ちんちくの女が、船端で赤坊に乳を含ませ乍ら、呪ふ様に、デロ〳〵と、橋の上の人通りを眺めて居た。

裏返しの様な半纏着た魚屋が、えつさ〳〵と、半臺をかついで行く後から、眼の丸い唐人髷の女の子が、派出な友禪縮緬の着物を、大人の様な格好に着て、氣掛りさうに振返り、振返り行く。私は、不圖、萬壽子さんを思つた。「美しい皿」を思出した。そして少しも文字に囚はれてない、あの流暢な筆致が、限り無く羨しかつた。そして、飽迄も江戸子的な？此の土地の生活を、縱まゝに、空想して見た。

色彩に對する一種鋭敏なる觀覺を持つて居ることゝ、文字に豐富な事とは、この君の特長である。私は初めて君の「夜の淺草公園」を讀んだ時、君の美しい文章から流れる或るフレッシュな感じと高い香氣とに醉はされる様な氣がした。ところが夫れが二月と經ち三月と經つ中に見かはす様に褪色して香も薄くなつて了つたのにヒドク失望した。この文章など流石に巧なものであるが理智の光つた乾き切つた白い冷たい空氣が目を遮るので、圓みのあるフックリした觸感が薄い。才華絢爛たる君が何故此頃の様になつたのか、私は非常に惜しいと思ふ。(白羊)

とは云へ、此文は「夜の淺草」以來有數の出來榮である、何人にも出來不出來といふことは免れないが、此作者は根底に自信がある、自信があるのは頓て上述の餘光に相違ないが、只、自信があるばかりで自ら力を測ることが出來ず、より以上に買ひ被つて、慢心すると頓て上述の反對に終る、私は作者の力を認めてゐる、小說などを書くと存外だら〳〵として引締まらないが、散文を書くと相當に書きこなす、筆は達者だが、讀書と經驗とが未だ能く腹の中で消化してゐないのである、消化力を養ふことが當面の心掛であらう。(辭茗)

○無言のあひだ　(八)

はやぶさ

ひとりは抱いてひとりはあかり持つて緣側に立つたのは一瞬間の過去であつた。

やはらかな獸の肌のぬくもり。今のさき冷たい土の上にすくんでゐた、追へど去らず、捨つれどかへり來るわが家族よ。「みいちやん今にきつと入れてあげる、自分の生活をするやうになれば、自由にさへなれば……

……あゝだけれど、それはいつ？いつくる？」まだ見ない大きくなつた時の自分の姿をおもひみて好奇心をどらせた胸はまだ波のなでりをとゞめてゐるのに、遠き昔よりかくあり長き未來にむかつてかくあらんとする様なかたちして、二人いまはしづかな呼吸をつゞ

けてゐる。

とお貞さんは目をくりくりつとさせた、わのやうな地ざう眉の下で丸いのが白くひかつた。八疊の明るいランプと母さんとをへだてる、ふすまにはくつたくらしく首をかしげた、やかんどびんの影をはさんで向きあつてゐる私の坊さん頭と大きい桃われ。けれどそこにはかるかやの話にきくやうな相いどむ蛇のかげはなかつた。

弱い火の上の小鍋の蓋をとると五勺の牛乳のふくらみかけたおもてがこまかい皺をひきあつてかすかな脂肪のにほひが、ぼうと顔を包む。

飲みたくない、ねむい、瞼がしぜんについてしまふ。

かたさせが啼く。

湯殿のトタン屋根に雨の音の忙しくなるにつれてだんだん垣根をこえて往來をこえて遠ざかつてゆくやうなけはひ。

キリリ、リリリ。

人の目からはまるで沒交渉な別の世界に生きてゐるやうな小さい蟲と老いたる家畜との間にふしぎな絲がからんで、その啼くこゑは、今夜、あの暗いぬれた監獄の原の方へ、哀れな三毛を誘つてゆくのぢやないだらうか。

目をあげて唇をうごかさうとしたとき、人はゐなかつた。

今までこゝで何思つていらしつたの。

たとひ姉妹でむきあつてゐたからといつて。

いまたづねなければそれは秘密の中に葬られてしまふ。

しかし知つたとて何になる？

重いねむりは魔藥が全身を痲痺させるように流れてゆく。

無言の深いはてには見ずきかず思ひなき世界が無限につゞいてゐる。

註、傳馬町と違つてお隣りのかんごくの原には鶏がゐるので、猫をおくことは父ぎみが許さぬ、姉さんのお手傳があるでせうと辭者にからかはれてから、一ぺんこつきりで女子文壇の投書を止めたお貞さんである、襟にうつつた坊主頭、はやぶさはやつぱりお下である。評は思ふむねありて辭者に讓る。(夜雨)

私も亦思ふ旨ありて、此の作者に暫く藝術的批評を避けたい、此の年齢、此の境遇に居て、此れだけ充實した生活を味つてゆかれゝば申分はない、たゞ此の張りつめた力、此君十四歳の時に作つた詩を見て私の驚かされたる第一印象――それから以來、ずーつと續いて來てゐる力に、あゝ、未來あれかしと願ふばかりです。(辭者)

佳作

○二人

柴井やよ子

「奇抜なのが好きなんです。人が松を立てたら檣を立

てる――といふふうに」年酒に醉うた神田さんはそろそろ氣焰を吐きかけた。

私は煙草の烟を吐きかけた。

思ふさま煙草を吸うて一息にぱつと吐く、と白い烟の輪がすうと出て擴り乍ら斜に昇る。輪の向ふにきらりと光るひとみがあつた。

今度は、ぱ、ぱ、ぱ、ぱと小さな輪をつぎ〱にふいた。輪をくゞつて聲がきこえる。

「――破天荒な事をやつて先づ相手の度膽を拔いてしまうんですな。あつと感嘆した時その人の心は自分の心に屈服してしまひます。さうしたらもうしめたもので…………」

口の内がからくなつた。煙草を灰の中につきさして火鉢のふちに手をおいた。

一體此人は何のために饒舌てるのだらう。世界の遊ふ私の心にあなたの話は何の感應もありませんよ。と私は心に思つて神田さんの自由な表情をみて居た。

年末の賞與は多かつたときくこの人の頰には血の色が美しく漲つて、凄みを含んだ瞳は敏捷に動いて居る。その明快な話ぶりをきゝながら、強いて黑闇の骸骨を相像すべきでもあるまい。その頭蓋骨の恰好がどういふ種類の系統に屬するか、研究すべきでもあるまい。

などゝ、ほゝ笑みの中にすべての空想を葬つた。

「小さな缺點を算へられるよりあたまから冷評された方が宜いです。些細なことと云はれると感情を害するばかりですが、あたまから惡口云はれると自尊心が相手にしませんからなあ」

小さな缺點を算へられるよりあたまから冷評――自尊心――と私はつい胸の中でくりかへす。どうしたはづみだつたか、決して誘れまい。あんな人に、あんな不眞面目な人に決して誘れまいと衞つて居たのに。何うしたことか、若い男に對する私の心は好奇心に引かされて知らず知らず近づいて行くらしい。心の移動は恐ろしいものだかなしいものだ。輪をふいたさつきより時がたつたもの。烟の輪は消えて香もしない。

「えゝえゝ、それからどうしたといふのよう」私の聲は眞面目ではなかつた。

斯うひねくれても困るやうに思ふ。（辭若）

素破拔いてはいやといふお斷りがあつたから言はぬけれど、この文章を見ては耻かしがりの十七のお下の君と同じ人で無いことはわかるであらう。或時青山で、あの私の名を何うよみますかと聞くから、「芝居いやよ」とよめると答へておいた。小米櫻の白い花のようなそれは小さな草花の束であつたが、あたまから拔いて何の花だか知つてらしつてと聞かれたけれど無論知らなかつた。驚いたのは煙草をめし上ることと。（夜）

◎逐はるゝ思ひ　　草の門

人に愛され、人を愛するのが女の命でせうけれど、

二度戀するは罪惡だ。欺むいて嫁ぐ女と、二度戀する男と、罪は同様でせうに、女のみに娼婦の名をおはせる。わが見る世の人は不公平だと思ふ。

女は皆娼婦である。と仰有つた人を思へば慈しくなる。再度の戀に初戀をよそほふ男と、萬やむを得ぬ運命の下に過去を封じて新らしき人の胸に僞りの笑する弱き女とが、ふりむいて見た時は、どちらが苦痛であらう。仕方がない、見しらぬ人と僞つた方がよいと私は思ふのだけれど、それを娼婦だと云ふ。

童貞にして終れる一生なれば何も云ふことはないのだけれど、處女で終るを許されない運命だから私は迷ふのである。行く道は一つぢやあないにと、思ひ出せないが誰れだかいつた。どうせ不仕合に生れた身が、幸福のあらうとは思はぬけれど、せめての幸を祈つて下さる母を思へば、何でとも自分の心のまゝに絶對に退けられないもの。惡夢のような苦しい思ひを抱きながら日は一日と葬られて行く。あゝ一日一日と葬むる程人世の謎を深く味うのではあるまいか、さらばとて再びかへらぬ若き日を止めて、若き思ひに泣かうとは思はぬけれど、何とはなしに葬り去る日が惜まれてなりませぬ。

「お前の顔はほくろが多いよ、せめて目の下の泣きぼくろだけでも抜ておもらひよ」と母はいつた。「この先き泣く様なことはありますまい」と私は強て笑ふけれど、今の苦しみさへやりばがない。だけども名古屋の伯父さんだつて、髮結のお滯さんだつて、あんな大きな泣きぼくろがあるから、人に別れて泣くぢやあないか、迷信などお前は笑ふけれど……私は氣になつて……

……」と母は云ふ。

今抜いて果して泣かぬ性なら、憂きも愁も去る心なら……と涙ぐんで靜かにふりそゝぐ夜の雨をきゝながら十一時をきく。灯火は何物にか驚たようにじいつと音を立てゝ暗い心をともらつた。（しはす中旬）

『あれからまた一度卒倒した、母に抱へてゐられたのだけれど足くびを痛めて難儀した、母は非常に氣をつけてゐてくれる。大きな家の中に離れてひとりでねるから、ひるも夜も見に來る。

「母を見れば心ぞなごむ老の女に、死なじとわれを、はげますからに。」笑うて下さい、私は生きてゐねばならない。世にも人にも用なき命だけれど、母だけは愛してくれるのです……』

とよんでわが涙は膝に落つる。われとわが苦悶を拂ふべき力もなく、暗き思ひのみ重なつてたへぬ心。先生だつて生きなければならぬと仰有る、私だつて、私だつて、せめて先生の御齡まで生きなければなるまいが思ひにつなぐ命は辛くつて。…………

「つらからうけれど母のために生きるのがあなたのしのこしたやくめかも知れぬ」と仰有る。仕殘したやくめ、やくめかもしれないが私にはどうしてよいかわか

らない。「私の見るものはやはり蒼いろい死の壁です」と四十四年の元旦にかべを見んと仰有る。思つたまゝで頭は重い、熱い涙はまぶたも重い。火鉢に寄りかゝつて靜かに指し示されたわが行く道をそらんじて見た。

しはすの風は身をさすようだ、すき間から流れ入る風は冷たい、わが行く道は氷の上よ。「風がやんだら雪でせうな」と大聲で外を話しながら男は通る。（二十六日）

「この頃は顔色が惡いよ」と母はいつた。「いゝえ、別にどこも惡くはありませんのよ」……見つめられるが辛さに母の側を離れる。ひとり思ふ、かう續くはてなき煩へは私にはたへられない。斯くあるべきはもう數箇月前より覺悟してゐた、いづれは通るべきわが難關と思はぬではなかつたけれど日を逐ふて續くべくまた深くならうとは思はなかつた。どうならうと仕方がないのだけれど胸は閉ぢ夢のみ深くかけめぐつてあやしくゆらぐ此の思ひ、誰れぞたれぞ解く人はないでせうか、われ心のみ暫しでも安らかに住ふべき處を尋ねたけれど、つひに見出すことはできなかつた。

あゝふりかへつて見るわが過去の夢はまだ〳〵淡きものであつた。今味ふ苦しみこそ死に勝るくるしみ、死ははるかに易いでせうに、私は私は死さへ死さへ止められてゐるのだもの。（二十七日）

澤山ある誌友の中であなた程もだく〳〵してゐる人も少ない、いくら名を匿しても分りますが賤の苧環くりかへし〳〵あなたの情緒は實に紛亂錯雜してゐます、それを惡いと云つてお說教するのではないからお聞きなさい。要するにあなたは誠實です、ごまかして置くとか思ひ開きをするとか云ふことの出來ない質なんでせう根柢が解決されてゐないから一つの事件が生じても、くる〳〵くる〳〵、と其いとぐちをたぐり出さうとするのでせう、併しあなたが解決しやうとしてゐるのは人生の根本問題であつて恐らく天下何人も結論の出來ない問題でせう、所謂不可解です、生きても死んでも不可解です、だから其の根柢の不可解は不可解として置いて、もつと生命の糧を澤山に貯へ、狹い天地から廣い天地へ出て御らんなさい、あなたがいくら出ないといきまいても今に引張り出されます、それはあなたの爲に幸であるか、不幸であるか別問題としてもそれだけの事を覺悟してゐて寧ろ人よりも一步先へ出て覺醒すると云ふことに氣を付けたら何うですか、でないと處女時代に於てあんなに煩悶した人が家庭の人となつてあんなに平凡化したと云はれるのはくだらないじやありませんか、一に今の中の心がけにあります、廣く大きくゆたかに遲疑と執着とを捨てゝ世の中に進んでごらんなさい。（醉茗）

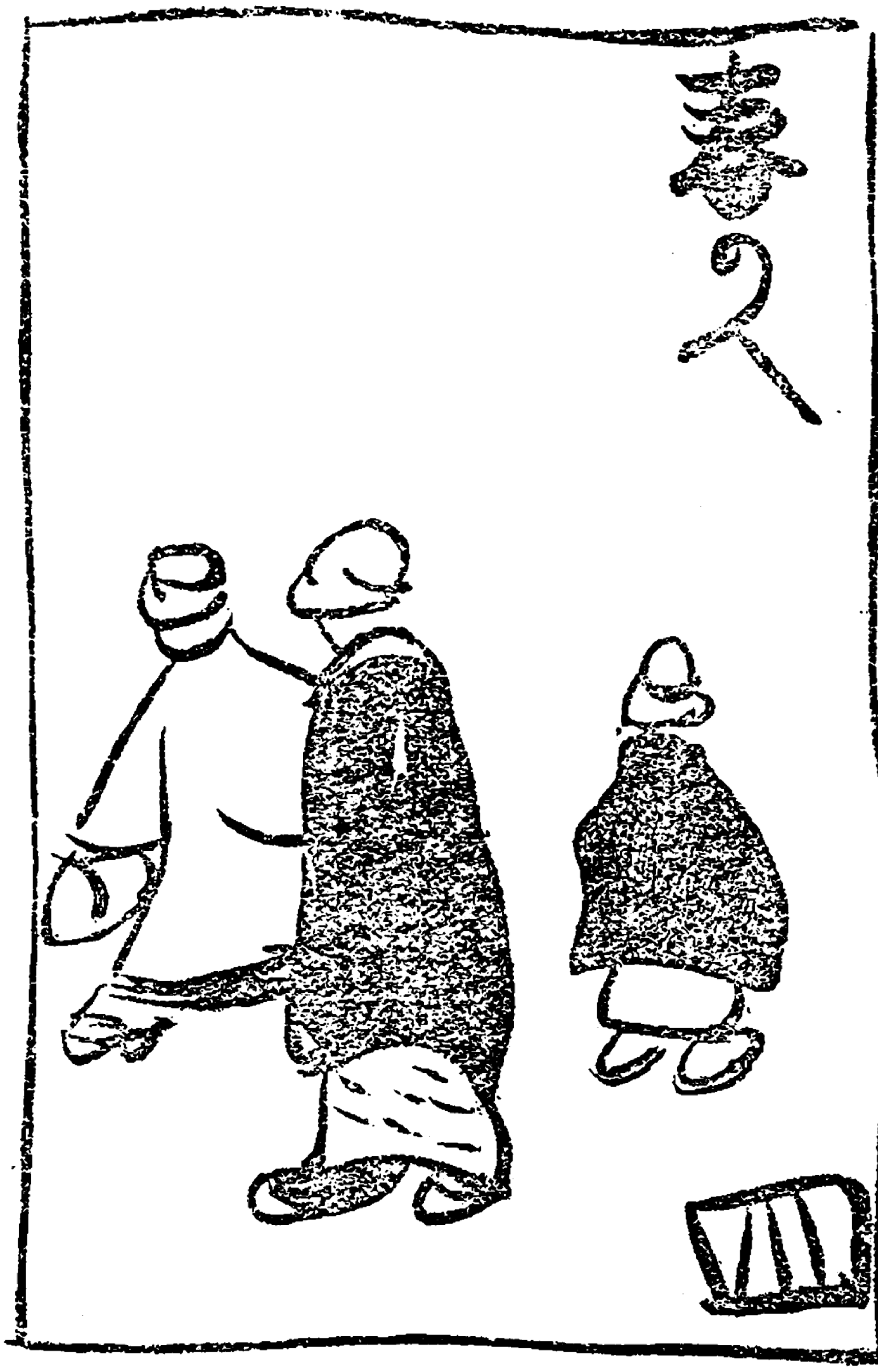
○雪日記

金澤山梔

エデンの桃源、嬉しきは我が夢なる哉、初夢も樂しかつた、お年越も。

雨戸ががたつくのでふと夢を破つた、鼠の惡戲かと思つたら風の音だつた、どうも雪が降つてるらしい。お寒いと誰やら言つたものがある、藥種屋が賣初を持つて來たのだ、つゞいて春も雛もお買初に來た、この寒いに馬鹿だなーと言つてみたが自分も昔しは出たものだ。雪の降る寒い一時二時頃人に壓されながら兄さんとよく出た、一寸片町の觀工場の人出を想像して見

たがいつしか又眠つてしまつた。
再び眼の醒めた頃は雪は止んで居たが雨戸のすき間は眞つ白にふゞき込んで居た。
書き初めを終つてから往來の方のガラス窓を見ると緑葉の頃は見えなかつた七聯隊、の城壁が芝居で見た龍宮城のやうに浮いて見える、百萬石の遺物よ健全なれ。夢みてるやうな金澤も文明の風に吹きさらされて千歳まで變らぬ水を湛へた百間堀はうめられる、權現堂の時の鐘をも廢せられ白壁のつゞいた屋敷も取壞されて小さな貸家が建ち町の柳も大方は切られて了つた。嗚呼せめては石川門だけでも昔の儘の白鉛の甍を殘して置きたい。………(二日)
ハムレツトの畫が呼びものとなつて尾山座は毎夜大入だといふ、招待劵は貰つてあるし好ちやんいつていらつしやいと言ふと私まあちやんにすまないわといふ、何私見たかない事よお留守してあげるからと言つてお母さんと雛と二人で出した。



春の人　下總　千代子

静かな晩だ事、かうした夜をひとり默坐してぢーつと考へて居ると心が自然に鎮まつて來て川音がにごつた心を洗つて行くやうだ。ウツトリ夢心地の樣になつてランプの火影を眺めて居ると、ふと今朝いらしつたお琴のお師匠さんの事を思ひ出した、着てらした羽織に菊水の紋がついてゐたつけ「見ずに聽く」何てみじめだらう、自分で意識してつけたのかはた人がつけたのか悲哀はこれのみにとゞまらで、襦袢の袖までが蝉丸の能裝束だつた、うたひなさるお聲が透き通るやうに美しくて「夢が浮世か浮世が夢か」……私はほろりとし

た。ほんたうに夢が浮世なのか浮世が夢なのか近頃私は分らなくなつて來た、お師匠さんは自分の一生を何と心得ていつしやるのだらう、めしひし人の向うに相對して花のやうな妹が五時のリボンをキユツとしめててれから出やうとする夢の世を夢みつゝ居た。家の前を寒念佛が鉦叩いて通つて行つた。……（六日）

雪にかゞやく醫王山へ我ともなく眼をやる、暗い空光つた山、次第々々に目が疲れてきて果ては活動寫眞で見る北極の荒涙のやう、逆巻く涙が今にも私の頭上へおつかぶせやうとして居る。思ひ出したやうにバラバラ雪が降つてきた。私はつまらなくなつてピツシヤリ障子を閉めて机の前へ坐した、そして思ふともなく今朝見た夢を思ひ出してニツコリ微笑んだ。なつかしい思よ、いつまでも忘れるな。

お母さんがお炬燵にあたりながら、「さつきのお手紙どなたから」と訊くので「齋宮の方ですよ」と言ふと「あゝさうか、世間は廣いね」としんみりした調子で仰しやる「もう一度讀みませうか」と伺ふと「なにあれでよく分つた」と仰しやる聲が沈んで居た。燵布團に顔をおしつけてぢーつと考へていらつしやるのだ。

「お母さん私尼にはならないのよ……そのかはり有髪の西行になつて……行衛定めぬ旅に出て……行く手は野となれ山となれ……」「お前そりや何を言つてるの、さうすりやお母さんが寂しいぜ」と泣きさうになさるから「噓ですよみんな、私が四十にお母さんが七十、さうして一所に死にましやうね」

夕方姉さんの學校を透視して見た、初めは自轉車の女が見えたがしまひに自分の學校になつてしまつたから止した。……（十一日）

臥て居て鳥に夏蜜柑の仁を投げつけた人、おん坊に燒く時はお手柔にと頼んだ人、水は石に鳴り、風は木に鳴り、人は不平に鳴る、歐へ君が聲は天にいたらん。（夜雨）

◎心の日記

夢の浮橋

一體何に依つて私は滿足する事が出來るのだらう。其れは自分にも分らないんだもの人に知れる筈はない何物にも滿足し得る人は幸福だと敎へてくれた人があつた、仕方がない、私は甘じて最大不幸者と呼ばれよう。（××日）

凋落を語る黄褐色の山々の間をコバルトの美しい空が流れて居る、淋しいけれども嶮い思ひをさせる色だ。丁度私の性格に似て居ると思ふけれど、人から見たら又さうでもなからう。

去る年の春三月友のS様はあの美しい空色の三枚重の艶かな腰模様に目くるめく様な綾の帶をしめ△練つ

たけれど。……錦も綾も美しい空色も一生の幸福を守る程強い力を持つちや居なかつた、美しい物も見惡いものも自然の前には擇ぶ所はないものを。（××日）

私の境遇を羨ましいと云つた友があつた。其れは不幸じやない私は、父は私一人を愛してくれる母も私一人を愛してくれる、そして私は兩親を深く思ふて事へて居る、たしかに幸福だ。けれども此幸福は私ばかりの專有物じやあない、此宇宙の萬人が皆等しく天から受くる所の幸なのだもの、私一人を羨むのは間違つて居よう。Kは然云ふ意味で云ふたのじやない、Kは物質的の供給にあくまで滿足し得る人なのだ、然云ふ所から率して獨子は幸福だと云ふのだ、淡い考へだ。實にをかしい程、今私は精神的のあるものにさへ滿足し得ないで居るんだもの、眞の私は外から見る程其れ程單純なものじやないのだ。（××日）

よくお天氣がつゞく、一度雨が降ればいゝと思ふ。鈍色の薄絹に包まれて地の底へ沈んで行く樣な、然うした雨の日に何とは無しに深く〳〵考へ込むのが好きだつた、二三年前までは。今はもうおそらく其麼氣分にはなれないだらうけれど、一度でいゝから先の樣に淚の出る程しんみりと考へ込んで見たい。單調の生活になれては一寸違つた鼓膜の震動にも心は動く、一寸とした色彩にも目を聳てる、私の心は始終變化を叫び變化を戀うていつも一つ所に止つて居ない。あらゆる官能はあらゆる刺戟を欲して靜止する暇がないのである。（××日）

I樣私は思はずも死ぬべき境を一つ越して仕舞ました。人の心の年々に、歲々に相同じからずと云ふのが吾々人道の原則なのでしようか？、私は二十歲にして死べき境を一つ生延びた罰として、信ないフレンドを一人淚して捨てねばならぬ運命に相遇しました。貴女は心地よく御承知下さいますか、其れとも三度信よと殺仰いますすか、三度信ずれば又三度疑はなければなりますまい、私は同じ事を何度もくり返へすのは煩う御座います、此所まで書いて止めてしまつた。あんまり烈しい此上書いたらI樣は泣くだらう、私と違つて大人しい人だもの。けれども私を僞つてるのは事實だ、そして、其れが私に知れるを非常に恐れて居るのも確な事實だ、あゝよさう〳〵。出さなければ彼人も何時までも何も知らずに私が信じてると思つて安心して居る然うだ強ひて人の心を亂す必要はない。（××日）

よほど議論が言つて見たい質と見える。併し徹底してゐるから好い現代の婦人の抱いてゐる意見としては、然もあらうとうなづかせる餘り徹底して居ないやうにも思ふ。（記者）

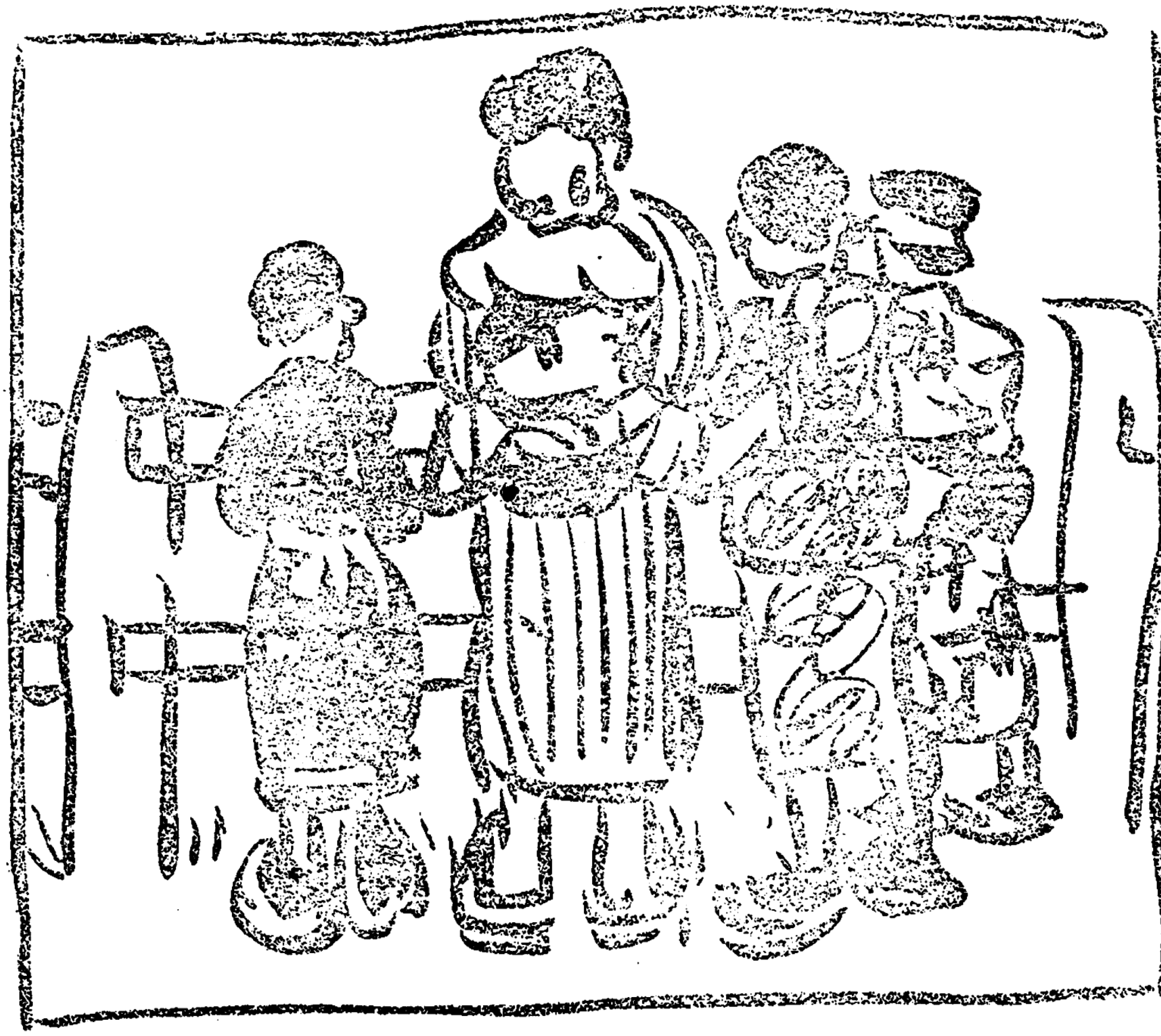
○短身の悲哀

埼玉縣　中澤たか子

妾は、ある郵便局の電話交換手を務めて居る身なのです、毎朝八時に詰めなければ、なりません。妾は始めの程は、自分自らが望んで應じた職務ですもの、そりや面白うござんしたのですけど、不思議ですは、自分からして不思議に此の頃は此の務がいやになりましたの！。或は、妾がこんな事云ふと、皆さんは屹度、倦つぽい人だとか、ナマヶ者だとか不忍耐者だとか冷評下さるでしよう。然し此れは話すのを最もな恥とする、つまり「心の秘密」が妾にあるのですわ。話さなければ解りませんから、何もかも皆んな御話し致しますからお冷笑遊ばさないで下さい。かうなのです、妾は性來身長が短いのです、餘り氣になりますから、此間量つて見ました、髪の高さ迄入れて四尺三寸七分!! 妾は此聲を自分自らが發し乍ら、何幾度か、頭腦の集中神經から「馬鹿なア」と叫ばれて、何度、口を蔽つたでしよう、口を噤んでは、又四尺三寸七分!! から日に何度叫ぶか知りません。其たびごとに腦頭の痛烈な詰責を受けるのです。自分で斷え間なくかう思つてる故か、局に行つても朋輩の皆さんが（杉本さん草野さん、吉野さん森川さんは、皆な大きく五尺以上）ひそ〳〵と囁く小さい聲が、キッチキチ〳〵と時を刻んで居る電鈴や時計の音に雜つて、自分の小さいのを評し合つてる囁きとしか取れません。（さうではないのです皆さんは樂しい戀を語つてゐるのです）さうしてはては笑ひさゞめくのですが其の時は自分を下げすんでお笑ひなさるかと、妾は妾の椅子に凭れて、幾度か悲しいつらい思ひをしたことでしよう。誰れ言ふとなく階下の男子の局員さん達は妾をチビ子々々々と呼ぶ樣になつたのです、其の聲を聞いた時の妾が心の内は何んなでせう。一々此處に申上ることは出來ません。「中澤さんお疲れでしようチト此方へ來てお話し遊ばせ」と時々言つて下さるは杉本さんです。杉本さんはスラリッとして男子の方にも恥ぢないお丈をお持ちなすつて居らつしやるのです。其のお姿を派出なお召に、藤色の袴着けた扮裝は、何んなに妾が胸の内をそゝのかすでしよう、窃にお姿のかたへに寄つて自分の身に比較してみますと、妾の頭は杉本さんの肩の少し上位ゐきりありやしないんですもの、つい私しは、ホロリッと袖を濕しますわ。念の爲杉本さんに窺つて見ますと、やつぱり朋輩の皆さんは妾に付いては、何んとも言つて下げすんで居るのではないんですつて。なんといふきたならしい妾の氣の僻みでしよう。「では何に言ふて居らつしやるの」と聞けば、あの方々は今し窓外を通る、戀人を吹聽し合つて居るのですつて。噫朋輩の皆さんは、何ん

樂しい淋しい甘い戀を語つて居るのせでう、「樂しいことねー」と思はず私は、羨望の叫びを心の内にすることがあります。叉すぐにチビ子々々といふ聲が新らしく耳の内に起るのです、さう思ふと、あゝ今朝であつた、町の角の日當りで十二三になる尋常科の男の子達が「交換手のチビが行かあ〳〵」と口々に言つた聲がまだ耳の底にコビリ付いて居る樣に思はれる。

こんなことをそれからそれへ辿ると、自ら望んだ此の職もいやに成つて、いつそ止めにしようか等と思つた事が度々です。ですけど止めれば月給九圓の言ひ換れば母を養ふ道が



潮の人々　青森縣　松尾ちよ子

杜絶えて終ふのです。アアすまないこんなことを想つてはお母さんが〳〵が可愛想だわ、と何時も思ひ止つては、局へ通ふのです。生れてからモウ十八年、まだ戀といふ者を解しません妾は、チビ子〳〵といふ言葉の爲めに終日終夜、頻らはされてゐるのです。頭の上から大鐵槌で打ち下ろされる樣に思ふ此の言葉！

妾は、何度新聞の「長身器販賣」といふ廣告を切拔いて置きましたらう。十三枚溜つてをります、が九圓の月給だ、と思ふと身を切らるゝ樣に身の切なさを感じます。

三宅雪嶺博士曰く「女が世に表はれるのは、才と貌と徳との三つで男子は力だが女は貌の方が重い」と戯謔

然う云へば貌の好い者が早く認められる、容貌の劣つてゐる者は何うしても度外視され易い、けれども貌を頼んで才も德もなければ、藝妓に異らぬ、才貌兼備でも德がなければ末に衰へる、才德さへ勝れてゐれば容貌は劣つても末は吉である、一生の上から云へば耻づるにも悲むにも及ばないと思ふ、身長の低いものは決してあなた一人ばかりではない外にもある、容貌に劣つてゐることを自覺して、才と德とを修めるやうにしたならば之を補ふて餘りあると思ふ。（醉茗）

○ある夜

伊藤躑躅

ある夜の一

十日餘りの月が稀明く障子にさして、祖母樣の吐いた煙草の煙りが輪を畫いて暗い天井に消えて行く。

壓せられる樣にホッと寢苦しい息をして豆ランプを細めて見た。夢の空氣で部屋は閉ぢこめられた樣に、亡き人、現在の人、種々の面影が表はれて來る。未だ我頭から去らない、今夕見し淋しい旅の女…………。

迷ひ苦しみ戰ける心を靜める爲め、三坂峠に積つた雪に夕日が冷たげに注いでゐる頃、三百年も昔の先祖の墓と墓の間に立つて、死して十年尙木標の儘なる母の墓を淋しい心を抱いて見てゐた時「久方へ行くのは此路を行つてよろしう御座いますか」と後ろの方で聲がした。ふと振返つた瞬間眼と眼がつと合つた。脊の低い淋しい眼の四十女「はいさう行けばよろしいのです」と云ふ聲、自分ながら怪しうふるへてゐた。「有がたう」と五六間行つて又淋しい眼で私を見た。二丁程行つた、又振返つた、何故か胸がつまる樣で苦しい。ジッと立つて見て居ると、田の中の道にいよ〳〵小さくなつて行く後姿が暮れ行く森の邊の小路にぼうとなつて、白い風呂敷がちら〳〵とかすれて行く。亡母樣亡母樣と叫ばうとする言葉を飮みこんで、若しか亡母樣がとほろりとして、木標を凡そ一時程も見つめてゐたそれは今夕だつた。

あゝ又しげ〳〵と淋しい眼で私を見てゐる旅の女、たまらなくなつて蒲團に頭をつゝ込んだ。未だ消え去らぬ。手を出してぱつと豆ランプを大きくした…………（ある夜）

ある夜の二

舊式の八角時計がヂン〳〵と九時をうつた。茶の間では繼母と下女とが夜業をしながら何か姦しく話してゐる、居間の方で祖父の雷の樣ないびきと祖母のかすかな寢息が聞える、サーと寒さうな風が中庭の欅にあたつてる樣になる。左右に寢て居る從妹弟を靜に覗いた、よく眠てる。私は仰向けになつて兩手を胸に置いた。眞正面のくすぶつた佛壇に宵につけた御燈明がかすかになつて新しい位牌が金色に光る。枕元でジイジイと蟲の泣く樣にランプの油吸ふ音が聞える。

夢々、人世は果ない夢なんだけれども、夢としたなら何の爲に人は生きて行かなければならないのだらう

思出の記の矢吹周三が云つた事をくり返した。周三は自殺した。人世はそんなものだらうか？幾千年人は生れては死し生れては死して居る、何の意義もなく苦しい生を續けてる………。

父なる神を思ふ時、私は僞り多き社會を見て神在りと云ふ言葉を疑ふ。美妙なる自然を見て全智全能の主あらずばと神の存在を思ふけれども、人の魂は永久に生きてゐるものであらうか、死しゝ人の記憶の存在と共に亡びるものではあるまいか？それからそれと疑の雲がわいてくる、あゝ私の信仰は破れてる。

ガラ〳〵と霰が瓦に當たつてる樣だ、頭がぼうとなる。苦しい疑ひの雲も消えて昔の子供に返つてゐる。

天野先生が廊下に坐つて笑つて居なさる、節子さんに文さんに私が裁縫室から飛んで來る、私は手に赤い木綿切を持つて居た、それを先生のいがぐりに置いて「あら先生が赤いきれつけて丸まげに、奥樣になられたの？皆がわあと笑ふ、私も笑ふ。先生は私のお下げを引つぱつて笑はれた……がらりと云ふ音に眼が覺めた、祖母樣が便所に立つて行かれる樣子だ。

なつかしい子供心地になつてるとチク〳〵と眼が痛み出す、枕元のコカインをさした、若し此眼が全快らなかつたらと、淋しい氣がしたが又疲れて眠つて了つた。

おとなしく流暢に書けてあるのを採る、華麗な近代的の色彩はないが、相次いで起る夜の追想にも無理がなく、一種沈んだ氣分を味はせる。（白羊）

○稚き日

福岡　筑紫

お午前澄樣が遊びに被入つた、丁度お洗濯がしたくない時だつたから本當によかつた。澄樣は青い梅を澤山出して喰べ競をせうと仰言る、で父樣の時計持て來る、さア五分よ、一二三。喰べるは〳〵ガリ〳〵お酸い事、澄樣が二十一私が二十三、二人共額には汗が一ぱい。けれど雙方喰べ方がぞんざいなので、また立派に喰べ直す、汚いね一度喰べて出したものを又喰べて、さう牛見たいねと大笑ひ。喰べ殼を畑の溝へ投込んで兎を見てると、母樣が一寸お洗へ肌着一枚だからと仰言る、澄樣が何卒させて頂戴と仰言るでして貰ふ。一つの布を二人でチヤブ〳〵させる。私が罰被る〳〵と何度も云ふので、煩さい人、かうするよと手をつねられた。お飯喰べて暫くすると歸ると云ひ出した、そして私から暁くなつたから必と怒れる貴女送つて頂戴と云ふので母樣にそつと話したら、じやすぐ歸るのですよ、本當にお澄樣は可愛想母樣が遠ふからと仰言つた。私何だか變な氣がした、私も一昨年迄乳母の家に居つたもの。作文の時間私ははつとした、一つ讀みますつて、あら私のだ、もうぼーつとなつて次第〳〵に顔は机

上に下つた。西公園の櫻は眞盛だと云ふ、見度くもない、七ッ出りの七坂峠七重の霞に閉ぢ込められた山伏谷の櫻が見たい切に——こゝがうまい實にいゝてんなにも戀しいんですかなあと先生はお笑ひなさる。私乳母の家を書いたのに、後で皆樣が、貴女てゝの方じやないのつておきゝなさる、エヽてゝの者よつて言譯するにも極りが惡い、何故あんな事かいたらうか……あゝ矢張り乳母の家が戀しい、種々な事が思ひ出されて何となくなさけなかつた。十六の春の日記より。

五分間に二十三といふと一時間には二百七十六たべる勘定だ、梅も)こんな胃袋がたかつてはたちまち潰れよう、女は偉なるかな(攻師)



ぬひもの　後藤あさ子

詩

河井醉茗選

○淡綠色の花（天）

笠岡　なぎさの子

かすかなる傷

あざやかに
みづみづしき青空に
むらがりて枝かゝぐる李のはな、
淡綠色のはなびらは、うちそよぎ
つめたき玻璃にくちづくる。

そのときに、純白のシーツ敷きたる
寢臺にすわり、
あるかなきかの小指なる傷口に
しづこゝろなく綿撒紙あてぬれば、

われは知る、
みどり兒のひとすぢに母呼ぶごとき
いひわきがたきなつかしさと、
水盤のふちにひらめく
淡き淡きかなしみのゆくへ…………

李のはなは玻璃の面に
朝照のうるはしさ。

物語

小さきひとみに愛らしきものを言ふ
かのつばめ、はやもきて、
くらき伽藍のひさしかげに巣をいとな
む。

つばめよ、
年々にむかしがたりの人去りて
さみしき夢に耽り泣くわが身には、
いましこそ、ふるき歌ゐはすべき
たゞひとりなる幼なじみのフレンド
シップ。

さらばつばめよ、
きて物語れ、花咲く窓に、わがこゝ
ろに
ああ、いましがこゝろよきひるがへ
りを見つむれば
わりなくも熱き涙を誘はるゝ。

ある日

海越えて、かなたには
緋のかづきせる波羅門僧の鈴ふる國
もありなまし、
かのオフエリアの竪琴も、火を噴く
山も、さてはまた
わが戀ひしたふ女帝の島もあらまし
を、――なつかしや、まひるのみな
と、棧橋に
煙のこしてはるばると行く船みれ
ば。

鐵琴

雪は屋根のうへにつもり

外面はひそひそとくらみゆく、
かすかにうつは鐵琴か、ゆるく、さみしく
音のきれぎれに
忍び泣くわがこゝろ………。

入日

赤くさみしきいり日の海上を
つかれたる帆は群なしてかへりくる、
夢にたゞよふ灣のしづけさ、
青塗の窓には、病あがりの女の眼、
いつまでもさみしき海にそゝがれてあり。

『物語』『ある日』『入日』のやうな傑作は決して不用意に出來るものではない、作者には何んな修養があるか知らないが、詩は孰れも渾然として間隙がない、斯う云ふ作が現はれて來ると、本誌詩壇全體をにぎはして、感興を喚起せしめる、一人の功も影響する處は少くない（評）

○病床吟（地）

和泉　金田代志子

百舌鳥

口で啣へたハンカチを
引き裂くやうに百舌鳥が鳴く。
哀れ、葉は落ち盡し只一つ殘りたる
實に輝ける日光は
しら〳〵に薄れ行く柿の上枝で、
口で啣へたハンカチを
引き裂く様に百舌鳥が鳴く——。

冬の雨

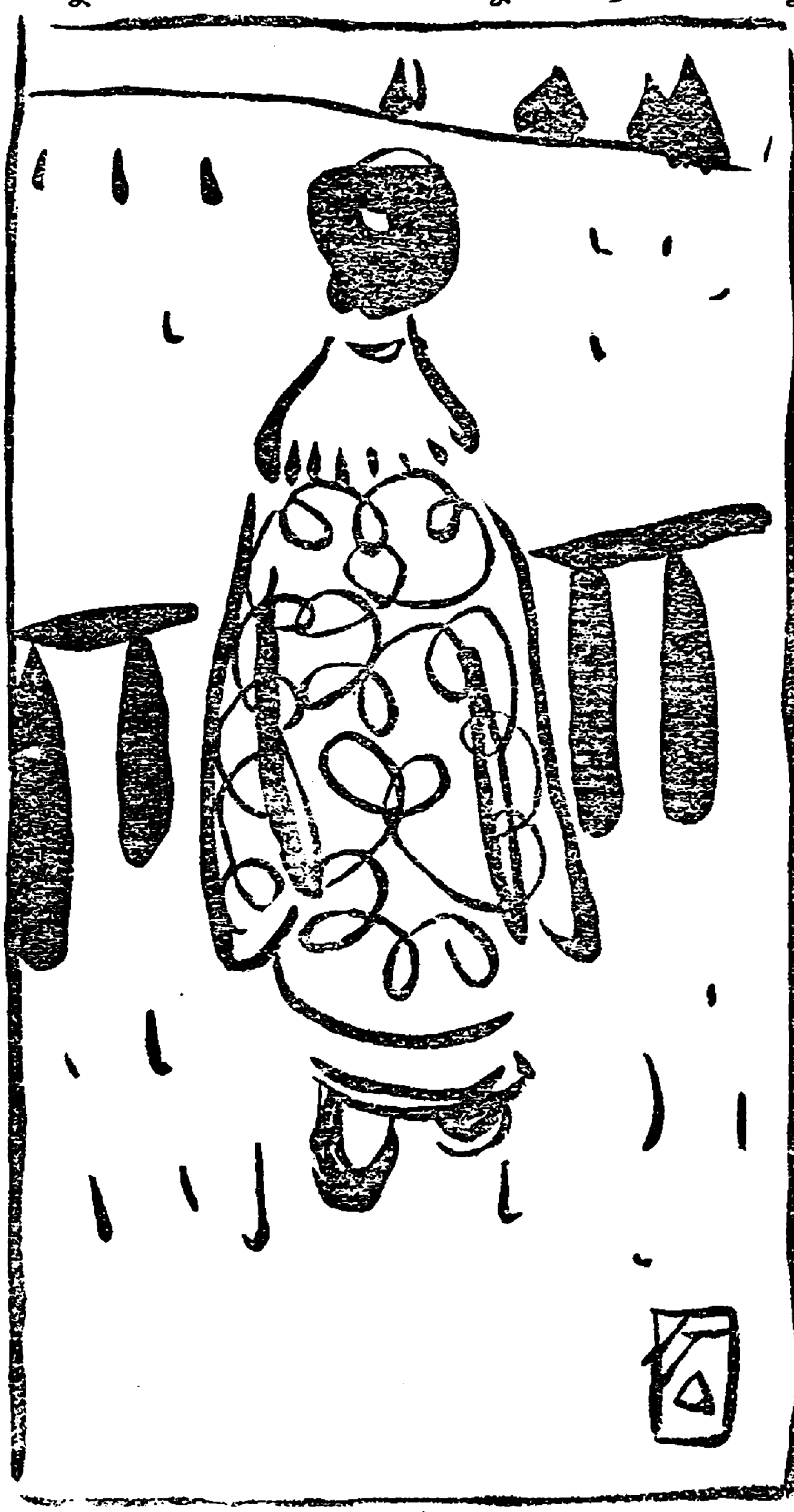
師走の雨が冷たく降る。
枯れ果てゝ暮れて行く芝生の上に、
うなだれた寒菊の憂の上に
色の褪せた空から、涙の様に
冬の冷たい雨が降る。
庭の枯木を音も無く濡らして行く雨
病衰へた心の上に悲しくも降りそゝぐ雨
日と夜のたよりなきいさかひに
唇の色も氷るやうに冷たく降る——
師走の雨よ——。
日ぐらしの鳴くやうな悲しい音色で
裏の棕梠が搖ると
其の陰から濕つぽい暗い冷たい匂が漂ふ。
今日を病むすべての子が
其の悲しい音色と、淋しい匂を抱いて、なつかしく
安らかな死に就くのか？………
靜かな、悲しい、暗い
病床の、一人の窓のくれがたに
冷たくも降つて居る冬の雨よ。

『冬の雨』の情調は全く作者自個の情調其のまゝであらうと思ふ、冬の雨の情調としては別に新しくもないが、作者從來の態度から蟬脫し自覺し、眞に作詩の獨立したる態度を自明するに到つたのは誠に嬉しく思ふ、斯くてこそ進步も來れ、苦しくとも此步調を以て、一作は一作と意義ある作を心がけて欲しい（評）

○朝のこゝろ(八)

枯尾花

向ふのはては、白い名もしらぬ、
山々にかこまれた、
越後平。
海の香も漂つて來る、
清いけがれない、
朝のこゝろ。
煙する、
夢のやうな、
雪けむり、
朝日のさすまで、私はこゝに立つてゐやう。
あたゝかさうな、ふうわりした、雪けむりは、



幼子をつゝむ、やはらかき衣の中に
ふくめたひ。
かすんでゐた、杉の木立がはつきり
みえた、
心のあかるみ、
うすく立のぼる、雪けむりの下から
あらはれた。

あゝ、
ひや〳〵しい、風が、すその方から
夢みつゝ立てゐる自分の心を、おどろかさうとする、
「いえ朝日の出るまで立つてますよ」
まばらに、
枝の赤うなつた、落葉松の間が、
うす紅色に
――オ、美くしい。
日がのぼるのだなあ、
こゝちよげな、なにものかの音、
でも……不思議に、

新潟縣　村田けん子

身うちが、ふるふ、
あゝ
霧けむり立のぼる如く、
静かな朝の心から、
又せわしい、
こころにうつりゆく、
あさのひとゝき。

大きい印象を大きいなりに、パツと表はした處に、何ものにも遮ぎられない大膽な若い心が躍つてある、背景のない詩は寂しい、此作のやうに矢張一つの印象を得て、主觀を歌つた方が引き立つのである(評)

佳作

○初冬の朝明け

岡山縣　森田きよ子

いぢけた十二月初旬の朝明けの野には、
なにとも知れずなつかしい柔みがある。
冬は油斷なく眼を瞠つて居るけれど
それでもまだ、わざと甘へて、
南の窓に倚りかゝり、
霧の中を美少年が、
優しく口笛を吹きつゝさまよひ、
朝、午後、滑かに瞳の流れる、
櫟野路の柏葉の裸木は
木枯のうたをふとなしく唄つて居る
さて日光を恐れて、汚れた露がいぢらしく滑に落ち、
心をして、何ともわかず悦ばしむ。
十二月初旬の朝明けの萬象の淡い柔かみよ。

博多人形

片眼は青く瞠り、片眼は盲ひて
道化た顔、小鬢は禿げ上り——
　大きな琵琶を抱へ
さて、歯の抜けた口を開けて大聲に琵琶歌をうたふ博多人形よ。
弱々しい衣の色彩……こんな色に
誰が塗つたんだらう。
　見る眼に悲しい
　博多人形よ。
しかし筋張つた喉は血色がよ過ぎ
襟は白い。
　博多人形の翁よ
　お前は何を歌つて居る?……。

『初冬の朝明』は無論好い作だ、『博多人形』は好い作と云ふより、此んなむつかしい作を纏に作りあげた腕前に服する(評)

○冷笑

港の女

あゝ氷を張りつめた大空
追憶も嘆きもない透明な大空
冷たい——冷たいふるひつく樣な美しさ
月が笑つて居る——聲を出さずに

萬象のやすらかな熟睡を嘲ける
その白い冷笑――
ものみなの凍つた息の中で笑つて居
る
こんな夜に山腹の平地にすゝりなき
をきく
生命のないもの――いたましい――
月に背いて蹲つて居る黒い影――
荒れたすさまじい夢のまゝに死んだ
樣な
陶器窯の――
陶器窯よ――冷たい陶器窯よ――
昔の溫かさは何に吸ひとられたのだ
冷たい――限りなく冷えきつ　て居
る――
燃え燃えた赤熱の苦惱の火に
美しい陶器の器物が數多作られたで
はないか
窯よ――默して居る
この平地に陶器が竝んで居た賑しさ
は
溫かであつた汝の心のよろこびは
若い想に溺れた陶器師の歌は
今に何等の投影をも止めない
大空の底の底の光がまよひ出て來た
樣な風が
山の頂から針の樣な木の梢に觸なが
ら轉んで來る――きらつと光つて消
えて行く
平地は又靜かだ、凍つた黒土の上に
氷の破片の樣な、陶器の片が凄く光
る
身をさす光と心に沁むすゝり泣の聲
それでも冷えた窯はたゞ默つて居る
ふるひも、をのゝきもしない
凍つた黒土の上に、氷の空を仰いで
何處まで冷えきつて居るのだ――
冷えた窯よ――窯よ――

陶器窯は好い題であつた、題ばかり好くつても、内容が空虛ならつまらないが、此作には新しい生命がある、作者の努力は決して空ではない、だけれど、此作は强いものを掴つてゐない、だらくと平板なる描寫に傾き過ぎたのを惜む（評）

○紫明

京都市外　三宅壽賀子

黄昏

黄昏のうすら明りは野にひろごり
茶の木の岡は黒く、墓場の土のごと
く
うち沈みゆく十月の夕
吹くとしもなき風に枯草の啜り泣け
ば
ものおちて蟲は顫へ啼き
踏切番の暮れ殘つた顔に
憂鬱の陰を見る――
夕靄の覆布のかなたに
灯のまたゝき
よりどころなき淋しさの忍び寄り
色失ひしコスモスの花は
今輕き憂愁に眠り行く――

枯草の香

枯草の黄なる岡に

晴れたる秋の日光はやはらかにうちふるへ
傷つきし野菊の花はかすかに吐息つく
なつかしき枯草の香よ——
わが追憶は甦れり——
やはらかになつかしく、はたうらがなしき追憶よ——枯草の香よ——
おそ秋の野の岡に
午後の光はふりそゝぐ

冬の一室

ストーブの火ほのめく一室
生あたゝかく澱める空氣はキスの呼吸の如
なまめかしく頬に觸れ——
わが若き血は皮膚に燃ゆ
戶の外に吹き荒む風も知らず
卓の薔薇はうれしげに——
過ぎ去りし戀の甘さを夢見るごと

『枯草の香』尤も好く、『冬の一室』これに次ぐ『黃昏』はまとまらぬ、此君も詩に進み得る才分は確に是認することが出來る、力を籠めて獨創的の藝術を自ら味ひ、且試みたまへ（評）

○わが詩

向島　鈴木春子

流星

すーつ！……
星だ!!!
つと鼠色雲が破れて、すーつと私の心は入つた。
沈默……
小暗い下界、大きい眼、小さい眼、
夢だ！ 醒めた！
と騷いでるけれど……
生命の光は、西の空に歔欷いて、
だん〳〵と、あゝ、だん〳〵と……
がう〳〵と、木枯がすさぶ……

私

あの人は、赤い。
あの人は、青い。
あの人は、白い。
あの人は、黑い。
私は、みんな、知つてゐる。
お世辭と、謙遜と、美しい色彩の着物と、
をかしいなア。
眼を上げよ！ 後を見よ！
空を見よ!!!

あそび

何故？ 何故？
さう……
苦しいから？ 仕方がないから？
「當然でせう！」
ナニ、
まだ、貴女は、ねんねだからつて？
はゞかりさま!!
二十ですよ！ 二十ですよ！
去年のやうに、突落されかゝつた、
斷崖!!

青淀む淵、なつかしい、無意識の死
の胸、
母は泣きました。
「狂人」と、世は嘲笑ました。
けれど〳〵……
母の爲め、與へられし小
さき生命の爲め、
生きませうよ!!!
空を見て、野をさ迷ひて
ア!!
何處からか、
「私を呼ぶ樣な聲がしま
す?」

三篇の中では『あそび』を取る『流星』は充實した力を缺き『私』は餘り才が利きすぎた、『あそび』には女性らしい氣分がある、或る者も底に持つてある、かるはづみのやうに見えて、其實かるはづみには出來ない作である、兎に角作者の詩の態度の一變したのは欣ばしい(評)

○小さきおどろき

ふもとの人

湖のしろきも見えず——
藁屋根のひくきも見えず——
野はいづこ——
萬象は闇に包まれて
靜かに眠る。

瓦斯燈の光の中を、
チラ——チラ——チラ——
地に落つる影あり——朧夜を散る
花にはあらず——白雲の、

大空をおほへる雲の、
いく重かさなり、白雲の、
おもたく暮れて夜に入りぬ。

其の中に——
軒の瓦斯燈の小さき光
物怖ぢし樣にかすかに顫ふ。

あかき入日を身に浴びて、よ
ろこべる小さき鳥よ——今
枯草の中に落果を拾ひ、よ
年生れし雀の子よ——
冬の日の早く暮るゝにおど
ろきて、
瓦斯燈の光を的に軒にかへ
れば、父母は汝を待てり。
一片の瓦を屋根に、三つの
羽根すりよせて、暖かき熟
睡せる、小鳥の夢は枯草の
下なるあかき果にゆかん。



濱の女　笹田かずを

ちぎれて落つる白きもの、
チラ〱と音もなく。
あゝ萬象眠る闇の中に――
音もなく天地の神がするなる
大いなる事業――
あかき果も小鳥の夢も、
雪にうもれたるを――
明けぬる朝をよろこびて、
軒を出でぬる小さき襤褸。

實に好い處へ氣が着いた、好い感じのする材料ではあるが、此詩の言葉の上に現れた處だけでは、充分に其好い感じが表はされてゐない、吾等は聯想して好い感じをよび起すけれど此作者はそれを十分に表はす力が足りなかつた、誠に惜しいことだ(評)

○夜の哀しみ

岡山 日下榮子

風はしづかなこゝろをみだして
痛ましい光の黒くたゞれた闇の底を
やゝ靑い影を布きながらあゆむ
ひゞき…………
ひゞきは禿げた裸木に
しみじみと涙もろい音を立てゝ
空しく消える……………。
逃げおくれた金の線條のひゞきは、

花もない草むらに
白々とすゝり泣き
蛇紋の闇のなかに蒼うもえる
靑白いかなしみの靜かなながれ――
夜
薄氣味の惡るい沈默の夜
ふと起つたピアノの冷めたい顫音は
罅の多いすさむだこゝろに
鋭くしむで、あまりに哀しい…………。

詩才を採る(評)

○わが心

津山 富山賴野

月はいま、
夢見心地に歩みゆき
朧ろに薄るゝ我心倦む。

夜は重み
かくて喪心のものみな渇び
あさましき笑ひのみ甘えつゝあり。
あゝわが運命!!
光にそむき霜かれし
榮えなき十二月の野の如く。…………
あたゝかき夢の
輝やきて投ぐる露の眩惑
いづくまで、あゝ、いづくまで逃がれゆかむ。

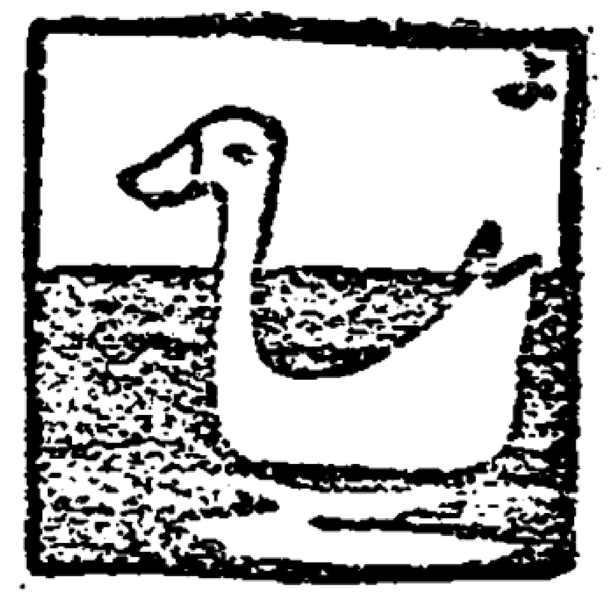
同上(評)

○昨日の樣に

高尾

あゝ鳥が鳴く昨日の樣に
胸病める人の腐つて行く血潮のどよみか
或ひは又たゞれし肉の香に醉ふたサタンのうめきか
喜びを呪ふ聲は暗の方へ消えて行つた。
おゝ暮れて行く昨日の樣に
灰色雲の重い惱みと
紺青の闇への空に
華やかな色彩と
脆い音律とを
吸ひつくした惡魔は會心の笑をたゝへて西の方より
狂亂の血潮の息を吐き掛けて居る
なえすがれた草や木は驚きの目を見張つて
薄暗いそして冷たい大氣の中にほのかにもをののいて居る。
おゝ灯がゆれる昨日の樣に
物怪は息をひそめて
靜寂に光る産神の一つ燈籠
蛇の舌の樣な執着の色
もがいても〱定めの枷をはづし得ぬ
私を嘲笑ふ樣に
ちろ〱とちろ〱と灯はゆれて居る 執着の紅い笑ひ――
おゝ昨日の樣に私も涙ぐめて來た。

葉隠れ花の君に似てゐる、何となく執着の深い心持がある、斯う云ふ心の女と云ふことが分る、下手に技巧に囚はれたものより新しい感興はある(評)



和歌

與謝野晶子選

○（天賞）　美濃　佐藤靜子

人形の手足のあらぬあさましさ其の忌はしきものに似たるか

○（地賞）　信州　若杉金盞花

名を知らぬ大彗星か名を知らぬ河原の石かわきまへぬかも

佳作

○　水戸　玉川すま子

冬の日もうつらうつらと溫室の黃皮の椅子に人おもふわれ

○　牛込　平塚白百合

あけぼのの靑玉色の野の花をはるかに高くひばりなくかな

○　山口縣　熊田科代

手觸るれば崩れむとする古壁に疲れに堪へで倚りゆくこゝろ

○　愛知　佐分華影

字を書きて銀杏葉ながす落日の川の面のうつくしきまゝ

○　備前　佐久間綠子

幼き日めしひてあらばかばかりにかなしき事は知らざらましを

○　京都　町田てる子

昨夜裂きし歌反古をわれつぎ合せ讀むてふこともそぞろ心や

○　渡島　美津子

わがむねに扉立てたる心地すれ最もうかる人見るならね

○　日高　鈴木すみ子

丘の上の春のゆふべは赤の龜しづかにふみて人を思ひし

○　兵庫　丘の子

椿ちるとほきみなみの島こひて二十四時を泣くは誰が子ぞ

○　金盡花

山火事は杉も檜も雜木もみな紅に一線をひく

○　大阪　あき
妹はいと美しく首かたげ屋根にとまれる白き羽子見る
○　近江　須川末野
梅ちりしあとの庭には鳥も來ずさびしきわれの影苔を這ふ
○　水仙
ふるさとや一二の伯母のみつむりの白髪にしもむねを刺されし
○　千葉縣　日南なよ子
わが脈のうつ音さへも知るゝまで靜かなる夜を春と思はず
○　淡路　加藤菊子
よろこびに遠ざけられて悲しみを甘き木の實と思へる少女
○　京都市　露つき子
さびしかる君ののたまふ言の葉の一つを思ふ寒菊の花
○　千葉縣　紅谷はつ子
奥山の岩の戸出でて鶯の啼く朝ならし雲の黄ばめる
○　東京　わくらば
舞殿に侍る翁の手拍子も聞えずなりて淡雪ぞふる
○　越後　文枝
冬の月雪の中なる北國の鐘の音こそ死に似たりけれ
○　大阪　田中きよ子
初春の祝の舞にうるはしき袂をふりし少女忘れず
○　和泉　金田文子
鶯の初音を聞きて夢さむる紅梅の家十五の少女
○　神奈川　木村浜花子
姉上の手ずさびなりと送られし羽子板重ししら梅の花
○　大和　辰市芳香
人のよきさが見る心持たぬなる君は少女にいひ給ふかな
○　甲斐　忍子
ゆくりなく君と別れし其夜より時雨ににほふ木犀の花
○　岡山市　洋月子
淡雪に白む世界をうち見れば白梅の咲く丘もあるかな
○　岡山市　石井明子
うら〳〵と春の影さす梅ヶ枝に雪し降りこよ金に似るべき
○　横濱　小豆澤いし子
淺草の夜の酒場にかきならす三味線の音おもふ瀞川
○　武藏　なでしこ
冬枯の山につゞける竹藪に紅の花椿咲くかな
○　會津　桑原仙子
ゆきずりに君の姿を見まつれどもの云はぬこと三とせなるかな
○　大阪　田野しか子
わかき母髪の毛薄くぬけゆくと書き給ひし日かなし日記の日
○　淡路　留子
我廿年肩揚とるが悲しくて衣抱きしめてしみじみと泣く
○　長野縣　百瀬わか子
天地に一人生くべく我れなりぬ君が大船いまいかり拔く
○　千葉　白鳥ゑい子
春の晝みだれ心に花園の花など葉などむしるはかなさ
○　千葉　松崎きよ
もの思ひに折りふし沈む悲しかる性とはなりぬ戀もあらずして
○　常陸　輝子
なつかしき校舍の窓の古がらす紅の雲今うつるかな
○　長崎　永井圭子
悲しがる汽車の窓より古里をみかへるときの春の夜の月
○　近江　代富子
姉上と呼ぶ愛らしき妹の手の上におくきれの小兎
○　讃岐　雪子
すみれつむ昔の夢にふとさめて時計の音を悲しがる人
○　東京市　黒田紫蘭
今死ぬる少女にかくる夜具のひとよるのとばりは野に下りもきぬ
○　越後　こむらさき女
さきの世にいのちわけけん半身をたづね侘ぶなるむくろと思へ
○　播磨　みどり
老といふ恐ろしきもの我胸の紅き血しほもうばひて去りぬ

○　神戸市　土佐綾子

君により秋の長夜のさびしさを味ひ得たり唯ひと夜見で

○　神戸市　増田すみ子

雪ちりぬ鬢の男の酒に酔ひ追羽子すなる都大路に

○　茨城　高崎すみ子

雪の消え木の芽青める春の野に君のきたりて歌ふ日となる

○　碓井北利子

山悲し海はた悲し君遂に七年までも消息をせぬ

○　信濃　宮島千代子

今宵わが空虚の心いにしへの人ゆゑに皆花と咲きける

○　長岡　秋月すゞ

十五越ゆ胸は春野にたはむれてくるゝもしちであそぶ日を待つ

○　東京　夕の花

雪ちりぬ星の臺に住む子らのかざしの花のはらはらとちる

○　越後　岩本芳子

御佛のますとし思ふたふとさに念珠つまぐりをろがむ夕

○　土佐　石川よしの

そよ風のふける花野にあかつきの日光を浴て蝶の舞ふかな

○　京都市　翠香

梅が枝に歌をむすべる少女子の髪の長きに春の風ふく

○　京都　松木澤子

君來ませおぼろにかすむしら梅の林の夜あけはた夕月に

○　伊豆　土屋いそ子

うぐひすや化粧へる君のくろ髪に梅のたぐひの香油ぬらるゝ

○　大阪　竹子

そのかみは石と思へる少女子に君は文をばたまひつるかな

○　石川　哲女

はなやかに語りてつきぬ若人の心を今はかなしみにける

○　岡山縣　入江曉花

新しき傘さして行く君を見ぬ我こゝろにも春雨のふる

○　伯耆　新田文子

歌思ふ少女が胸に戀なくば歌は雪にも似て寒からむ

○　美作　白百合

霰など瓦の軒にたばしりてそこはかとなくものの悲しき

○　横須賀　三輪とし子

細殿を渡る裳も匂やかに春の半となりにけるかな

○　岩代　もくせい

戀しらぬ若き男は秋の日を壁にもたれて落葉見る哉

○　新潟市　吉田ふみ子

芝居見て些さかごとによく笑ひよく泣きし日のふと胸に浮く

○　大阪　多野なみ子

山茶花に夕日薄るゝ垣ごしに餘所の泣く子をなぐさむるかな

○　東京　島白灯

かの年にかの君思ひこの年にこの君戀ひてありはあれども

○　石川縣　宮本登美子

君に似し人を見つれど吾胸はおくつきのごとしづやかにして

○　土佐　石山ひとし

野の花を狂ひし少女扇ふり戀ひし／＼とうつ夕かな

○　伊豫　渡邊文子

今朝ゆひし髪をうちゆく春風は少女を誘ふ情にも似る

○　朝鮮　酒匂美子

友はみな花に來てまふ蝶を追へど我は悲しきめしひの少女

○　港の女

うすき黄にくづれて落ちし髪の薔薇その上にちる春の日のかげ

○　岩代　百合子

春雨の音絶えぐ／＼にきゝぬ我君とかたらふあはひ／＼に

○　山城　木の花

只今は才なきことを悲しまずもゝの花さく春を悦ぶ

○　廣島　後藤壽美枝

あゝ今年あけて七年父まさぬ家を守りぬ悲しき母と

○　常陸　古島花子

うれしさもをかしさ事もこし方はすべて榮なしみなし子なれば

和歌

○　愛知　榊原けい子
彼の人は幼き時のまたもなき友なりき今はうき君
○　金澤　むらさき
おほくある物のうちより一つのみえる時のひととまどひぬ戀に
○　京都　松原きぬ子
ふと浮ぶ昔の人はうす紅の紙のやうにもなつかしきかな
○　土佐　はざくら
とその香のみちたる家のうた祭は天上にきくもののごとかり
○　丹後　伊志子
うたげする月の宮居のうてなより盃落ちぬ水仙の花
○　東京　貞奴
五十日ほどわが病める室に風入りぬあな寒牡丹ちるがわりなき
○　大阪　田野郡子
縫ひかけし春衣の膝にをさな子の這ひ寄るを見て笑ひ給ふよ
○　埼玉　伊草邑子
遊びして歸り來りし猫のせの雪はらひやるきさらぎの春
○　大阪　多野なみ子
君何を思ひてあるや知らねどもわれにかくれて涙ぬぐへる
○　埼玉　中澤たか子
うらがれの君とある時いひしらぬ淋しみのわくわれなりしかな
○　越後　田巻てい子
祖母君の甥なる人はうぐひすを商ふまでにおちぶれしかな
○　静岡縣　蒔賀
黒髪の一つのこらずぬけおつる夢見て泣きしわびしさに似る
○　福島　松本やす子
水清く昔〳〵の桃太郎流れ來るべき春の野の川
○　京都　松木絹子
乳の香の殘れる子よと人は云ふ一人娘のおろかしきわれ
○　石川縣　鍵島米子
大きなる火桶かこみて父母と話にふかす夜はまたきぬ
○　神奈川　新倉なほ子
巣を出でてまだ人馴れぬ鶯の鳴く聲ひくし雪はふりつゝ
○　信濃　岩波むら子
七つ子の中に交りて遣羽子をするときくともうとみ給ふな
○　大阪　吉田うすひ
父あれど母はもあれど如何にせむ語る人なきうれひおぼゆる
○　山口縣　細谷白菊女
川堤なびくやさしき青柳に肩をもたせて歌をこそおもへ
○　綾菊子
そののちに花咲く春は三つ來つれさても戀らぬ少女ごころよ
○　飛驒　むら女
白梅の林の如く雪ふれば雜木林もうつくしくして
○　近江　露草子
愛らしき少女が白き水仙をもちつゝ行くもふさふ雪の日
○　常陸　田村かね子
友禪の被布のかざりのひのふさをまたなくほこる十五の少女
○　新潟　吉田かほる子
よき香する紅の薔薇にそのかみの夢見まほしく又も瞳とづる
○　山梨縣　鷹谷やす
かゝる日のふと戀しくて壁にある三味とりいでぬかはたれ時を
○　山梨縣　鷹谷とみ
梅が香をもたらす雨のなつかしく山里人に文をかく時
○　小田原　中村貞子
寺の子は子鳩と共に遊びけり梅の花咲く如月の庭
○　越後　枯尾はな
戀をする思ひさめゆくこゝろにもひそ[illegible]かるべき霜どけなるや
○　牛込　ふみを
青白き瓦斯の光りにてらされし夜ふけの町にうす雪のふる
○　徳島縣　細田きん子
春の日の鏡の様になぎわたる海の面てにもののけの立つ
○　徳島縣　紫花
春雨に紅き栞す桃の花玉のしづくの君がくろ髮

○ ほゝ笑みて君がかたるを聞くがこと春雨の日はうれしかりけり　本郷原 孛子

○ 霄の色いと淋しけれ霜の日の梢の木のいとさびしけれ　牛込 つげ枝子

○ わかみづをくむ音うれし霜しろきかのへの梅に月のてるもと　伯耆 さくら子

○ あはれにもいと楽しげに微笑みぬ悲しき思ひしのぶならねど　札幌 佐々原清子



お田かけ　本郷　西まき子

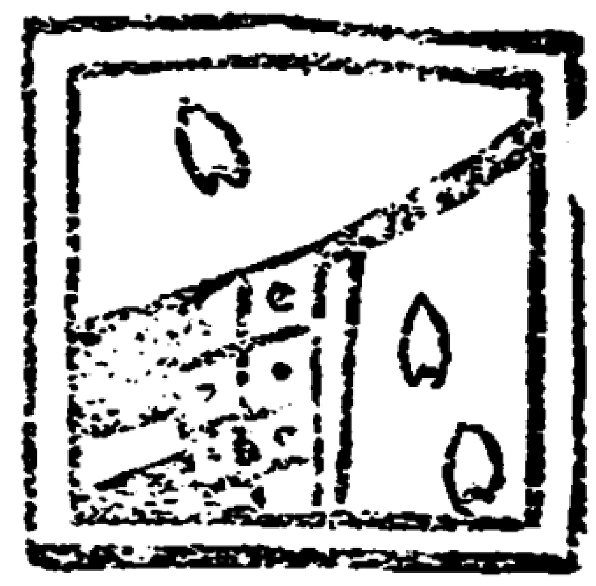
○ かなしくものたまふ事をいなまずけ我が寂さの消ゆる心地す　神戸市 井口久我子

○ 織ふ君の御棺おくる野邊にして白き草花目にもつくかな　伯耆 盤指幸子

○ くだかけのよろしき聲に赤縞引年の初めの東雲の空　出雲 清子

○ ほゝ笑みて明き灯かげに妹のかるた遊びを見てはあれどゝ　伏見阪 芳子

○　茨城　田村波津子
樹より樹にとびかふ小鳥たのしげに見ゆと泣きけり二十日病む人
○　神田　石田美子
少女子は涙して見ぬ十二月終の夜のくらき大空
○　上毛　小澤碩子
おそ咲きの梅の立木へ紅絹はりし板立てしまゝ姉の居まさず
○　諏訪　紫子
たらちねに抱かれて逝にし妹のその面ざしに似たる雛かな
○　羽前　野口菊子
鶯のなく音にも似てうれしけれ晝もるゝみ歌み言葉
○　秋田　佐々木園子
春のくれ木蔭の石に身をよせてみ言葉などを思ひて泣きぬ
○　秋田　佐々木貞子
下り坂走る車にひとしかるこの戀心たれか止めむ
○　東京　草雲雲
わりなくもそむきし後の淋しさは死にもまさりて苦しきものぞ
○　麻布　横谷白雨
紅葉ちる扉にきてはひとり泣く夢の女のあはれなるかな
○　明石　操子
のちの日も美しからむ小扇のつま影に見しひろき天地
○　和泉　金田代志子
柔かに若葉そよげば我が胸の憂はいつかにげ去りてあり
○　石川　橋本花子
さても今此なげきをば君知らずさてしらずとてあるべきものか
○　沼津　笑村
月出てふじほの白く浮き出でぬ眺めにあかぬ大相摸かな
○　沼津　鳴田若綠
事なげに笑みなどつくり別れにし人を思ひぬきさらぎの月
○　京都　竹村槇子
雉子鳴きぬさが野の末のあけがたの霞のうちに灯の見えつゝも
○　下關　浦見露子
春の雪うつくしき顏並びけり柳のなかのちひさき窓に
○　下關　柚不唯子
三人程皷もつ子のためらひぬ柳のもとに馬の荒るれば
○　京都　京子
冬枯の木立の中の梅こそは白馬のいこふてこちこそすれ
○　宮城　馥子
悅びのひそむ心地に眺めけり月のある夜のきなるかすみを
○　京都　要司村福子
我がむねに名しらぬ花ぞ咲きにける君は嵐となりてちらすか
○　紀伊　關戸里枝
三日月は熊野の山にかゝりけりきさらぎの風肌さむくして
○　岐阜　中島幸枝
泣き泣きて未だ泣きあかぬ我悲しよろこびつきぬ君はめでたし
○　淡路　千鳥
深山路や淋しき旅の少女子は紅葉散らして慰めし哉
○　千葉　伊藤美津
雲に乗り空翔るなる夢を見ぬ何望みある少女ならねど
○　千葉　美溪子
山深く獸の叫ぶ聲としも師走の夜の風をきく時
○　長野　白い花
文えつれ君に返さん力なし少女は心千々に亂れて
○　信濃　白蓮女
雜木に小松も混る山蔭の氷の上を君走りきぬ
○　諏訪　木野さゆり子
やうやくに遠ざかりゆく我心よろこぶまでになりにけるかな
○　淡赤
都邊の君を悼みてつくるなく涙流るゝ初冬にして
○　石川　橋本花子
夜は寂びし靜かに雪の降る音す北國人はかなしきものか
○　備前　佐久間りん子
後の世は蝶ともならむならずとも物思ふ子とまたは生れむ



俳句

内藤鳴雪選

○（天）

陸じき春の灯の二つかな　深川　佐久間貞子

○（地）

冬籠り今日も本意なき日記して　上總　時雨女史

○（人）

頬冠り取りて拜むや初日の出　美作　白百合

秀逸

若葉よし朝杜鵑名乘して　山城　木の花

水落ちて鴉淋しと畦に鳴く　千葉　伊藤美溪子

春の夜や醉ひて戻りし船の中　伊豆　土屋いそ子

うす絹に包んで見ばや春の月　信濃　岩波むら子

子の無きを愛て春の暮れにけり　京都市　町田てる子

春の水太平の世を流れけり　近江　須川まさ

水際を二寸はなれて柳かな　岡山縣　入江曉花

茶の花に紙衣を綴る日となりぬ　越後　藤原竹子

山姥のめぐる山々小春かな　麻布　橫屋更正

春の雨音せで暮れぬ古戰場　高尾

初雪や今日も少女の藥とり　東京　芳子

病む姉のおはして窓の梅が散る　北海道　田山淸子

戸の穴や煙出て行く冬の雨　三河　榊原けい子

雛の座敷にあがる吹雪かな　大阪　田野靜子

紅梅に布干す妹が日南かな　名古屋　きぬ

松若く花明かに城古し　日高國　鈴木美子

春風や法の御文のなつかしき　越後　こむらさき

家捨て立出る旅の梅寒き　麻布　橫谷白雨

五條橋牛も車も霞哉　名古屋　瀧本逸子

寒月や破れ築土の梅の花　長岡市　秋月すゞ

物の香の霞もれ來て春の山　東京　夕の花

御陵やまだらに殘る春の雪　越後　岩本芳子

折々は狐鳴する雪夜かな　淺草　夕月子

寫眞見て聟撰る窓や春の月　土佐　石川よし子

村ぶれの廻る今宵のさむさかな　大阪　竹子

たから舟枕に裂きし悔もあり　福岡　筑紫

乘初や嘶く駒は幕の内　近江　須川末野

人妻の大根きざむ謹ましさ　備前　板橋文江

欄に出て漁灯の數かぞへけり　岡山市　大倉榮子

月の夜の月夜烏や子もあらん　神戸市　足立春子

たまさかに君と逢ふ夜や梅の月　沼津　鈴木文子

白梅へ木陰者が庵と申しけり　牛込　ふみを

散にちる花のをかしや月明り　德島　鶴田きん子

曉の星落ちにけり餅の音　筑後　中島野菊

白雪や燈火借りし愚を笑ふ　大阪　多野なみ子

縮緬の耳引く人や春の雨　渡邊あき子

春寒し相馬内裡の除目して　信濃　若杉金盡花

雪の日の小犬をなぶる烏かな　千葉　藤平靜子

かるたする邪魔して梅の夜風哉　群馬縣　松本やす子
雨に白う野薔薇の花の露哉　武藏　なでしこ
二十日月御庭の梅はちりにけり　長崎市　永井圭子
洋館の窓掛美なり今朝の雪　大阪　田野しか子
母の墓へ詣づる子等や雪の道　長野縣　百瀬あか子
湯に醉ひて臥しゝ一間や冬の月　常陸　喜惠
梅咲いて夕の街をさまよひぬ　茨城　梅子
馬宿に隣れる家や桃の花　甲斐　鷹谷やす子
初空や白梅にほふ寺の垣　小田原　中村貞子
月さえて墨繪に似たり沖の船　北海道　小町いく子
花もあり金もある春九十日　靜岡縣　遲美千秋
青柳や女こゝろのよわくして　藤田すみ子
駿馬驅て二月の水を渡りけり　横須賀　三輪とし子
遠ちこちの白帆に春の海晴れぬ　新潟縣　岩井常子
春の日の庭に子供の神樂哉　麻布　小倉うた子
初東風や海の千里の彼方より　新潟市　吉田ふみ子
花足袋や脱で已の枕元　大阪　多野なみ子
冬日向水仙を切る女かな　港の女
丸い月は寒いつきなり梅の花　石川縣　橋本撫子
灰撒きし花咲爺よ春の雪　撫子
まぼろしに君見たりけり梅咲く夜　會津　百合女
羅十里霧の霽と白きを競ふ　兵庫　丘の子
鶏なきてかげろふすなり梅の宿　東京市　黒田紫露
吉野人鶯の雛呉れにけり　京都府　竹村槇子
吹落す鳥の古巣や冬の風　下關市　清見露子
古池に纏浸しけり五戸の村　淡路　柏木好文
梅いけて衣紋つくろふ博士哉　信濃　ひなげし
三味の音鼓の音や花あれば　備前　板崎好枝
鼻高き人のくしやみや秋の暮　神戸市　井口久我子
梅咲くや井戸を覗ふ旅の人　札幌　佐々原清子
若菜籠提げて歌うて春の風　伏見　阪芳子

散り紅葉息吹きかけて飛ばしけり　神田　石田美子
衣縫う手にも更けゆく夜寒哉　滋賀縣　草野しげ
鶯の鳴く音あかるき化粧窓　長野縣　なでしこ
おしろいも紅も解きけり春の水　諏訪　紫子
紅さすやほんのりと出る初日の出　京都市　松木絹子
簑脱げば女なりけり雪の人　新潟縣　加藤きみ子
猿曳の猿にぬかする白髮哉　美濃　佐藤靜子
十九の春惜む夕べの鐘かな　本郷區　原孝子
春の川美人の船に逢着す　新島秋子
春の雨別るゝ人を濡しけり　下關　吉野君子
蝶多く生るゝ里や春の水　下關　後藤新子
陽炎や石切る人の鑿の音　山梨縣　鷹谷とみ
梅の夜や箏を奏づる人憎し　千葉縣　藤平靜子
美しき人の跣足や土こはる　備前　佐久間りん子
勾欄に君が十指や春の風　麻布　保坂芳子
二日月を北見の山の雪に見る　麻布　田代朝江
萩の寺爺の古きもなつかしき　越後　齋川幸子
奥津城にぬかづく人や秋の風　伊豆　土谷鈴子
秋の水白妙の衣をひたしけり　島根　百合子
名月に棹す已が小舟かな　港の女
戀すてふ女見て來ん秋の暮　越後　吉田紫歌
瓜一つ光る畠や秋の月　三島　村瀬紫子
朝寒や落ちし櫛ふむ長廊下　豐後　菅原芳子
蜩や靜に暮るゝ志賀の浦　横濱市　朱鷺
君近きて三度の秋を木の色に　三河島　桂子
網を干す漁村豐かに秋日和　新潟縣　吉田うた子
すつと來て袖を拔けたる螢かな　小樽　矢木りつ
簾の上河風涼し夏の月　越後　吉田かほる
六尺の草に風ある蜻蛉かな　越後　藤原泣黒子
礫すれど居かぬ戀の鷗かな　三島　村瀬紫子
はら〱と栗の音して朝嵐　上野　茂木よしえ子

散文（其二）

編輯局選

○雨の日

東京　清水たみ子

耳を劈く樣な鈴の音が狭い待合に響き渡ると、ベンチに腰かけた人が一時に立ちあがつて足駄の音がけたゝましく起つたが、暫くして人のどよめきが改札口から棧橋の方に吐き出された後は、寂入つた樣に静かになつた。入口の上の天井窓から來る光線が行きわたらないで、隣の方はうす暗く、壁にかゝつた時間表や繪はがきを入れた額縁などがぼんやりと浮き出て居る。

私は房州行の汽船の時間をまちがへて此の暗い靈岸島の待合に只一人取殘された。朝から絶間なく降つて居た頻吹雨は一層〻強くなつたので歸る事も出來ず茫然として夜の十時に出る最終の夜航船を待たねばならぬ事となつたのである。今し方一段低くなつた棧橋のあたりに雨を冒る喧聲が聞えて、四五人の仲仕が揚荷を運び合ふて居たがそれが皆倉庫の陰に消去つて了ふと、あたりは又元の寂寞に歸つた。入口の横手にある物賣場の親爺は大きな欠伸を續け樣に出して難事さうに眼鏡越しに新聞をとりあげた。後の硝子窓からパッと明るい光線が差込んで、逆光線の顔は暗く、頭の輪廓と其前にある菓子箱の蓋とが灰色の反射で光つて居る。

空あきになつたベンチの間の火鉢にはもう火の氣が絶えて了つて海の方から吹き込んで來る雨交りの師走の風があたりをかすめると寒さが一入身に滲み入る樣に感じられる。詩集を開いてどこを見るともなく茫然と眺めて居ると、想は何時か未だ見ぬ房州の空に馳せて、男波女波の岩に碎くる布良の海岸や、果しも無く續いた砂濱の道、太平洋の荒い風に吹かれて屹立する白濱の燈臺、さては水平線上に横はる大島の姿も鮮かに腦裡に浮んで來る。『わたしや大島御神火育ちなあ――胸に煙が絶えはせぬよ――』のんびりした櫓の音につれて其の寂しい歌の調子のかすかに聞える心地がして、私の心は遠い遠い海の彼方に引き込まれる樣に思ふと、ふと右の手の甲に熱い熱い涙の雫が落ちた。

雨は又一頻り強くなつて筧を傳ふ水が弱い子の胸を抉ぐる樣な響を立てゝ流れて行く。

私はソッと涙を拭ふて髮のほつれをかきあげつゝ、ぢつと海の面を見まもつた。改札口の低い格子と棧橋の方に垂れ下つた亞鉛屋根との間から見える滲みがゝつた灰色の空は眩しい程明るく光つて居る。無數に並んだ船はコバルト色に霞んだ向岸の家を背景にして、重なりあつたエローオクルの屋根のみが明るく、其の下から濁つた灰色の煙が斜になびいて、立ち並んだ帆柱は見えたり隱れたりして居る。岸に沿ふた船と家は次第にぼかされて、沖の方には帆柱のみが夢の樣にかすんだ間から限りなく浮出て來る。船は次第に大きくなつて船頭の急がし相な足どりが見え、黄色い水棹は空をかきまはして居る。河浪を白く碎いて一艘の石炭船が不意に棧橋の下に現はれた、舳には手拭かぶつた女の顔が雨にぬれて柱をつかまへて立つて居る。七輪の眞赤な焔が待合の暗い壁の陰に隱れてしまつてからは、川の面を打つ雨の音に交つて薄暗い格子によつた子守が謠ふ平和な歌のみが寂しくこの室の空氣を漂はして、黄昏の色は川の面や子守のさした紫色の傘にも音づれて來る。この悠々たる自然の景色に對しても尙ほ心を激する樣になつた私は悲しい。

雨の日が齎らす蕭散な感情は、かうして何時も私に樂しい過去を追想させ、影の薄れて行く寂しい未來を想はせて、冷たい涙を催さしめる。

雨の日の薄暗い空氣が可なりによく出て居る。自然を叙づる作家の少い本誌に於て、多少とも此方面に敏感なる頭腦を有する人を一人ならず發見したのは嬉しい。恁う云ふ日の空氣は得てして一種のウヰークな感傷を喚びたがるものだが淺薄な未熟いゴテゴテと書いてあるのは嫌だから削つた（白羊）

○甘き叫び

茨城縣　小堀とし子

女學校の一年間の生涯は私にとつては何の印象も殘さない貧弱な經驗に少し許り修養を積んだ——只ほんの夫れだけ、學校を半途で引いてからもう一年、古河の空氣は何時も溫い、今では家庭本位の人となつて骨肉の愛につつまれながら十七歳の春の日を面白く送つて居る。私の目から見た世の中の凡てのものは皆鮮かに彩られたものとして映ずるばかりだ十七歳!!何と云ふなつかしい叫びだらう、私は出來るだけ華やかに清い印象を刻んで、此の歳月を送りたい。お琴も習はう、裁縫も勵まう、スケッチもしよう、好きな文藝にも親しまう。

電燈の光に照らされたやうな路ばかり歩いて來た私には、前途はやつぱり光明を以て輝いて居る様に思はれる。光明——夫れは强烈であるか淡い光であるか或は暗黒であるか一切私には解らない、嘗て私の友達が云つた、心がくさくさして仕方がないから可笑い時があつたら思ひきつて笑ひますので、私にはそれが何を意味して居るのか充分受け取れない。

朝夕は下女の役目もするし、急がしい時は藥局のお手傳もする、しかも其の働いて居る中に云ひ知らぬ慰藉がともなつて樂なのは事實だ、針持つ手首をじつと見つめて、此の血管の中には清淨な血が漲つて居るのだと思つた、心臓の鼓動は絶えず若き日の叫びを發して居る。

今朝も診察室の椅子によつていろ〳〵と思ひを走らせた、ガラス越しに南の空の白雲を眺めながら、あの雲の下あたりにはなつかしいみつちやんが居るのだと思つた、私は何故か姉さんと呼びたくなく、何時までも美知ちやんと呼びたい。水清き刀根の畔、栗橋町の美知ちやんのマダム振りを目に浮べた。

私がお嫁に行くときにはお下げに結つて眞赤なリボンをかけて行きたい、廿五位になつたらマガレットに結つて三十代は島田、そして五十位になつて額にしわがよつたら其のしわを何とかして足の裏に移してやりたい、私はこんな事を思つて居る少女なのだ。

もう一度叫んで見たい、若き日よ!!十七歳よ!!それは衷情から湧き出た血潮の躍る叫びに外ならぬのだ。

才の叫びだ、衷心から出た叫びではない、併し書いて居ることはキビキビと氣が利いて居る、餘り才に走り過ぎて輕佻に流れさへしなければ、前途に囑望すべき一人だらう（白羊）

○骨あげ

淺草　夕月子

七盆の佛は音もなく茶屋の入口に着いた、女中が運ぶ茶をのんでゐると從姉様が入らしつた。八人で火葬場の方へゆく、おん坊が出した鐵板の上には、もうお祖母様は灰になつて……お年に不足もなく、御壽命とは云ひながら、生前の事など今更の様に忍ばれて、熱い涙に瞳が濕む。强いて匿さうとすると胸が一ぱいになつて、うつむいたなり從姉様と挾つこして壷へ入れる。おん坊が結へてくれる間、向ふへ目を遣ると三十前

彼の男が自分の子らしい四つ計の女の子を抱きながらおん坊が出した骨を拾ふとするけれど子供になかれて困つてゐる。其姿の樣子から考へると餘り樂でない生活の人らしい、私はそばへよつて「どうなさいました」つて云ふと子供はだまる、「私が抱つこして上げましよう」と云ふと父親は喜んでしきりに「ありがたうございます〳〵」と云ふ。先程からの樣子から察すると、若しや此の子の母親じやないかしらと思つて「どなたがお死くなりなさいましたの」きくと「此れの母でございます」「まあ、それではさぞお困りでしようね」「えゝ此れが尋ねましてね」と涙聲で云ふ。「此のお子さんお幾つ」「四歲になります」「おや大きうございます事」云ふ內に母樣がお呼び遊すので子供を渡して「さ樣なら」「どうも誠にありがたうございましたお蔭樣で助りました」その聲を後にして私は茶屋へかへつた。

八臺の俥は雨の田圃道をはずんでゆく、私は俥にゆられながら今の親子の事を思ふ、四つになる子を置いて妻に死なれた父親の心は如何に、子供の母を慕つて乳になく時は如何に、實に斷腸の思ひがするであらう。……幼にして母に別れた子は如何に呼びても歸らざる母を慕ふであらふ。……思ひ來れば我が身も同じ彼の子の身と、四歲にして母に別れお祖母樣に育てられたのだ者、其當座さぞお困り遊ばしたらう。あゝもつたいないお祖母樣おゆるし下さい、十五年の間手しほにかけて育てゝ下すつたお祖母樣、其の御恩を返しもせず何につけても我儘計り申ました罪を。……あゝ思ふまい〳〵思つたとて仕方ありませんもの。……けれど私は祈つた彼の父子の身に幸多かれと。……

あはれな話、あはれな場所、幼稚ながらしんみりと書いてあるのであはれを催す(記者)

○廣小路

南千住 吉田清子

十二月押つまつた廿五日夜、電燈まばゆき淺草廣小路に、自轉車人力車急はしく走せ、往來の人はあごをうづめる耳がちぎれさうな北風が、賣出しに陳列してある銘仙羽二重の帶下駄ショールなどに遠慮もなく砂ほこりをあびせる。或る店では勇ましい樂隊で、無理に景氣を付けて居るいろは牛肉店の下足も、男下駄が二三足、廣い土間に淋しく列んで居る人について行くともなく並木を通つて、百助の前まで來てしまつた。何處も不景氣の有樣が滿ちて居る、買物して又元の道にぶら〳〵もどつた。スウスウ走る電車を見て、まごまごして居るお婆さんが、手を上げて何やら呼んで居る、振り返つて見るばかりで、言葉かける人は一人もない氣の毒なので何方に被行るのですと尋ねたら、田舍言葉で築地だと言ふ、のりかへ場所をよくをしへて上げたが、わからない、品川行の電車が留まつたので、切符買つて築地方面の人はと聞くと、幸ひ三人程あつたからよく賴んで私は降りた。チン〳〵、電車は走り出した、お婆さんは角をまがつて遠くなるまで、何やらしきりと頭を下げて言つた、あまりいぢらしい姿なので思はず後を見送つた、飾り氣のない言のはし〴〵に何處やら懷しい人だと思つた。新聞、新聞えー報知の夕刊――と小さな鈴をしつきりなしに振りながら、絞るやうな疲れた聲で、忙しい人脚に悲哀を訴へる樣に叫んで居るのは新聞賣である、多勢の人は皆默つて行き過ぎる。

都會の一面が表はされてある、追々上達すれば望みのある筆つき(記者)

○雲戀ふる日

美濃　葛の葉女

雲戀ふる日とでもいふのか、私は限りなき思ひに廣い空にうく雲の上を殘りに思つた。いつの頃よりか私は東を多く見る子となつて居た。西をみた時代もあつたが——金色の幾筋が夢と流れるうるはしさに、暇さへあれば私は雲の變化の妙をなつかしがつて、每朝東面のせこへ出てくる、胸の中の心が綠とみだれて納まらぬ時は、何物のさへぎらぬこゝまで出てくるのである、もう六度だ。いつにない今日は、よく空を仰いだ事である、茜さす西の空の入日にはいつもうき足になつて。

結髮師の宅にて

母が進めらるゝまゝ幾年振の久々に私は髮結師の宅へ行つた、さどうぞ、人のあとへ裏向けた許りの小ぬるいせんべいぶとんに座つた。一種いやな處だと思ふ、瞬間、むら／＼と戀しがつて涙が眼元までにじんだのを、ぢつとこちらへてほゝゑみにまぎらはした。いろいろの心をいろいろにうつして面にのみ白粉した人を其面のなりに映して來た此鏡は、私にはふさはぬ。口紅を無視した美人、きたない／＼お座へも出せないと思ふ人を、白粉がぶるまゝ紅が赤さに、いゝからとよくうつした此鏡と思つたら、みぢんにふみ破つてやりたいとも思つたが。

眞美人兮天一方でなくて、美人が始終東の空を戀ふるのは何かいはれが有りさうだ。何年ぶりかで髮結にかかつたのも其せいではあるまいか。（記者）

○正月を送りて

尾張　華影

又御手紙差出しますよ。

此前のは母樣の御用でしたから、貴孃のお家へ行つてもお使のみして歸つて來たと同じですわ。

お正月も逝つてしまひましたね、今年は眞實に此世の名殘かと思はれる程遊びました、追羽子からカルタ、福笑等いろ／＼と近所へも面目ない位賑やかにしましたのですよ「まあゝなた幾つになつてさうさわがれるの」と問はれますから「え今年とつて十五と年が下りまして」と、年を云へば與に驚きましたよ。何度數へても數へても、赤い帶して派手な友禪メリンスの前掛して、肩上げに心持短かくなつた袖の私の姿から云つても、正月を幾度か越したのには違つてはしないかと思ひますわ。

雪が降りましたね、僅か五六分、何と思つて少し程降るでしやう、五寸と降るのは三四年に一度位ですけれど、餘りですわ、二尺一尺と降るのが見たいですよ。

山ある所が懷かしいですよ、郊外へ出れば遠山は見えますが。靑い山が朝夕町へ出ても見えるといゝですが、今日は痛切に山がなつかしいです。

海でもいゝですよ、何もかも打ち明けてしまつた樣に廣い海原の雪降りなど、春雨とかはつて又詩趣がありましやう、大きい川でもなつかしいわ。瀨の音、水の音、山鳥の聲も聞えぬ平地なる里は詰りませんわ。靜かにたゞ眠れる夜に降る雪は女性の樣ね。音もなく降つて朝別世界にして皆を驚かすなど、私折々かう思ひますわ。鵝毛に似て飛ぶ雪少しのすきにものがさず白く染める一寸……五寸……あゝどんなにいゝでせう、細い枝は重くてふわ／＼と……、小鳥も細い枝にとまつてフワ／＼として居る樣に。其中に老嫗のよそほひの如く凄きまで澄み渡りたる月が照します時、私は名のみ優しい白砂の玉床に赤い燃ゆる樣な血液を滴たらりとたらしたらどんなに、あゝ胸がをどりますわ、あゝ赤く／＼て白く／＼て、林檎の皮ぢやいけないです、けれど貴女私はかう思ふ計りでメスが

つて表へ出た事もないし、雪夜に限つて鉛筆をけづつてもちつとも手をけがしないし

あゝ貴嬢は、私は何も思はない昔風の女だと思つてらつしやるでしよう、私だつて現實の世に不平を抱きつつ生きて居ます、あゝ何故私は死ねないでしやう、貴女には私の心の奥がわかりませんでしやう、貴女には、いえ誰もかも知らないです私一人で苦しんで居るのがいゝですわ、人も世も何も呪ひません。



私の或る苦しみを人が知るのも嫌ですわ、萬一私が雪の夜に死にましたら、もしかですよ一番早く此の手紙を色で紅く染めて雪にうづめて下さいよ眞の苦しみ悲みだの又は心の涙流す人私には分りました、あなたは何も知らぬがいゝですわ、

舟の人

麻布　井上元子

ソラいつかの或人ね「女子の通性を知つて其の純潔と其貞操とに對する憧憬とを棄てた」と仰有る、棄てるにあたらないぢやありませんか。ある人等がさうでも世間の女皆其樣な心契を何とも思はないときまりませんわね、一言の言葉一回の契にも淋しく守

る方がありますね。のに女と云や頭から御けなしなさる、私は何にも知らないけども、痛ましい人を欺いた人は何と思つてらつしやるか知らないが、キツト……さうぢやあないでしやうか、罪深い人ね、もう何もいひませんよ。

私今日町を通つて行つた數多の人の中で私の氣にいつた女が二人あります、着物でもありません、髪でも、顔でもありません。が何だか私の目についたので御座います、矢張り若い女だつたでしやうか。今日S子樣にあつたですよ、マダム振り何とも私は思はないが、どうしてもパアージンが呑氣ですね。

近日中に遊びに來て頂戴、夢もさらへて待つて居りますから、今日はこれで左樣なら、姫桃樣失禮致します。

白壁の上に一滴の血を垂らして見たい、と云ふ考へも、形見の手紙を赤く染めて見れ、といふのも敢て新らしくない、新らしくないだけに、見樣によつてはキザとも採れるが、私は此人の眞率なる書振に少からず動かされた。眞故に新の一句は、以てこの文の全斑を評し得る。手紙文としては、こんな事より仕方があるまい(白羊)

○針もちて

土佐はざくら

今日も又寒い樣でございますのーし、と若い女が母に云うて通る、私は裏口の障子に向いて針を持つた。

「あなたはどうしてもゆけないだらうかね」と嘆息を洩して云つた人の眼鏡の裏は曇つて居る、私はだまつて太息を吐いた。すまぬと知りつゝも、私はそつけないこと許り云つて居るのだ。「何といふ星のもとへ生れたらう」とも云つた。

昨夕濱を歩いた時、私はもう死んでしまひたいと思ひます、否時々さう思ふのです」と、浪が足許へざんぶざんぶと寄せてくるのを見い〳〵云つたら、「死にたくなつても、私の居ぬ所では死んで下さるな、あなた一人は殺さない」と、言つた言葉を思ひ出して、縫ひ切から目をそらしてそつと見るとうつむいて考へて居る、私は針を置いて、冷くなつた手を火鉢にかざすと人の手にそつと觸れた。

「あなたは自分で行かうと思へば行けない事はないぢやないか、行かうとしてないから駄目だ、私に計り心配させてさ、自分は平氣で居るのだもの」と云ひ〳〵眼鏡の曇をふいて居る。私は針を持つた。「あなたは、私が獨りでどんなに寂しいか想像がつきますまい」とも云ふ。「若しもあなたの通つて居る兩側で、同時に人間が死なうとしたなら、あなたはどちらを助けますか」と人に問はれた。「どちらも助けずに眞直に通りこします」と、私は即答するのに躊躇しなかつた。いづれを生かしていづれを殺さうとも思はない、兩方とも私には捨てられぬ人だ、人を殺して尚生きようとも思はない、親を捨てゝ世に立たうとも思はない。吾生命を縮めても自然苦しみからはのがれ樣とは思ふけれど――。わが爲に生きよと敎へた、されど恩愛と愛情と、いづれを重しとし、いづれを尊しとするか、恩は忘れられない、情は捨てがたい。時がくれば散る花も、幹のまゝにはならぬといふではないか、惱んだとて考へたとて思ふ通りにはなれぬのだ。

「あなたは世間からかけはなれてゐる」

世を見知らぬだけ心の歎を甚く感じる。もう世の人とは接すまいと泣いて考へた時も度々あつた。

輕々しく人と誓は立てられない、約束を破る者は女許りの樣に云ふけれど、私は男の中にもそれを見た、花の女を金に替へて、立派に業を終へ

て後捨てたといふ事も聞いて居る。個性を認めなくて女と許り定評を下すのは餘り酷ではあるまいか。かしこい人は結んだ帶を解くやうに其束をもとくと云ふが、約束を破り得ない人間はすべて無物となして居る。生物の長として、其人格を重んずる者が一度吐いた唾を二度飲み下す、そんな汚れたことが常識あるものの何として出來る事であらう、感情の尊さを思ふと共に、一度吐いた唾を敢へて再びのみ込む人を、私は人間の組に入れたくない。

机の下のノートを取ると、丁度元旦にたまつて雜談した所が開いてある。四五ページは亂雜になつて居て讀みたくない。やさしき人、眞面目な人、眼鏡をかけた人、忘られぬ人の一人、印象深き若き人、世を知りし一人の人、我が生を與へられた人、私の手でこんな事が書いてある。戀しき人、意志の弱き人、我を張る人、すねる人、情の人、負け嫌ひの人。これは人の手である。「唯早く四國の歴遊をしりぞけなさる心になるのを祈ります」とある。

猜疑心の強いのはあなたです。これは私の手。

「猜疑は君がためなり」と白紙のところに目立つて見えて居るのは人の手である。ごちやごちやに樣々の文字が見えて居る。

浪の音が高くひゞく。浪荒き土佐の海、吾行路よ海の旅、浪よ永遠に高かれ。

何だかよくわからぬ。夢の女の文は波瀾を土佐の人にまで及ぼしたかと思ふばかりだけれど、良人は一しよに行かうといふのに、行けないので父母に對し二人の時間を書いたものと取れば取れる。雜談したのも事實であらう。「あなた一人は怨さぬ」がひどく耳に立つ。(夜)

○ゆきの日

京都 松木絹子

雪が降つた。東山は白妙の衣きて默坐してゐる、こんな日は乾度筆さへ忘れて飛び出したくなる、またちらちらとする雪を露氣なく拂つて堀川の橋を渡ると、東廻りの電車は痛いやうな風を送つて威勢よく走り出した。電線のうなりもひとしほ痛切な感がする。眞白い間から美しい人の顔が見えて、眩しい程明るい朝だ。枯柳に花の咲いた府廳前までくると、私の前を蛇の目傘さして行く人がある、髮の結び樣が香野さんによく似てゐると思ふた。歩るきだまでも妙に躊躇しながら溝に沿うて行く人の後姿をおかず見送つた。灰色の空から淡い薄日がさすと靜かにおし並んだ町の屋根はホツホツと冷い息をはいてきた。

個性のない、人眞似の文だが、如何にも器用にスツスツと書けて居る。(白羊)

○佃島

枯草

暮れかゝる港の町にも木枯が佗しく荒んで參りました。空は灰色に曇つて、寒い風が鋭く吹廻して居ります。冷たい波が絶えずひたひたと岸に寄てゐます。川口は今夕のどよめきの中へ入らうとして居ります、立並んだマストの林を分けて小蒸汽が冷い波を蹴てゆきゆきします。オヽ美しい?眞白な大きい一艘の汽船が金色に輝て居ります。今しも傾く入日の燒光に照映えた月島、越中島の商船學校の屋根や石川島の倉庫も皆眞赤です、對岸靈岸島發着所では薄黒く煤けた色の船が黒い煙を殘酷に吐らして悠々と搖ぎ出ました。はては白い波を蹴立て突進みます。オヽ煤けた船、お前は何處へ行く?彼の雄大な不可抗な大自然の涯る名も知れぬ絶島か?暖潮岸に咽び白鷗夜啼く南洋の濱邊か?曉霧紫に晴澄む空紺青色の海。

遠く照榮えた赤い夕陽の色は次第に褪せて風は冷たく夕雲は段々暗く成ります、乾いた港の氣が——微な總調の響もいつか川口の船に沈んでしまひました、ボーボーと造船所の夕の汽笛の長い餘韻が薄暮の空へ響きます、寒い川風が岸から船へ帆柱を漂はして吹付ます、オ、悲痛な夕暮よ。

山國の凋落の晩秋から歸つた妾の胸に亂れてしまひました。枯れたる妾は一人淋しく、斯うして潤ひの無い單調な生活をいつまで送るのでせう。

幼稚乍らに整ふた色調がある。貧弱な修養で以て徒らに現代がらうとするよりはいゝ(記者)

○また逢ふ日まで

麻布　廣澤靜代

夕榮えの雲うつくしき相摸灘。

見渡す限り水と空——一點の帆影も見えず島もない、たゞ寄せては返す浪の響ばかり……私は松の木によつた、そしてその浪の行衛をじつとみてゐると幾ばくとも數知れぬ大浪小波は雪と碎け泡と散りつゝめぐりくつて南の方へ流れゆく、あゝ此浪は遠き彼方南米の岸へと寄するのではあるまいか……あゝ南米の秘露よ私はその名を聞いてもなつかしい、母の在す國にしあれば——そびゆるビスカの嶺よりヨルダンの此方カナンの地をのぞみしモーゼの如く、私は今はるかに遠き母郷をのぞみつゝ、在りし母の面影を偲んでゐるのである……なつかしい母は四つの時に別れたのであるが朝夕忘るゝひまもない、母はもとゼルマンの貴族アントニオ家の第三女と產れしが故あつて秘露に人となり父が公使館附武官としてかの地にありし時に嫁せしとか聞く、あの紫の露したゝる葡萄園の中で白い柔かき腕にいだかれ、細い靜かなる聲でゼルマンの哀歌をうたはれたことは今までおぼろに記憶して居るけれど……母去つてこゝに早や十四年の昔となつたがもう一度あの時にかへりたい、父が玄海の藻屑と消えてよりこの廣い世の中に、血を分けた同胞といへば伯林に居らるゝ兄ひとりのみ母戀しと思ふ心は日に日に深くなるばかり……胸に輕からぬ病を得て玆湘南の地に一年を送りし身は明日とも知れぬいのちなれどたゞ一ずぢの淡い希望をたよりに存へて居るのである、願はくは一度母に逢ひたい、そしてあの白い柔かいかひなに抱かれてゼルマンの哀歌を聞きながら靜かに——靜かに眠りたい。

ふと見上ぐる空にうつくしかりし雲はなくたゞ新星の影二つ三つ私は思はず神に祈つた。

さらばいとしの母上よまた逢ふ日まで神の守りたえずあれかしと。

高貴血の異れる母をペリーにもてる君ならばこの君珍重すべく、この文愛惜すべし、麻布永坂町のセントヒルダにおはすと聞けばうなづかるゝふしもあれど、されどあまりに詩めかずや。(夜雨)

○故郷の春

東京　ふみを

あゝ丁度こんな日、十年餘り昔の其の日もこんなによく晴れて暖い日だつた。「路の臺がもう出たらうね」と日を浴びてお椽につぎものをして居た祖母が突然にいつた。家の後は廣い畑で片隅に四五本柿の立木がある許りあと半分は茶畑だつた。垣根ぎしには陸芹が見事にのびて、角力取草の紫が間々にまじつて咲いてゐた。

枯れた葉や草やを押し分けて私は一心に路の臺をさがした。淡い綠のまるい可愛い路の芽を、嫁菜の中や、はこべの中に見出しては嬉しがりて前掛の中に一つ一つ入れてゆく。中には白い花をふきかけたのもあつ

朝起きるとおもちや箱を引くり返して私は窓から外をみた。それはいつも美しく澄んだ青空に白砂の裳裾を長く引いた富士の嶺を見る爲に。灰色の雲に隔てられてもしもお山の見えない時はお天氣の惡いと共に私の機嫌も惡かつた。何故なれば私の氏神樣の木花咲爺姫といふ美しい女神樣はお山の上に入らつしやる淺間樣も同じ方と聞いてゐたから。蓮華の咲いてる田圃を隔てゝ、仲よしの初音さんが手招きしてにつこり笑ふ此方も笑つて挨拶する。之がお天氣のよい朝のきまりであつた。

林濟寺の稚兒櫻が咲いた。淺間樣の吉野櫻が盛りたと皆お花見にゆく。私達も二人のお祖母樣につれられてお花見にいつた。緋房のかざりをつけた友ぜんの被布を着せられて朱塗りの木履、同じ樣に唐人髷のつけまげをして、鹿の子絞りをかけてゐた。引きずりさうな袂を抱へて、歩く度にころ〳〵と可愛い音を立てる下駄の鈴をうれしくて〳〵二人仲よく手を引かれて歩いていつた。道ゆく人が振りむいて「まあ可愛らしい嬢樣」といふと嬉しさうにお祖母樣達は笑つてゐた。田圃をぬける道にも蓮華を摘んだり、蝶を追つたり、林濟寺の山門の仁王樣を怖がつて二人ともお祖母樣にしがみついて門をくゞつた。梢から長くしだれる稚兒櫻ゆれば散りさうな花の風情、まがりかけた竹の圍やちな櫻と記したたてふだなど、いづれもうれしかつた。其の蕗の薹も、稚兒櫻も、ことしの春も萠え出たであらう。咲いたであらう。もう一度前掛の中に摘んで見たい。さうして仁王樣を怖がつてみたい。なつかしい故郷の春よ。私は今、濁つた都會のうづ巻の中に住んでゐる。もまれてゐる。

小松島から池田に移つた紫花さんにも「蕗の薹」と題したのがあつたまだ冷かな土の間から、初春の日影をさも嬉しさうにぽつこりと小僧が窒ねしたやうに出てゐる、やつぱりお祖母さんに頼まれてた、さうぢや無い、自分なども よくおばあさんにいひつかつて前屋敷の杉垣の南、梅の木の下など探したものである、なつかしきふきの臺よ（夜雨）

○對話母と娘

鈴蘭

母　お前何故畑さんに廿三に成りましたなんてお云ひなの、眞の年より餘計に云ふ筈よほど變てこだネ。

娘　でも母樣顔見るなり直ぐ「一向お若く見えるのに肩上げ下して一體お何歳か」等と云ふのですもの餘り失敬だと思ひましたから態と二つ三つ大きく云つてやりましたの。

母　お前の怒りやにも呆れる若しか誰かゞ尋ねて居るのだつたら――よし然うでないにした所が彼の人の事だもの鋒山の娘はあゝ見えても年よりだぜ等と吹聽しられてどらん餘り仕合せな事でもないよ。

娘　オヽ嫌畑さんに私の事を聞く如うな人ならどうせ埒もない心の人でせう些と位お婆さんに云はれても苦るしく有りません眞實に私を愛する人望む人なら少し位の事一二年位の事頓着しませんわ歳々と人が煩るさく云ふと大抵の人が些とでも若かく云ふなら私は一つ大きく云はうと思ひます。

母　何とでも勝手をお云ひなさい。

娘　アラ母樣お怒りなすつたの濟みませんネお許しなすつて頂たい、けどお節分のお豆年に一つ足して戴く程ですもの大きく云ふ方は當つてる方だと思ひます取り年より若かく云ふ人でお豆を控へて置く方がありませう。

母　それあお前矢張り一つ加へて戴くだらうよ。

娘　然うでせう、そして若かく云ふ何と云ふ矛盾でせう當りまへに云ふに過ぎた事は有りますまいけど……。

母　それではお前が考へて見て良いと思考した事になさいよ、至然お前と私とは心の方向が別々なのだから又先きになつたら母樣もお前も良い考へが出て、しつかり心があふ時が來るでせう。

娘　何時になつたら……。

母　お前が嫁いで子供の一人二人も出來たら其時分には屹度だネ。

娘……。

耳のくすぐつたい人がその邊にござい ませんか(記者)

○おもひで

備中　小見山春子

閉め切つた十疊の座敷は今亂戰の最中。

壁際へ押やられた大火鉢の炭は燃切れて眞白い灰が炭形に殘て居る。ランプの油煙、白粉の匂、油の香、人の息が混がらがつて嫌な瓦斯が漂ふて居る。

妾は少し頭痛がするので讀みかけた札を母に渡して椽に出て雨戶を一枚くつた。

冷い風が上氣した顏をサツと撫でる。

障子を漏れた光が小庭の一部を照してぼんやりと水のさきが目の前に現れる。

太い聲、はしやいだ聲、やさしい聲が入り亂れて冬の夜の靜寂を破る。

久方の光長閑き……靜心なく花の散るらん朝鮮に居る兄が得意の札だつた。

靜さん!!壁へ名だけれど兄が付けた名を其儘云ひなれて來た、飯事のお婿さんが兄で嫁さんは靜さん、隱れんぼの時でも靜さんと兄はいつでも同じ所へ隱れる、別々になると兄の機嫌は惡かつた。

けんかをすればいつでも兄が靜さんの肩を持つのがねたましかつた。

斯うして二年過ぎた或る日のこと、靜さんと三人陳屋の稻荷さんへ行つた、樹の少い社の前から斜に頂迄畑になつて居て青々と麥立つた麥。畦には枯れた草の間から冬を越した「いたどり」の葉が紅い。

春未だ淺い日は薄寒い乍ら照つて居た、兄は紙鳶を揚げる、風箏が麗かな空に氣持よく鳴つて赤や青い繪具で彩つた奴凧の影が小さくなる、興に乘つて飛び廻る兄の後から二人は喘ぎ〳〵追つて行く、兄は枠に巻いた絲の有る限り延した。

軈て風が弱くなつて凧が落ちかゝつたので兄は急いで絲を手繰り出したが運惡く絲は大櫻の枝に掛つて如何しても離れぬその內に絲が切れて凧はフラ〳〵と向ふへ飛んで行く。

兄は仰向いて其の行衞を眺めた。

二人は何んとなく悲しくなつて聲を上げて泣た。

其晩兄は家の都合で田舍の學校へ轉つた。

妾等は學校を出た、互の境遇が變り年が移ていつか年始狀のとりやりも絕た時中學も半途で退いて漂浪の旅に出て居た兄から……珍しい人を見し又果敢ない思出に痛へられた……と書いた端書が來た事があつた。

其頃靜さんは某市の女學校で才媛の名が高かつた。

今は故鄕の女學校で語學の敎授をして居られると聞いた。

ハツキリとした音聲、表情に富んだ瞳、昔しの樣な懷しい微笑を湛えて——

不圖氣が付くと內では騷がしい笑聲、ガチヤ〳〵、洋燈にでもふれたのか淡い木影がユラユラと動いた。

そんざめく春の夜の淡い哀愁を感じさせる、探しはないが、アサず

りした小品だ。幼い日の追想も態とらしくなくていゝ(白羊)

○吾妻獅子　うすひ

モウさつき十二時を聞いたのに私はどうしてもねむられない、あちらむいたり、こちらむいたり、何べん寐返したかしれやしない、夜が更けるにしたがつて目がさえてくる、たまらなくなつて枕元の衣桁にかけてあつた羽織を寐衣の上からひつかけて、燈火暗き机の前に座つた。何をさがすと云ふあてもなく、本箱や机の引出をかきまはして雑誌や詩集などを拾ひ讀してみる。冬の夜は寂と更けて月光が淡く窓を照して居る。

中庭に寐てゐるピスがクサミを二度した外はねずみの足音もしない……、やにはに筆取つて中紙一ぱい紋様！紋様！紋様！と書いて見た、あゝ早く卒業なすつたら——。制服制帽の紋様のポートグラフ又出して見る、臨此目…此のスタイル…紋様と口中で思はず叫んで頬ずりした!!!

『夢さめて君忍ばる
　る眞夜中に
　君しのびつゝ文机
　による』

○

『露ちやんおきや』『露ちやん……露ちやん』

『あゝ』と吃驚して目を開くと『よくねるね！』と兄様が笑ひ乍ら襖の際に立つてらつしやる、障子一ぱい朝日がさして日向ぼつこをしてる玉の影がクツキリ寫つてゐる、ちようづ使つて御飯を頂いてから一通り新聞へ目を通して髪を結ふ、例の通りマガレツトにして、此の間兄様と御姉様の縁日へ行つ



朝の停車場　横濱　臼井ひで子

て花十三で買つて戴いた眞紅の縞リボンを結ぶ。

花屋が玉水仙を持つてきたので、床の白梅と活けかへる、殘りを兄様のお机の上の花瓶へさしておく。

午後お箏のおけいこに行く、例の通り大島がすりの着物に、濃紫の紋ちりめんの被布をきる、今日はお菊が藪入で歸つてるすなので供は淸ときまる。途中で小學の松本先生に逢つた『まあ吉井さんでしたの、大きうおなりなすつた事ねー、私まあすつかり見違へてしまひましたよ、ほんたうに美くしうなつて……』と頭の先から足の先まで見上げ見下してかう仰しやる、私は誰にでもかう云はれると恥かしくつて仕方がない、どう云はうかとどぎまぎして、やつと

『あの先生瓤の方へ御こしになりましたらどうぞ御よりあそばして』と云ふた。

『え、よせて戴きませう、やはり前のお宅ですの』

『は、さうですほんとにおまち申して居りますわ』

『それではお別れ致しませう、さよなら』

『さよなら』と西と東に別れた、北風が寒う横顔を吹いて灰色のみ空から今にも白いものが降つてきさうた。

『おゝ寒つ』と思はずショールの襟をかき合せて、チヨコチヨコ走りをした。

家へ歸つたのは三時過ぎ、入口を開けると、ピスが走つてきて、クンクンなき乍らよろこんで胸の所までとびつく、冷たい風に吹かれて家へはいると、のぼせて頰が眞紅になる、茶の間へ行つて、

『母様只今』と申上ると『おゝお歸り、寒かつたらうね、さあもつとこつちへおより』と云ひ乍ら火鉢の火を開けて下さる。しばらく母様と松本先生に逢つた話しやなんかしてたら、お針の春やが、

『あのお嬢様先程おはがきが參りまして御座いますよ』としきわざはに手をついた。

『あらさう、どこに』

『お室屋のお机の上に置きなまして御座います』

『さう』と云つて私の室へかけて行つた、机の上におかれたは美くしい繪はがき、いきなりなつかしいと胸に抱いた。

露ちやんお嬢者——、なつかしい水莖の跡しばらく見ませんね、僕は案じてますよ、どこか惡るいのぢやないかと……此の繪は可愛いでせう、はつきりした此瞳、ほんとに露ちやんに似てますよ…。父様にも、母様にも、武夫君にもよろしく　あばよ。

聡敏雄様御無沙汰してね、すみませんでしたわ、堪忍して頂戴よ……。其まゝ机の前にぺたつと座つて、白百合抱いて少女の繪はがきに返事をかく。四時過ぎ父様も兄様も歸つていらしたので、今まで靜であつた家がにはかににぎやかになつた。夕飯後今日ならつた吾妻獅子さらはうと靜に箏のぢをとつた。

昔よりいならはせし
吾妻下りの大まめ男
一人たび路や松が枝に

と思ひつきり聲はり上てうたつた、是で私の氣がすつとした。

大阪式の家庭の有様が正直に寫せて居る——尤も名文ではない（記者）

○をんな

紫

いきいきとした水仙の水鉢。日あたりの椽近く裁板すゑて紋羽二重の

破布を裁つ。昨日久しぶりで結つた高髷の、頭小ゆらぐ心地して、一寸手をのばすにも髷が氣になつて仕方がない。芳子樣からお手紙が來た、封引やぶつて讀み行くまゝに、君のおん名を見出してはつとした、この度某男爵の令孃、學習院出身の才媛と華燭の典をあげさせ給ふとである。かねて期したる事ながら……事なれば、驚きはせぬが果敢ない。思はずものさしを投つた。君とはあまり親しくもない芳子樣からしらせられたのが、侮辱をうけたやうでもある、正田樣は帝大の法科生、文學好きな多感多涙の優しい方ではあつたけれど、御心づよくて、焦れて悶へて幾度か私から手紙送つたはこの方ばかり、大切な四つ葉のクローヴアや、ある時は忘れな草の花までおして………我にかへつて膝にひろげた縫物の針をとる。「來年はお嫁に行つちやいけませんよ」とたはむれ給ふた、御言葉、御樣子が悲痛の胸にありありうかぶ。

この夜私は本箱から、正田樣に贈いた即興詩人をとり出した、美しいペンの走り書きで月日を少さくと、呈須磨子樣、忠六。

私は筆をとつて「かたみこそ今はあだなれこれなくば………」と書いた、明日はこれを書留小包で御送りするつもりである。

とうとうたまらなくなつて、わつと机の上に泣き伏してしまつた。

紀念こそ今は仇なれこれなくば………にはウンザリして了ふ、君よ『明治も已に四十四年なり』嗚(記者)

○異性の友

信濃　宮島千代子

Iさんがいつかの手紙に――自分は密かに貴女が若しか男であつたらと思ひます、男であつたら!! 廣い自由な野へ出て芝生に寢ころんで、倶に語るでせうに、共に笑ふでせうに、倶に悲しむ事も出來るでせうに。靑い空は廣く、吾等の住む地も又廣大です、而も、私等は、只二人倶に手を振つて此自然を語るの處はないのです、僕は、いつも社會の之等拘束の手を脫し度いと叫んで居るものです、けれどもそれは駄目な事です。

噫、何故、世は干渉が多くて、自然に任かせないのでせう、社會が作つたのでもなく誰が要求したんでもないに、――自分は、いつも、此手紙を繰返して見る、そして、人は何と謂はふが、友は何と嘲笑仕樣が二人の間に爪の垢程も疚しい事はない、良心に對して、少しも恥ぢる樣の事はない、私の血は冷靜である、Iさんに對して一度も燃えた事はない、そりやお若い少女ですもの肉のある人間ですもの、靑春の血は身體中に漲ぎつてます、然かしIさんと對話したつて私の血はどうもなりません、そして異性の樣には思はれなく、どこまでも同じ理性の合ふた親しき友!! 此う云ふ觀念が斷えず頭を廻つてます、其間に嫌味は少しもなく白ける樣の事は些かもないのです。

たしか去年六月の本誌に異性の友と題した文がありましたが――話が切れて興がさめてお互に冷たい感がする――とかありましたが、要するに、二人が異性だと云ふ觀念が腦裡にあるからだと思ひます。私等は決して、そんな感が致しません。それだのに、人はかれこれ何か意味でもある樣に。――私は蛙鳴蟬噪に等しき人々の言は何とも思はずに居ます、自分さへ、確固たる繩掛で居れば、それ等の事は立派に證明が立ちます、けれども彼の人等は何故そんな卑劣な考を持て居らるゝかと不思議に思つて可笑しくなる事があります。況して、相手が容貌でもいゝと嫉妬心でか何評判しますず、なぜ人は根も葉も無い事をやかましくかれこれ云ふんでせう? 眞紅な血の有る中に、異性の人と交るのは飽までも

非な事なんでせうか？云ふ人が惡いのでなく私等が餘り正直過ぎるのでせうか、私は——私の疑問として絕えず小さい腦を苦めてます、いつそ絕交したらいゝでせうか？私の心が弱いか？してそれは等閑な事です、インポツシブルな事です、Iさんは、

「神に誓つた淸い私等の心には何の汚れもないから人は何と云ふても心に關りません、寧ろ埒もないわからず屋の心が氣の毒だ」と云はれます。

全くさうでせうか？

又私等の心は永久に變らず、淸淨の今のまゝで、行かれるでせうか？幾年の後も、猶淸き安らけき交りを、遂げられるでせうか？今の樣に——。

痛ましきかなこの煩悶。自分はIといふ男の稚氣滿幅なるを、あはれむと共に、あなたが遠き未來を危ぶめるはかなさを考へる、女子は男子に對しては、終に逃げるか然らずんば、捕へらるゝの二つあるのみ、淸き交りとか、潔きおとづれとかいふは畢竟おのれを欺くのみ、あなたが若し良人を迎へての後Iに對して變らぬ感情を持續してゐられたら見ものだ。其後のIの態度も見ものだ。自分は男女の交際などゝ聞くと、フンと言ふ外は無い。（夜雨）

○Kさんに

横はま　松子

昨日會社から歸ると、御手紙がございました、花の樣な可憐の姿は若いてはいかんですつて、そりや年老れば皺も出來ます、お婆さんにもなります、當然では有りませんか。私はKさんの思召す程優しい、情の有る女では有りません、風になびく、柳のやうな女でも有りません、さりとて男子の變裝では、勿論有りません。甘いキッスですつて、私のくちびるは甘か有りません屹度にがいからい物だと信じます。妙な妙な女でしよう、戀や愛や酒に醉つてゐる內は甘いでせうが醒めてからの心持は。……

ラブしてラブされて、夫婦になつて、世帶を持つて、子供を產んで終です、私はそんな、以後決して、こんな御手紙下さいますな。

此手紙御覽なさると、Kさんどんな御顏なさるでしよう、然し私は、Kさん計りは今の若い人と變つて、いらつしやると、初から信じて居りました、が矢張同じでしたわね？

Kさん何卒醉つていらしつたら醒めて下さい、思召す程の女では有りません。一風變つた女です、何卒之だけ御承知下さい。此手紙御覽になつてKさん怒りますか喜んでくれますか……。

お閑の節は、御遊にお出下さい、御返事まで、あら〳〵。

三寸の舌端、風を生ず。（夜雨）

○草の芽

淋しい夕

細井明星

窓と裏門を開けると、だん〳〵薄れて行く冬の日影に一面紺靑のやうに融んで了ふ、入江の奥の方は暗碧な水ともやとゴッチャになつて入つて來た釣舟の帆が其際を高く低く浮いてゐる、ふと二年前の死を決した夕はちやうどこんな風であつた事を思ひ堪らなく悲しくなつて。

縮む心

私は机に凭れて女性大觀を開いたがどうしても讀み續ける氣になれない、此頃はどうしたのか一變した、山程の望を抱いてゐた私だつたに立

身をはかる心もはろび蹄音に其日を送らうといふ念もない、唯私の身體を或因縁の絲があつて地の下へ結びつけられる様な氣がしてならない。

牛

學校の門を出た病身な牛をむりに引ばつて行く人がある、なぜあんなに足をいためて居る牛をなぐつてまで歩ませて行くのだらうと不思議に思ひつゝ後について行くと「今日は之をツブシに」或人に答へた、町近くでどうしてもあゆまない、私は前の方へ廻はつて見ると牛は目から涙をポトポト流してゐた、あゝ私はそれからふと牛肉がいやになつた。

○若草

中村みどり

今日めづらしくも美保様のお兄様がお出になる。

軍人らしいさつぱりした男らしい人で私は大好きだ、大好きだつても變にをかしくとられちや困るけど好きなもの嫌ひとも云へないから。

この秋習志野へ演習に行つた時宿をとつた其家の娘に黒水晶のやうな眸のたまらなく美いの、けどもまだ若いんだよ十四歳の少女さ、みんな可愛がつてね僕なんざあもう聯隊中の評判さ、眞赤な帶しめて桃割れ姿のあどけないさまはみいさんお前さんの幼時其のまゝなんだ、少女の名ふうちやんふうちやん——。まだ戀しらぬ少女をうらやむ、一度は私だつてそんな時代があつたものだ。(十日)

起きたての雲が美しかつた。

今日はいよいよ友の嫁ぐべき日である、晴姿をかいま見やうと思つてさまよひ出た日暮時、降りさうだつた雲がとうとう雨になつて見やうと思つたものも見もしないに雨のなかをぬれねずみになつて歸る。(十一日)

ゆふべからの雨がまだ止まずに降りつゞいてゐる。

淡暗い心もちのするさびしい日だ、友は今日何うしてるだらう、何處を見ても見知らぬ人達ばかりで新嫁様は顔赤くして居るだらうかとこんなつかないこと考へながら炬燵にうたゝねしてしまつた。夜になつてから雨が止んだらしい、二階の窓を細目に開けて見るとドンヨリした空合に星がキラキラ見えてゐる、外を通る人も傘をさして行くは稀だ。(十二日)

ゆふべは何處へ行つたんだらう——十二時すぎだ歸つて來たのは。もしや、あすこのぢあないんだらうか、不安だ、私など箱づめのやうな一寸郵便いれに行くのまで何のかのといふくせに、自分ぢあなんだ、矢張り女のくせに。あゝ、いやだ、いやだ、もうこんな家に居たくない、秩父山の中の生れた家へ歸りたい、が其の山の中の生家には父も母も居ないといふ、何故居ないんだらう。乳母はなんにも話してもくれないでたゞ居ないんだといふ、入日を浴びて美しい秩父山の夕ぐれをながめて私はいつでも涙ぐむ。父といふもの母といふものゝ愛をうけずに乳母の手に生ひ立つた私は、あゝまだ見ぬ父が戀しい、母が慕しい。あの山の中には居ないと乳母はいふけれど屹度居るに違ない、行つて見たいあの山の上の生家へ行つて見たい。居なくつてもいゝから行きたい。(十三日)

「秩父の山の家に」「父母」がある、いやゐぬとある、一條の悲劇はこしらへものだと斷言するを憚からぬ、としごろの女が子供のようにすかされて居る筈もないし、何とかいふ中尉がみいさんの幼なだちを知つてるのを思つてもわかる、つくるならもう少し上手に化粧して下さい「たゞ眞、故に新」といはずや(夜雨)

初作

○角兵衛獅子（地賞）

尾張　榊原けい子

町は霜で眞白になつて居りました、通る人は恰度綿か何かの薄い物に包まれて居る樣にボーッとして居ります。私は火鉢に火を入れて居りましたら、

「悪魔拂ひませう」と早や臺所で鯱鉾立をして居ります、年つたらまた六つか、よく成つて七つでせう、冷たさに手を眞赤にして居ります。私は寒いでせう、さあお當りなさいと火鉢をおしてやりました。あたりもしないで外方をじつと見入つて居りますから、何かと思ふたら外方には子守が五六人、さも珍しさうに集まつて眺めて居る其後の方に親方とかが太鼓を叩たかずに、にらまへて居りました。私は可愛想でしたから少しばかりの錢を與へましたら、嬉しさうに狹い土間を二へんも三べんも鯱鉾立して廻り、有難うと叮嚀に叩頭をして立去りました。子守は又がやがやと後から附いて行きました。漸く向ふの家の屋根に太陽が射して來ました。

作文の先生なら甲を與へる處（評）

○海邊の朝

東京　千代子

まあお孃さんのお早い事……お散歩ですか……と早起の婆やが吃驚したやうに。

あらそんなに早くつてホ、、、無理もないわ、朝寢の私が、とつぜん寢坊界のレコードを破つたのだもの……欲まきの上へ八丈の書生羽織ひつかけて淡紅色のエリマキくるくると庭口からそつと出た、曉の海は靜た、どつと岩に當つてくだける浪の音、サヤサヤとさゞれ石の間へ潮が入る、神秘な呟きが聞えます、一夜の内にどうしてかと思はれる樣にさゞれ石や美しい小石が海邊一面にあります。東京の病院のベットに横たはつてゐる花代さんに、先日のお手紙に、いつも浪の音やあの大好きな美しい五色の小石を拾つてゐますつてあつたから、白青黄赤黑の石をさがして懷紙へくるんでおく、何かといつしよに送つてあげやう……東の方が淡紅色になつたと思ふ内にパッと花が開いたやうに、赤や紫の輝きある雲が一面にそして水も岩も可愛い石も皆美しく輝きました。ガラガラヂャリヂャリと石かきが車へ石をつんでゆく、沖に二三の船が見えだした、かうして海の朝は眠りからさめるのです。

愛すべき文章（評）

○白き花

かたばみ

豆腐屋のラッパも聞えなくなつて、夕暮の風が肌に泌む。私は、一帶に沈んだ色彩で滿された、坂の上に立つた。吉田家の墓地が暗い色の中に冷く見える。吉田山の落葉の音がさくさくと淋しく響く。

ふと茂つた道端の雜草の中に、夢のやうに咲いてゐる花を見た。白い小さい線で出來た花が幾つも幾つも群がつて、フウワリと浮いてゐる。すべてが人の心を喚かす樣な中に。

時々、甘い香がする、幼かつた時、私達はこれを石鹼の花といつてゐた、何故ならば、あの烏瓜の赤い實の中の俗にいふ「大黑」「夷」を棘に混ぜて使ふと美しくなるといつて、よく田舍の人なんか使つてゐたから、

私は、白いコップに花だけ揷して机の上に置いた。何だか、西洋花で

も見るやうな氣がする。

翌日、私はこの都の地を去つた、二日の旅を終へて、懐しい家に着いた時あの白い花の事を思つた。「もしや？」と思つて庭に出てみたが、白い花は、一つもなかつた。たゞ、その莖が何かの木に絡まつてゐるのを見た。日は次第に暮れて、薄暗くなつた。群に後れた烏が、あざけつた樣に啼いて行く。私は、急に悲しくなつて來た。

巧みに過ぐ（評）

○神の力

近江　代富子

私が病氣の時であつた。

ふら／＼と迷ひ出して何心なく、老木の多い鎭守の森へ入つた。私は其深く繁つた老木の下を色々と空想をゑがいて歩いて居ると、冬に枯れた長い赤ほそいくきから、青めいた草々の芽が出て、どこからとなくサーと風が吹いて、黑く、低くさがつた木の枝に笹葉のような音を立てゝゐる。遠寂しい老木の枝から枝へと歌のやうに重なつてかすかに神秘な音がする。南の森はじから二羽のカラスが、我が森だとのやうにバタ／＼木がすりに高い杉の木にとまつた。そして森中がカアカアと鳴くやうに響いた。けれどもやつぱし寂靜に沈んでしまふ。私は自然の壯嚴な、美しい前に自分の今病んでゐると云ふことをスッカリ忘れてゐた。

華やかな其幾時間に、此病苦を忘れ得た嬉しさを、神の惠みと深く感謝した。

やはり自然の壯嚴に感じたのでせう（評）

○初めて投書する感

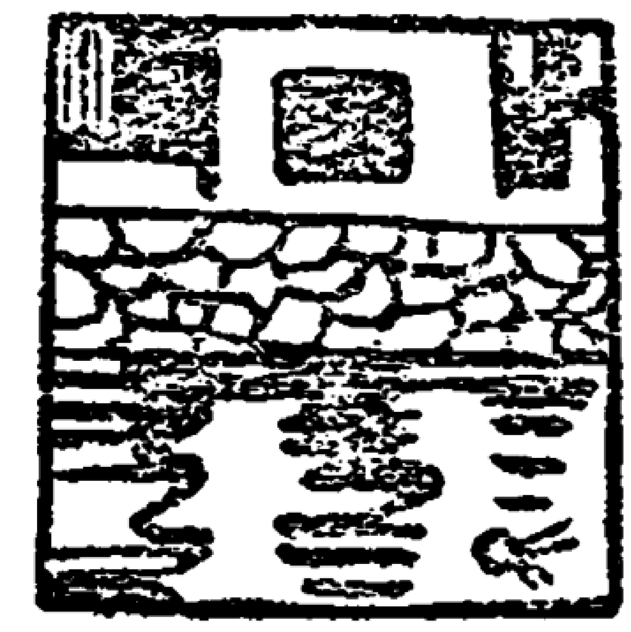
政子

華やかな女子文壇を手にする毎にいつも自分も現代の女の一人である、と心の何處からともなく叫ぶ、そして何となく誇りである樣に思ふ、そして其のつど今度こそはと思はない事はないけれどもどうしても出す勇氣はなかつた。自分ももう十九である、うか／＼して居る間には若き歷史を彩どる青春の時代も過ぎて終ふ。さうだ。

今月こそはと初めて確と覺悟をした。急に忙しくなつた樣な氣がして文壇の愛讀者と云ふ觀念が痛切に響く。あゝ何にしよう散文にしようか雜錄にしようかそれにしてもよく讀んで置かなければ駄目だ、規則書も、と曾て學生時代に經驗ある試驗のそれが迫つて來たかの樣に襟かき合せて頁繰る音高く彼處此處を見る、それにしても後幾日あるだらう、あ、四日しかない大變だ、とまた思ひ立つ樣に忙しく目をくばる、散文にしようか雜錄にしようかいや／＼初めから雜錄なんて生意氣過ぎるだらう。「現代の女はどうして恁うも輕薄に成つたのだらう」なんて桂庵の山の神風情に云はれるのだ。散文にしよう併し散文は文がうまくなければ落第だからむづかしい、ぱら／＼とまた散文の處を出して見る、初作と云ふ處に目が付く、野菊と云ふのを讀む、何だたわいも無い、これなら私にも作れる、なんて高く止まつて見る。其の評を見た「中々上手な方は却つて此の欄では落第するかもしれません」と、あゝ嬉しい、思はず本をたゝいた、そして私の出す處はこれより外はないと定めた。さて何を作らうか、手紙短文日記—またしても迷はざるを得ない。何だか寒くなつて來た、時計は十一時、窓を開けて庭を見た。大分靜かだと思つたらいつの間にか眞白に雪が積つて居る、朝ぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里に降れる白雪と一寸口ずさむで見る、かうしたスタイルは天晴れ女流作家らしいが——と自分ながら情なくもまた可笑もなつた、クスッと笑つた其の聲は平穩な室内の空氣を震動させて自分の笑つた樣ではなかつた、つと邊を見廻すとこれは又いつの間にか出した參考書で手の出し場もない、夜は明けた。

今更文學と云ふ者の娛樂ならざるを覺えた。何時自分の理想とする文壇の花の精と仰がれる時は何時來るのであらう。

此の筆つきなら雜錄風のものが書けるでせう（評）



饗鼓

夜雨

一

まあどうです、あの筑波の詩人とやらいふ方、女をまるで動物扱にしてるぢやありませんか、たつた一人の女が操を破つたからつて世の皆が皆さうとは限りません、あゝ惡口いつては同情を失つてしまひますわ。其くせ自分の○○はほめちぎつて。(小堀八重子)○○原文ノママ。

二

先生、ひどいわ〳〵私おこつてよ、だつて〳〵一月號に私が油をひいて先生を轉がしたなんて書いて、いらぬお世話ではないの、ホホ。

姉さまがいつたから一寸お取次したんだなんておつしやるかも知れないけれど、いくら毎日毎日談判をもち出しても重たさうに島田をゆるがせて、人ちがひよ、外のうちのやんちやんでせうつて。でも私に似てゐてよ、おぼえがあるから!

姉さんにきいたのでせう、え?さうでせう?

もう一年ね、星ケ岡で、私はピヤノにかぢりついて(口でぢや無くつてよ)コロンシヤンをやる、唐澤さん、ご存じでせう、お下にして詩をうたつた秀子さん、あの方ね今度島田にいつてよ、え、すてきなの。

美耶さんね、よくいらすの。私どうかしてあの方にも結はせたくつていぢめるけれど、子供のうちからつてきかない、私もね實はゆひたいのだけれどねあれはのしつけつていふのださうで、それぢや風もあげられなくなるからまあ二三年見合せよ。一寸あたしの風をいひませうか、前の方へリボンをつんとかけて元祿袖につんつるてんの高袴、高ぐつ、手を上げたぐあひはやつてよ、これはゆうべ障子へ影をうつして發見したの。

きのふ姉さんの寫眞できて來てよ、八代さん位はふとつてゐませう。をかしいわね。

姉さんは先生は口わる……ぢやなかつた、あのね姉さんは口惡だから姉さんの申すことは何でもかんでもとり上げないでね、今もけんかして島田を根こぎしてやつてよ。(つうちやん)

三

みぞれ霰の名は知れど　土佐は南のはしにしあれば
雪なざはふり申さず　寒いやらつめたいやら
筑波の雨のふる夜半を　小笠もみのもめされざる
おん師は遠き道を行く
つかむにあまる黒髪の　長きが肩を渦まいて
油ならざる香もさふらふ　ある時は絣の房たるゝ高わげの
重きを好むわれは人妻
見まくおぼさば　銀鞍白馬八重の雲
雲凍る野に鞭おいて　雪見ぬ國に越したまへ
榕樹(アコウ)しだるゝ南の　土佐は海よし天もよし
君と相見ば、そめし歯の　見えんを恥ぢてたずきのみ
紬のみ膝につまぐらむ　さりとてもよしや
ねがはくば、花とまがふ君がにひづま
み胸のおくにうす色のうすぎぬおほひ
ひめてかくして一人笑む　君がにひづま連れて來ませぬ

(梶原しげ子)

四

油を引いて先生をころがした一件でつる子が何だか申上ることがあるさうです、その手紙見せてくれつていひましたけれどはく情な姉さんでも私にはしんみのきやうだいだから惡くはいはぬと申します。あれぢや私もひどい目にあひました、この二日に見つかつてしまつて、いきなりえりをつかんで後ろへたふすでせう、同名異人だつて斷つたけれどきゝませぬのよ。

今ひさしで凧を上げてゐます、大きななりして一錢の凧が上らないやあいと外からはやされる、女のくせに凧を上げてゐらあ、何て悶がいゝんでせう、リボン泣いてらあと皆からかふけれど、平氣なもんです、「今に見てお出、上つたつてやらないよ」

ある先生のおひげをある友だちと片つぽつゝかん定して見たら、友だちは二十八本とかぞへ、妹は二十七本とかぞへたさうで、どつちが本たうだらうつて笑はせるから、中をとつて五十五本ときめてやつたけれど笑ひきれぬほどくるしくて。

二月にはお出のよし、母もお目にかゝりたいと申して居りますが、母は先生にひげをよく剃つてお出なさらぬと危いからとたのんでおけとい ひ出したら、つうちやん大よわり、姉さん何でもいふことをきくからそればかり書かずにつて賴みますけれど島田のまん中をもつてひつくりかへされた怨みがあるから！

細谷、吉澤、安木、酒句……皆さまおめでたいわね、おめでたと一しよにつらいこともありませう、あんまり冷笑なさらないで下さい。尤も私はこのごろ結婚はふくびきのやうだとつくづく思ひました、運嶇天賦さきざま次第はなさけなうございます。

顔引つていへば先達妹と二人共同質出へ行つて二本づゝ引いたのですそしたら私に下駄が當つて！ 別に何にも思はぬのに女物をくれずに書生下駄を、ひどいと思つて手を出さずにゐたら、うしろから「君」肩を叩く人があるでせう、ふりかへつたら「書生の癖に花かんざしを取つた、交換だ」つて、さあ人の注目になつて「よおよお甘くやるぜ」「好きな人にお互もちこめ」つてわいくいはれて、やうく逃げて來ました、こんなもの僕にはやるやつは無いとか有るとかその人はいひかけたおあとは存じません。（くさひばり）

五

小ぬか三合の君とイチヤツテる人……はあまりひどいでせう、書く方が惡いといへばそれまでだけれど、書いて見たくつてせうが無いんでせうから大目に見てやつてちやうだい。この勢で行くとスンチャ國の先生はすべての新婚の人に對して三斛の冷水をそゝぎかけはしまいか、寧いのにまつ平よ。（篠田とみ子）

番外

阪東太郎

拜啓、小生をして天下の婦人遂に代り、夜雨征伐の計畫を立てしめ候はゞ、一筴を獻ずることを惜まず候、今や夜雨大人は、女と云へば當るを幸ひ、薙ぎ立て、切りたて完膚なからしめんとするやに相見受け、婦人界の珍事、前代未聞のすばらしさに候。これでは姫御前の身のやつきとなつて鞺鼓を打ち、責めつゞみを鳴らして逆襲を企つるも無理からぬ仕儀と存ぜられ候。小生潜かに思へらく、筆や口では事面倒なり、我と思はん女たちは、大擧して夜雨の館を圍み、本尊を盜み出して腦上に致し、かはるくかついで筑波山に登ることに候。夜雨如何に苦しがるとも許すことは無用、斯くて山上の高天が原に於て、夜雨に山海の御馳走を捧げ、山神地祗を誓ひに立てゝ、神荒れに荒れたまはぬやう、女たちが八乙女の代りとなりて、カッポレ、紀伊ノ國、ションガイナなどを踊りて慰むることに候。早々頓首。

明暗（二）

○　原田琴子

美しく生きんとすらむ大方は瞳ねむりて晝が夢見る

世をなべて見つくしたりとわが瞳靜に閉づるものならなくに

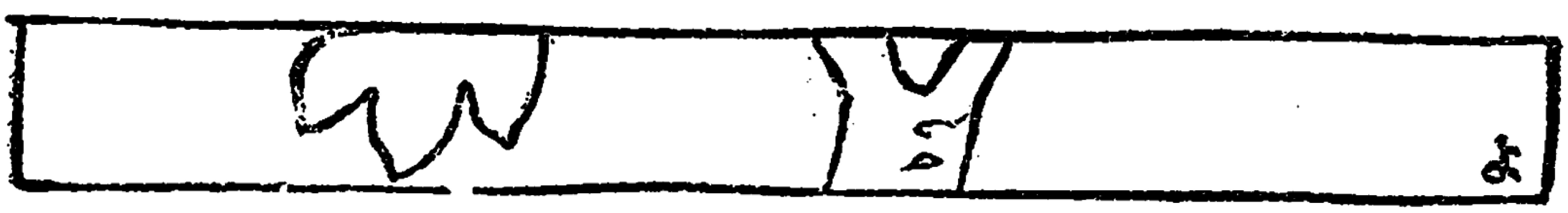
我が眼まづ氷りたりけむうつるものなべて心に傳はるはなし

君をしも偲びて泣くといふでときつくり文さへ秋は持て來ぬ

天地と向へるものを人にして並ぶ子もなしさびしく歌ふ

女猟るさつをのとも丶見殘しぬ窟の中に涙する子は

あらしにもくみせんものか狼に交らんものかすさぶ心は



心暗しわがはらからも母さへもつれなく見えぬ冬の夜の色

道たがへよろぼひ來るなきがらか紅き光の身にささぬ子は

○　太田きし子

美しき春の光のめぐり來ぬ心と誰か神に知らしめ

あはれまた林を貫けるてのみちようねりのはてに母の家在り

わが日ごろうすき氷の上を行くそれより外のうらなひはなし

見てあれば涙湧くなり丸き山何のつとめぞてのなみだはも

○　山村龍子

悲しくも死をのみ思ふ老人の心の色に凍りたる池

わが籠の鳥のなかぬはうら淋し鳴かば集ひてうま人の來ん

ふる里の山をのみ見て心足る我ならなくに去りがたきかな

戀をもて輕き心をなげかはすたはむれごとゝ思へるは誰ぞ

若くして戀人もなきかの人に似て淋しけれ海のなき伊賀

死ぬきはも髪はみださじ落ちてなほ椿の花の崩れぬぞよき

わが伊賀の海なき國といふてとが幼よりの我のかなしみ

わが衣に鼠の色のいと少しまじるも悲し二十四の春

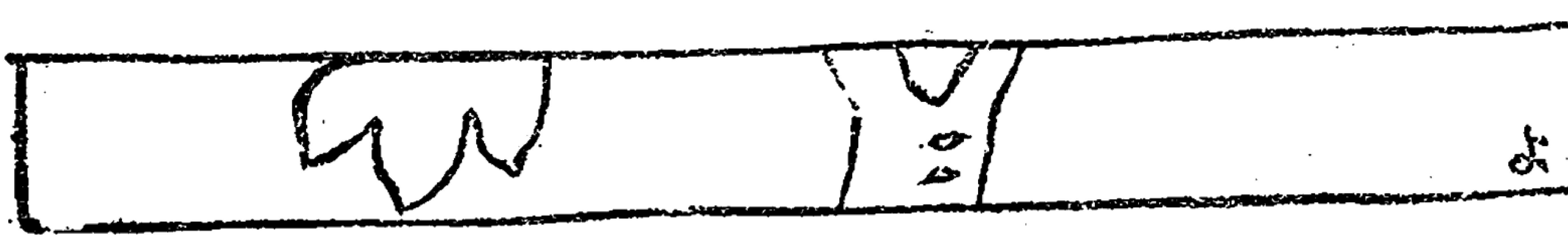
かりに着る衣も少女は美しき色をとばかり心に願ふ

○　ねざめ

冬なれば我はきらへど木枯のしきりに吹いて早く暮れけり

木枯はなれ衰へて老ゆる日の來るぞと吹いてさびしがらする

故鄕よあゝ故鄕よわが爲に何の殘りて我れを待つらむ



うすよごれし壁に夢二の畫をかけぬ忘れし胸の明るきがなしみ

何となく人なつかしの夕まぐれ鏡のわれのあはれに見入る

わが前の暗き女ぞ悲しけれちりめんのえりかけてはゐれど

暮れぬ間にかへらんと言ふ遊びどち憎みし昔に似て來ぬ戀も

土の香のほぐれ〳〵にこぼれ松青きをかざしてこえゆく峠

弱かりし彼の戀人のかへりゆく姿忘れず夏の夜のあめ

うちつれて野薔薇の花を見出でつる濃き日胸さす五月少女よ

人はいざ山にのぼれば海見えてひとりゆく身に涙こぼるゝ

＊　＊　＊　＊　＊　＊



詩の言葉（三）

森（林、曲樹）

愛も、また
命も、歌も
こゝにして、かくは滅びむ
あはれ見よ、森の奧より
煌めける蒼き星——
風はたゞ暗くさまよひ
悲める我魂は
そのゝきて忍び泣く（露風）

此處に歌つてある森は、風死し、木の葉朽ち、暗く、淋しく、暮れてゆく暗黑の森である、愛も斯く滅び、命も斯く滅び、歌も斯く滅びると云ふやうな悲しい、冷たい、滅亡の森である、森の奧の蒼き星と云ふのが、凄く感じる、魂のをのゝく姿のやうに思はれる。

しづかな、靜かな夕暮

鳥の噪ぎも林の上に默まり
病みほけた薄色の月が
路上の落葉にさゞめく（柳虹）

林らしい印象が能く浮ぶ、此の林は未だ全く葉の落ちつくさない——寧ろ此れから落葉しやうとする頃の林らしい、而して此作の林は小徑の片かは林である、凍るやうな寒さではないが、淋しい寒さの感じがある。

烟は立ちぬ、しづかに
夕ぐれの丘の上
森には夜の色
おもむろにひろごりぬ（御風）

其景の自然なるが如く、詩の語法も亦甚だ自然なものである。

比良の嶺間近の里につゞく
櫟の森にも花は咲いて
くづれし館の四方をめぐり
梢を縫ひて小鳥うたふ（胡夷）

櫟の森はおもしろい、櫟の花も珍らしい、森に圍まれたる館と云ひ、梢を縫ふ小鳥と云ひ人間と自然とちかしいのが、此の森のすぐれてゐる處であらう。

わがゆくかたは月明りさし入るなべに
さはら木は腕だるげに伏し沈み
赤目柏はしのび音に葉ぞ泣きそぼち
石楠花は息づく深山——『寂靜』と
『沈默』のあぐむ森ならじ（泣菫）

さし入るなべには、さし入ると共に。さはら木はさはらといふ常盤木、赤目柏は柏の木の一種。泣きそぼちは泣き濡れ。石楠花は深山に生ずる灌木で、躑躅のやうな美しい花が咲く。あぐむは待ちあぐむなどのあぐむと同じことでたいくつしてゐるやうな意。偖て此の一節は沈默と、寂靜に充ちた森のさまを歌つたもので、さはらの木は腕がだるくなつたやうに枝を下に垂れてゐる、柏の木の葉は露や雫に濡れて泣いたやうに默つてゐるし、石楠花は森のしづけさにホツト息を吐いてゐる。斯のやうな靜かな森と云ふのである、初めの「わがゆくかたは」と云ふ句と、終りの「森ならじ」と云ふ句とは、此の詩（『わがゆく海』）の全體にかゝる言葉であつて、此の一節を解する場合には必要がないのである。

み冬となりぬ、日暮れぬ

ひねもす森にあらびし
脚早の野分はうしろ寒に
そゝけの髪もみだれて
北山あたりいそぎぬ
もとあら木立の落葉林
木の息でもりたゆげに
殘りの葉こそは風にあへげ(泣菫)

うしろ寒は、後ろ姿が寒いと云ふやうな氣分である、そゝけは髪の亂れた形容、もとあらは下の方で疎らになつてゐる木立、たゆげはたえ〴〵。此の一節は、冬が來た、終日吹いてゐた野分の風は、髪を亂してうしろへ寒さを殘して足早く、北の山の方へ去つた。粹もあらはに、枝もあらはに落葉した林は、息もたえ〴〵のやうになつて、僅に枝に殘つた葉が、風にひら〳〵あへいでゐると云ふのである。全體薄田君の作には、森や、林が非常に多い、大抵の作には、森か、林の自然がゐる且つ君は自然を實地に研究してゐるから、描寫が空想でない、森なら森、林なら林の眞の色、形などを出さうとしてゐる、其處には從來の歌人詩人の遺却した新しい努力が見えるのである。

あゆめば蘭の花を踏み
ゆけば楊梅袖に散り
袂にまとふ山葛の
葛のうら葉をかへしては
女蘿の蔭のやまいちご
色よき實こそ落ちにけれ(藤村)

蘭の花、楊梅の花、山葛の花、ひかげのかづら、山いちごの實、皆之れ山林中のもの、其一つを想ふても山林の香がするやうに思ふ。

彼の萌え出づる草を踏み
彼の湧出づる水をのみ
彼の新らしき花に醉ひ
春のおもひのなからずや(藤村)

『深林の逍遙』の中の山の精の言葉。

鹿はたふるゝたびごとに
妻戀ふてひにかへるなり
野山は枯るゝたびごとに
千とせの春にかへるなり(藤村)

同じく山精の言葉。

草の息吹ひ
木の息吹ひ
息はづませて
山毛欅の幹に寄添ふ二人
若き胸と
ふるき胸と
ふとてゝに
言葉絶えぬ(醉茗)

山を登つて行くところ、息苦しくなつて來なの幹に凭りかゝつたのである、草の息吹ひ、木の息吹ひで、山林の草や木の間を分け登つて行く意を表はしたもの。

手は白かりき森の沼
若葉の淵に櫂とりて
水を彈きし玉ゆらの
人は我より匿れけり
菱の實喰ふ鴉の
岸に鳴く夜は萍の
白める花も煙むらむ
仄に煙る霧降りて(夜雨)

此の森は大寶の森で、沼は森の下なるとばのあふみである、白い手に櫂取つた人も去つてしまひ岩に淋しい秋が來た心持がある。

氣焔

▲女子文壇に折々西洋の話や、西洋小說又は劇の話、西洋の文學者の話、西洋文學の新しい消息など殊に併西洋大陸の思想を傳へてほしいと思ひます、日本の事も勿論ですが、修養には西洋のことを承るのが何より利益になるやうに思ひます、皆さまも片カナ交りの記事は毛嫌ひせずに勉めて讀むやうに遊ばせ、屹度おためになることがござ[illegible]いますº(京都、みよ子)

▲私は批評するのが好きですけれど、批評された方が、氣をわるくなさりはしないかと思つてツイ遠慮がちになります、どなたからか思ひ切つた誌友の評を初め出しては如何でせう、私も彌次馬になつ出かけてよº(ABC)

▲本誌に芝居のことを載せて下さい、劇界の氣運が動いて參りましたから、舊い芝居はいやよ(星の國より)

▲私は女ですけれど、婦人問題には飽いてよ、問題になつたつて少しも嬉しくないことよ、勝手に問題になさいませと言ひたくなる、だつてえらい人には、えらいことを仰るけれど、少しも私共に取つて有りがたくも必要とも思ひませんもの、私の聞きたいことは外のことよ、男の方が聞きたいやうなことを聞きたいの、女の問題は男の方のはうが多く聞きたがつてると云ふぢやありませんか、女に話すのだからと云ふやうなお話ぶりは失禮ながら追々お引下りをねがひます。(本郷のおでんば)

▲かう申すと失禮になるでせうけれども、私はお免しを願ひたいのです、近頃山々の雜誌を讀みましても、終の頁には交際欄が設けてあります、分けて女子文壇なんかは一方ならぬお手數を煩されて、私共の便利をはかつて下さる、實に感謝に堪へません。私の樣な無智無才の女には、此の欄が喜ばしくてなりません、不幸にしていきた世界は闇、目あてもなく同樣の此の身が、處々の諸賢のお話を承つたりする事が出來ます、こんな便利な事はないだらうと思ひます。しかし諸賢のお話を續いて聞かれないのが何より殘念に思ひます、誌友の皆樣、第一の始めには誰樣でも、一時的と交際を望まれる人はありますまい。必ず永久の二字をふくめて、一時的をきらつて交際を申し込まれるで御座いませう。其永久が、此の頃はどうも一時的のやうに見受けられます。私は去年の[illegible]の頃、お情け深き誌友の或る一人から、一時的でなく、永久にお交り下さいとお手紙が參りました。草深き庵に友なき身をなげいて居る際で御座いましたから、お便りがあるやいなや心がパツとしました。御水莖の跡美しいのには私などはおはづかしい次第で御座いましたが、或る人が「はぢをかいても鏡をとれ」とお仰やつた事を思ひ浮べたので御座います。早速々共に永久の誓ひを立てゝ約しました。一ケ月とすぎ二ケ月目に及びました時、ふと名所繪葉書五六枚送つて下さいましと申しましたら、御禮は必ず致しますとのお葉書が參りました。私は田舍の寒村に住むで居ますものですから、其意を果す事が出來ませんでしたから、苦しくもおわび書を出しました。それより二三度お尋ね致せしも鍛冶屋の[illegible]腹で、チンとも、カンとも、音さたがありません。其儘で今は昔の知らぬ人にかへつてしまひました。こんな方七八名に出合ひました。其後交際には趣味を失ひ自分は永久の二文字を重く〳〵見ております。(明星)

▲女子文壇新年號、表紙はあまり好きでなかつたが、太田三郎氏の口繪、見るから涼しげな瞳心地よく感ぜられた。本誌中で一等面白く讀んだのは、晶子樣の「ひまな人」——私は何だか晶子樣御自身の事を書かれたのではないかと思ふた、夫の前で何の束縛も受けず、自由に己れの思想を云ひ得る人……晶子樣ならずばと思はれた。散文(天賞)吉田紫花樣—多感なそして明確な頭を持つてゐらるゝ御寫眞其まゝの文章だと思ふ。夢の女樣の文を讀むと何時も眞面目に何物かを考へさせる、そして哲學書を讀んで居る時の樣に、私の胸を苦しめて冷い〳〵私の心を尚冷えさして行く、苦しめられつゝも讀みたい文である。とにかく本誌を眞面目なる雜誌として愛讀しておる。(躑躅)

▲結婚や旦那樣との間を多く書いたは今は見えないが根本松江樣であつた。ましを樣歸子樣澪子樣其れから大和の靜香樣近くは蒲原早蕨樣等は今の其れであらう? 如何ですましを樣また御新姫の日記をおつけになりませんか。少しも之等を書かないのは平塚百合樣(但し本誌上へ)吉田紫花子樣である。吉田樣の旦那樣のおありになる事は今度初めて知つた。お子樣をおなくしになつた相だが實にお氣の毒の事である。



雜錄



梅一輪
一輪づゝの
あたゝかさ

湘南新春日記

内藤千代子

七時半起床、ちつと寢正月でもしなけりややり切れないのだもの。玻璃越しにさす日はまぶしいけれど、風が寒い。

水仙の水鉢を日向に出してやつて、顏も洗はぬ先に新聞よんで叱られて、お雜煮のお餅を燒く、元日から毎日食べ上げて行くものだつて、四切目にはもうウンザリ、もちあつかふつてほんとにこの事だ。グツ〳〵とお化粧し髪を撫でつけて着物を着替たらもう十一時になつて了つた。富枝樣へ手紙書きかける。

「碧浪澎湃たる駿河灣の新春、如何にお迎へ遊ばされて？お島田にお結げになりましたか。

あゝ私もとう〳〵十九になつて了ひました、十九？何と云ふ厭なひゞきでせう、いつそ二十と云ふならばまた、花やかなやうな氣もするけれど……」

午後から約束したお優ちやんとこへ行くとお母樣が出て來て

「お千代さん、折角ですけれど優はいま藤澤へ行くつて支度してますから……」

子供ではあるまいし、たとへやうなき侮辱をあたへられたやうな氣がして、奮然と去つて郵便局へ行き葉書十枚買ふ。國旗こそ戸毎にひるがへつて居るが、かるたのよみ聲、羽子の音もきこえず、何と靜かなお正月であらう。サツサとかへつて來ると、玄關に薩摩下駄がぬいであつた、中山樣だ？と急にうれしくて勝手口からかけ上る、「嗚呼玉杯に花うけて」なんて大聲に歌つて來たのが恥かしい、廊下で母樣と鉢合せしちやつた、「一寸お待ち」と鬢かきとつて、ついでに衣紋を直して

下さるのももどかしく、襖の透から黑いお羽織の裾が見える。

「中山樣」「ヤ」と高いお叩頭、簡單な御挨拶、私は笑を含んで見上げる、この春まで五分刈だつたかつ黑いお髪を少し長くして、お色の白い方だつたのが赤くなつて少しおやせ遊ばしたやう。

「いつ當地へ？」と伺ふと、

「四五日前から友人と東家へ來てゐます」と有仰る。

「まああんまりねえ、それで家へは今時分いらして？」と云つてみたが、ひからびたお菓子にみかん位、何にも差上げるものがない。

我家はクリスチヤンではないけれど、お重詰だのお屠蘇なんか一向用意がしてないので、

「今年はすつかりお廢止に致しましたのよ、相變らずつて申しますけれど、こんな生甲斐もない生活をつゞけるのではたまりませんものね、少しかはつた事があつてくれゝばいゝのです。」

と笑つたものゝこんな場合、白葡萄酒に紅い林檎、小さいコップに美しいナイフくらゐそなへておきたい。母樣が鷄卵をうでゝ下すつたから、むいて上げやうとしたらよくはげないでまるでアバタ面のやうになつて了つた、それを糸切にもせずお小皿の上におッころがしておすゝめしたら

「これは奇抜とまでも行かんでせうけれど、かはつてますね」つて笑つてらつしやる。

「だつて、いつも山海の珍味に飽いて被居しやるからたまにはこんなものお珍らしいでせうと思つて………………」へらず口をきゝながら、

「ではね、切つて差上げますよ、丸でとではイヤだと仰有るから」

「誰もイヤだと云やしません」

「食つて下さらなければおイヤなんでせう」

先日綾さまとうつした寫眞お目にかける。

「貴女は大きな眼ですね－、これが夢二式と云ふんですか」

「イヤだ、中山樣」お人のわるい。

「中山樣、これからは御多忙でお出遊ばすわねえ、今年御卒業でせう、さうして直ぐに文官試驗……」

「何しろ學生々活が一番氣樂で面白いですね、卒業してみればいつまで親のすねをかぢつとるわけにも行かんし……」

「ホゝゝゝそんならもう一年停電遊ばしたら如何な

の！」

「それも眞平ですからね」つて大笑ひ。

「今年の秋頃にはもうお髯生して御新調の脊廣か何かで……………ねえお奉職遊ばすやうになつてもなるべくなら東京にお出遊ばせよ。」

別に面白いお話もないのだけれど、長く居て下ずつて、燈火がついてからお歸りあそばす。送り出た門口にぴゆうつと身を切るやうな北風が頰をかすめて去る。

「また入らして頂戴ね。菊地さんによろしく、今度は御一緒にお出あそばせな、何故今日お一人でしたの」

「きまりが恥かしいと云つてますから」

なんて御串談ばつかり…………。

頂いた美しいカードと爲はがき、大きな白ばら百合の花、なつかしい忘れな草やすみれの花束、中でも燃ゆるやうなひなげしが一番氣に入つて了つた。でも私なんかにこんな上等の、勿體ないのね、さう〳〵今度東京の綾さまへお土産に差上げませう。

夜、久しぶりの女子文壇を見る。私夜雨先生が一番好き、お世辭でも何でもないのです、先生のことについてはもつとくはしく知りたいと思ふのですけれど、私みたいな飛び入りが折々の女子文壇を透しての君はあんまりロマンチツクで何だかちつともわからない。二十八宿も花守もいろ〳〵手をつくしたけれど、まだ手に入りません、お三十三？ほんとでせうか、私もつとお若い（五つ程）やうな氣がしてなりません。

先生、耶馬溪の萩花樣を御存じでお出遊ばすの！忘れもせぬ、四年の昔、私が十六の夏のこと、あはれその雜誌の口繪の黑枠の寫眞に顏おし當てゝハラ〳〵と落淚した私の心？

西樣は不治の病に泣く薄倖の靑年詩人であつた、西樣の死は靑春の壓迫に堪へられなかつたのだと云ふ。

私、私、今こそはかく微笑みを頰にかざる女となつたけれど…………笑止でもいゝ、少女の言葉はみんないつはりでもいゝ、デカダンでもいゝ、お轉婆娘でもいゝ、思ふまゝな世をへるのだ、自己の爲に生きるのだ。

あゝ若き日の誇りと驕樂が痛切に味ひたい、私はもう十九ではないか、靑春、ブライト、光榮、あゝ。（二日）

朝、髮を結びに行く、十五の春から結び始めた島田、もう〳〵飽き〳〵して了つた、ハイカラなウヰンナに

四吋の緋のリボンでもきゆつと襟元に結んでみたい。でもね、白丈長に水のたれさうな髪つき、髱つき、平打一本さしこんだ文金の後姿もまた捨てられないものです。年賀狀が十三通、早速スタンプしらべする、また去年の消印のが二枚あつた、可笑しいやら憫然なやら腹立たしいやら………。

「東京本郷の篤さんより」つて意味ありげな文句のは何誰のいたづらでせう………「往にし日、西歐の詩人スコット麗はしきこのエレン島カトリン湖上に輕舟を浮べて飽くまで自然の美を歌ひしが圖らずも戀し戀しと慕ひに慕ひし窈窕たる佳人に邂逅しつる喜!!……

……出でゝは秀麗比なき湖上の景と、入りては彼女が眞心こめたる溫情とによりて遂に彼をして不朽の大作を發さしめぬ。

新年の始め此繪葉書を千代子孃に贈る、亦徒爾ならざるべきか。」

ペンの走り書き、お手蹟は中山樣にそつくりだ、けれど不思議だ、昨日も現に家へ入らした方が………湖水と云ふから氣にかゝる。湖水？湖水！あゝ水淸く山美しき蘆の湖上にオール握つて若き血汐を湧かしつつ語り合ひたる君はあれども…………。

もしお優ちやんが來たら留守を使つて頂戴なと母樣に意地の惡い事お願ひしておいて、二時頃から藤澤のステーションへ行つてみた、上等待合室へはいりこんで新聞を讀んだりスケッチしたり、目に立つ樣な美しい女が見當らなかつた。中央舍へよつて「今の婦人」を取りよせてくれるやうにたのむ、夕方電車で歸る。母樣は用達にお出掛でお留守、お祖母樣一人暮れかゝる室内にぽつねんと埋み火赤き火鉢をまもつてゐらつしやる。

着替しながら何だか今夜でも何處からか歌留多會のお招きの來さうに思はれて、それだとこのまゝで居る方がいゝのだけれど、としぶりながら重いふだん着の袖を通す、昨日の今頃は中山樣とお話してゐたのだ、と思ふと堪らなく悲しくなる。

ランプをつけやうとしてたら、門前を聲はりあげて歌つて來る人がある。

「萬骨あだに遼東の、幽鬼となりにし戰も、今はた誰を咎むべき、臥薪嘗膽また更に、十年待つ間の平和かな、平和よさらば春の夢―

一高の寮歌だ、私の大好きな寮歌だ、ホヤを片手にもつたまゝ下駄つッかけて馳け出してみたが、もう聞

に合はぬ、どんな人やら姿はみえず、たゞなつかしい歌聲のひゞき來るのみ。

身にせまる靜寂に得堪へで思はず……

「中山樣……」

と呼んだ。

あゝ中山樣、またお遊びにいらして頂戴な……思ひもかけぬ中山樣にお目にかゝれたはうれしいけれど、約せし人は履行もせず、忘らるゝ身とも思はず誓ひしか……冬期の休暇に必ずと云はれたを信じて二十日頃から毎日〳〵、待ちくらした私がくやしい、大學生と田舎少女、それからして小說的である。見上ぐる空に夕づゝの影、あゝ淋しい初春の夕ぐれ……（三日）



旅　越後　若穗圖なか

歌留多あるがためのお正月、なんて云はれた私が去年の正月以來一度も札を手にしない。暇はあつても練習するだけの張合もなし、原稿書かうと思つても何だか氣が落ちつかず、日記つけるのさへ面倒くさい、もうもうつまらなくつて淋しくつて焦れつたくつて、初春早々こんなではどうせ今年もろくな事はない、と悲觀して了つた。あまりのわびしさに、

夕方海岸へ散歩する、風が寒い、湘南の波はしづかだけれど、私の胸は狂ひさうです。江の島が直ぐ眼の前で話でも出來さう、夕陽が引地川の水に映じてチラチラと美しい、兩手を羽織のわき明けに突てんで、足にまかせて歩きまはつた。

ふと見上げると東家(旅館)の二階に二三の人影があらはれて、手をふつてしきりに相圖してる、中山樣！と思ふと縋りもつきたくなつかしかつたが、知らぬ風で木かげにかくれた。かへりに東家の裏門の前を通るのがイヤだから、ずつとまはり道してかへつて來た。今日は寮歌を歌うて通る人もない。

夜、祖母樣が肩をもんでくれと有仰る、ぱつと壁にうつつた高島田、薄ぐらい燈火に我が兩手のみほの白う……時計が九時を打つ。

あゝ我が十九の新春もかくて逝くか？花やかなるべき我が青春もかくて了るのではないか？と冷たき床の夜着の襟に額をおしあてゝ熱い涙に頰をぬらした。

(四日)

雨上りの美しい朝。おくればせの年賀狀七通、中に一通大きな封書が私へ……月岡樣のお父樣、はつとして顫ふ手先にしばしながめて居たが、思ひ切つて封を切る。

「母樣、母樣、あの月岡樣がとう〳〵……」

「えゝ」

見られじと俯く膝にホロ〳〵と。「お可愛想」の一言も出ぬ、母樣はぢつと私をみつめ乍ら

「お若い身空で……」

堪へ切れずつと立つて机の傍に行く。あゝ月岡樣、月岡樣、お父樣のお手紙をまたくり返す、「生前御交誼を蒙り候倅正治儀……」

「病中も屢々御見舞狀に預り難有奉存候、御返事可致旨小生より促し候も今樣の次第にて何分筆をもつともいやと見え、終に御無沙汰に流れ候儀、不本意千萬に御座候」

胸をかきむしられる樣で、泣くにも泣かれぬ。死にたくはない、生きたい〳〵とお手紙の度に有仰つた、あゝ春秋遠きおん身にしていかばかり殘り多くおはしましけむ、御最後の樣のあり〳〵と見えるやうな。……

……

「病院はしづかです、折々死と云ふやうな事を考へます」つて、あゝ「おかはりはありませんか、お母さん

もあたつしやですか」とたづねて下すつた私等は丈夫でピン／＼して居るけれど、君は、君は、つひに逝き給ひしか……。ほつと息ついて縁の柱に凭ると、母樣が、

「この頃はよく若い方が引つゞいてお亡なりなさるねえ、二郎樣もおとなしい方だつた、月岡樣もおとなしい方だつた、けい子樣もあんな方だつたから……」

「中山樣や木村樣のやうな口惡連中は大丈夫ですね」

「お前も身體を大切にしてくれなければいけませんよ」

また新らしい暗涙が湧いて、わざと足の先で調子をとり乍ら小聲でコロチンを歌ふ。

新體詩がお得意ときいたけれど、私には見せて下さらなかつた。「うつむきてもの云ふ人と波の音と……」そゞろ戀しき春の雨かなとあぶら流るゝ青柳の御自筆ハガキになつかしい歌かいておよこし遊ばしたも夢となつた。

「月岡樣は丁度厄年ぐらゐでせうねえ」

「えゝ」（六日）

＊　＊　＊

晴れた日、曇つた日

山田邦子

眞紅だ！眞紅だ!!血の色よりも……美しい華やかだ……と見る見るうちに灰色になつて來る、あゝいやだ壓へ付けられる樣だ、えぐつても！えぐつても、灰色！灰色、あゝもうから成つたのだ、から成らざるを得なかつたのだ、からだ、からだ……青味を帶びて來る沈んだ青い色が、靜かに震へてゐる、夏の朝の草の樣なしめやかなうるほひ――。灰色がだん／＼とから成つて來て、之こそほんとの色であつたらうと息をつく間もなく、又眞紅、直ちに此度は青味を帶びて來る、又灰色。のびたと思ふと縮んで了ふ、ぐつたりしたと思ふと、又張りつめた纖維がかゞやく、不思議にじれつたくつて目をすゑて、よく／＼見たが之は無色透明のもので只周圍の空氣の運動によつて現れる色彩を、反射するのであつた。此の不思議なものは私の心であつた。（ある日）

「お孃樣か奧樣かお助けなされて下されや」――見れば五つ六つの女の兒、眼がくる〳〵と賤しげに大きい、「お助けなされて下されや――」恐らく此子の一生は此一言で呪はれて居やう、血も、肉も、靈も、此らな蟲の樣なもぐり込みたい精神のうごめきに囚はれて居る無智の子供の一生を思つて私はふるへ上つた。（上野公園にて）

電車は赤坂見附上に向つてゆるい進行を始めた、と一列の騎兵十數騎、劍を鳴らして彼方の横町に入つた。人は一寸立ち止まつて無意味な笑みを目に浮べて見送つてゐる。武を以つて建つて居る時代――私はふとかうして佩劍した兵士が一日に何度となく列をなして市街を練つて歩いたと言ふ事を物珍らしげに聞き耳をたて〻居る子供の顏が胸に浮んだ、これは私の子か孫か――しらず！たゞ私の血は引いて居るものであるらしい。（ある日の午後）

櫻の花が眞白に咲いてゐる、心の底から春が來て、たゞ故もなく外に出た。私の胸には一杯の血が盛られて有つた、そして我以外のもの〻どんな微かな響にふれても、涙が立たずには居ない、こぼれずには居ない程、滿たされて有つた其心。されば私はきはめて靜かに、一歩〻〻一歩、地上を踏んで滿ち溢れた春の空氣の中をさまよつた、佛英和女學校の寄宿舍から、戀をする人の息の樣に物言ひたげな光が流れて居る。ふと私は其れを仰いで、ハツと瞳を地にそらすとだん、「ホ、ホ、」と閉ぢられた窓をもれて不思議な程意味の不可解な、其くせ何んでもなく洩らしたらしい若い女の笑ひ聲……私の頰にはたまらず熱い涙がハラ〳〵とこぼれおちた。（春の或る宵）

女が處女を守るのは一面から言つて本能的である、と思ふ。男は容易に彼の女は誰れ〳〵と關係が有ると言ふ刹那に、ずでに黑い影がひらめくらしい。私は誰れ〳〵は操を汚したと聞いてさへも其人がそれまで處女で有つた場合どうも其れを信じる事が出來ない、女が處女を守る強い力……あゝ此本能的に強い力――かう思ふとき私は自分を抱きしめて眞心からの感謝を捧げる。（或る日）

山下門の停留所の木に倚りかゝつて夕刊を賣つてゐ

る五つ六つの男の子「報知、やまと、中央の夕刊――夕かーん――かーん……」と人なき時には「かん」のゆくゑを不思議さうに考へてゐるのを見た。私は此れを見て、或る時、或る人が言つた。「子供の虐待時代、子供の使はれる時代」と言はれた言葉が今更のやうに胸に來た（或る日）

雪が降つてゐる、ハラ〱と夜に成つた。信濃に住んで居つた頃、こたつの暖い中にくるまつて更けてゆく白い靜かな夜の深い沈思冥想に己を忘れた十七八の頃を思ひ出して、ふと涙ぐましうなつた。仙子さんが訪ねて來て雪見に行きませうと言ふ、二人は電車に乘つて尾張町で降りた、青や、赤や、紫の灯の中に、チラ〱と粉末は飜へつて、冷いガラスに幻の樣なもの影を動かして居る美しさ、



日比谷にて　芝中野こま

絶えず人は此中に浮び且つ消えてゆく。二人は無言で新橋迄歩いた、ステーションのとよめきに誘はれて、其方に行く、下ノ關行の夜行列車が今に發車する處、忙しさうに淋い足音が入り亂れてゐる、汽車の出るのを見て、火にあたらうと急に物靜寂に成た、構内の婦人室に入つた中央のテーブルに熱海寄贈とした白梅が匂つてゐる、「もう梅が咲いたのね」「熱海よ」二人は何となくそばに寄つて、其匂ひをかいだ、ガラス窓の外には雪がなほしきりに降つてゐる。（一月二十日）

人間同志であるからと、物言ひ合へば直ぐ手を取らうとする、遠ざければ心ゆくまで陰口をきく、人格がどうの、品性が何んのと、口で立派な事を言ふ男にかぎつて、此種のものゝ多いには驚く。二月の「婦人く

らふ」に婦人記者の末路とかして其一節に「仕事のない時は男記者に翫弄れたり、嬲られたりして」云々と言ふ句が有つた。彼を書いた人よ、どう言ふ積りで有るか、私は彼れ程、男自からの價値をさげた言葉はなからうと思ふ。婦人の職業問題は既に空想ではない、事實である。何事でも事實と言ふ事をないがしろにする程愚かな恥べき事は無いと思ふ。私は此意味から云つて、或る種の男子に深く廣い意味から言ふ、道德の觀念の一層進まん事を期待して居る者である。（或る時）

濁り沼の中に青味どろがどろ〳〵とうでめいて居る、傍の草は皆ひよろ〳〵と、石ころの間から生えのびて、蒼ざめた濕つぽい空氣が、やつと生命を續けて行かれるだけに流れ漂ふて居る我が世のどん底の一劃。夜天には幼ない日に親しかつた多くの星が、正しい道をめぐつて定められたる座に輝いてゐる。「私は見に來たゞけです、直ぐにこゝを去ります」から言つて濁づた沼、青味どろ、ひよろ〳〵の草を、又じつと見つめたまゝ、太い息をついた。（或る夜）

陰と陽と合せて電氣が發する、女の聲と男の聲と合せてほんたうの祈が起こる、僞と眞とまじつて倫理が生ずる、こんな事を思つて見た。

眞實と言ふものは唯一つで有る、何物もまじへない自然其まゝの姿がそれである、あらゆるものが滅びて、そこに眞實が一つ殘る、ほんたうの自然の姿がそれである、こんな事を思つて見た。

電車が走つて居る東京市街にも、人足のちよつとかからぬ處には、直ぐに草が生える。裸體で野のものを食つて生きやうとまで自然を愛する人間に來るものは眞實の死である。自然に人工を加へた處に活動が起る眞實に×を加へた處に永遠の生命が働く――こんな事を考へて見た。（或る時）

髷の形

東京にて、此頃髷形の陳列をなせるところありしが、その種類には左の通りの名稱あり。

丸髷。すべらかし。いびし。かつ山。大原女。太夫横兵庫。束髮。福良雀。お初髷。投島田。禿島田。都おしどり。片はづし。太夫五兵庫。文金島田。天神髷。蝶々。奥女中。竹の節。おしどり。かけおろし。三わげ。ばい蝶々かせ島田。

文藝消息

大阪より

草村君子

△店頭の雜誌

瓦斯の灯の青く輝く、夜の書店の前は澤山の群集、色彩とり〲の新刊雜誌は、頁の香なつかしく店頭の花のやう、若い人達は皆手に取り上げて見てゐます。賣行の宜いのはどうしても婦人雜誌ですね、其次は文藝倶樂部、實業雜誌も能く出ます、と書店の主人は云ふ。艶やかな丸髷の、若々しい奥様がと見かう見、『あのう、婦人世界の増刊が來てますか？』『へい、參つて居ります……女學世界は如何で』で女學世界と二冊、その白い手に渡される。弦齋の夫婦論や何々實驗談の讀者らしい。然し若い人達に讀まれるのは矢張り女子文壇、三田文學、スバル、文章世界などで、婦人雜誌は男子にも澤山の愛讀者？を持つてゐるとのこと。『劇と詩』、『新思潮』などは參りません。『創作』は一時大分出たさうですが此頃は頓と出なくなつた、『學生』も以前のやうなことはないと云つてますのよ。『新小説』『婦人くらぶ』『婦人界』などは其次位、此頃に成つてから『演藝畫報』『歌舞伎』などの劇に關したものが能く賣れるやうになつたとのこと、近頃は若い人達は劇でなくちやならない樣に騷いでゐる爲め此處まで影響するのでせう。夫から近頃此土地で發行になつた純文藝雜誌『白楊』も一般はどうか知りませんが、女學校、中學校位ゐの若い人々に大變モテてゐたやうですの。

△純文藝雜誌の讀者

クラスのお友達など、よく集ると、やれ詩人がどうの、文學がどうのと被仰るけれど、眞實に解つて被仰る方はさう無いものねえ、文學者の名前だけは感心に御存じで被在るけど、どんな風の作品をお書きなさるかてんで御存じがない。先日も與謝野晶子さんが小説をお書きになつてゐるつて云つたら、不思議さうな顔をして被在つた方もある。

まだ大抵な方は、幽芳や鏡花、天外、蘆花などのお作を好んで愛讀なさる。いまだに手垢の着いた『不如歸』『やどり木』などが人々の間を轉々してゐる。

然し女子文壇だけは皆さん秘かに讀んで被在る、何故つて？ほゝゝ學校で止められてるんですもの、隱れても讀みたいのは不思議じや御座いませんわ。

でも此頃は追々『新しい女』と自信して被在る方々が出られました、個人主義、ナイヒリスチズム、自由主義的言論がなかく〵やかましう御座いますのよ、但し夫はお友達同志の間で口だけの……。

で、隨て投書家なんかは餘りありません。男學生でも矢張り學校で讀むのを禁められるもんだから好奇心で購讀する位の程度が多いやうですの、そりや中には未來の文豪を希望する熱心な方もありませうけれど、眞實熱心な愛讀者、文藝鑑賞家は、反つて前垂掛で算盤を持つた人や、替り色のチヨツキに背廣を着込んで、綺麗に磨いた靴を鳴らす銀行會社員に多いとのこと、是は書店の主人が口を揃へての話ですから間違ひは御座いますまい。實際電車などで羅紗の厚司に羅紗の前垂をした青年や、オーバを着た若紳士がスバルや太陽の文藝欄などを熱心に讀んでゐるのを見掛けます、大阪以外の地では見ることの出來ぬ現象ですね、ま

つたく／＼

何時だつたか、お友達の方と一緒に天王寺公園に散歩に行きましたところ、或る繁つた樹木の下のベンチで縞の羽織に前垂といふ純商人風の若い人が何か熱心に讀んでゐました。通りすがりに能く見ると、どうでせう詩集の『邪宗門』じやありませんか、私吃驚りしましたわ。

▲作家と雜誌

作家と云つても眞實の文學者とは違ひます、實の作家はおても皆中央の落武者で、新聞社裡に隱れてゐるに過ぎません。此處に云ふのは廣い意味でいふ投稿家のことです。尤もう中央へ出ても耻しくないといふ人達（とまあ敬意を表して置きませう、近き未來の文豪ですもの）で、文學愛好家に名を知られてゐる人、雜誌に名を出してゐる人達のことを少し書きませう。然し棚下しではありませんから御安心遊ばせ、おほゝゝほ。

實は書店の主人から內々聞いたのです、と云ふのはさう云ふ人々が一團となつて小さい純文藝雜誌を發行して被在るので、その販賣上書店と密接關係があつて書店の主人は能く知つてゐるのです、ほゝとう／＼白狀しましたわね。

都會詩社といふ結社で『都會』といふ雜誌が出てゐます。是は本誌にも一度文藝消息欄に出てゐましたが、菊二倍版の表紙がイブセンの顏の寫眞版で、書店の店頭に何時でもぶら下つてゐます。總六號活字で若々しくて中々面白う御座います。與謝野寬、晶子、茅野蕭々、雅子さんなどの作も載つてゐます。同人は、

矢澤孝子樣。お年はもう二十八九、小柄な勝氣な方とのこと。昨年歌集『鷄冠木』をお出しになつて發賣禁止になつたので、『創作』や『讀賣新聞』に喧しく響いてゐましたことは皆樣御存じでせう。他の方々の姉さん株。

花岡桃崖樣。高等醫學校の今年卒業なさる方。

段谷秋洋樣。此方は前垂。同人の中で一番筆達者で、『スバル』や『創作』で中々振つて被在る、私此方のしみ／″＼したお作が一等好、なつかしさうな方。

百田楓花樣。下駄屋の息子さん、一月に歌集をお出しになりました。

北村不泣樣。有名な牛肉屋の若旦那。

宮飼　榮樣。銀行員。俳優のやうな人、演劇通で劇評家で役者にお知己があるのださうです。

田村華陽樣。新聞記者。二十七八の人。

宇崎純一樣。畫家で、正月スミカスカードお出しになつて女學生に大モテで直ぐ賣切れになつて仕舞つた、夢二さんのやうな繪を書く人。以上の人が又『白鳩』といふ小說雜誌を出して被在る。私は『都會』を每號讀んでゐますので消息は知てゐますの、隱れた愛讀者のあることは、よもや御存じではあるまいと可笑しく思ふ。

その他本誌へ投書なさる泉州の金田代志子さんも社友に這入て被在る。此方は或は男子ではないかとおもふけれど未だ確とは分りません。

每月一回都會詩社で歌會が催されます、昨年は與謝野寬、吉井勇兩氏が出席なさいました。

▲新聞の文藝欄

大阪朝日。堅實主義の同新聞は、僅か日曜附錄に依つて時々文藝創作を見る丈です、夫も四五年以前の作物のやう、櫻岸派歌人の本城で、是も每月一回歌會を開きます、然し老人が多いとのこと、段谷さんのお作が時々載ります。

大阪每日。家庭婦人向の新聞で、幽芳のパリー通信が評判。純文藝の作物は餘り見當りません、時々晶子さんの歌が載る位ゐのもの。

大阪新報。服部嘉香氏の文藝批評が載ります、大阪で一番此方面に力を入れる。

大阪時事。文藝欄はありません。四新聞共劇評はから駄目、東京のに比べて雲泥の差があります。役者の手で左右することの得る藝評丈です、新聞が斯うですから新社會劇團が來た時なんか、まるきり客が無かつたのも無理がないと思ひますわ、で、私は東京朝日と讀賣とを取つてゐますの。

右の新聞雜誌の外に俳句の方で寶船などがあり、青々、露石、巨口などの俳人がゐます。婦人の方で新しい文藝の投稿家なんてちつともありませんね、本誌の改野さん辻井さん位ゐのものでせう、以前は木村春江さん、木村花子さんなどが羽振つて被在つたのに。

では皆樣、新しい文藝の爲めに本誌の隆盛を祝福いたしませう。

福德に、天滿つ神の名をすぐに、天神橋と行き通ふ、所も神のおまへ町、營も業も紙店に、紙屋治兵衛と名を付けて、千早ふるほど買ひに來る、かみは正直商賣は、所がらなりしにせなり。夫が炬燵にうたゝ寢を、枕屏風でかぜふせぐ、外は十夜の人通り、店と内とを一〆に、女房おさんの心くばり、日は短し夕飯時、市の側まで使ひにいて、玉は何してゐることとぞ、此三五郎めが戻らぬこと、風が冷たい二人の子供が寒からう、お末が乳の呑みたい時分もしらぬ、阿房には何がなる、しんきな奴ぢやと獨り言――(近松門左衛門)

活動寫眞の印象

平塚白百合

それは極暑い夏の最中の八月だつた。錦輝館の左側の椅子によつて天井ではまはる白い圓形の紙のやうに見える旋風器の人工的な風をあびて、金扇は單重帶の間にさした。

フロックの辯士が、愛の女神の映寫をのべて壇を下ると、かはたれ時のやうなくらさに扉がしまる。

何處からともなく幽婉な輕いピアノの音が夢かのさまにフワ〳〵浮き出てひゞく。

映寫されたのは曉の天界の光景であつた。紫の雲がわく中に霞のやうな白絹肩からなげてスックリと丈高い。腰にからんだ紫のスカートは長くゆかに引く、くづれさうな金髮をやはらかにさゝへた水色のリボン。右から、左から、種々の色衣つけた女神達が現はれる。かてまれて肉色の波うつ七つ許のみ子は、もろ手をひろげて、ベヌスの紫のもすそにからんだ。他の女神は退ぞく。いだきあげて接吻する。

次々に一旦退ぞいた女神達は、月桂樹の冠、白羽の矢十本餘のえびら、小さき弓。み子は女神達にかこまれてよそほはれた。

いみじき美しさのキユーピツト、ベヌスの女神は再び抱いて靜かに室を出る。

と、大理石の廣い〱石段四五十段。見上ぐる宮は二抱へ程の圓柱そびえて。ベヌスの女神はキユーピツトを抱いて蓮歩靜かに石段を下る。後に引そうて女神達が樂器をとつてしたがふ。

ザブライムな美しさ。石段を下りつくすと、女神はふたたび口づけして、キユーピツトを下界へと旅立たせた。

とり〲の樂器から起る夢の音樂!! かる〲胸にふれる。恍惚と見惚れてゐる間に、もすそ引かれた女神は石段をのぼる。引具された女神達も後へにつゞいてのぼる。右に圓柱の奥深く歩む光景。只うつとりとした。形容の言葉もない、讃美の辭もつくせない。

と見るとこゝは花園の一部で、遠くグリシア式の建物を見せ、すべて下界のさま。花園のそこには背を向け合つた男女が、快よからぬ面持して立つてゐる。女はかすかにすゝりないてる。男はツト歩み出した。女はと見るとはせよつて手をとつた。女はせつにねがふやうなうるんだ瞳をあげて男の手にすがつてゐる。けれど男の氷のやうな心はとけさうにもない。はては女を門外につき出さうとした。

紫や、黄や、紅や、白の花を分けて現はれたのはキユーピツトであつた。

まるい星のやうな瞳はかゞやいて、ダリヤの花影から小さき白羽の矢はとんで男の胸に射られた。

女は門扉にすがつて力なくなげいてゐたが、瞳をあげた。もう涙のうるんだ瞳は何となくかゞやいた。

とバネにはぢかれたやう男はフイと四邊を見廻した。さうしてすばやく身をひるがへすと、かれは離婚んとした妻の頭をいだいて口づけた。女のやさしいさうして巧みな驚きの表情。

キユーピツトは花の中にかくれる。

よろこびにみちた夫婦は抱擁をつゞける。

次は落日の西空、血のやうな片田舍の景。束ねた藁に腰かけて老夫婦は、かなしさうに明日の一日を如何にしたならばとかこつ。もう愛情も色つやのやうに枯れつくして、二人は只生きてゐる許と云つたやうである。

刈られた麥畑の切り株の白い間の一路、靜かにくるのはキユーピツトである。

肉色の服は晩風にゆられて、近よると見ると小さい弓はしぼられた。

老夫婦は夢からさめたやうに、手と手ととりかはした。さうして再び青春の血をどる若さに返つたやうに相抱いた。

場面は變つて室内となつた。壁際のデスクにばらの花がオレンヂに美しい。

とり亂された室内には、スカートの短かい女と男といどみ合つてゐる。

すぢは夫が出かせぎ中、他に情人をこしらへたと云ふ疑である。

妻はふとり肉の身を動搖させて泣く。夫は手を上げてどなりながら打すゑやうとする。

この時、壁際から音もなく出たのはかのキユーピツトであつた。

ゴールトヘヤーのふさ〳〵亂れるのを、小さい指でかいなでると、一すぢの白矢はえびらからぬかれる。

もうえびらには一本もない。

ゆづるが眉のやうに圓をかく。ハッシ、矢は夫のハートをしたゝかにいた。

ふたゝびよみがへる愛の泉、うたがひは夢ととけて愛は一層深くなる。

キユーピツトは靜かに戸口から消えた。

次は元にもどつて天界と、下界の境なる石段の景であつた。

ベヌスの女神は最下段にたゝずまれる。他の女神達は樂をかなでゝゐる。ピアノのかるい音！

とキユーピツトはつとめをはたして、紅のもゆるやうな靴も重げに小さい足をはこぶ。

ツト抱きあげた女神は、おもむろに頰ずりして、一抹の霞のやうなもすそを引きながら石段をのぼる。

次第に高く――。他の女神達も樂器を収めてつゞく――。夢のやうな宮殿。

終つてのち、間を置いて拍手するまで恍惚と人々は崇高な感にうたれたのであつた。

耳に、目に、深く美しい印象よ、カッと開かれた窓からさす白日に、私の意識はよみがへつた。

* * * * * *

田舍の質屋

葛の葉

質屋の内幕をいつはらぬ筆にまかせて、あらく可祝と御話致しませう、都會ではどんな鹽梅だか存じませんが、田舍の質屋と申ました處が、とてもてゝもと申すのぢやありません、先づ手近に私が日々見聞致しまする或一軒の事を申すのに過ぎません。

質屋と言ふ商業は、如何にも金持らしく人ぎゝは宜敷いが、實際内部に立ち入つてみると、さう〳〵ぬれ手で粟とも參らぬので御座います。質つてとうするんだらうと荒い風知らぬお孃樣はさう思召すでせうが、どうつて別に變つた事ではありません。品物を持つてお金をかりて、お金に利子をつけて返せば元の品物が手に歸ると言ふ迄の事でして、わけはありませんが、其譯はありませんといふ迄には、仲々經驗と實力がいるので御座います。一色や三色の種類ならまだしも、預る方の身になると、世間の殆どあらゆる物に眼識が屆かなくてはなりませぬ、實に六つか敷いので御座います。それにまあ例へて申せば、賣買價格今一圓あると見なせば七十錢迄位貸すと申さなけりや、置き人は仲々黒いので御座います、六十錢と言はうものなら、一度相談して來ますから、つて他家へ持つて行くのですからねえ、俗に質は半分値と申ますが、物によつては八分通り位附けてやらなきやならぬのもあります。着類では僧侶の衣、尼さんの衣、洋服等は身體に人々で違ひますから新らしくたつて値のきく物ぢやありませんが、また博多織だの、お召だの、高貴織だのと申まして、一枚でも十圓以上も貸して差支ぬのもありますが、昔氣質のお婆さんなぞ、へいこれは家の先祖から傳つた大事の羽織袴で念がは入つて居ります奴で、なんて言はれる日には實際御氣の毒です、二十錢位しかとも申されませず、木綿物の方が宜敷いですよ、とまあ逃げ腰ですわ。何が一番多いかと申せば矢張り衣類でして、中には反物のなりで來るのもありますが、次が蒲團だの、蚊帳だの、鍋、釜、火鉢、お茶椀、吸物椀、組物の膳、柱時計に懐中時計は申すに及ばず、荷車、人力車、大工道具、雨傘、洋傘、下駄、指輪、三味線、月琴、重箱、ハウピキン、古本、甚だしいのになりや、ちやぶだいや、お櫃、戸障子などをはづして持つてくるのです。中には軸や刀劍類を、銘が打つ

てあるとか何とかいつてきますが、さう〳〵眼の屆くといふぢやなし、おゝいゝ繪ですこと、金らんの巻物も古くちやほしくないから、紙表具の價で二十五錢かね、つて笑つてしまつて相手になりませんが、佛具やなぞ持つてくると可愛さうな樣で御座いますよ。するとこれ等をどうして置く事だらうとの御疑問もあるでせうが、その代り質屋では床の間だの、佛間だのと申して居られませんから、どの間もどの間も質物ならざるはないと申す樣な譯です。納戸から座敷、外の間、中の間、奥の間、店の間、廻りに戸棚やたんす等を幾本も置いて、貴重な品を皆入れるのです。並の木綿



代科田熊　防周　目き幼

物や一寸した物位は棚がかけてありますから、ずんずん積み込むので御座います。それで外の間なぞ學校の講堂の樣に天井なしにして、上へ〳〵と見上げる程積み上げますが、下積になつたのなんか出しに來られると、何千何百番といふ風に番わけで處がちがひますが、澤山の中ですから、控帳に何色の包とか早くみつかる樣に印がしてありますので、それを便りに探すのですが存外早く知れるので御座います。竹に早糸を七八寸づゝ附けて、番號、氏名、金高、何月と記いてありますのを、お金と一緒に渡した質札にあはせて出すので御

座います。今の其の下積のなんかですね、上手に引きださないと、上の方から質物なだれに逢ふので御座います、四十口も五十口も頭といはず顔といはず一時にぐらつとやられた日には涙が出る位です、でも命に懸る樣な事はありませんから御安心下さいまし。お豆腐半丁位の倉ですけれど、こゝへ來ると蒲團が又鍵の手に高くつんであるのですが、衣類とちがつて襷や紐位では結へられませんから、細引からげです、都合よく上の方のならいゝですけれど、下積のを出しにくると、重いのをあつちへ放りこつちへなげ、手が細引にすれる位ですよ、片方の棚には蚊帳や座ぶとんが、其向うに自轉車が幾臺も〳〵、二階へ行きや、膳箱だの、吸物椀だの、がらくた道具に交る百姓の道具、鋤や鍬まで、仲々振つて居ませう。庭へ來ると俥が四臺並べ四列十六臺に、そこに置けぬ處は物置にしてある空屋へ入れるのですが、護謨輪の俥など、ぢうたんばりとか、てれんぷ張りとか、ちか〳〵と顔のうつる樣なのが幾臺もあります。俥夫が俥を殺して何してやつて行くかと心配する人もあるでせうが、又そこに面白い處がありまして、まあ假に三人が、己もつもでりがこせぬ己も金がほしいといふ樣な時にはぢや一臺殺さうかな、よからう、くぢ引け〳〵、何八公手前ぢやぞ、うんそんなら己の俥殺せ〳〵、さあつて三人で十五圓借りや五圓づゝ使つて、二臺の俥を三人で使用すると、さう三人が三人仕事がある譯ぢやないといふのです、道には道があると、をかしくなるので御座いますよ。俥一臺と申ましても、つぶしの値で一圓七八十錢のもあれば、おろしたてなら二十圓のも三十圓のもといふ樣で萬事一概には參りません、時計だつて柱時計位に定まつた物はいゝですが、懷中持になると、からわかりませんのです。金側だといつてめつきのをつぎつけたり、銀側だなんてお里がみえたりするのを平氣の平左で出すのですから、アンクルだとかシリンだとか色々小言をいつてはお金を出させよう〳〵とするのですもの、それで少し餘けい貸すと仲々受けには來ないのですから。

どんな人がみえると申ますと、矢張り品物の色々ある如く色んな人がみえますが、山の神しか權の神とか言ふ井戸端會議員が御出張になるときもありますが、かういふ人は妻君がきつくて、亭主を多く使用ふので御座います。そりやたまには御身分のある方なぞ、ほんの暫らくとやりくりなさるのもありますが、極內密

でお取引申すので御座います。一面識の無い人はどうも事情上お氣の毒でもようお預り致しません、でうちの知つた方に紹介して貰ひなさる樣にとりはからふので御座いますが、餘り顏を知り過ぎて來憎い方など所謂、質置婆さんに若干の駄賃を出して來て貰ひなさるのであります。年に何囘位では御座いますが、東京角力の力士先生などがみえますと、これは名乘り丈で大抵はお預り致しますが、そりやその筈です、流れ歩く旅人とは身體の格がちがひますもの、お角力さんの無邪氣さと申しましたら私ほんとに好きですのよ。罪の無い事許りいつて、お上りなさいと言はでもさつさと上つて大あぐら、鼻うたで、お菓子でも出て居りや、さつさと召し上るのですもの、また來たよう、つて感心に名など覺えてらして、よびなさるのですもの。あなたお幾つおとし?、己か、己あ八、十だ、なんて皆なさんこの調子ですもの、仲々捌けたとよりは無邪氣な方ばかりですの。中には意張つた樣な事いふ方もありますけれど、それでお角力さんでない方でも質を上手に置く程の方は皆呑氣です。小半日も面白い事許りいつてからかつたり笑つたりしていらつしやるのです。山の神樣など質置く物があるのが、へんえらいのぢやなんて氣焰萬丈の方も往々ありますが、どなたでもうちへみえると笑つて歸りともなくなつた、なんて仰有いますが又私等もそれが嬉しいので、兄弟か親類の人の樣ですの。それでも大勢のうちには利子をねぎつたり、いやにねち〳〵する人が無いでもありませんが、そんな方は稀で御座いますから。中に面白いのはお金を持つて居乍ら質置く人などあるのですよ、どうしたのか?と尋ねますと、金貸せといはれたりするとない風をせねばならんといふのですと、色々底には底のあるものとみえます。期限は普通六ヶ月ですが、利息さへ入れて貰へば何時迄でも待つて上げますが、利子も入れずに待つてくれ〳〵と一年も二年もいふ人がありますが、利子でも馬鹿にならぬもので御座います。三十錢以下は一ヶ月一錢ですが、假に五錢の質とみてでらんなさいまし、利子が六錢ですからねえ、もう元金五圓以上になりますと、札に切手をはらなくちやなりませず、それに帳面が面倒くさいぢやありませんか。表の地質絹とか羽二重とか木綿なら木綿と、何色地何と何の縦縞とか横縞又は絣入とか、やあ大柄だの中柄だの、裏は奥が何で八つ掛がかうの、はぎがあるとか紋は何だとか、時計なら何形、無雙とか片硝子、何印

何番鎖は何一から十迄からうなんですのよ。債券なぞでも一々番號を記入するのですが、一口に衣類なぞ十枚も二十枚も行李へでも入れて、入らうものなら帳面はもらうるさいですよ。今の一品づゝ記入して、これは何程、これはいくらと一品毎に分流分けして總〆の場へ何十何圓と樣にしませにやならず。拔質がしたいと言はれや一度は規則上はいくくですし、鼠にでも喰はれると氣の毒したと自分の仕業か何かの樣に、質札には辨償せずとはしてありますが、そこは人情ですもの、利息位はふいになつてしまひますわ。旅で旅費につきたりして困りなさる人は警察署へ行つて、事情を警官に調べられて、漸く自分の物でもまゝになるのですが、若い男と若い女がかけ出したりして、さあ金につかへて自分の着物を、質になり賣りなりとしても、どこだつて知らぬ人から買ひも預りもしませんので、直きに捕へられてしまふのですが、それをみると無分別をしちやならんとよく思ふ事で御座います。若しも預かつたのが盜品なんかですと、警察署へ手續書をそへて、差し上げてしまはなくちやなりませんが、お前これはあれの物と思つて預つたか、と尋ねられますが、はあもう着ていらしてうちでぬいで行きなすつたものですから、なんてその通り申上ますと、着てきたとて油斷しちや駄目だぞ、きずは無かつたか、丈は何尺だと暗に尋ねる樣にするもんぢや、以後氣をつけてね、たゞで取り上げられるのは如何計りつらい事ですやら、もう一週間に二三度は警官が帳簿しらべにみえるのです。一圓かして二錢五厘貰ひますが、銀行へうちから利子を出し税金を拂ひ、帳簿にこまかくつけて、うまく行つて幾厘殘りませう、質屋といふも悲い商業です。夜分は心安い方を規則上お斷りとも申せませんから、蠟そくでもともして探したら、ほんとに馬鹿らしいので御座いますよ。でも私は店へなるべく行かない事に致しますが、それでも大晦日の晩なぞ、七人も八人も待つてみえるのに用心もありと、出なけりやなりませんが、二三年前の大晦日の夜でした。三時迄もお人があつて一寸たえたかと思ふ頃、足音がして戸が明かなかつて、盜だと父樣が一二町逃げて行くのを追ひなすつたら、驚くなかれです、年詞の名刺が、冷汗が出ましたの。それでどうかと申ますと、一月元日から金貸せの拔きたいのと小言をいつて來られるのです、けれどもなれてはおもしろきものです。何商法に限らず自分からきらひだてしてはならぬと思ひます。

地方女教師の受くる誘惑（つゞき）

名もなき女

馬鹿らしい、誰が返事なんかやるものですか、柳に風とうけ流して居ましたが、中には餘程熱心な者とみえ、三度、四度、五度、終には腹が立つてきて、其手紙を引裂いて唾してやりました。で先方も此上は尋常な手段ではとても動す事が出來ないと思つたものか、終には手を代へ品をかへて、あらゆる方面から攻擊否誘惑し樣とするのです。其一例を申しますと、すつかり方針をかへて、何々書物が若おありならば、一寸貸して下さいませんか、私の手元に新刊の書物が澤山あるから、御遠慮なく御讀み下さいと、白ばくれていつて寄越したのです。でも私は此麼場合、貸していゝ物かどうか、非常に迷ひましたが、ふと友人に、此麼時に何氣なしに貸したが、返された時本の間に、いやな手紙が入れてあつたと聞いて居たものですから、貸さないと決心しました。ですが其書物は私が持つてゐるのを知つてゐるのですから、まさかにないともいへず、貸さない事も出來ないから、據所なく先方在勤校の校長にあて一通を認めまして、事情を話し、私も可惜書物を空しく本箱の隅に蟄居さすより、讀んで戴く方が遙にいゝ、又書物としても、嘸滿足な事でせうから、校長樣からとしてなら貸します、何卒先方の意を害せぬ樣、よしなに取計つて下さいと申しましたら、間もなく私の意がよく解つた、尤至極だから何卒私に貸して下さいと、返事がありました。

が折あしく其日私は學校へ持參して居なかつたものですから、明後日(日曜)持つて來ますと、いひますと、では午後私の近所へ用があるから、序に寄つて貸して戴くとの事でした。で私もそこ〱に歸宅て出して渡せる樣にしてありましたが、ちつとも參りません、とう〱取りに來ませんでした。どうしても貸して欲しいのならば取に來るのが當然です、是を考へますと、矢張ある手段方便でしたのでせう。校長が中へ入つて居るものですから、切角の苦心も水の泡となつたかと、先方の心中を察しますと、笑止千萬に存じます。ですが私とても。まさか木や石ではありませんから、心を動された事もありました、何此人は極才子で文章家ときて居るのですから、いふ所が甚甘い、甘く形容なんかをして容易に夫とは知らさぬ樣、其苦心の跡があり〱と見えるのです。が私にも斷乎とした堅い〱

鐵よりも何よりも尙堅い信念があつたものですから、幸にして今迄無事に切抜けて來られたのです。此麼事は一度にして止まらないです。で私は大に覺りました、男子の野心は、なか〱甘くするものです、うかうかして居ると、甘くのせられて、臍を噛む樣な事になります。どうか親しい懷しい誌友の皆樣、御注意の上にも御注意遊して、決して此麼詰らない男子の手に翻弄ばれない樣數ならぬ身より祈上ます。

八重の潮路

△近頃巴里の貧しい裁縫屋の女で、創作の上手な人が現はれた。別段深い敎育もない、文學的素養もないのに、彼女の書いたものは驚くほど趣味に富んでゐる、彼女の生活は單純だけれど悲劇的であつた、生活の事實が既に小説的であつたから、書いたものも面白いのであらう。一般の文藝批評家も彼女を閨秀作家として認めるやうになつた。

△明治四十三年に於て、亡くなつた世界的文豪は、トルストイ、マークトウエーン、ビヨルソンなどであつた。

△來る七月にはサッカレーの百年祭がロンドンで執行される。

△オード夫人と云ふ人の書いた『ロバート、エルスミヤ』と云ふ宗敎小説は、非常な評判で、六七十萬部賣れたさうだ。

△『罪と罰』の原著者ロシアのドストエフスキイは、困つてゐた時には、二三日も食はずにゐたと云ふが、追々有名になつて、彼の死んだ時には會葬者が四十萬人もあつたさうだ。

△フランスのゾラが有名になつた頃、アメリカから講演を頼みに來て、旅費一切先方の負擔で、八回の口演料に八萬圓出さうと云つたのに、ゾラは斷つて了つたさうだ。

△西洋の文士の原稿料は、大抵一行幾許、一字幾許で勘定する。

△フローベル曰く、常に結論に導くことを好む人は、必ず事實を誤寫するものである、結論を與へることのできる者は神ばかりである……どの宗敎もどの哲學も神を有つてゐるやうな顏をして、無限を量り、幸福を授けやうとする、何たる傲慢、何たる狂氣であらう、それと反對に、偉大の天才と、偉大の作物は決して結論しなかつた。ホーマーも、沙翁も、ゲーテも注意深く物を繕ふことを避けた、そしてたゞ表現した。(Kー抄)

読友くらぶ

交　際

○海の彼方より

米國加州ロヲスアンシルス市
北ロヲスアンシルス街五〇八番地
西山シヅ子
Miss Shizuko Nishiyama
508. North Losangels St.
Loss Angels California
U. S. A.

遙かに太平洋の彼方より。小學校を中途で止しまして、父の許へ渡航致しましたのは六年の昔に成りました、今では當市ハイスクウルに通學致して居りますが、日本人の學友は一人も無く、月月着します本誌を又無き友と致して居る者ですが、諸姉樣方に當市の英字新聞や、マグジン繪はがきを御望みの御方は何品とでも宜しく御交換下さい、不束者ですが永久の御交際を願ひます。

○歌

山口縣都濃郡徳山町東舟町
久保山方　吉賀靜江

誌友の諸姉樣御無沙汰致しましだ、皆樣御無事で御座いますか、妾も苦しいく日を過して居ます、こんど妾廣く歌を集めたいと思ひます、諸姉樣何んな歌でもようございますから、面白いのをどしどし御知らせ下さいまし、御知らせ下さつた方には繪葉書差上ます、此度……それから、レターの交換も御願ひ致します。

○住めば都

近江國蒲生郡苗村山之上
寺島代富子

記者樣初め誌友皆さま。山と山との峡でさへも住めば都よ花が咲くと言ふ唄の如く、こんな淋しい田舎にでも都と同じ春は來ます、霞棚引く野や山に散歩に行くも面白いし庭に來て啼く鶯の玉を轉ばすやうな美くしい聲を聞きつゝ緑香薫る草餅を食べるのも嬉しいやうに思ひます、誌友の皆さまもお出でなさいませ、樂しんで待つて居ります。

○短冊交換

大阪東區絲屋町松屋町北入
田野靜子

本誌愛讀の御姉上樣私も短冊の御交換を願ひます岐阜の篠田とみ子樣備中の小見山春子樣岐阜の中島幸枝樣茨木の岩田よし枝樣本誌二月號で御名を承りました、何卒御交換を私は第一習字が下手で皆のお友達に笑はれる位ゐですから文字は誠に見にくきなれど皆さんに笑はれて追々勉强致すつもりなんです どうぞ御教導のほど御たのみします。

○御禮

神田區錦町一ノ十二刈谷にて
草野みち子

青々とした野山に花匂ふ春も間近になりました。先達は諸方の姉妹樣より美しい繪葉書や御手紙を戴きまして有難たく御禮申上ます好きな本も拜借して讀みましたが只遺憾に思ひますのは四十幾人と云ふ誌友便りの中で二十名餘り男性方が有ることです其方には失禮作ら返事は差上ませぬ只誌上を拜借して厚く御禮申上ます男性の方で本郷のH H樣、不肖は英米獨佛伊丁抹に朋友を有す併し未だ一人の女性だに無し幸なる哉誌上でお身と邂逅の榮をなんて振つたのがありましたネ、、必ず以後共姉妹の樣にくれぐれも

○始めて

金澤市土取場永町
村木かめ子

皆様なつかしう御座います私昨年の六月からの愛讀者なの何卒これから誌友として御交り下さいきつと〳〵永久に變らぬ御交際をおつゞけ下さいまし兼六園の繪葉書などどし〳〵御送りいたしますからねえ。

○朝鮮より

朝鮮京義線開城驛官舍一號ノ二
今村ふさ子

誌友御姉上樣姿も仲間入さして下さい妾今年とつて十八歳と成りました不束者でございます何卒末長く御玉章やヱハガキ寫眞の御交際を願ひますヱハガキ御送り下さつた御方には朝鮮京城名所ヱハガキと妾の寫眞とを早速御送りします。

○山の奥より

岐阜縣菅田町
中島幸枝

懷しい誌友の皆樣私は淋しき山里にくらして居る不束者です文藝には下手ながら趣味を持つ一人です何卒和歌新詩に御熱心な御方はお交り下さいな繪葉書でなくともよろしいから普通のハガキに和歌新詩など書いてお惠みを願ひます男子のお方は固くお斷りいたします。

○丹後に來て

新舞鶴町敷島通り五條東入
辻伊三郎方　菅　幸子

丹後の誌友諸姉樣よ、私も昨年九月よりなつかしい故鄕なる丹後を後に此舞鶴の海邊に只一人寂しい日を送り居る不束者で御座います、何卒萬事よろしく御教示を願ひます、そして皆樣、繪葉がき交換して頂戴な。

○歌と圖畫

大阪市東區東高津南の町百十三
淺野樣方　三輪とし子

誌友の皆樣よ私は昨年の十一月より此懷かしき女子文壇の愛讀者になりましたどうか諸姉樣よ永久に御交際を願ます又下手ながら和歌俳句及び圖畫等も致しますから御交換を御願申します

○千里眼になりたい

佐賀縣杵島郡六角村
山口しと子

私は近頃千里眼になりたいとつく〴〵思ひます先生方や誌友の皆樣方を透視しておなつかしいお姿に接し度う御座いますどんなに樂しいでせうだけど私にはどうしてもなれませんから、せめて御手紙なりとも戴きたう存じます。どうぞ永久に御交際下さいな切に御願ひ申します。

○生田流の先生

本鄕千駄木林町百四十九
山本壽賀子

誌友の皆々樣私ね只今は誠に氣樂な身の上で日日諸雜誌と音樂とをたのしみに致して居ますのよだけれど私は京都で生田流の箏を少々習ひましただけなのそれでね今後深く〳〵勉强致し度と思つて居ますのよ皆々樣の中に若東京で生田流の名高い先生を御存じでしたら何卒お敎へ下さいましね御禮は必ず何か雜誌を送りますそして皆々樣お近い方はお遊びに入らつして下さいまし。

○眞情ある方に

德島縣板野郡堀江
檔野かつ子

賴母しき誌友くらぶの皆樣御變りはなくつて私は只今はじめて投書いたしましたからよろしく願ひます私は當地の高等女學校を昨年卒業いたしました此頃は此淋しい片田舍で樂しみとてはありませず只音樂を趣味と致して居りますの何卒眞の情に富む方御文通をとこしへに願ます

○鴨川の畔より

京都東紫竹大門
要司村福子

清き流れの鴨川のほとりに千鳥鳴く音を聞くを何よりの樂しみとする身に變りました華かなる今出川から全く詩趣に富んだ京都の四方の景色を手に取るように眺め高き一つ家に日毎友の訪れやお便りを待つて居ります誌友の皆樣、京都のお方は勿論、地方の誌友もゆつくりと見物に入らして下さい、カラクリのように變る一日の景色をお見せ致し度う御座います又不在中お手紙下すつた方やお訪れ下さつた方々よ殘りなく聞いて居るつもりですが中にもれたお方は何卒お怒りなくお願ひ申上ます。

○待つてゐます

美作國苫田郡奥津村
水田邦子

紙上の皆々樣よ私は一度誌友くらぶへ投書しまして皆樣へ御願ひしましたが田舍者と思し召てお交り下さいませぬので甚だ遺憾に思つてゐます哀れと思すお方がございますればどうか交りをして下さい私は母と二人で淋しく暮してゐま

ず一日も早く皆樣からレターのくるのを樂しみに待つてゐますどうか後生ですから。

○茨城縣のお方へ

茨城縣斯治郡栗原村大沼織太方

本橋精子

妾から申し上げては恐れ入りますけど、皆さん本縣の愛讀者は此の文壇に活動してをらない樣ですね、よしあつたとしてもほんの少し僅かお一人かお二人、全く殘念でたまりません、少しやつて見やうぢやありませんか、妾なんか察發がないからどうせ横座辯慶なのですけど、皆さん御投書をなさい及ばず乍ら妾も投書しますからみなさんもね、をりをりはお手紙頂戴ね。

○女の名の男子

渓香

誌友の皆樣から葉書や御手紙戴きましてまことにありがたう、けれど女の名でお手紙下さる男子の多いのには實に驚きました、父兄もきびしくございますから御斷り申しますどうか惡からず

○編物

岡山縣吉備郡足守町

宇野淑子

皆樣よ私は編物などの細工が大そう好きでございますが、編方を知りません故悶なり、ひぢつきなりお持ちの御方は御惠み下さいませ、お禮には繪葉書又は雜誌其他相當の物で必ず致します。

○御禮と所望

土佐勝賀瀨局下

かげ法師

皆樣御かはりはありませんか、私事一月號で御交際を御ねがひ申しましたら方々の皆樣から美しい畫はがきや玉章御送り下さいまして大分淋しさも忘れましたお禮申上ます、併し私の名が戀なものですから男子かと御疑ひの御方もある樣ですが決して私は男子ではありませんから御安心下されます樣甚申かねますが一髙の寮歌御存じの御方はどうか御知せ下さいませんか御禮は當地の名所畫ハガキにて申上ますそれから地方の婦人、都會の婦人、何れにても御送り下さる御方はございませんでせうか、きつと相當の御禮致ます。

○園藝と文藝

茨城縣筑波郡髙城村苅間篠崎方

星野親子

養鶏や園藝に趣味を持ていらつしやる誌友の姉樣方と御交り致し度う御座いまず俳句和歌などの御交換も願ひます。

○おしやべり

備中春子

待ちに待ちし短册交換、どんなにか樂しみましたか、二月號を手に致してまづ終りからくり初めました。

麗々しくさも賑々敷一對になつて發表される事だらうと思ひの外とうとう口繪の處までもくりましたが一向かげも形もございません不思議で堪らず又も終りから一々丁寧に眼を通しましたムいましたムいましたとも只の四人、ホヽヽ可笑やら羞かしいやら、茫然自失全く文壇を手から落して仕舞ました、彈機の切れた時計のそれの樣な顏をして啞然たる事やゝ暫らくだつたと思し召せ御らんにならない事ですからさうでもムいますまいけれど御らんになつてたらきつと可哀想なとお思ひ遊ばしたでせう、本當に私の失望たらありませんでしたよ、お轉婆だとお笑ひ遊ばすか存じませんけどもわざわざ計畫遊ばした記者樣へも、何だかお氣の毒でとんだおしやべり致しました、ごめん遊ばせ。

○能登より

能登國輪島町河本平七方

利枝子

親愛なる諸姉樣方へ御願ひ申します妾は能登の果に住む不束な田舍娘ですが何卒親しき御交りを御願ひします、私は姉妹もなく一人ぼつちですから妹と思つてかあいがつて御玉章繪葉書などを下さいな惡筆で見苦しう御座いますが屹度御返事を致しますよ。

○ダリア

越後南蒲原郡中野村

岩本芳子

園藝好の御方にお願ひ致します、皆樣の御手元にダリア(種子)の御不用のが有りましたら、御めぐみ下さいまし、又球根にてもよろしくありますから、何卒々々。

○後樂園より

岡山市難波町五七

西田花子

おなつかしき誌友の姉上樣よ、日東三大勝園の隨一と言つて宜ろしい後樂園は妾の住んで居ます所から程遠からぬのよ、そして日曜日には何時でも友達と一緒に小山の芝草の上に寢たり、櫻の樹の下で話したりして樂しく暮らして居ますのよ、妾繪葉書が大好きですの、殊に慈はし

い誌友の姉上樣方から下さつた玉章や美しい繪葉書を見ては嬉しくつて、嬉しくつてなりません、何卒姉上樣繪葉書を送つて頂戴な、そして幾千代變りなき御交をして下さい御返事には蹊はしい後樂園の繪葉書をきつと差上げますよ。

○文才のある方

磐城國伊具郡丸森町西二十五
齋藤すみれ子

私事本年一月より本誌愛讀者となりましたから以後よろしくそして本誌愛讀者の方で文才のある方男子でも女子でもかまひませんから御交際下さいませ又御送下さる方は雜號で御ねがひ申上ます。

○御通信

久留米市通町五丁目
新野米子

おやさしい誌上の諸姉樣私も本誌の愛讀者となりましたどうぞ皆樣の中で誠の妹と思召して永久に御交際下さる方は御地の面白い事や變つた事を御通信下さいましな私も必ず御返信致しますわそして一時的でなくいつまでも〳〵眞の姉妹として淸く御交際致したいので御座います

○初めて

小石川區餌差町三五柿沼方
飯田八重子

御願ひ……誌友の姉樣方に御ねがひ致しますわ、妾も、この新しい年と共に、女子文だんの愛讀者になりましたのよ、まだお交りなぞとはどんな事かも存じませんでしたの、之れが始めての投書なのですわ、何卒末久しうお交り下さいませ、けれども何も存じません不束者で御座いますのよ、其代り御玉章下すつた御方には、きつとお返事差しあげます、さよなら。

○朝顏の種子

大阪市南區天王寺大道三丁目
松澤豐子

誌友の皆樣、朝顏の種子が入用でしたら女子用書翰か、はがき七枚以上）御送り下さい、朝顏種子混合を送ります。

○

羽前東置賜郡小松町
高橋百合子

加賀の小松の御兄姉樣、伊豫の小松の御兄姉樣何卒永久に御交り下さられる御方御交際下さいませ、なることなら同姓の御方に多く御願ひ致します。

○筧のしづく

皆樣の御內にてヴアイオリン御不用の方がありましたら定價の半額位にておゆづり下さいませんかもしありましたら前かたあらかじめ御一報下さいまし尙あまり古く無いのを望みます私の住所は長崎市本石灰町五五松尾貞子樣へお聞き下さい。

○

仙臺市仲杉山通
增澤邦子

御なつかしき皆樣よきさらぎになりましてからは袖ふく風も何んとなく春めきましたのねえ、姉樣方には御變ない事、先達中はこんな不束者でもレター御惠み下すつた方が御ありでしたが其際は御返事も差し上げませんで相すみませんでしたのねー、あの時は少し取り急いだ事がありましたためですからどうか惡しからず思召して下さいな以後はドシ〳〵御手紙いたゞきます但し男子の方だけは御コトワリ致しますわ。

○

大阪市西區本田一丁目
佐藤長次郎方　露子

誌友の皆樣私も本誌の愛讀者で御座います誠に不束者で御座いますが親密に交際して下さる方が御座いましたら何卒玉章の御交換を願ひますそれから私の手元に女學世界や婦人世界女子壇などの古雜誌がたくさん御座いますが、皆樣の內にハンカチーフ、ヒヂツキ、レース編物などの御持ち合せの方は御交換下さいませ。

○

福島縣若松市新屋丸山方
樋山伊勢子

皆樣お願ひがございますの妾ね昨年の女子文壇の師走號を買ひそこねましたの、で皆樣の中でお持ちのお方は十日間計りお貸し下さいませんかお禮はきつとしますわ。

○

本鄉區湯島一ノ十四神谷樣內
一戶志輝

私は昨年から左記に參りましたから何卒以前の樣に御交際下さい併し三四年前に妹の死んだ時に大分愛讀者に寫眞や細工物贈りましたが只取や男の方に取られ切りで實際殘念でしたよ。愛讀者の方々は注意に注意が肝要で御座います。

○

下野今市町小倉の里
高村瀧子

誌上の姉上樣追々暖かに向ひますね姉上樣方中にて暑中休暇に日光へ御出になります方はぜひ私の町へも御立寄下さいましな日光停車場の手前より二宮先生の御墓がありますしまた日光まで行く道は兩がはが松並木でございます故御徒走遊ばしますとほんとうに凉しくて愉快ですわ日

光見助しなけりや結構ではなくつてよ。

○　神田元柳原町二六山本房吉方
　　　　　　　　　　　　　鳥飼君子

懐はしい誌友の諸姉上樣方よ妾は去年から本誌を愛讀して居る者ですが今まで皆樣と御交際申した事は一度も御座いません何とぞよろしく御願ひ申します誠につたないものですがいつまでも〳〵御交際下さいませ。

○　大阪市天王寺生玉前寺五三三四地
　　吉田方　　　　　　　　辻井信子

誌友の皆樣の御手紙は私冬期休暇に歸つて一度となりまして一々御返事を致し※た方もありますが不悪許して頂戴、轉居致しましたが尚今後も相變らず御交際して下さい。

○　仙臺市空堀町五番地井上方
　　　　　　　　　　　　　佐藤蔦子

おなつかしき皆々樣私は三ケ月前に東京より當地に參りました不束者ですが何卒お玉章おめぐみ下さいませおねがひよ。

○　大阪西區江戸橋北詰北入ル西側
　　洋畫家馬淵方　　　　　本間寥鶴

誌友の皆樣よ私は今年始めて御交際を願ひましたら男子の方から大分御玉章戴いて困りましたよ若し堺の高女の御方樣で住吉の高野絲子樣及び高野靜子樣の御消息を御知りの方は御通信下さいな絲子樣の御友達の御方はどうぞ皆樣も御交際下さいな肉筆繪葉書の御交換致しませう。

○　滋賀春子

繪はがきや玉章の交換をお願ひ致しますや早速におなつかしき玉章や繪はがきを御送り下さいました誠に有がたう存じますこゝにいち〳〵お名はしるしませんが五十八名のお方に誌上を拜借致しまして御禮申上ます何卒以後もよろしく

○　埼玉縣川越高澤町養成所
　　　　　　　　　　　　　いと子

栃木縣と名古屋の誌友諸姉樣何卒永久御交際下さい殊に名古屋は私の第二の故郷です昨年六月當地に參りましたドシ〳〵レターの交換を願ひます。

▲左の諸孃よりも諸君に交際を求められました最も特別な條件もないやうですから、唯住所姓名だけを發表いたします。

○信濃松本市新伊勢町五十嵐方、渡野きみ
○信濃北安曇郡大町荒神、工藤河内子
○府下北多摩郡拜島村、高崎和子
○青森縣東津輕郡大字後潟村字小橋、柿崎清
○千葉町南道場、手塚まき子
○兵庫縣明石町ノ内櫻屋町、伊藤美佐子
○千葉町市場一七八佐久間繁次郎方、秋月子
○茨城縣土浦下高津羽鳥休太郎方、淺川秀子
○滋賀縣大津市寺町六一、小島露草子
○大阪市博物北、家内藤、原秀子
○熊本縣飽託郡川尻大渡町五二五、吉田きさ
○信濃小安曇郡平村野口、工藤清子
○常陸下妻町、初澤ときわ
○北海道釧路春採、北條光子
○千葉縣香取郡米澤村大貫、工藤碩子
○土佐香美郡山田古町一〇、石川桂花
○埼玉縣比企郡平村大字西平、淺見くら子

個人消息

○婦人ノートで姉妹をお書きになつた馥子樣に申し上げます、あの私の歳のこと御想像下さいましたのがあまり意外なので今更ながらおはづかしうございます實は幾年も陷つて居た不治の昏倒からやつと救はれて氣の利いたおばけの引込む時分に皆樣のまねをはじめたので御話しかねるほどの年喰ひ女ですあなた樣も御病氣がおありのやうですが一日も早く御なほし遊ばすやう私は天にまかせた危い命ですができるだけ六十の手習するものと御あはれみ下さい。(芳子)

○櫻草樣、その後、御變りもありませんか、先月の女子文壇の圖書交換の所に、林しづ子といふ方の出ておましたでせう、もしや貴女かも知れないと思つて、雨のふる日に、探しに出ましたのよ、やう〳〵尋ねあてゝ「林さんて方いらつしやいますか」といふと、「そんな方、來て居やはりません」と剱もほろゝの挨拶、全くがつかりーてしまひました、一度、お目にかゝりたいと思ひます、御手紙下さいませんか、市外吉成村でおります。(はる子)

○ふゞき野さん、悲しいわ〳〵、いくら仙臺がすとしを云ひ違へてもいくら不親切であつても……ねえ仙臺の皆樣、仙臺の方が、皆ぢやないでせう私は「おすゝ」だの、「まんづう」だなんて云ひませんわ、にくらしいねほんとに……(梅子)

○三宅馨賀子樣同名でおなつかしうございますそれに私もね古郷は京都でございますのよ當地へ參りましてから大分になりますがやはり京都が戀しうございますわだつてね生れ古郷ですものそれで毎々貴女樣の御芳名を拜見する毎に誠になつかしくつて大さわぎ致しますの不束者

でございますが今後御交際を御許るし下さらば如何に嬉しいでせうせつに願ひます繪はがきや寫眞の御交換も願ひます。(本郷駒込千駄木林町一四九、山本壽賀子)

○二月號を讀みて大分縣のしぐれ樣(月々二三の雜誌を愛讀して星と群がる誌友諸孃の御名を拜見しながら唯の一度も御交際を願つた事のない戀人ですけど貴孃のお言葉のみは感動されました幸ひに貴孃の友としての資格があるかどうかは疑問ですが、所謂順境に育ち得なかつた身には多少人の世の辛らき味は存じて居ますつもり、よしや一時のお交りなりとも快よくお受け致しませう。(下野、木枯らし)

○英國倫敦の小野米子樣去年六月にレター差上ましたら先月二十日に表記にはり紙して返送してきましたから何卒次號で御宿所御知らせ下さい。(近江國長濱祝町、横幕秀子)

○米國より神邊八重子樣ともう御一方繪はがきにて御便り下さいました御方がありますのよ誌上を拜借して厚く御禮申上げますとうに御返事を差上げたいのですが消印のために住所がわからずに困つて居ますのよ私の兄も二人御地に參つて居ます故ほんとうに御なつかしいのよ誠に申兼ますが封に御住所御書き遊ばしたの送つて下さいな英語書けない事もないのですが……其時には私の身上などくはしく申上ます。(神奈川縣足柄上郡南足柄村狩野、田代勢智子)

○誌友の大分縣のしぐれ女樣深く御同情申上げます世の中は樣々です決して貴女一人では御ざいませんいたづらに悲しみ給ひますな妾は美作に生れて三十六年に上京致し飯田町の女學校に入學致しまして二ヶ年で卒業致しましたが當年で出京して九年目です之とて事情にて父母にまみゆる事を得ず淋く都にくらして居ります。(番町愛讀者)

○岡山千代子樣美くしいヱハガキを有難う御座いました、お顔はよく存じて居りますが、御住所姓名がわかりませんので、心ならずも今日まで御無沙汰致しました、何卒おゆるし遊ばして下さいませ、どうぞ御住所とお姓名とを御知らせ下さいませ。(岡山市内房之)

○誌友の皆樣若し新潟西堀通二、富澤方に御住居の關根すみえ樣の現住所御存じの方は下名まで御知らせ下さいませ必ず御禮いたします。(函館區臺町六十番地、菅野雅子)

○誌友の皆樣さき頃はわざわざおもしろき種々の唱歌送り下さいまして誠に有りがたう御座いますあの宇都宮の杵代樣御さしつかへ御座いませんでしたら一寸御住所お知らせ下さいませ御願ひです。(深川區東元町壹、鈴木美喜子)

○大分のしぐれ樣!貴女は水清い番匠河畔の或商家の二女の君でおらつしやいませう?以前は清香と名乘られて佐伯在の某小學校に御奉職近頃御轉勤遊ばしたと夢に見ました。私の郷からは餘り遠くない湯の町の自然美で謳はれた朝見病舍に御愛妹は御在勤とか唯理由はなく未だ見ぬ白衣の少女が懐しいのでございます。(本宮山麓の女)

○東京市芝區田町五の二木村參笛子樣お端書ありがたくはい見致しました早速手紙でお返しを致したら、宛所取調たるも肩書受取人無之として戻つてまゐりました如何のまちがひで御座いませうか、さためし不都合なものとおうらみ遊したでせう、私それが心苦しう御ざいます、御手數ながら、もひとたび住所姓名くはしく御知らせ下さいませ。(福岡縣粕屋郡香椎、井上しづ子)

○記者樣にお伺ひ申します、私昨年千葉縣の蒔名靜江樣と手風琴と金色夜叉の交換の約が整つて妾が手風琴をお送り致しても未だに何の返事もないのです如何樣に致しましよ。(茨城田口愛子)

○京都の照子さま御親切に御たづね下さつて有難たう仰せの通り妾は京都の出生で立誠校に通學致して居りました一年に一二度歸京致すのみで絕えて學校の方は消息を耳に致しません今本號に於て立誠校の文字を見如何ばかり嬉しく感じたでせう住所は下記の通りです。(大阪南區北高岸町、川崎道江)

○加奈太に御いでの淋しき女子樣よきれいなヱハガキありがたう私御禮致さうと思つても貴女の御所がわかりませんから致し方がありませんのよ御さしつかへなければ御知せ下さいたのみますよそして私貴女から御送り下されしヱハガキ紀念として永久大切に致してをります。(三重縣桑名郡野代村大字中頂三四水谷彌生)

○今月號に男子の方との交際は望まないとか昨年とか何月とかにも男子から手紙をよこしたとかありました、私は邪推かは知りませんが私の

文字が餘り亂れ書きであるため男子と思召したであらうかと思ひます、只に筆跡をもつて男女を區別するは早計と思ひます、私は變性女子ではありません、何處迄も純粹な女です、お心當りのお方の御熟考御反省を願ひます。（松山、雪子）

○金澤の島ますえ子樣其の後お變りなくつて私新年號の本誌上でハムレツトお持の由拜見して早速ハガキ差出しましたの何卒しばらくお貸し下さいまし決して粗末には取り扱ひませんわ讀みあき次第相當の返禮をつけて御送り致します（廣島比婆郡東城町川西二六後藤壽美枝）

○誌友のお姉さま方の内に、橫濱日ノ出町にいらしつた大井咲子さんと、大阪府下に小學校の教師しておいでの玉置せい子さんと言ふ方の御住所御存じの方が御座いませんでせうか御兩人とも、都の或るミツシヨン、スクールに居りました時分の親友でしたが一昨春はなれ〴〵になつてからは遂々うと〳〵しくなりまして、今では悲しい事には御住居すら定かに知りません、もし姉さま方の内に御存じの方がありましたなら、御住居をくはしくお敎へ下さるよう伏してお願ひ致します。（常陸西茨城郡北山内村、田村波津子）

○岐阜の女學校へ通つていらつしやるお姉上樣にお賴み致します、山本政子樣はお逝きになつたとは眞實でございますか、何だか不思議でなりませんから前の事ですが、どうぞその眞實をお聞かせ下さいませお願ひ致します。（山城綴喜郡宇治田原村奥山田八田文子）

○近江の芳子樣、お便りありがたう存じます、お身の上を思ふては、何となく悲しい思ひが致します、手紙でと思ひましたけれど、彥根とだけでは屆かない樣な氣がしますので、失禮ながら又も誌上を借りまして。私はお名ざしの人とは違ひます、委しい事は手紙でないと書けません、どうぞ御身御大切におはげみ下さいませ。（土佐、重子）

記者より

○記者樣、私は今月の女子文壇を見て、一色先生の御病氣を始めて知りました、あゝ喘息！私の親族にも一人肺が變じて喘息となり、十七年間苦しみ通す人がございます、私は喘息の病症をしりません、故一色醒川を懷ふをよみかけてお父樣喘息つてどんな病氣？つてとひましたら咽喉が始終ヂリ〳〵いふのさつて、私は胸がふさがつて淚がとめ度なしに頰をつたひます。私の咽喉はいつもヂリ〳〵いつて居ます、左肺は時々プツ〳〵いひます、あゝ親類の兄樣のやうに、喘息に變じたらどうしませう、一生親に安心さすこともなしに癈人となつて暮さねばならないんでせうか、年老い給ふ心弱き父母を思へばいつも悲しくなつて來て、此頃は夜中にきつと目がさめるともうねられません、私は心は强く持つて居ますけれども、此の弱い衰へた身體を見ればこれで生を保つことが出來やうかとをのゝかれます、どうも泣言ばかりならべてすみません、今月は元氣が沈んで何も出來ませんでした誌上に出る出ないはともかく見ていたゞくのがたのしみでございます（伊志子）（承るやうな御容體なら善くお氣をおつけなさいませ、尤も病氣は心で勝つこ とも出來ますから、出來るだけ手當をして、心は强くお持ちなさい、心から御健在を祈ります。記者）（附て云ふ、黑澤春子さん、竹村植子さん、露子さんなどからわざわざお悔み狀をたまはり鳴謝いたします）○私は山陽の奥に居る田舍者で御座いますこゝに顏出しするのははじめてゞす私は昔女子文壇もろくに讀めない頃に愛讀して居ました姉のを借りておましたが女學校へ行く樣になつてからやめました今度拜見して見ますと大變勝手が違ひます三十八九年の本誌とはすつかり別物の感がしますあの頃のは學校の作文のやうでしたが今では一定の傾向も進んで居るやうでございます私は何も知らないものですが後れ馳せに御供をしたいと存じます皆樣よろしくお導き下さいませ（美作、るり子）（勝手の違ふのは御尤もです、何しろ四五年たつておますから本誌も進歩しておます、併し進歩したからとて、決して文學に初心の方を度外視するのではありません、大いに指導の任に當ります、扨てお尋ねの散文は三十行以上五十行以內です、誌友くらぶを入れても開封二錢で參ります、記者）○記者御一統樣には何の御障りも御座いませんかお尋ね申します本日本誌第一增刊婦人ノートを買求め愛讀致しますに誠に利益な記事の多い事と東京ノートにて今まで通じなかつた區町名や電車の乘換へ終點まで一々能く分りまして忝くぞんじます一寸東京へ行て町名を問ふても恥ぢになりません英語ノートも其の通り尙又來る五月一日の本誌は創刊滿百號に相當致しますさうで付ては紀念に目覺しき本誌發行の由今より樂んで待つて居ま

す層一層此上は千號萬號萬々號と本誌の益々末永く繁榮隆榮の程を祈つて居ます（大阪東區北新町二丁目三六井上丈助方多野なみ子）（御勵まし下さいましてありがたう、再號は全く面目一新――いつも云ふことですけれど――實際好い雜誌をこしらへたいと思つてゐます、出たら皆さんも喜んで下さるやうに。記者）

繪葉書

○皆々樣私も女子文壇の愛讀者の一人なのです何卒御地の神社佛閣の印影を白端書に捺してお貸び下すつて開き封で御送り下さい御禮はきつと致します若し出さなかつたら二度と再び誌上に顏出しの出來ないやうにして下さい又繪葉書の交換も御願ひ致します（三重縣桑名郡益生村大字矢田小川みちを）○誌友の皆樣中詩、和歌名所繪葉書等御同好の御方と御交際を希ふ私方よりも御同好の人に差上げますから受取つて被下い非凡な御方ならば男女を分ちませぬ（福井市寶永上町四六番地方、翠子）○繪葉書又は美人繪葉書などの御交換して下さいな（茨城縣稻荷郡阿見村字大宗青山まつ子）○誌友の姉樣方よ名所繪葉書及リボン絹物シヲリの交換を願ます妾は相當の品を送りますからどうぞ（千葉縣山武郡大和村山口齋藤清子）○私は交際のため慰みのために繪はがき交換をいたします又特別營き繪はがき下された御方には美事なる品を差上げます（奈良縣宇智郡宇智村、新城つるへ）○誌友の皆樣私は土地の風景端書がすきですからどうぞ御交換下さいまし（尾張知多坂井磐陽堂醫院、伊藤はつ子）

書物の交換

○　大阪市北區小松原町三七七　高山米子

▲持つてゐる書物　『女子文壇』三卷一號より四年十八號まで、『女學世界』七卷十一號より八卷十六號まで。

△讀みたい書物　『少女世界增刊』もみぢの卷『少女』一卷三號、四號、『婦人畫報』何年號でも宜し。『玉蟲』『一葉全集』

右御交換を願ひます、玉蟲か一葉全集御送り下さる方には何冊でも差し上げます、但し豫め御一報下されば當方よりお送りいたします。

○　近江伊香郡片岡村大字東野　田川優子

▲持つてゐる書物　『富士山奇觀』『美文の資料』『百人一首講義』『俳句古本』

△讀みたい書物　『盆栽盆石』『實驗集』『夢二畫集』『風景水彩畫手本』（三宅氏）

○　神戸市兵庫港町一丁目横河　小兒科院内　足立春子

△『花守』（夜雨先生著）神戸市内にて本誌愛讀者の御方に十日間拜借いたし度く存じ候御禮はいさゝかなれど必ず致す可く候尚御交情賜らん事願上候。

○　京都府南桑田郡曾我部村字重利　並河龍子

▲持てる書物　「女子文壇」四十三年十月號以降「學生」同九月號「婦人世界」同六月號以下及四十二年春秋二增刊　文章世界」四十四年一月號、「スケッチブック」上下「水中美人」一冊「水滸傳」上卷。

△讀みたき書物　「婦人世界」四十三年秋季增刊「技藝講義錄」何號にてもよろし、「夢二畫集」

右換讀希望の方はあらかじめお葉書にて御一報願ひます。

○　備前兒島郡八濱町大字宇多見　近藤菊子

▲持つてゐる書物　「不如歸」「後の不如歸」「夫人の自白」「煩悶」

△讀みたい書物　「やどり木」「己が罪」「夏子」「コブシ」「生」「春」

右換讀を望む。

○　兵庫縣出石郡合橋村字三原　近本のぶ子

▲持つてゐる書物　「黃橙」「孝女白菊」「家庭新詩不如歸」「愛の書簡」「亞米利加物語」「檜木笠」

△讀みたい書物　「木蘭舟」「白玉姬」「わすれ貝」「一葉全集」「武藏野」「福翁自傳」「虞美人草」

右お思召しあるお方はハガキで一應御一報下さいませ。

○　福井縣武生町櫻八　佐藤ベニウシホ

▲「愁人」「青果集」「インキツボ」「二十二篇」「蝶」「花袋集」（第一）「二十八人集」

△「冥想論」「外國文學研究法」、玄耳小品」。

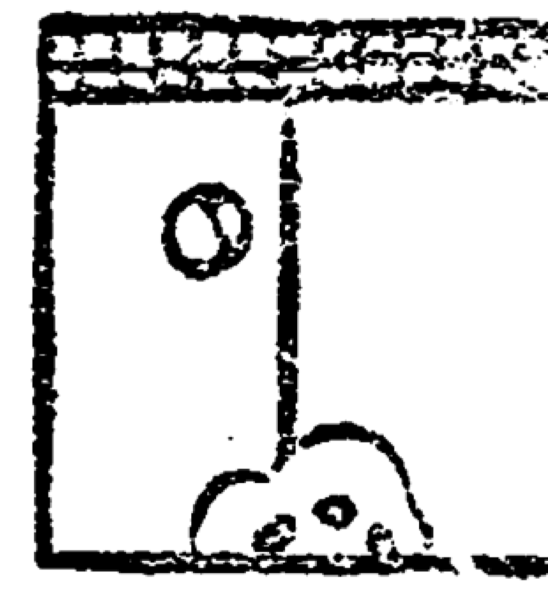
相當の書と交換してよろしう御座います。

○　攝津國池田驛前局區内九谷　上坂平三郎方　百合子

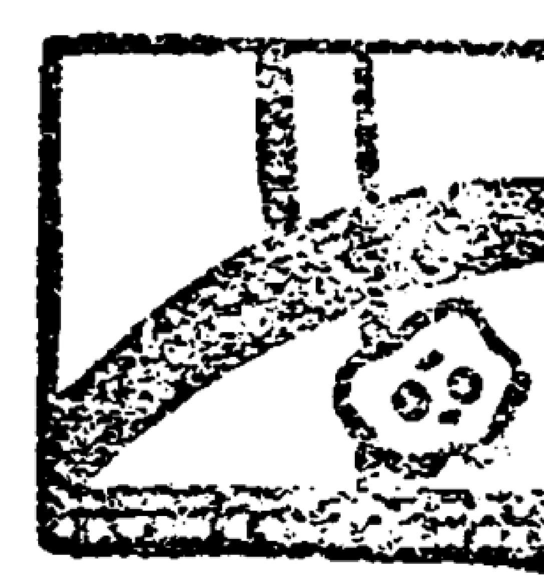
▲「颶風檻風」「ハイカラ合壞」「金色夜叉」「夢二畫集」

△五洲怪奇譚、東洋武俠團、冒險世界、一卷七號迄、中學世界、お伽花籠、お伽十八番、世界冒險談、夢二畫集、旅の卷。

右送り下さればすぐ送ります。



雜　報



彼岸まへ

△此月の末には、もう彼岸櫻が咲く、東京の天地は此月の末から、來月にかけて、青い柳と、白い櫻で、春の色彩が眼に立つて來る。
△今年の冬は比較的暖かに過ぎた。
△園藝を愛するものは此月の穏時を忘るな。
△各女學校は學校のかはりめに近づいて、女學生諸君は、心のいらだつ月である。
△筍を初め、新らしい野のものを味ひ得るのも此月である。
△北國では雪を切つて河へ流す、南國では野に蒲公英や菫や五形花が咲く。
△三日、雛祭り、女の子ある家の賑ひ、雛祭は婦人年中行事の中でも尤も趣味がある。
△光線が暖くなり、土が柔くなり、鳥が囀り、木が芽ぐむ、元來外出の少い婦人達も、此シーズンに室内にばかり閉ぢ籠つてゐることはないで生徒を募集し初めた。
△都下の各女學校では、新學期が來るといふので生徒を募集し初めた。
△此頃の婦人問題には、空論、虚論、愚論が多い、流行になつては困る、裏店の亭主でも、自分の娘や、自分の女房を養ふことに就いては、多少の意見と實行とを持つてゐる、何ぞ天下の名士を累さんやである。
△都下の或る女學校の生徒は一ヤール四五圓のリボンをかけるとて新聞にあつた。
△漫談の研究と云ふことがも少し眞面目に行はれても宜い。
△婦人の職業に就くことを尤も妨ぐるものは何ぞや、曰く男子。
△幸田露伴、森槐南、夏目漱石、佐々木信綱、有賀長雄の五氏が、文學博士になるらしい。
△千里眼婦人長尾いく子は病氣に罹り稍重症に陥つた、先に可憐なる御船千鶴子を自殺せしめ今又長尾夫人に恙あらしむ、千里眼も災なる哉。
△萬年筆と、懐中電氣燈が安くなつて、持つ人が多くなつた。

帝國座の開場

我邦第一の大劇場、帝國座の建築成り、愈よ本月五日に開場の運びとなつた、狂言は一番目『頼朝』中幕『饅頭娘』大切『羽衣』と決定した、女優諸嬢も座附俳優として今後帝國座に活動するであらう。建築の善美を盡くせるは言ふまでもなく、舞臺、觀覧席、貴賓席、天井、壁畫、食堂、運動場に至るまで、凡て意匠を凝らし西洋の大劇場に則りて、目を新しくする工夫をこしてあるから、先づ初めの間は其劇場を見るだけでも、多くの人の心をそゝるであらう。

夜雨の蘇生

夜雨氏は二月六日の一色醒川追悼會に出席のつもりで、上京の途中、微恙に罹り水戸から郷里に引返した。其際『ヤウアスカヘル』と云ふ意味の電報が『ヤウシス』となつた爲め、郷里の方では大騒ぎを生じ、夜雨の遺骸を迎へる爲め下館のステーションへ約五十人の人々がつめかけたさうだ、幸ひ間違ひと分つたので一同其無事を欣んだ、本欄掲載の『蘇生』は其前後を書いたものである。

醒川追悼會

前月六日の夜、春秋社樓上に於て、故一色醒川氏の追悼會があつた、集るもの中村吉藏、水野葉舟、溝口白羊、河井醉茗、澤村胡夷、森川葵村、中山三郎其他約十名、床には醒川氏の引伸し寫眞を掲げ、席上で寄せ書きなどをして追悼の意を表した。

●生●徒●募●集

△麹町高等女學校では、此の新學期に際し、各科に生徒を募る、同校は近來奮蹟揚りて生徒の風儀も宜しと云ふ。
△本郷の女子美術學校も四月の新學期より各級に生徒を募集せり、同校も生徒の數は愈よ多く毎學期に優秀なる卒業生を出し居れり。

新刊

○春泥集　與謝野晶子著

與謝野夫人の最近の和歌約六百首を集めて一冊の『春泥集』が出來た、夫人の歌が現代に於ける第一流のものであることは、もはや何人も疑はない。周圍の變化は夫人の心持にも表はれて、以前のやうな華やかさは見られないけれど、藝術的立脚地の根柢が深いだけ、變化すれば變化するやうに、其複雜な内的生命が歌の上に表現されてゐる、單に和歌を好むものとは言はぬ、一般の婦人に本書をすゝめる、女の思想、女の考へ、女の趣味と云ふやうなものが、此一冊に依りて、何んなに嬉しく、何んなに深くせられるか分らない、初心の者でも再讀三讀してゐる間には屹度味ひの分るものである。函入天金付き美裝(定價金壹圓、麹町區平河町五丁目金尾文淵堂發兌)

○爐邊　窪田空穗著

窪田空穗君の小說は此頃咲く沈丁花の花に似てゐる、見た處は淋しいが、何處となく周圍に好い薰を漂はしてゐる、現代の作家で此風を持つてゐるものは島崎藤村君ぐらゐであらう、藤村の名は世に喧傳せられるが、空穗の名は世に騷がれない、自分は毎も空穗君の作が努力と用意とを以て成つてゐるに拘はらず、所謂批評家の人々が默過してゐるのを慊らず思ふ一人である、空穗君はそれらに頓着なく作を成してゆくだけの自信を持つてゐる、其結果は本書に表はれてゐる、峠越、母、以下數十篇の小說は優に作者の伎倆を語つてゐる、近頃の小說は刺戟が强すぎて、所謂突込みすぎる處があつて、嫌惡の情を起さしめるが、本書には微塵もそれがない、凡て好い感じを以て迎へることが出來るのである。(定價金六拾五錢、本鄕森樣町村瀨書院發兌)

○不盡廼舍遺稿　中村春二編

明治の國文家の中でも、新しい頭腦と、しつかりした學問を持つてゐたのは故中村秋香氏である、氏が物故せられてより一年を經たる今日、嗣子中村文學士の手に據りて其遺稿が一冊となつて現れた、何より故人の本懷であらうと思ふ、本書の内容秋香氏の和歌、新體歌、和文、傳記日記、消息、小論文などであつて、殆んど五百頁に近い大冊を成して居る、釘裝萬端も叮嚀を極め、故人を懷ふの料としては全く遺憾がない(定價金貳圓五拾錢、京橋中橋廣小路前川文榮閣發兌)

○漫畫と譯文　三人共著

岡本一平氏と、名取春仙氏と仲田勝之助氏と三人の共著である、一見して好奇心に富んだ冊子であることが分る。一平氏の漫畫は漫畫として甚だ眞面目である、忠實に描いてゐる、春仙氏の畫は飄逸で、奇拔である、仲田氏は繪師でない、ボドレールの散文詩を譯してある、三人共著であつて、三人ともそれ〴〵自分の好きなことをしてゐると云ふ處があつて、其藝術的の態度が甚だおもしろい。函入の氣取つた本である(定價金八拾錢、京橋區南槇町廣文堂發兌)

○お目出度き人　武者小路實篤著

若緑の樣な軟らかさと力とを持つた青年期の戀物語を美しく描いてある。鋭角的な此頃の小說の强い刺戟から逃れて、斯う云ふ小說を見ると掏摸が眼を光らして居る淺草の雜沓から逃れて言問あたりの二階から青い水の上に鷗の飛んで居るのを見る樣な氣がする。卷頭に挿んである序畫は非常に氣持がいゝ(定價金六拾錢、東京麹町二ノ二洛陽堂發行)

編輯通信

△紀念號と投稿　三月十五日に締切る凡ての原稿は、皆紀念滿百號に用ゆる分ですから其つもりで、別項廣告欄の募集の處を見て、其規定に依つて下さい、乃ち、花、動物に對する感想、日記、小說、詩、和歌、俳句、女子文壇追想記、身の上話、世間話、實驗談等で詳しい投稿方法は廣告の通りです。

△賞品發送　昨年十二月號までの賞品は凡て前月までに發送濟みです、一月號の分は本月に發送します。なほ賞品の御禮として特にはがきを下さつた數十名の方には、お名前は揭げませんけれど、拜見したことを申上て置きます。

△氣焰欄の新設　本誌一二〇頁の處に氣焰と云ふ欄を置きました、次號から毎月揭出しやうと思ひますから、本誌の批評、文壇全體の批評、婦人問題の批評、不平談、誌友に對する一般的の批評、氣焰、憤慨、何でも投稿して下さい、但し文章はなるべく短い方がよろしい、長いものは採用しません。

△内容に對する注文　雜誌の内容に就いては記者は毎も注意して居りますけれど、なほ諸孃の間に、何んな記事を載せてほしいとか、何んな人の說を聞きたいとか、何んな研究をして欲しいとか、心あたりの方がありましたら遠慮なく申越して下さい、記者は出來得る限り其注文に應じ、要求を容れたいと思つてゐます。且參考にもなるのですから、なるべく多數者の意見をも聞きたいと思つてゐます。

女子文壇定期號 投稿規定

▲投稿は凡て女子に限る

▲原稿には必ず『女子文壇投稿』の文字を書き添へること

▲原稿は凡て女子文壇社宛(未納税は斷じて受付ず)に送ること

▲小説と、詩と、雜錄とには振假名をつけること

▲小説は二十四字詰八十行以内、散文は三十行乃至五十行、初めての投書は三十行以内、詩と雜錄は行數制限なし

▲各種類毎に一人一篇限りとす、和歌、俳句も一人一章限りとす

▲誌友くらぶの外はハガキの投稿を許さず、半紙、原稿紙、罫紙に限る

▲圖畫は毛筆畫にて薄き日本紙に認め、大さは二寸に三寸、一人一枚限

◎投稿は毎月十五日到着を以て嚴に締切る

女子文壇投稿各種 懸賞定額

▲小説と散文は、天賞金參圓、地賞金壹圓五拾錢、人賞金七拾錢を呈す

▲『詩』は天賞金貳圓、地賞金七拾錢、人賞金四拾錢

▲『和歌』『俳句』『圖畫』『初作』は、天賞金壹圓、地賞金五拾錢、人賞金參拾錢を呈す

▲『雜錄』は金五圓以下壹圓以上、正金にて呈す(但し二頁以内の短きものは此限りにあらず)

▲賞品發送は作物發表の翌月以後とす

定額金壹圓以上の創作當選者には價格相當の物品を贈呈し、金壹圓以下は圖書切符にて贈呈す

女子文壇定價明細表

振替貯金口座 東京第壹七貳九番

○定期發行分 ▲毎月一回(一日)

一冊(一回分)	定價金拾五錢	郵税一錢五厘	計金拾六錢五厘
三冊(三月分)	前金四拾三錢五厘	同四錢五厘	計金四拾八錢
六冊(半年分)	前金八拾四錢	同九錢	計金九拾三錢
十二冊(壹年分)	前金壹圓五拾六錢	同拾八錢	計金壹圓七拾四錢

○臨時增刊分 ▲年四回(二月、五月、八月、十一月)

一冊(一回分)	定價金貳拾錢	郵税一錢五厘	計金貳拾一錢五厘
二冊(半年分)	前金三拾八錢	同三錢	計金四拾壹錢
四冊(壹年分)	前金七拾二錢	同六錢	計金七拾八錢

○定期發行及び臨時增刊とも全部 ▲十六回

四冊(三月分)	定價金六拾三錢五厘	郵税六錢	計金六拾九錢五厘
八冊(半年分)	前金壹圓二拾二錢	同拾貳錢	計金壹圓三拾四錢
十六冊(壹年分)	前金貳圓二拾八錢	同二拾四錢	計金貳圓五拾二錢

▲申込注意(振替にて拂込む時は誌代の外に壹錢登記料増すと、郵便爲替は中橋和泉町局、郵便切手代用は必ず壹割増(收入印紙謝絕)、凡て前金拂込に限る

明治四十四年二月廿五日印刷納本

明治四十四年三月一日發行

定價金拾五錢

編輯兼發行人 野口竹次郎

印刷人 松本魁

印刷所 合資會社東京國文社

不許轉載

發行所 東京市京橋區大鋸町十、十一番地 電話(京橋六〇七番) 女子文壇社

特約賣捌元 ○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂

◎口癖の樣に頭痛がするといふ婦人あり

御婦人は十人寄れば、七八人まで頭痛して困ると仰しやいますが、頭痛の起る原因に色々あるけれども、婦人病の殆んど總てが頭痛の原因となるといふ事は、どの御醫者さんも申します、併し多くの婦人は、頭痛のするのは、時候の爲めだとかいつて、顳顬に頭痛膏だの、梅干の皮などを貼て、それで治ると思ふ人もある樣ですが之れは大なる誤解である、婦人病の根治を圖らない内は、頭痛は決して止むものでない、上述の如く頭痛がして困ると云ふ方は、多くの場合に於て婦人病に罹つて居るのであるから、特に是等の婦人の爲めに、婦人病の兆候及び療法に付て簡單に述べて見ませう。

ヒステリー症は俗に言ふ血の道で最初は頭が重く氣がふさぎ次で頭痛が起る、もう一歩進むと癇高ぶり、些細の事が氣にかゝり、過ぎ去つた事や、取越苦勞をする樣になる、白血赤血㊀㊁㊂こしけは子宮内膜炎の結果で多量のねばくした帶下を漏らし、其帶下は時としては、血液又は膿を含む事があり、甚だ惡い臭がする、此病氣は懷姙の機能を[illegible]ふから子寶を擧げ難く、顏色は常に青く活氣に乏しい年頃になつて月のものを見ないとか、たとへあつても、時期一定せず、其量に多少あり、月經時に苦痛を感ずるのは皆病氣の結果である、「つわり」は姙婦の持ち前の如く考へて治療を怠る方があるけれども、營養分を攝取することが出來ない爲めに身體甚だ衰弱し、之が爲めに難産小産する恐れがある其他腰足が引釣り痛み、又胸先へ差込み錐を揉み込まれる樣な痛みを覺えるとか目が眩んだり、耳が鳴つたり、肩が凝つたり、腰足が冷えたり、頭がほてつたりする容態は、多く婦人病から起るのである、此外産後古血が滯ると色々の病氣が起る、肥立ちが惡るければ手足が水腫が出來たり、しびれたりする、以上述べた所は、婦人病の大要であるが、是等の病氣に對する治療法は、津村順天堂の自宅治療法を以て最良とする、津村順天堂には内服藥としては中將湯あり以上の諸病に特効があります、外用藥即ち子宮座藥としては中將球があります、此兩藥を併用すれば、藥効は内外相應じて一層著しいどういふ時に中將球が必要かといふと、子宮内膜炎とか白帶下、赤帶下、こしけ、子宮痙攣、子宮炎、子宮加答兒、膣炎、膣加答兒、子宮糜爛、前の惡臭、前の瘙痒、月經時の疼痛及び夫の淋疾に罹り居る時等に中將湯を服用して中將球を兼用するの必要があります

◎中將湯、中將球は全國到る處の藥店にて販賣す、若し無き時は病人の容體詳しく書き添へ、本舖東京日本橋通四丁目津村順天堂へ注文せられよ中將湯には數種の加減藥ありて本舖は其病症に應じ適當の加減藥を發送する

中將湯代價五週分貳圓五十錢、三週分一圓六十錢、二週分一圓十錢、一週分六十錢、四日分三十五錢、二日分廿錢

中將球定價百二十個入五圓、四十五個入貳圓、二十個入一圓、九個入五十錢、試分三個入二十錢

（明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可）

女子文壇定價金拾五錢（郵税逓送五厘）